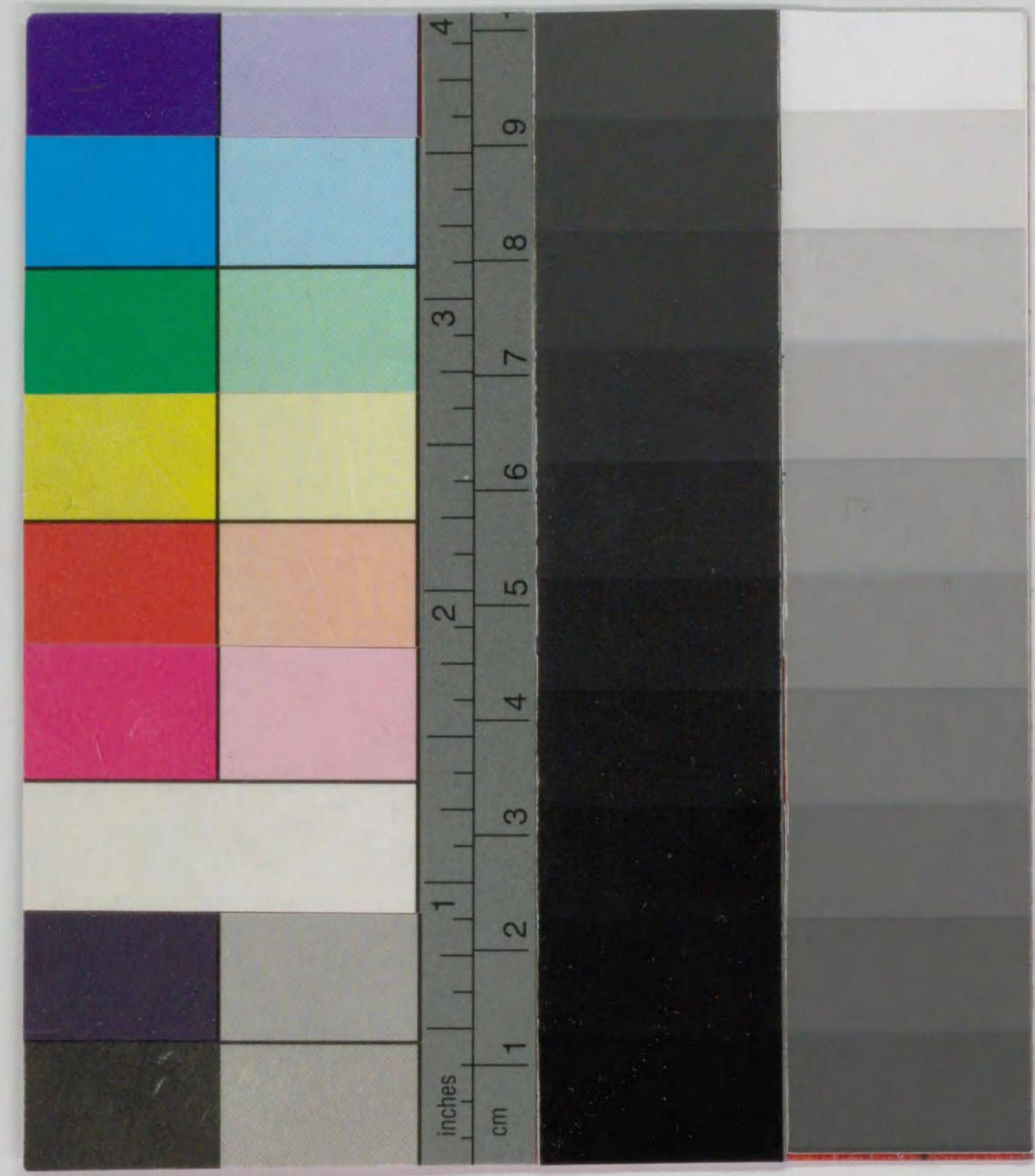


583-15



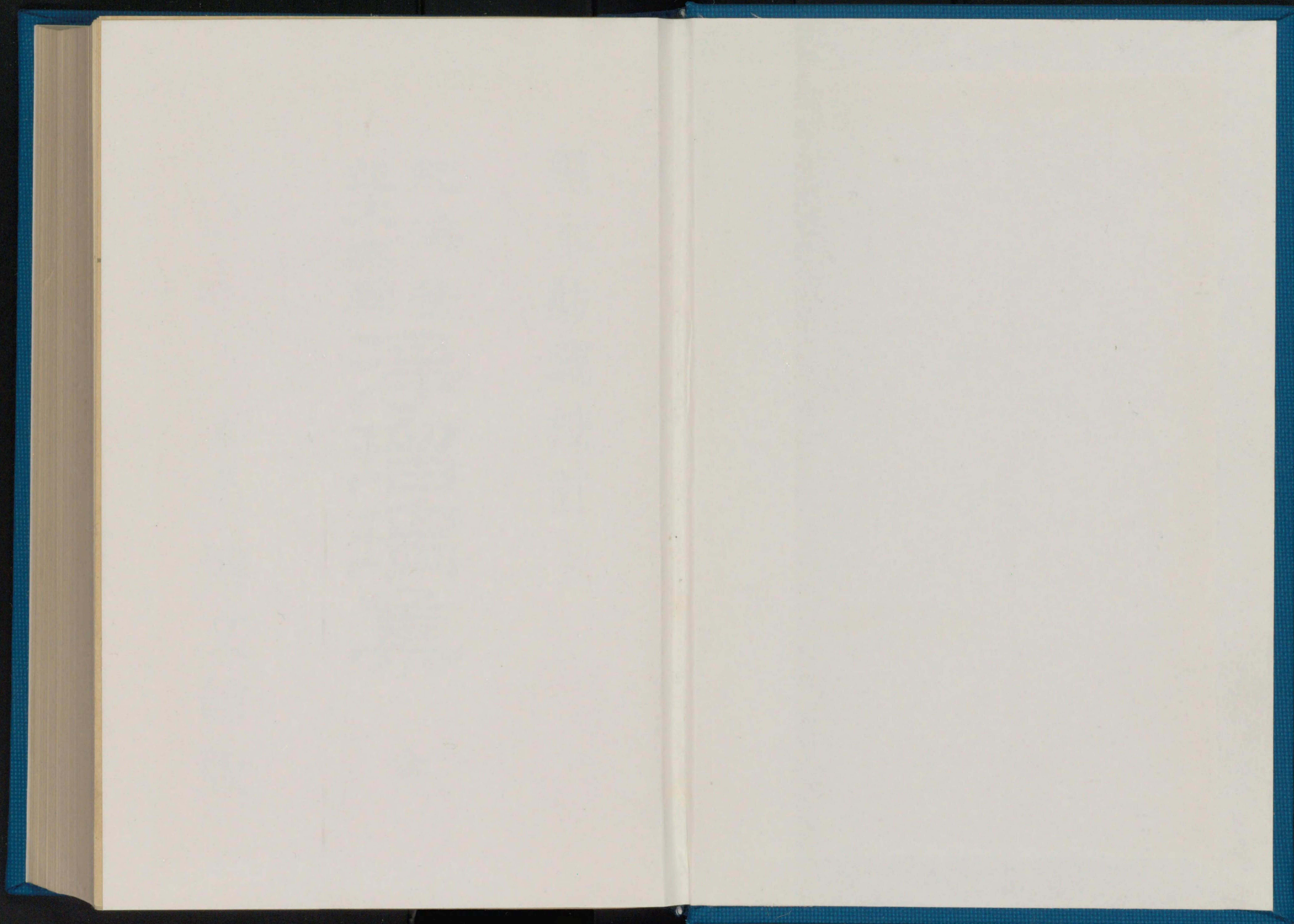
1200501523052

583  
5



inches  
cm  
1 2 3 4 5 6 7 8 9 4







512568

納本

東京

博文館版



紀海音  
並木宗輔

# 淨瑠璃集



黒木勘藏校訂

帝國文庫  
第十篇



## 解題

黒木勘藏

貞享年間に大阪の道頓堀に竹本座が創立されて、元祖竹本義太夫と近松巢林子との二大天才の力によつて人形劇が向上・隆盛の機運に向ふ事となつてから約五十年を経過した寛保・延享前後に及んで人形劇の黄金時代を現出して、我が國近世の演劇史上・文學史上極めて重要な意義を有する一時期を劃するに至つた。而してこれが爲には、作者と演出者との協同努力と、之を愛好した觀客の働きとに基因する事の大なるは言ふ迄もないが、竹本座に對して豊竹座が創立されて兩座對峙競争の姿となつた事が亦重大なる一原因であつた。されば「竹豊故事」(寶曆六年刊、一樂子著)は「竹本豊竹兩座と成てより東は西に負まじ、西は東に勝らんと互に勵み出來、益々芝居繁榮し、淨瑠璃の作者は種種様々の趣向を工み出し、道具建にも金銀を惜まらず金襴にて舞臺を暉かし、或は數寄屋懸りの粹なる思ひ付に智惠袋の底を振ひ、人形の衣裳には縮緬緞子金襴等にて美麗を盡し、詰人形の外は皆々足付となり、出遣ひの外は介錯足遣の立懸り、歌舞伎役者の所作より増りて天晴見物事なり。併し西か東か一座ばかりにては斯く繁昌もせまじ。」と言つてゐる。かういふわけで竹本座に對する豊竹座の對立は、人形劇の發展隆盛上から見れば頗る重大なる價値を有つてゐた。而して豊竹座の創立者は初代竹本義太夫の門弟豊竹若太夫、後の豊竹越前少孫であつたが、彼の六十年に及ぶ長い藝歴は、殆んど豊竹座と終始したといつてもよい程である。即ち彼の名によつて槽をあげられ、のち其の座の太夫と座元とを兼ねて演出經營兩方面の重大任務を負擔されてゐた豊竹座は、彼が世を去つた明和元年以後數年ならずして



一度退轉の悲運に陥り、それと相前後して竹本座も亦經營難に陥つて昔日の隆運を見ず、かくして人形劇の全盛時代は去つたのであつた。

されば豊竹座は全く豊竹越前少掾の豊竹座であつたと謂つて差支ない程である。處てかういふ歴史的の立場にあつた豊竹座の作者について見れば、その創立時代から全盛時代に亘つては紀海音と並木宗輔との二人が最も注目すべきである。その中海音の作者生涯は豊竹座の創始時代に始つて竹本座の近松と相對峙して、丁度近松が世を去る迄續いて居る。而してその跡を受けて竹本座の文耕堂・竹田出雲等に對して豊竹座の隆盛時代の作者として腕を揮つたのが並木宗輔で、彼の亡き後は豊竹座は全く群小作者の寄合となつて了つた。故に海音と宗輔とは豊竹座の作者としては最も注目すべきであると共に、やがて我が淨瑠璃史上に於ても重要な位置を占める作者たることは言を俟たぬ次第である。今まづこの二人の略傳を述べ、次いで本書所收の作品について簡単に解題を加へる事とする。

紀海音小傳——姓は榎並、俗稱喜右衛門、のち善八と改めた。紀海音は淨瑠璃作者としての號である。寛文三年大阪御堂前雛屋町の鯛屋善右衛門の二男として生れた。鯛屋は菓子製造の名高い店舗で、彼の父は明暦二年正月永田山城大掾藤原貞因と名のる口宣を頂戴して、御菓子所山城大掾の看板を掛けてゐた。文藝の嗜深く、狂歌に長し、俳諧をよくし、別號を長閑堂、白后齋ともいつた。その弟は榎並清右衛門といひ、やはり文藝を好み、貞徳の門下で花實庵貞富と號した。又その長男、即ち海音の兄は有名な狂歌師油煙齋貞柳である。かういふ風に文藝的空氣の濃厚な家に生れた海音は、始め黄檗山悅山和尚の門に入つて高節と號し、大和の柿本寺に居たが、のち還俗して大阪に住み、醫を業とし、傍ら俳諧を安原貞室に、和歌を契沖に學んで、契因と稱し、鳥路觀と號した。又狂歌を兄貞柳に學んでその號を貞峩といつた。享保九年兄貞柳の跡を受けて鯛屋の家督を繼ぎ、元文元年法橋に敘せられ、寛保二年十月四日八十

歳て世を去つた。入丁目寺町の日蓮宗の寺院寶樹寺に葬つた。法名清潮院海音日法居士。

海音が淨瑠璃作者として立つた年は明かでない。淨瑠璃譜は元祿十五年三月、越前少掾がまだ竹本采女と稱へた頃、筑後掾旅興行の跡芝居で語つた「傾城懷子」を以て海音の作として居る。これが記録上の最も古いものであるが、惜しい事に正本の所傳を耳にしない。次に元祿十六年に豊竹座上場の「心中涙の玉井」及び「金屋金五郎浮名額」共に海音の作といふ説もあるが、正本には署名はない。現存正本中海音作の署名あるものとしては、本書に收めた「梶久末松山」が最も古く、以下正本の現存するものは總計で四十七篇を數へる。その中「梶久末松山」「おそめ久松袂の白しほり」「丸腰連理松」「傾城三度笠」「傾城思升屋」「なんば橋心中」「梅田心中」「八百屋お七」「笠屋三勝廿五年忌」「心中二つ腹帯」の十篇は世話物で、その他は時代物である。近松の作は、淨瑠璃だけでも約百二十篇の多數に上るに比しては比較にならないが、四十餘歳から六十二歳迄の二十年間の作者生活の間にこれだけを自分だけで書き上げたのは、文耕堂・出雲・宗輔以下の諸作者に合作物の多いのに比して健筆であつたと言つてよからう。殊に世話物が十篇に及び、その中に注目すべき佳作や、歴史的に價値ある作品のあるのは、近松を除いた他の作者に類を見ない所である。海音の特色は一言之を掩へば理智的である。その文は叙述的であり、客觀的であり、時に場面の描寫よりは筋を物語る平板なる敘事に墮する嫌がある。彼も亦近松と同じく義理と人情との葛藤をよく描いたが、その場合には、常に人情を以て義理の犠牲として、徒に空疎にして概念的の義理を強調しようとする傾がある。されば淨瑠璃作者としての天分に於ては、遠く近松に及ばないとしても、また一方に於ては、作の結構布置の整然として、如何にも理に詰んで居る點などは、却つて近松に見られない處である。この特徴は同じ豊竹座の作者たる彼の後繼者並木宗輔にも影響して、その作品には周到なる用意の下に、前後の場面の關係を巧妙複雑にして變化を圖り、技巧を弄したものを見るに至つたのではあるまいかと思ふ。



並木宗輔小傳——大阪の人で、通稱松屋宗助、市中庵と號した。初め俳諧を學んだが、のち西澤一風の門に入つて淨瑠璃作者となり、享保十一年四月豊竹座上場の「北條時頼記」を西澤一風・安田蛙文と合作したのがその處文作で、時に三十歳であつた。これより先豊竹座は享保八年七月紀海音が「傾城無間鐘」を最後として淨瑠璃の筆を絶つてよりは、西澤一風・田中千柳の連名で引續いて新作を上場したが、不當り續きであつたので、事實上の執筆者であつた田中千柳は享保十年末に豊竹座の作者を辭して上京し、同座は作者難に陥つた。この時同座の元老格たる西澤一風が中心となつて想を構へ、並木宗助と安田蛙文とをして作り上げさせたのが「北條時頼記」である。四月八日初日て翌年の閏正月末迄引續いて興行した程の大當りて、これによつて豊竹座の基礎は初めて確定した。本曲の成功は無論宗助一人の働きではないが、これによつてその作者としての手腕は認められたものか、作者としての一風の名は見えなくなつて、享保十二年二月の「清和源氏十五段」を始めとして元文五年二月の「鶴山姫捨松」に至る迄に年々豊竹座の爲に新作を提供し、その數前後合せて廿八篇に及んで居る。單獨の作もあるが、半數は安田蛙文との合作である。而してこの間の作としては、本巻に收めた諸篇が代表的のものである。その後暫く豊竹座のために殆んど筆を執らなかつたが、延享二年並木千柳と名のつて竹本座に轉じ、三好松洛・竹田出雲・竹田小出雲等との合作として「軍法富士見西行」(延享二年二月)「夏祭浪花鑑」(延享二年七月)「楠音嘶」(延享三年正月)「菅原傳授手習鑑」(延享三年八月)「義經千本櫻」(延享四年十一月)「假名手本忠臣藏」(寛延元年八月)「双蝶々曲輪日記」(寛延二年七月)「源平布引瀧」(寛延二年十一月)等を始め合計十一篇を寛延三年十一月迄の間に作つた。この期間が人形芝居の全盛期の頂點で、又今日でも舞臺生命を有する傑作が次から次と作られた時であつて、座元で作者を兼ねて居た出雲と共に千柳の功績は没すべからざるものである。寛延三年十一月竹本座興行の「文武世繼母」(三好松洛との合作)を限りに竹本座を去つた千柳は、翌寶曆元年には

又々宗輔の名で豊竹座の爲に「一谷嫩軍記」の三段目迄を作り、その完成上演を見ずして、同年九月七日に五十七歳を以て歿した。但し宗輔の歿年に關しては、寛延二年九月(聲曲類纂)、寛延三年九月(名人忌辰録)等の説もあるが、濱松歌國の「攝陽奇觀」の寶曆元年説が、その著作年表の上から見れば最も矛盾が無いから、私はこれに従ひ度いと思ふ。初め彼は作者の署名にも通稱の宗助をそのまま記して居たが、元文元年頃から宗輔と改めた。劇界で並木を名のる作者の祖であつて、その門下からは寶曆期の歌舞伎の名作者並木正三を始めとして、並木丈輔・永助・良輔等の作者を出した。又彼の別號千柳(千柳としては二世)は丈輔の弟子翁助によつて繼がれた。

宗輔は淨瑠璃の合作を最も大膽に行ふやうになつた最初の作者ともいふべきであつて、自然その作品には合作の長所と缺點とを示して居るものが多い。即ち一篇の作品に有機的關係が乏しく、趣向に趣向を重ね、人物相互の間に色の複雑な因縁や關係を持たせ、伏線を好みに利用して讀者や見物の興味を一篇の山に集注させるやうな用意は極めて周到に施された作が多い。舞臺上の技巧と實演者の技倆とが進歩した場合に、又一方に於ては趣向の複雑と脚色の斬新奇拔とを歓迎した觀客本位の實演用の淨瑠璃作者としては勝れた手腕を有つた一人であつたといふべきで、この點ではその先輩であつた海音は遠く彼に及ばなかつたと言つて差支ないと思ふ。

以下本書に收載した二人の作品について簡単に解題を試みる事とする。

## 第一 紀海音の作

梶久 末松山

寶永五年三月三日から「新利屈物語」の切として豊竹座興行。時に作者四十六歳。有名な梶久の事柄を材題としたも



のである。實説として傳へる處によれば、椀久は大阪御堂前の豪商で椀屋久右衛門といったが、大阪新町の遊女松山に溺れて監禁されたので發狂し、炮烙頭巾のまゝて家を飛出して狂ひ歩いた。それで京五條坂の別邸で療養させて平癒し、のち延寶五年九月七日病歿したといふ。この巷説は、俗謡にうたはれ、歌舞伎芝居で演じられ、又浮世草紙にも綴られていよく有名になつた。それを海音は取つて淨瑠璃に仕組んだのである。

その荒筋はかうである。椀久は松山に溺れて贅を盡した擧句に、井筒屋で節分の豆蒔きの代りに五十兩の金銀をまいて一座の者に拾はせて居る場へ、親の久右衛門が来てその誓を切つて勘當した。椀久は舅義右衛門の許に監禁されて居たが、松山は廓を抜けて逢ひに来たが、女房おさんの貞實なのに感動して、田舎の客に身を任せようとして去り、椀久は悲しみの餘り發狂して、狂ひ廻る途上、請出されて行く松山にあひ、田舎の客の情で松山は椀久に與へられるいふ仕組である。初代都一中の正本に同外題で、殆んど同文のものがあるが、その先後は不明である。

劇の椀久物としては最も注目すべき作で、後に作られた椀久を材題とした諸作は、直接間接本曲の影響を受けて居る。といつてよい。

### 八百屋 お七

外題年鑑に寶永元年二月十五日から豊竹座で「八百屋お七歌祭文」を興行したとあるが、その正本はまだ見ない。故に現存の「八百屋お七」との関係は明言し得ない。享保十七年正月豊竹座興行の「八百屋お七戀緋櫻」は同文で、これは外題だけをこの際改めたに過ぎない。故に原作はこれより前の作たるは明かであるが判然しない、併し遅くとも正徳年間には作られたもののやうである。

八百屋お七は吉祥院の小姓吉三郎と深く契つたが、父久兵衛は火災の後、その家を再築する費用を借りた義理合上

からして、萬屋武兵衛からお七との結婚を迫られてこれに同意しなければならぬ立場となつた。お七はこれを悲しみ、自宅に放火して再び吉祥院に寄寓して吉三と一緒にならうとしたが、捕へられて鈴が森で處刑され、吉三も亦刑場で自害してお七の後を追ふといふ筋であつて、上巻は吉祥院の場、中巻は八百屋の場、下巻は牢屋前から道行、鈴ヶ森刑場に分れて居る。

本曲は元祿末から寶永初年頃に行はれた八百屋お七の歌祭文の影響を受けて居ることは、下巻の「八百屋お七江戸櫻」の一齣によつて明かである。又西鶴の「五人女」(貞享三年)の巻四八百屋物語に負ふ處のあるのは、上巻發端のお七濡れの場面が西鶴の雷鳴の夜に忍ぶ條の翻案であり、中巻も西鶴の雪の夜の情宿の脱化と見られる點などによつて明かである。

海音の世話物中出色の作で、後の八百屋お七の戯曲に及した影響は大きい。延享元年四月豊竹座上場の爲永太郎兵衛の作「潤色 江戸紫」はこの改作で、更にこれを作りかへたのが安永二年四月北堀江座で興行した菅專助の作「伊達娘戀緋鹿子」で、後の歌舞伎の火の見櫓のお七の人形振はこの作から出てゐる。

### 富仁親王 嵯峨錦

明和板の外題年鑑には寶永六年六月豊竹座上場、享保五年三月同座再興行とある。但し本曲が「丑の年」(寶永六年又は享保六年)に作られた事は本文にその證據があると共に、又作中に四寶銀と新銀との併用されて居る(享保四年から享保六年十二月迄)間の作たる證もあるのによつて考へると、享保六年の作ではなからうかとの疑もあるが、今姑く年鑑に従つて置く。

富仁親王(花園女帝)がその異腹の兄宮に當る蟠海僧都の王位篡奪の野心抑壓の手段として男装し給ふが爲に種々



の波瀾を捲起すといふ趣向で、女繪師狩野雪姫と彫刻の名人左甚五郎とが、蟠海僧都に強要されて、人質に取られて居る夫や母の命を救ふために、決死の一念をこらしたために夢想によつて弘法大師の筆といふ小野小町の像と同一のものを、それ／＼製作するといふのを全篇の骨子としてある、發端に富仁親王が嵯峨へ紅葉御覽の行幸ある條に因んで外題をつけたらしい。

作中の狩野雪姫の事は、既に宇治加賀掾の正本「女繪師狩野雪姫」に仕組まれて居るが、これを本として作つたもので、更に後の「祇園祭禮信仰記」の雪姫の藍本となつたものらしい。又三段目左甚五郎内場は全篇の山で、後の「京人形」の原據とも見られる。海音の時代物中에서도稀に見る力の籠つた面白い場面であると思ふ。

おそめ 袂の白しほり

正徳元年四月八日から豊竹座上場。大阪の東堀瓦屋橋附近の油屋太郎兵衛の一人娘お染は子飼の丁稚久松と親や主人の目を盗んで相通じて居た。然るに太郎兵衛はお染を親類の山家屋へ縁付けようとし、久松の在所の父も亦久松を連戻らうとしたので、二人は前途を悲しんで、家人が山家屋へ招待の留守中に情死を遂げたといふ筋。

この實説については從來心中否定説が行はれてゐたが、私はやはり二人は心中したものと考へる。而してそれは寶永五年正月の事らしいが、これが直に歌祭文となつて歌はれ、更に寶永七年正月には大阪の荻野八重桐座で「心中鬼門角」といふ外題でこれを仕組んだ歌舞伎が荻野八重桐(おそめ)松川常之丞(久松)櫻山庄左衛門(油屋主人)等によつて演じられた。本曲はこの歌祭文と「心中鬼門角」とを粉本として作られたものであつて、海音の世話物中では名作の一つであると共に、後に及した影響も大きい。淨瑠璃の改作物としては、革足袋の意見で知られる「染模様妹官門松」(明和四年十二月、菅專助作)と、野崎村の段で名高い近松半二の「新版歌祭文」(安永九年九月)とがある。

### 傾城 三度笠

正徳三年十月十二日から曾根崎新地で興行された豊竹座の「播州曾根松」の切として上场。近松の「冥途の飛脚」の改作。大筋は次のやうである。忠兵衛が商用で江戸行の留守中に、その養母は忠兵衛の許嫁となつてゐた姪のおとらと思ひ合つて居た新七と添はせた。歸つてこれを聞いた忠兵衛は、その代りに馴染の梅川を身請しようとし、友達利右衛門の親切を誤解して、それと張合ふために爲替金の封印を切つて梅川を身請して大和に走り、新七の許に潜んで居たが、遂に召捕へられるといふのである。

この作では新七おとら夫婦及びその父新兵衛が、忠兵衛と梅川をかかまふ爲に苦心し、殊に新兵衛は二人を落してその罪を一身に引受けようと迄する條に作者は大いに力を入れてゐる。義理に詰んだ作柄であつて、原作たる「冥途の飛脚」と本曲とを比較すれば、近松と海音との作風の相違はよく分ると思ふ。

活字に覆刻したのは今回が初めてである。

### 愛護 若藪箱

正徳四年十月朔日から豊竹座興行。印度の阿育王の太子狗拳羅が繼母の戀を斥けたためにその腹いせに讒せられて父王から放逐されて、流浪の辛酸を嘗めるといふ話が今昔物語の巻四にあるが、この説話の系統を引くと思はれる説經淨瑠璃の「あいごの若」は、古淨瑠璃にも轉用されて語られた。而してこれを改作したものに元祿六年正月竹本座興行の「都富士」がある。こゝに收めた本曲はこの「都富士」の改作であつて、後の「愛護若名歌勝興」(寶曆三年五月、竹本座上場)の原據となつた作である。



左大將清平の子愛護若は右大將有雄の女六條姫と大納言爲明の女鳩照姫とに思はれて居た處が、有雄は腹黒き人物で、反逆を企てて、六條姫を清平の後妻として清平をも一味に引入れようと企てた。然るに名義上は母となつても、六條姫は愛護若を思ふ情念は募るのみであつたので、その不倫が清平の忌憚に觸れて六條姫は斬られ、愛護若は追放の才となつた。併し姫の執念はなほ附纏つたが、忠臣早苗之介夫婦の働と佛力によつて執念は退散して、愛護若は鳩照姫と添ひとげるといふ筋である。

### 鎌倉三代記

享保三年正月二日から豊竹座興行。

頼家が暗愚にして酒色に溺れて居るのに乗じて、比企能員は京都六條の遊女二人を密かに呼下して養ひ、その一人を若狭前と名のらせて頼家の室として外戚の威を振ひ、又他の一人である淺茅は畠山重忠の子重保とは以前の情人であるのを奇貨措くべしとして、態と女嫌ひの朝比奈三郎に嫁せしめて、重保との間に三角關係を作らせるやうにして、これを和田畠山二大族の確執の因とし、かくてその間隙に乗じて將軍家を横領しようとした。併しこの隠謀は若狭の兄花垣の告白によつて露顯し、能員は和田畠山のために滅されるといふ筋である。鎌倉三代記中の比企能員の謀叛を中心として脚色したものと云ふべきであらう。

天明元年三月作の「鎌倉三代記」は同じ外題であるが、これは大阪落城の事件を鎌倉の世界にして脚色したもので、本曲とは全く内容の別なものである。

### 義經新高館

享保四年正月廿日豊竹座初日。

古淨瑠璃の「高館」以來有名な義經主従の高館に於ける悲壯なる末路を借りて、これに大阪落城を託して脚色した作である。作中の主要人物である頼朝は家康、義經は秀頼、權頭兼房は片桐且元、和泉三郎は眞田幸村、三郎一子大助は眞田大輔、龜井六郎は木村重成に當ててある。

從來其筋を憚つて殆んど觸れ得なかつたが、戯曲としては絶好の材題である大阪落城を頗る大膽に又巧妙に假託した點に於ては、これより先、同じ作者によつて關ヶ原の戦を扱つた「頼光新跡目論」よりは一段と鮮かである。而して作者は和泉三郎龜井六郎等高館方の主要人物に同情を寄せ、殊に泉三郎を中心人物として描いてゐる。

本曲は後の「南蠻鐵後藤目貫」の原作となり、引いては「近江源氏先陣館」「鎌倉三代記」「日本賢女鑑」等の原據となつたものとも見られるので、この系統の淨瑠璃としては頗る注目すべき作である。

### 心中二つ腹帯

享保七年四月六日より豊竹座興行。この前年享保六年四月五日宵庚申の夜のお千代半兵衛の情死事件を扱つたものと思はれる。而して實際は八百屋の姑婆は蟲も殺さぬ人よして、亭主の伊右衛門は若い女好て嫁のお千代を口説いたのが元であつたのを、作者は姑婆を悪人に舅を善人に作りかへたのだといふ(傳奇作書)。

荒筋はかうである、遠州濱松の土山脇十藏は、その子半六が劍難の相があるので侍を止めさせよとの主君の情ある内命に従つて、大阪新靱油懸町八百屋仁右衛門の養子とならせて、半兵衛と稱へて暮したが、一年人數改めに歸省中女房千代が姑去りに逢つた。侍氣質の半兵衛は、養母に對する孝行と行く先もない妻に對する情義とを考へて進退に窮し、遂に女房と共に宵庚申の夜生玉馬場先大佛殿の勸進所の門前で女房心中を遂げるといふのである。その最期に臨



んで半兵衛が、お千代の白縮緬の抱帯を二つに切らせて、その一筋で自分が舊主への申譯として先づ切腹したその傷口を捲き、他の一筋でお千代の腹にある四月目の胎兒に、せめてもの心で腹帯をさせて心中するので、そこで「心中二つ腹帯」と名づけたのである。

本曲は大當りであつた。同じ材題を扱つた近松の「心中宵庚申」は竹本座に十六日遅れて上場されたが立後れの爲もあつたか豊竹座に壓倒された。そこで、豊竹座は大當りのために、千日の法善寺へ石碑を建てて供養したのを、八百屋では大いに怒つて、夜分に石碑を豊竹座の木戸前へ移して建てさせた處が、却つてこれが逆に一入人氣を煽つたなどいふ話(反古籠)も傳はつて居る。海音の世話物中名作の一つである。

#### 傾城無間鐘

享保八年七月十五日から豊竹座興行。紀海音の最後の作で、時に作者六十二歳。作中に初春の行事や景物を當込んだ箇所が多くて、益興行としては如何かと思はれるふしもあるが、姑く外題年鑑に従つて置く。

山梨日向前司久國が叛逆を企て、足利頼兼を酒色に溺れさせ、遊女今川とその情人伊勢新九郎長氏との間に生れた茶々丸を、今川の父近藤平次兵衛から貰ひ取り、これを頼兼の落胤と稱して養育して、天下を奪はうとの計畫を進めた。久國の聲今川俊秀とその妻淺香とはその奸計を知り、これが阻止のために種々の迫害を受けつゝも同士と共に盡力して、遂に頼兼と茶々丸と公然親子の對面をするといふ日に、悪人の奸計をあばくといふ仕組である。

第四段に遊女今川が父の末期の遺言に従つて、茶々丸を久國の手より取戻して足利家の禍害の種を除かうとして、久國の前で父の晝いた無間の鐘を撞く場面がある。題名の基づくところである。無間鐘の説話を劇に仕組んだのは歌舞伎の方ではこれより前にもあるが、淨瑠璃ではこれが始めてである。本曲は海音の時代物中有数の佳作である。

## 第二 並木宗輔の作

### 攝津國長柄人柱

享保十二年八月十五日から豊竹座興行。作者並木宗助 安田蛙文。

暴横潜上知らざるなき蘇我入鹿は、戀慕に事よせて皇極天皇を弑し奉らうとした。忠臣藤原鎌足はその女藤原照姫を身代りとし、帝を奉じて浪花の里に隠れ、長柄の人柱に立つた岩次兵衛の女おこよを蘆刈女に扮装させ、鎌足の家に傳はる神通力のある鎌を持たせ、蘆刈の所作の間に入鹿に近附かせて遂に之を滅すといふ仕組で、四段目の岩次内から袴流しの段、人柱の段が全篇の山で、この段は後にも度々繰返されてゐる。又五段目蘆刈の段は謠曲「蘆刈」の翻案で、初演の時には太夫豊竹上野少豫、ワキ豊竹和泉太夫、三絃野澤喜八郎の出語りで、人形は藤井小三郎の出遣であつた。

### 南蠻鐵後藤目貫

享保二十年二月七日から豊竹座上場。前掲紀海音の「義經新高館」を藍本として、世界を南北朝時代に取つて、大阪落城の事件を一層大膽に描破した作。足利尊氏を徳川家康、新田義興を豊臣秀頼、舟田左衛門利村を眞田幸村、江州に住む目貫の名工後藤又治を後藤基次に假託して、この醉漢後藤が舟田の切なる推擧に動かされて軍師として大阪城に入る事、舟田が空砲で後藤の本性を試みる事、後藤の妻關女が尊氏を砲撃する事等の條に山を設けて脚色してある。その描寫が餘り赤裸々で大膽なために、其筋から出版を禁止されて寫本のまゝで傳つて居り、外題も「南蠻鐵後藤目貫」の外に「南蠻銅後藤目貫」「南蠻鏡後藤目貫」などがあるけれども、いづれも内容は同一である。



處が延享元年三月江戸肥前座に於ては、本曲を取つて「義經新合狀」と改めて興行した。尤も作の上にも多少筆を加へ、先づ世界を海音の「義經新高館」と同じ鎌倉時代とし、問題となつた關女の尊氏砲撃の露骨な條に改修を施したが、併し大體に於て結構脚色共に原作と大差はない。「後藤伊達目貫」「泉三郎伊達目貫」等皆同物である。本書に改めたのはこれである。

本曲の第二段日本田館での番場忠太が後藤大三郎へ配膳の條は、近松の「信州川中島合戦」の輝虎配膳の翻案で、この大三郎は「義經新高館」の大助を作りかへたものと思はれる。又四段目の堅田浦に於ける後藤と大三郎との出会いは、後の「一谷嫩軍記」の須磨浦の段と同趣向である。

#### 苜萱桑門筑紫蝶

享保二十年八月十五日から豊竹座上場、並木丈助との合作。

信州善光寺の親子地藏の縁起を題材とした説經の「かるかや」は既に寛永八年版もある程で、古くから行はれたものであつたが、更に寛文二年には「かるかや道心」が刊行されて世に流布するに至つた。本曲はこれを本として、更に色色の趣向を取入れて作り上げたもので、宗輔の作中での一代代表作であるのみでなく、淨瑠璃中での名作の一である。

筑前の大名加藤左衛門繁氏は酒盃の中に櫻花の散るを見て無常の心を起した折柄、日頃陸しく見えるその正妻と側室とが、假睡の中に頭髮が蛇となつてもつれ合ふを見て、こゝに外面如菩薩内心如夜叉の理を感じて一念發起し、高野山に遁れて苜萱道心となつた。國許では隣國豊後の大領大内義弘が、加藤家の重寶夜光珠を得ようとして、使者に遣した新洞左衛門の女夕してが守宮酒の計略にかゝつたのを憤り、兵力に訴へようとする。繁氏の妻は一子石童丸と共に夫を尋ねて高野山に向ひ、學文路の宿の玉屋與次夫妻の助けを得て登山したが、母は女人堂で病死し、石童丸のみ

は辛じて父に邂逅した。折柄加藤家の臣監物太郎が大内義弘に繩をかけて來ると、苜萱は、助けるも殺すも私には計らひ難し、都へ行つて奏聞の上命乞をしてやれ、それぞ我が子石童を筑紫へ送る轍なれといふに終る。二段目の切繁氏書置、三段目切守宮酒の段、四段目學文路辻堂夢の段、與次内の段、五段目山の段等が名高い。

#### 和田合戦女舞鶴

元文元年三月四日から豊竹座興行。寶永元年正月竹本座上場の「悦賀樂平太」の改作である。將軍實朝の妹齋姫は冷泉爲氏を思慕して居たが、藤澤入道安靜は、老職和田新左衛門常盛と江間太郎義時とが共に前將軍頼家から姫を妻とする許可を得て居たといつて争ふを利用し、姫を囮として兩家の間に戀争を起させて、その間隙に乗じて天下を傾けようとした。然るに荏柄平太夫妻、阿佐利與市の妻板額一子市若等の働きによりて悪人は滅びて、和田北條兩家和解し、齋姫は情人爲氏に嫁するといふ筋である。二段目の切板額門破り、三段目の切市若切腹、四段目の口阿闍梨の場、切小倉山の段等が名高い。

初演の時阿闍梨の場を豊竹河内太夫が語つて好評であつたが、この場は滑稽味を發揮するのを特徴とするので、「阿闍梨場」が訛つてチャリ場といふ言葉が起つたといはれる。

#### 河原 釜淵雙級巴

元文二年七月廿一日から豊竹座興行。いふ迄もなく強盜石川五右衛門の事件を題材とした作である。石川五右衛門を仕組んだ最初の淨瑠璃は、貞享頃の作と思はれる、松本治太夫の正本「石川五右衛門」で、これを改作したのが、近松の「傾城吉岡染」(正徳二年)である。この作では石川五右衛門は、兵法の師匠たる吉岡憲法の窮迫を救ふためにふと



した誘惑より盗み心がついて、遂に變幻出没の妙を極める大強盗となつたが、憲法親子を救はうとした爲に捕へられて釜煎の極刑に處せられるといふ脚色である。本曲はこの改作であつて、五右衛門を義賊とした點は共通であるが、原作の憲法に關する筋は全く削除して、憲法と遊女吉岡との關係を五右衛門と瀧川との關係に譏案し、又憲法と吉岡との間の子を五右衛門と先妻お律との間の子に作りかへて、五右衛門を主人公としてある。上中下三卷より成り、上卷は河内美豆野狩場驅りの段から島原澤瀉屋の瀧川盗出しの段迄、中卷は柳の馬場當馬浪宅より五右衛門住家の繼子いぢめから瀧川本心告白迄、下卷は藤の森の刀賣、五右衛門父子召捕、七條河原釜煎に終つてゐる。

石川五右衛門の戯曲としては系統的に見て重要な位置に立つてゐる。

#### 鳩山 姫捨松

元文五年二月六日より豊竹座興行。謠曲「雲雀山」や中將姫の傳説などを材題として作つた竹本筑後掾の正本「當麻中將姫」(元祿九年四月)の改作である。

横佩中納言豊成の後妻岩根御前は、繼子中將姫を憎み、豊成が天子から保管を命ぜられてゐた千手觀音の像を忍びの上手の者に盗ませて、その罪を中將姫に負はせ、雪中に獄舎を構へてその中に姫を入れて呵責の限りを盡す。侍女桐ヶ谷が浮舟と牒し合せて姫を打殺したる體に見せて、虎口を通れさせて、雲雀山に隠れた。これを知つた岩根は執念深く追跡し、姫の首を討つて渡せと自ら檢視のために乗込んだ。横佩家の執權左京之進晴時と久米八郎とは苦心して身代りを立てたが觀破されて進退に窮した際に、烈婦更科が岩根の實子千壽の首を携へ來つてその積惡を追究し、佛像を盗ませた上に殺された夫の仇であると稱へて岩根を刺殺し、姫は出家するといふ筋である。三段目の切雪責の段が最も名高い。のち寛政九年二月道頓堀東の芝居で「中將姫古跡松」と題して三段目を出してから、この外題が行は

れ、現在もこれで通つて居る。

四段目の雲雀山の隱家で、晴時と八郎とが姫の急を救ふために相談をして、

思ひ廻す程大事の場所。高うは言はぬが身代りはどうであらうぞいなう。サアおれもさうは思ひ付いたれども、是迄に手をかへ品をかへ様々の身代り。仕盡して仕様がな。どう思ひ廻しても身代りは古い。いやさう片意地にも言はれぬ。古いといふならば。朝夕する膳部。此世始つての八木(米のこと)かし洗うて炊き上げ、ぎやつと産れて乳ばなれより今日迄食すれども。命をつなぐ一粒萬倍。眞實の甘露の味ひ。幾度食ても飽かぬぞや。身代りも忠義の誠。誠を以て姫の身命を養はば古くとも一口は大事あるまい。

と言つて居るのは、作者の身代りに對する態度も見えて面白くはないか、身代りは芝居道で忠義を表現する場合の米の飯であると思つて居ればこそ、これから後でも何遍でも繰返されたのであらう。又岩根が「目通りで首討たせよとの仰。生き顔と死顔とは相好の違ふ物……」といふのも、寺子屋でお馴染の松王のセリフと、近松の「吉野都女桶」の東寺首實檢の場の大森のセリフとの連鎖をなすやうに思はれて興味がある。

#### 一谷 嫩軍記

寶曆元年十二月十一日から豊竹座興行。正本には作者として淺田一鳥・浪岡鯨兒・並木正三・難波三藏・豊竹甚六等五人の名を連ねた上に故入並木完輔の名をも掲げてある。完輔は本曲の三段目迄を作つて物故したので、そのあとを淺田等が追加して一篇に纏め上げて上演したのであるといふ。既にこれ迄多くの作者に依て幾度も扱はれた熊谷と敦盛、忠度と六彌太との物語を大きく廻ひ交ぜた爲に随分複雑な筋になつて居る。全篇五段の場割を略示すれば次の様になる。(初段)大序―堀川御所(熊谷六彌太陣)、中―北野天神の場、卿の君自害、切―經盛館(敦盛出陣)。(二段目)口―一の谷



陣門(小次郎先陣)、中一組打(敦盛最期)、切一菟原の里林住家(太平出陣、六彌太忠度へ櫻の枝渡し)。(二段目)口一彌陀六内の場(小雪と若衆實は敦盛との濡事)、中一御影の松原(青葉の笛渡し、寶引)、切一熊谷陣屋。(四段目)道行(菊の前と乳母林との鎌倉行)、口一鶴が岡八幡の場(菊の前危難を救はれし深編笠の侍より忠度の敵は六彌太と教へらる)切一六彌太館(樂人齋事太平の述懐)。(五段目)、大内の場(寶劍取返し)、扇谷平山陣所(六彌太叛逆人平山を討つ)。

本曲では二段目の組打から三段目の切の熊谷陣屋迄が勝れてゐて、今日でもよく上演される。この間の荒筋はかうである。大序堀川御所の場で義經から辨慶の書いた「一枝を伐らば一指を切るべし」との制札を渡された熊谷は、若木の櫻をいたはれといふ義經の心を汲んで、一の谷で院の御胤である敦盛卿を助けて我が子の小次郎を身代りにしてその首を討つて、自分の陣屋に於て義經の實檢に供へる。敦盛のために供養の石塔を建立して居た彌陀六も梶原のために陣屋に引かれて来て居たが、義經は眉間のほくろによつてそれが昔自分達が伏見の里で雪の夜に救はれた宗清であると觀破して舊恩を謝し、寸志として彼が大切に育てる小雪への土産として鎧櫃を與へる。中には敦盛が忍んでゐる小雪は重盛の女で敦盛の情人である。世の無常を悟つた熊谷は出家する。これが三段目の切である。

瑠璃天狗

五卷 賽笠翁著

著者の傳未詳。淨瑠璃の名作十四篇十八段を取つて註釋を加へたもの。大抵その當時よく行はれた曲である。文化三丙寅秋の掠費居士の序文があるのによつて見れば、この年成つたものと思はれる。明治以前に於ける淨瑠璃の註釋書としては、穂積以貫の「難波みやげ」と並び稱せられたもので、淨瑠璃註釋書としてはこの二書以外にはなかつた。しかも著者は「難波みやげ」のやうに儒者氣質の堅苦しい行き方をしないやうにと心掛けて筆を取つたらしい跡が見える。今日でも参考とするに足る著述である。

—— 解題終 ——

目次

紀海音淨瑠璃集

椀久末松山	一
八百屋お七	一九
富仁親王嵯峨錦	四三
久松袂の白しほり	八三
傾城三度笠	一〇五
愛護若峙箱	一二五
鎌倉三代記	一五九
義經新高館	一九一
心中ふたつ腹帯	二三五
傾城無間鐘	二五一



並木宗輔淨瑠璃集

攝津國長柄人柱……………	二九一
南蠻鐵後藤目貫……………	三四三
苧萱桑門筑紫轢……………	三九七
和田合戰女舞鶴……………	四四九
河七原釜淵双級巴……………	五〇一
鷓山姫捨松……………	五三三
一谷嫩軍記……………	六九七
瑠璃天狗……………	六五九

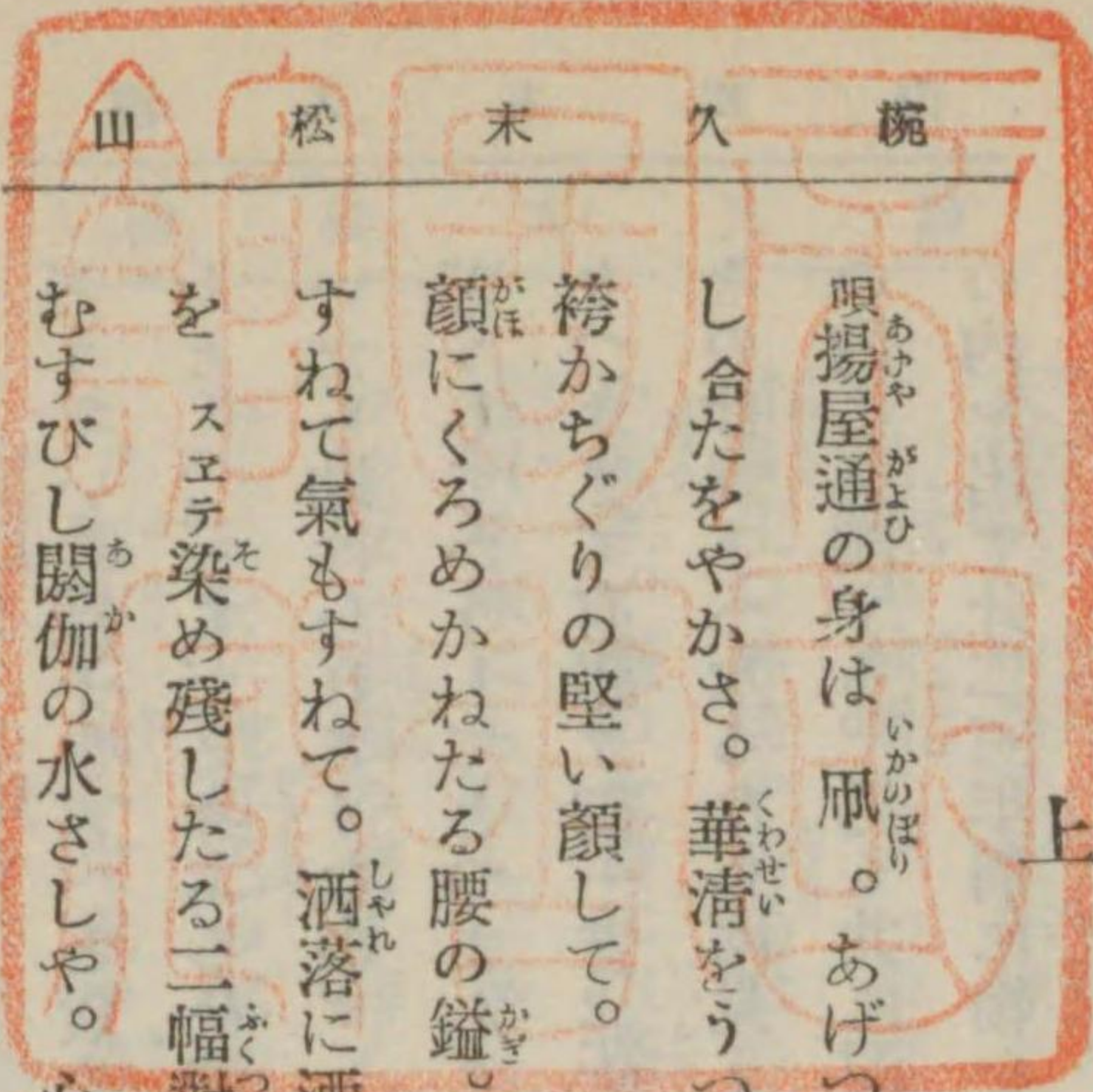
—— 目次終 ——

椀久末松山



椀久末松山

作者 紀海音



唄揚屋通の身は 風。あげつのはしつ手管の涙。又來ぬ客もまだこぬ桐屋紫檀のナホスフシ音色を弾き。もたれかゝりし合たをやかさ。華清をうつす奢とかや。地色今日の茶の湯のお客は誰そ椀久様一中様、浮世をねぶり又右衛門。各袴かちぐりの堅い顔して。フシ並びある。地下座にさゝれて三つ輪ぐむ。老婆はすみかも井筒屋の。水のよしあし知顔にくろめかねたる腰の鑑。上びじまんに居ながれし亭主は色のふかみどり君が根曳を松山の。雪の口切壺折の姿はすねて氣もすねて。洒落に洒落たるしやれ手前。オクリせかずいそがずしほらしや。地先づ掛物は情しる虎少將が眞寔をスエテ染め残したる二幅對。表具は庵に木瓜の。素袍の昔思はるる。フシ名は白拍子。祇王祇女。佛を願ふ朝夕のむすびし關伽の水さしや。心の杉の木地ぶたの。フシ氣の通りたる物好。オクリいや色好へ疊ざはりも靜御前のその昔。もらさぬ水の堀川や。小オクリ御所のへ宿直の棚さがしあられ煎りたる灰焙烙。班女がふかき思はくの。思ふにかひもフシなき世なら。身をも投ぐべき井戸茶碗。山鳥の尾の羽箒の。うはきな客と。フシいひかはす。中は茶入の。飛鳥川。千壽の前が爪音に峰の。松風。たぎらす。釜は蘆屋に啼く田鶴の。友に久しき龜菊が。フシ葛葉の里の自在竹。熊野が在所の池田炭。こがれてくゆる薫物入は。越中が伊勢白粉箱。茶杓はおこと道心が。ハツミ昔を泣きしフシまだら竹。中にゆかしや蓋置は。是なん消えし夕霧が。唇染めし紅猪口と。フシ皆目を付けて感じける。地夜會



に花は生けねども、亭主の顔は初梅に。柳あしらふ腰すゑて袂紗茶巾の取捌き湯音。水音汲みわくるハツミフシ柄杓持  
 つ手のしほらしさ。フシ利休が流宗且が。妾腹なる孫姫が此世稀なる遊色と開いたる。口を閉ぢかねし。地色盗みと  
 いへばにくけれど戀とて忍ぶ縁の下。白き腕を差出して客の脇差奪はんと。もがけども手が届かねば股引はいたる男  
 ずね。ぬつと差出し親指に下緒引つかけ取る所を。腕久見付けナウ何れも。太夫が茶の湯に鬼神も感ぜしめ。心なき脇差  
 が宙を飛ぶはと言ひければ松山かしこを差覗きヤア道楽殿是は誰ぢやと頼かぶりをとれば。駕籠の作兵衛さて興がる  
 どうぞいの様子を言へと責めかくる道楽とかう答へせず。ナウ作兵衛殿双物が無けりや死なれぬか。舌ても喰ひ切ら  
 んと。スエテもだえ身ぶるひ泣きみたり。詞腕久せかぬ顔して。様子はさかねどそちたちが命は七福神の前。巾着を開  
 いたら助けられさうな事。地色毘沙門にも愛染にも拙者が成つて。願をかなへてやらう長う聞くのも初心な事。高は  
 どうしてかうしてとつまんでたつた一口に。話せといふも大様に。フシ脇目をしてぞゐたりける。地色道楽袖にすが  
 りつきさて有難き御一言。死なうと覺悟極めたも五十兩の借金ゆゑ。身を長崎へ賣られ行き添ひたい人に別るゝゆゑ。  
 その仕覺さへなるならば見えぬ冥途をあてにして。何の心中したからう生けうとも殺さうとも。お前のお心一つにと涙  
 の内に笑顔する。男も共に涙ぐみ扱面目なき次第なり。私めも腹からの駕籠舁にてもござりませぬ。短氣おこして親  
 の内を出て此二三年肩に物を置きます。地色戀の歌は習はうとも貧の盗はせまいと思ひしに。死損なうて淺ましき  
 名を流さんかと。スエテ差俯向いて泣きみたり。腕久うなづき扱々心易いこと。一夜に捨つる豆板の露より輕き二人が  
 命。きづかひすな請取つたそれ又右衛門。詞最後の小判をといへば又右衛門不機嫌にて。お志は御尤なれど。此金は節  
 分の御吉例借錢乞を打出す豆板。地色上はば、様御より。下はま、炊花車六尺。我等が宿の鼻そげまで今宵をあて  
 に。貫袖半疋買ひかゝつて着せました。詞其心あて違うては兩人は悦ばうが。迷惑は大勢の者地角を直して牛殺す。  
 何とも暗き御政道と。フシにがり切つてぞ申しける。地色大盡につこと打笑ひ尤もく。詞汝が心も背くまいと小者

を呼びてやい汝は。走り歸つて手代の六兵衛に言はうは。のがれぬ事にて金五十兩入用あり。只今持參せよと云ひけ  
 れば。地色其時皆々手を合せ一切衆生平等の。如來の御慈悲有難し。道楽様勝手に。眉取つて御内儀姿作兵衛殿は  
 股引に。肩衣着し婿君の鬢付一兩御祝儀に。又右衛門がはづむぞよ今宵はどうやら物騒な。肌の一步のひえぬ内。はや豆  
 打とそやし立て奥の座敷へ。三重入りにつけり。地金にかつえぬ禿花車物縫中居下男。座頭の久都二人連お出入の尼道  
 心。町代夜番の子持喚。足をつま立て走り出で。オクリ時刻へ遅しと待居たる。地色腕久其夜の装束には肌には好む白  
 天鷲絨。申着は黄垢無上着には太夫が仕着せの黒羽二重。淺黄の袴股立取り靜に歩み出でければ。お傍去らずの一中  
 は箱置の絃掛に。一步豆板山をなしさも。フシうや／＼しく伺候する。詞其時大盡高聲にそも節分の祝儀といつば。  
 昔日江口神崎や情揚屋の小座敷に。化物有りと云ひふらし七つ過ぐれば女郎の。往來も絶えてあらざれば一門一家是  
 を歎き。戀の女神に五釜の湯を參らすれば有難や。神子に託宣しました。汝が家の妖怪は。狐狸の業にもなく。逆  
 柱有る家にもなし。多くの者がそこに來て家を亡ぼす魂の。地色假に止る化生の業沈み果たる一念の。ほしい惜しい  
 の豆板を年越の夜に蒔くべしと。示現に任せ行へば。妄執忽ち去りしとなり。それより年月隔たりて傳へて知る人無  
 かりしを。我好色の冥加に叶ひ江口の君の夢想を請け。古きを追うて新しき。今宵の祝儀面々が手柄次第に拾へや  
 と。惠方に向いて鬼や外福内へ撒き出せば。地突退け押退け振合ひて。フシいさかひすべき氣色なり。地色かゝる所  
 へ編笠深く身持姿。最前の小者を連れ座敷へずつと通りければ。詞腕久見るよりこりや慮外者。主人の前で立ちはだ  
 かり殊に笠はと引取れば。地色親久右衛門はつとばかりに飛びすさり。搦手をすれば面々も。周章狼狽尻込し。  
 フシ座敷の興はさめにけり。詞久右衛門詞を鎮め。ヤイ久兵衛何か金子入用のよし手代六兵衛は留守なれど。急な  
 る事と聞きしゆゑ幸ひ昨日の爲替の金。汝が手より請取つた財布の封も其儘に。地色只今渡す請取れと機嫌は悪しく  
 見えねども。胸に應ふる誤りの。詞も出でず俯向けば包み切れたる腹立の聲あけなくわめき出しやれ痴呆者大盗



人。騙り掠めてげしがうより親の許してやる銀を。遣はぬかやりをらぬかと。地色肩も背中も遠慮なく。財布押取さんざんに破れよ碎けと叩くにぞ。口もほどけて石瓦はらり／＼と出づるにぞ。皆々驚き拾ひあげ。フシ是は。／＼と呆れる。詞久右衛門涙をはら／＼とこぼし。初対面の方々へ不禮の段は御免あれ。折檻の仕様もあらうに。晴れなる中にて一分を捨てさす。子は可愛うないかと思されんが恥かしい。世間の親とは違うて。相應の金銀を費すを厭ひは致さぬ。又阿房つくすを嬉しうはなけれども。襲にも晴にも獨子。五つの年に母親が流行風にさそはれて。死ぬる臨終の際までも彼めが顔を打守り。早う別れう故にやら人より殊に可愛うて。背丈の延びる嬉しさに。年月暮るゝを待兼ねしに。髪結ふ顔も得見ずして別るゝ事の悲しやな。乳母といふもの有るなれば乳にかつゑる事もなう。てゝ親のましませば牛馬にも踏まれまい。心にかゝるは繼母が取りつ叩いつ憎まうかと。地色思へば／＼情なや。千部萬部の巾ひより我が後世のため子の爲に。詞聞の枕は淋しくとも後連持たせ給ふなど。地色言置くことを目と耳にとめて歎き暮す故。詞一門どもが壁訴訟。商人の身に女房が。無けりや濟まぬと咄くを聞かぬ顔にて年月を。やもめの腰に甘やかしたる誤と。思へば今迄の放埒をも強意見した事はなし。爰をば聞いて給はれ。昨日取りたる爲替の銀を此石瓦にすり替へて。親に一杯喰せしを當座に探り覺えしが。ア、まゝよ云はゞ纒に五十兩。地色叱立してゆすられて家出やせんと案じられ喰うた顔して濟ませしが。思へば大事の分別所。親なればこそ子なればこそ。世間へ出せば眞金も同然たり。是に懲りずば如何様の事仕出さんと。人々に咄して恥を與ふるもきやつが爲。假令此身も諸共に袖乞の身と成り行くとも。母が形見の撫子の故と思へば悔みはせぬ。詞ヤイ物知らず義理知らずめ。せめては月に二三度は宿の妻をも詠めぬぞいとほしや舅の義右衛門。汝が痴呆を知らずして器量と誠になつみつ。つてにつてして戀聲の齋娘を名ばかりに。地色そぶ／＼とした女夫仲。それを苦にしてぶら／＼と。煩ふ娘の顔を見て。さぞ後悔に思されん。おのれが憎き餘りには某までを怨まれん。舅と婢と内外の。義理の缺くるが口惜い。おのれにかゝり某が命は

五年つゞまらう。悪しかれとは思はねど不孝の積もる天罰の。成り行く末が不便なと。スエテ怒りつ泣いつ口説くにぞ。地傍に居合す者どもも思はず。フシ涙を流しける。地色宛久兎角の詞なく脇差ずばと抜き放し。自害せんとする所を松山縫りとゞむれば。久右衛門立上り。詞ム、親の意見をむやくしう思うて死なうとな。やれ。とても腐つた根性からは生きて居ても花實は咲くまい。併しおのれ獨り殺しては。冥土の母へ言譯がない。地色逆ながら某も皺腹切つて追付かん。死ねや急げと責めかくる。フシ聲も涙に震ひけり。地色松山泣く／＼云ふやうは。詞ア、勿體なき御仰かな。地色世に有難きお志何しに悪しう聞き召さん。篤と御合點いたさうな如何な事明日よりは。廓通もなされまい我身も今のお詞にて。ふつ／＼思切りました。此廓を出ぬ法もあれ今から文も通はさじ。是に免じて此度の御腹立。御許し下されよと。スエテ涙ながらに掻き口説けば。宛久顔振上げなに。懇切るとは擲るるも叱らるゝもおのれ故と。地色云はんとするを口に手を當てナウこれ。詞杖の下からも廻る子が可愛と言ひます。お慈悲な親御が憎うておつしやらうか。いとしいこな様にお爲にならぬ事を申さうか。これ常は是程の事はつい合點の行くが。いかうせかしやんしたさうなお道理ぢや。大切な人の命二つを救はしやんした。五十兩の金違うたと云うては義理が立たぬ故。死なうとの事であらうナウ。わしも太夫ぢや。こな様に引もつけますまい。二人の者も死なしますまい。地色お前が双物三昧なさるれば。面打の様にて親御様が。一倍お腹を立てさんすと。スエテ縫り付いてぞ泣きあたる。詞久右衛門聞いてホ、神妙な心底。年寄めが心を感じ今の一言たがへ給ふな。家藏も埃まであれめが物。地金故義理は缺かせまいと懐中したる金子にて。悴が命は拙者が買ふ。汝は二人が命を買へと。包ながら投出せば。どこやら粹な親御様と。フシ皆々顔色直しける。時に久右衛門合口抜いて宛久が。髻根より切落す。是はと云ふをア、騒ぐまい／＼。詞世間の聞え舅への義理。勘當せねば立たぬ首尾俗の姿で追ひやらば。地色中々浮氣は直るまい。さあらばあらぬ方便事。又は様々悪心募りて悪名を双に残し。屍を野邊に晒されんを久離の子とて餘所に見て居られうか。詞姿を變



ゆる此上の慈悲首を纏ぐることぶき。地色衣に染めて里々を托鉢して世を送れ。それとも飢に及ぶなら指圖はせぬが従弟も有る。家來の門へ立つとも咎むる程の事あらじ。是もいふまじ。他人ぢやもの。憂しや浮世と横へ振る顔は。フシ涙の置所。地色金言耳に應へてや得心顔に椀久は。親に向つて一禮し何處ともなく出て行けば。松山やがて追付いて妻も許さぬ出家とは。はてやくたいもない何處へと控へる袖を振放し。詞ヤイ最前わが方より懇切つた。地色ナウ切らうと云うたは切りともなさ。親御様のお心を宥めんばかりに胸慥な。お心とも知らいで假にも云うたが悔しい。氣遣さんすな傾城を居腐りにして成りとも。圍へましよ我身を捨てゝ行かうとは。曲もないやらぬ〜と縋り付く。地色一中見兼ね中に入り御勘當は當座の事。とやかうあれば却つて椀久様のお爲にならず。萬は我等吞込んでみます追付け目出度う逢せましまさもあれ餘りお姿の。見すばらしうてお笑止や。地色垢馴れたれど一中が。心計の餞別と十徳脱いで着せければ。地嬉しや是も後世の縁。廓は西方極樂の二十五歳の夢の内。醒むれば何の變哲も無き世の中こそ。三軍哀れなれ

中之卷

フシ夢路には。足も休めず通へども。現にかへす佛や。スエテ姿の關の座敷牢。我物盗む金銀の小オクリ科ぞとへ思ひ諦めし。フシ候べく候に馴れた目の。地色近付ならぬ文字よみはしり智惠とて小器用に。古文も半空にやる名のゆかりとて西の銘。詞乾を父とし坤を母とす。何ぢや乾坤を。父母と云うたは此唐人めも。勘當に逢うたさうな。不夜城の仕過か妓女文作が募つてか。地色咄の合はう男ぢやと。得手に引込む註釋は壁の耳さへ。フシ恥かしき。地色舅の義右衛門次の間に咳拂ひして詞をかけ。詞ホ、結構なお心がけ。此様子を親久右衛門が聞かれたらほろりとしられう。ナウ若い時の不届は世にある習ひ。勘當が惨いの面目がないなどとて。必ず短氣な魂を持給ふな。つまらいて駈

落した者も。心が直れば富士を見たが徳になる。沙汰はない事身共も。二三年前までは。節季々々に二三十兩程の仕過。

地色塵が積りて山の神に前垂て縛られたも。さら〜恥とは存せぬ舞殿をかくまふに。座敷書院打開き。伽こしらへて朝晩の御馳走申す筈なるを。小暗き一間に押込めて置く故に。娘が怨めしさうに親の顔を打守るが。目に餘りて不便なれども。詞かやうに致すが御身の藥。又は詭言の種にと存じての事。僅か十日か廿日の内不自由をこらへ給へ。

地色最早今宵も初夜半時所帯持の第一は。夜は早う寝て朝起の。稽古に功を積み給へと。オクリ教へてへ奥に入りけり。地色かゝる折節妻のおさん同じ見舞も色含む。氣に覺ある差足や世間晴れたる妹と脊の中に思はぬ川出來て寢所替る。フシ宿直臥。地色小腹が立つて夜が寝られずあくる翌日は十六日。地獄の釜の蓋さへ開き。餓鬼も嗜む男ぶり

三途の川原をぞめくとかや。如何に斯うした時なりやとてお髪も結はずばらばらと。頭の延びた故にやらお色の悪い顔が。目に。スエテちらばうて氣の毒な。地色暫しの内と堅めたる下紐の關解かずとも。目に正月の御祝儀に鬘など

剃らせ參らせんと。剃刀茶碗持ち添へて。かしこに來り佇みていかう靜な。モウ御寝なつたかと。フシ内の。様子を窺ひるる。地色斯くとも知らず椀久は大欠伸三つ四つして。詞世の中の親父といふ親父に。霞のかゝらぬ親父は一人もない。錢金持つても太夫に逢はず何の樂がある。淋しいとて宵から寝てはあつたら目が愚痴になる。新町橋はどこちらの方ぞ廓は爰から見えぬ事か。地色エ、今時分三枚肩で押す奴もある。一中が咄も油がのる最中。備前の野暮め

がとつくりとしおとし顔に弄りをろ。張をもつ太夫なれば一倍厭な身振して。格子へ出て犬そばやしてゐるを見るやうな。其處へちよつと拙者が顔出したら忽ち笑顔をお目にかけるに。詞損料貸しの天狗の羽はないか。揚州の鶴は下りぬか十萬貫を腰に付け。地色太夫を引掛け立歸り千年を結ぶ松山に。逢ひたい見たい戀しいと。願の糸の二上りや

八百萬代の神かけて。どうか斯うかと。行末を。思うて胸を焼かうより。いつそ此身を。捨草の露と消えなば。恨もあらじ。只兎に角世の中は。かの一色の儘ならば罪な作らじ。諸共に。邪淫の悪鬼は身を責めてその念力の道も戀路も



高屏の上に戀しき人は見えたり嬉しやな。地色ヤレ松山か早う爰へと招かれて。急かるゝからに足震ひ。飛ぶよと見えしが縁先の石の角に胸打ちて。うんとばかりに息絶ゆる椀久はつと走り寄り。呼び生けんにも勝手は近し水も薬もあらばこそ。途方涙にうるゝと。スエテ手足を抱へ居たりけり。おさん此有様を見るよりも恨み妬みも餘所になり。涙催す仁愛の襖を少しおし開けて。茶碗の水を差出せば。椀久嬉しく押戴き心と目とに禮言はせ。太夫が耳に囁きてナウ是女房が。菩薩心にて大悲の水を興へしぞ魂返して一言の禮云うてから死なば死ねと口より口に入る息のやうく心付きけるにぞ。抱へて座敷に上りつゝ互に目と目を見合せて。スエテ抱き付いてぞ。泣き居たり。地色おさんも襖の此方にて袖を絞りにたりしが。包むに餘る言の葉の扱も見事な心中やな。地戀に命も捨つるとは咄には聞いたれど。目に見たは是が始め我夫のみか世界の人の親の諫世の謗も構はず行くは浮れ女の。此誠より迷うての事情の道も戀路をも。今宵の今覺えたり。我はもとより。フシたらちねの。地色懷出てぬ生娘にて淨瑠璃や歌舞伎をば。此道の學問にて女心は一筋に男はどれも悪性なと思ひ諦め居たれども。詞仲居や下女が陰言に奥様はうつそりぢや。人形ぢや佛ぢやと急かす下から恪氣して。地色更けて歸らせ給ふ夜は物のたまふも不返事に。枕蹴散し頭から後向いたる寢姿の。厭らしからう憎からう。お腹が立つたであらう物と思へば今更恥かしや。詞今年は斯うした事の出来ようとてか初春祝ふ染小袖に。腰元が油をかけ秘藏の三毛は鼠にかまれ。地色何かにつけて氣掛り故天神様の裏門にて八卦見て貰うたりや。詞申酉の方の女が呪ふといふ。それには私もせき上げて。地色憎やおのれに負けうかと。貴い坊様聞出して道切の札離別の御符。精進したり垢離かくを爺様へ聞えて。男の内に居ぬは女房の馳走の足らぬ故。左様な邪な心持つ故。久兵衛殿に憎まるゝと殊の外叱られても。エ、無理な事ばかり日本國に我程な。地色男思は有るまいと思ひし事の愚さよ。遠き廓の關を出て幾重の門扉乗越して通ふ人さへ有るものと同じ内に住みながら。親同胞に遠慮して襖一重を越えかねて。心一つに歎きし事。愚痴とや云はん不屈とやせん疎まれたるは我身の科。思へば器量も心中も。劣つた物

負けた物。さうとは知らなくてくしくくと。昨日迄も今日迄も傾城とやらに騙されて斯様な憂目見給ふといしうも亦憎うも亦。思ひし事の勿體なや恥かしやと。フシしやくり。上げてぞ泣きにける。地色松山も共に打伏しゐたりしが。ナウおいとしらしいお心や町女藤の一筋に。詞男をいとしがらしやんすに。名も浮れ女の心中が何しに及ぼうぞいの。嗚や今迄私が名を聞かしやんすも憎かつたて有らう。お腹の立つたはお道理でござんす勤の身でさへかはしい男には。恪氣するといふ様な物ではござんせぬ。地色如何程惚れた人にも女房の有ると聞いては。どこやらがをかしからぬを椀久様とは異な縁で。詞お前といふが有るを知らながら只滅多にいとしようて。假令大名の奥様と呼ぶるゝとも如何な事行くまい。よしや一生妾と云はれうと椀久様には離れまい。地色是程には思へども假にもお前を去らしやれとは。神かけて。フシ云ひはせぬ。地色取交したる起請にも變らじとは誓ひたれど。夫婦になるとは得書かぬも皆こな様へ立てゝの事。ゆめくお二人の中裂かうとは思はざりしを。詞恥かしや今参りしはいかい悪心ナウ椀久様も聞給へ。内々の井筒屋の客が請出すに極り。金も渡して明日は國元へ連れ行く筈。姉女郎や傍輩衆目出度のあやかるのと。地色肩や背中をつくゝと心一つに思案して。譬へ泣いても笑うても今宵明けては歸らぬ事。こなたを誘ひ立退きて何處如何なる山の奥。葎の宿に忍びても女夫事して遊ばんと。路銀も才覺して來たと袖より袱紗投出し。斯う迄はしたれども其淺からぬ御仲の。目を盗人の振舞して通ひ参りし罰當。不慮なる怪我に。自は冥途へ半参りしを。その情の一帯に二度いとし顔を見て思も戀も嗜れました世の中の仇を恩にて報ずれど。恩を仇では。フシ報はぬとや。地色思切るは切つたれども。田舎へも下るまい廓へも歸るまじ。兎角は心一つにと。フシむせ返り。てぞ泣きにける。地色おさんもあつと聲立て、嬉しき人の心やな。詞それに就き我身の上の悲しき事明し申さん聞き給へ。常々母様の仰には厭がる男には添せまい。暇取つて戻れとせぶられしを。地色とやかう延べてある内に。斯うした首尾に成つてはいよゝの事。されども父様が頼もしうて。他人でさへおちめには見はなされぬ。まして露ばかり



も如才しては。世間が立たぬと云うてかくまへ置き給へど。詞母様がわゝしうて子にかへての義理立は。をかしの厭らしいのとねすられて。此二三日はどうやら父様も思案顔なる體を見て。地色我身の悲しさ主様に咄して。爰を立退きて添はうか。イヤ何もしつけぬ我なれば長らへ憂目見んよりは。いつそ諸共死なうかと。様々思ひわけれ共なま中咄したとてそなたと云ふ深い仲あれば。地よも自らとは死なうとも退かうとも御合點は參るまいと。思へば恥しうて包みしが。詞今咄しますは啓氣でも何でもない。地色そこにも主に別れてはよも生きては居られまじ。其命を私に呉れて。連れ立ち退きて添ひ給へ。二人の内に一人はとて死ぬる命。同じくは相思ふ中は残り給へ。我身は兎にも角にもならん。さは云へ夫婦は二世といふなれば。此世は松山殿と添ひ給ふとも。未來は必ず自と妹脊の契變り給ふな。言ひ置く事は是迄と持ちたる剃刀逆手に直し。自害せんとする所を腕久あわて止め兼ね。襖の下に押伏すれば死なるともがく女心。されども強き男力。恨めしげなる聲を出し諸共にとも云はゞこそ。身をば恨みて死ぬるものをそれさへ儘にし給はぬ斯くまで憎き我身かと恨み罵り泣給へば。是非に迫りて腕久は。フシ只せき上げて居たりけり。地色松山立寄りそゝけし髪を搔撫て。我身を立て、死なうとは有難や忝や。添へと許しを請けたれば最早千年萬年も。契つた心地の致しまし微塵も残る事はなし。則ち只今返します親御の心さがなくば。何處てなりと添はしやんせ夫婦と知れた仲なれば。詞浮氣とも。徒とも指差す人はござんすまい。我身は金に任す身の死なねば濟まぬ心なれど。お志のせつなさに義理に憂身を沈めつゝ。請出されて行きませうナウ腕久様。今歸りなば翌日より田舎女房と思召せ。お心ばし残されな自ら廓に無きならば。地色定めてお身も納まらん勘當も御許され。御夫婦目出度う榮え給へ。起請こそ今は仇なれ是なくば忘るゝ際も有りなんと。引き破り噛みしだき思切つたる顔ばせの。詞は清く目は濁る睫に玉を持たせつゝ。ずつと立つて出でければ腕久急いで聲を上げ。實正田舎へ下るかと走りよつて引据ゆれば。おさんはやがて起上り死なんとするに又立歸り。持ちたる剃刀もぎ取らんと振合ふ隙に松山は。梢に帯を引き掛けて堀の上にはひらりと登り。腕久様おさん様不心中はお爲ぞや。世間の誹はよき様に。頼みまするといふ聲も。オクリ泣くゝ、へ飛び降り出で行けば。地色南無三寶なしたり。その根性と知るならば最前に殺さうもの。よしなき水が仇となり備前の客めにうまゝと。添はせん事の口惜しやと足ずりして居たりしが。エ、腐つた心底と知らいて其方を。此年月袖に思つた面目ない。せめて彼奴めに恥をかゝせて腹癒んと。馳出る袖を引留め。女郎に科はない皆私故の事なれば。共に言譯致さんに連立ち行かんと泣出だす。腕久聞いてイヤ其方を連行きては親達へ言譯立たず。暫しが内遠ざかるとも女夫の仲は變るまい。さらばと云ひて最前の松の梢に馳けのぼる。おさんは猶も跡を慕ひ。嬉しい詞聞くからは親には生きて別るゝとも。同じ道にと這ひかゝる松の梢の蔦かづら。よれつ纏れつ離れねば。不便ながらも剃刀にて形見に残す下紐の。中よりふつゝと切り放せばかつばと落ちて泣叫ぶ。出て行くつらさ止る憂さ。互に心くみ帯のきれん。になる。三重へ世ぞつらき。

下之卷 腕久道行

二上り唄迎り行く。今は心の。浮かれきて。末の松山。思の種よ。合身死なうかの。どうもせ。これゝゝ君ゆゑに。あのや腕久はこれさ。く。鼓の皮よのほんえ。しんぞ此身はこれさ。く。うち込んだ。しんぞのほんえ。とかく戀路の。ナホスフシ亂髪。起きて別れし。佛の。小オクリ問へど答へずしよんぼりと。去りし寢覺に締め合ひし肌と肌との其うつり。フシ昨日は今日の。昔にて。そも我ながら浅ましや。誦法師々々木のはしと。思ふは野暮よわけしらず。心の花の薫をば。知らせたいぞやア、はちゝ。詞此十徳も其縁一中がくれをつた。フシ智恵も器量も身代も。皆淡雪消え失せて。交せし事の替るとも。變らぬやうにと先の世を。先で逢ふやら逢はぬやら。どうやら斯うやら知らねども。せめて未來は違なく。我と一所に極樂へ。それも叶はぬ物ならば。たとへ奈落の。底までも二人手に手



を。取り。組みで。ステテ離れまいぞや君琥珀。我は塵かや身に積る心の。芥。胸に満つ。それがかうじてきよみくく。けらく笑ふ。フシ物狂ひ。とても濡れたる。袖ながら。一村雨を厭はんと。立寄る軒の格子より色をあらせる玉琴に。過ぎし騒を思ひ出し。詞来いよ久助。地伽羅の下駄。珊瑚珠の杖と手を叩くに。あいと答ふる者もなし。無いも道理よ此なりぢや。アツア思ひ切らうか切るまいか。切るに切られぬ戀路の劍。はたくはたはたく。狂ひ廻るや。破車の。フシわが姿。井筒の水に。映じては。扱も寝れた誰故に。君故にこそつらからね。長地其曉の陸言もなかく。今はあだし野の露も洩さじ我思。亂心にちとはち。フシ狂ひありくは何處くぞ。祈る證を長町や。道頓堀へよこたはる。唄駕籠の籠を洩れ出づる。緋無垢黄無垢の空炷や。あれは呂州か白人か。客屋の三味の三下り。三下り唄我身の斯くなるは。如何様不思議松にあいたぞなんつかしのごい。なんぼ身請て急かすと申すとも。可愛男と。見かやせまいぞいの。なんつかしの。ナホス佛や。フシ色で固めし。軒のつま。爰こそ女護の島の内。堀江の文の便りさへ橋が無ければ渡られぬ。戀に願は西方の玉の臺の阿彌陀橋。うき長堀もわんざくれ。濡れてぞ渡る立賣堀。法に我名を黒めても住み憂かりける此浮世たゞ渡られぬ薩摩堀。問へども君に阿波座堀雑又はちく。あれよ笑へと皆跡に付いて。きた濱今日も早や狂ひくたびれ足立たず。彼處の土手に坐りつゝ。ステテ芝を。褥に伏しけるは目も當て。られぬ風情なり。

地土氣の取れぬ備前客。戀の素焼に松山を千代の子の日と引抜いて人目も旅は遠慮なく。フシさんさめかして通りしが。地色心にかゝる玉籠の駕籠の隙よりそれと見て胸の水も消えくと抱き付かんと思へども。人目をふせぐ八重垣の。フシ泣くも泣かれぬ其つらさ。地色早次郎駕籠立てさせ。詞あの坊主めは此頃町中を徘徊する氣狂六法よな。地色器量といひ手足の尋常さ。銀遣の拔殻ならん不便の事や。それく丁稚錢掴ませと云ひければ。地三介頼て立寄

りてこれや寝耳へ百錢が這入るは旦那のお蔭。仇に思ふな皆の衆が一日汗水になつても。かたはなに八十四文はか儲けぬに。地色福徳の三年目乞食仲間の仕合者。起きよ。く揺られて。詞腕久ずつと立上り。何ぢや此錢を主人が呉るよとや。ヤイ善根と云ふはな。未來の福田を蒔くとて往來の人が。地色慈悲の袖より漏るゝ一錢二錢を請け喜んで香僧が。朝夕の煙を立つる助とはする。肌を隠す布子は着る。後世を願ふ十徳あり乏しきにはなきものを。覺えなきに合力とはたはいなき僧上人。花にくるゝか露にはづむか。冠古けれど沓に穿かず。大盡は腐つても。フシ太鼓は持たぬと突展す。地色早次郎打笑ひ扱々心ある氣狂や。そも左様な堅い事は誰が教へけるぞ。ナウ氣狂の眞似とて狂へば直ぐに氣狂。四方に四萬の藏有れども限有る金銀を。色の奴と遣ひ捨てし天の罰親の罰。金の罰が當つて目前の法師が有様。見ても聞いても嗜み給へ歸らぬは昔。止らぬは浮身の末淺ましや悲しやと。フシ涙を流して語るにぞ。是は尤もく々と皆々袖を絞りけり。地顔は隠して松山は雪をかづける綿帽子。涙の玉の小間金を袂紗ながらに差出し。詞ナウ坊様是はな新町橋で拾うたが。戻さうにも主が知れねば此所に捨て、行く。地色同じくは坊様拾うてなりとも下さんしよば。嬉しからうと言ふ聲も。ステテむなつばらしう聞えけり。地法師受取り押戴き。お姿は見ぬが御器量さうな。物腰が素人ではない。お肌に添うた袂紗めにあやかつて。合懐かしい人の懷に寝たい。詞殊に新町橋で拾うたとあれば辻占がよい。太夫を仕落した客めが頓病死して。二度身どもが手に入る吉相。地色目出度い目出度い祝儀の爲の一踊。唄水を汲みやらばようやや小川で汲みやれ小川小石川轉び合うて轉びくく轉びかゝるとよえようやややや。小川で汲みやれ。小川小石川轉び。合うて轉びくくかゝるとよえ。棲はひくとも外へ靡かじ。地色あれ聞給へ外へ靡かぬ心底を。かはゆう無うて何とせうと。ステテ踊りつ泣いつ狂ひける。地色然る所へ作兵衛道業驅け來りさてく曲もないお仕方。女夫の者が今まで此世に長らへるは。お情故とは誰知らぬ人もござりませぬ。そのお前に袖乞させまして。我々が家の内に居られうものか。假令水を湯にわかし我は飢えてもこな様を。



かくまへまして行く／＼は何ぼ父御の當分は。石て手詰めた折檻なるとも。月日の立つに従うて。親は泣き寄り片端なる子の可愛いと申せば。御歸宅は追付の事暫の内も人が見る。お草臥なら作兵衛が。負うてなりと抱いてなりとも歸りませうと。恨みつ。泣いつ掻き口説く。地色思ひ餘りて松山は。駕籠の窓より顔差出し何誰かは存ぜねど。頼もしきお心や見れば物狂しき御有様。夜晝付いてなりとも外へ出して下さんすな。頼みますると云ふ聲も。フシ心迄く涙なり。地色道柴そこへは目も遣らずこれ作兵衛殿。詞我身も同じ流の身。犬猫の様な傾城と同じ様に。思はしやらう所が恥かしい。あつたら金をせめて川へ捨てたらば。どんぶりとも云はうに。よしない四つ足の薬喰遊ばして。地色斯くまで衰へ果て給ふと。フシ恨の角を生しける。何我事を衰へたとは今でも歴々の手代あり。ア、慮外ながら御大盡。浮世小路に駕籠はあれど。君を思へば藥草履花につらしと詠み置きし。嵐が六法よいよさ。荒い風にもようやよほいほ當てまい様を。やろか信濃の。詞へア冷いなげに。雪國へサアサさん此え。川ぢや。さんざら柳のよいよさ。白根が／＼よいてがよいてが。駒のひざふしんからが。陸栗栗毛にしんがらり。詞乗つたか乗つたぞ。地信濃へやろか。やろか信濃の／＼。詞へアつめたいなげに。雪國へさあさん此え。思ひ焦れ／＼とつと山家の苔猿が。雨にそぼ濡れてついつくばうた。かいつくばうた取りなりは。曾我のす。すつきり祐成ぢや。詞きんにやう／＼にやとらげ猫の／＼情あれかし。地二人は袖に縫り付き。信濃越後の雪よりもつめたい心に騙されて。さて正體なき御有様。千萬人の見るよりも。一人が見るのを恥かしう思さぬか。せめていとしやと思はずとも。人が笑へば人並に笑ふは憎や卑怯や。胴慾やと睨み付けたる駕籠の内。松山今は堪へ兼ねて尤ぞや。理ぞや。お爲に斯うはしたれどもあのお身に成り給へば。今と成つて立ちはせぬこしらへ置きし言譯は。是御覽せと懐にたしなみし。さすがの鞆を抜き捨て。南無阿彌陀佛といふ所を。詞早次郎詞をかけ。先づ待て一言いふ事ありアノ法師を椀久とは初めから知つてゐる。傾城は賣物金が敵と云ひながら捨つる命に比ぶれば千金も塵埃。地色さりながら半錢でも掠めば命を斷つ

道理。さあれば又重き物。しかし命より寶より重きは義理の二字ぞかし。我も鄙ひた身ながらも太夫が色に目が見えず。切なる金は出しぬれど命庇はぬ心底の。中引き分けて行く事も物の哀を知らぬに似たり。其上親久右衛門代々御屋敷へお出入致せば。彼是以つて餘所に見られず。よしや某も愛着の根は枯れずとも。松山には暇をやる。フシ至極の涙寒きあへず。地色早次郎重ねて。一先國元へ同道し。樞機を借つて親達へ。宜敷く勘當詫びなんに先づは目出度く出船と。椀久松山相興に打乗せてさらば／＼と立出づる。世界の事も好色も。誠を道の親とかや來し方よりも今の世々。又後世の末永く榮は色の道ならん。

右此本者依爲懇望文句音節等悉按合加秘蜜令開版者也

豊竹若太夫直傳

大坂上久寶寺町三丁目北側

正本屋九左衛門開板



八百屋お七



八百屋お七

八百屋お七

作者 紀 海 音

上 卷

臨下リカ木の端と誰が片意地な筆ずさみ。それは浮世を捨て坊主。是は煩惱。ナホスフシ菩提所の。寺は華麗の。大書院。  
 唐肩數子戸遠棚。掃きちぎつたる鳥籠塵に交れど法性の。水は濁らぬ瀧川の戀に小性の吉三郎。遊びがてらに挽く茶  
 臼。眠たからうと人目には。スエテ見えて寝もせぬ憂き事に。フシ花の姿も萎れ行く。君をこい茶に口切の。主は誰  
 様。お七様 長地立つ名はげにも本郷の八百屋の花袖松茸の蕾も何れ初物の。縁はをかしや假初の。過し火難に此寺  
 へ。親子主從厄介の内のもやゝ氣も付かず。普請も出來て鴛鴦のつがひつれなき水離れ。スエテ立つても居てもあら  
 れねば。せめてお顔を拜みにと。親の跡追ふ寺詣り。釋迦も見許し玉鉾の。道の掻取押下し。襟繕うて體やつて。座敷  
 へ出づれば君が顔。見るよりはつと氣上りし。詞ナウ杉や。もうおじや何と去ぬまいかと。地色髪を弄ひつ手を撫て  
 つ。フシもぢくするもどかしく。詞ハテまあ初心な何ぞいの。親御は後生願がひにお前は小性ねらがひに。地あた  
 ふたと取急ぎこんな尊い首尾へ來て。あかりの戀が初めても何が羞かしござんすと。背中をついと押遣られ倒け掛る  
 のを機にして。とんと後へ凭れ寄り。フシ手傳をかへと手を取れば。地色吉三郎振返り。地ハアハお七様お久しや。道  
 も忘れず今日の御參詣は奇特なり。然し御親父久兵衛様お袋様は二時も。先から參つてござるのに跡へ下つて何ぞ又。  
 味な趣向があつたもの。開けば毎日堺町木挽町への御遊山に。歌舞伎若衆の美しい姿でうまい狂言を。地御覽じた目



てわしなどが抹香ばかりとめ袖に。飽きの來たのは御尤も戀のいろはを教へても。手が悪ければお師匠を變へて嫁入遊ばすげな。目出度い事じやと。フシ氣を持たす。地色お七は流石正直の顔を赤めて涙ぐみ。誓文くされ何時からか芝居へ足も向けませず。心に立て、牡猫さへ膝に抱いたる事もない。こな様こそは方々から女子の弟子が附いたやら。詞ちつとの内に大人びて。小面の憎い此口がわしは因果で可愛いもの。地何處へ嫁入をするものぞお前はやがて坊様に。ならしやんすとの取沙汰が氣掛りてならぬ故。互の固めしよう爲に。コレ起請をと差出す。吉三郎はやがて戴いて忝い。兎や角言うたは皆偽り誠を見する誓紙をば。只今致して進せうと棚より料紙硯箱。筆押取つて書く所へ。新發意常香盛りさして。後の方に立覗き。詞コレ吉三郎様何さしやる。上人様の曼陀羅を遊ばす筆で勿體ない。地穢はしいと咎められ。はつと下に差置いて。詞ハア辨長。そなたは先から其處に居て様子は何も聞きやらぬか。お七様の仰るは。曼陀羅が欲しけれどお師匠様へは憚りな。身どもにとのお望み故書かうとしたが何とした。エ、如何にもそんな事さうなが。お七様から遣らしやつたは。淨土の一枚起請とやら。有難さうに戴いてこなたは宗旨替へる氣か。地色曼陀羅書くとおしやれども。フシそりやあんだらと笑ひける。地色お七はやがて手を取つて何時見ても。可愛らしい坊様じや巾着でも紙入でも。欲しくば縫うて進じよぞや。一寸見たこと聞いたこと言はぬものぢやと謙せども。なか／＼頭打叩き。詞愚僧今年十二歳出家の道を相守つて女の手から物取れば。五百生が其間手の無者に生れます。又嘘つけば獄卒が鐵の鋏舌を抜く。それでは日頃好物な球琉芋が食はれぬと。地こま付けられず立去らず。取付く蟲の辨長や花の嵐と持餘す。地色杉は捕へ出來ました。詞目に入る様なお前でも出家侍佛の使者。位の高いお人ぢやが。それでも此處へたつた今幽靈が出來したら。怖しがつて泣かしやるがの。ハアねつな事をば言やるなう。其幽靈を浮めてやる。地胸に納めた法華經の。八官町の比丘尼のちと棺桶の詰つたが。迷ひとなつて幽靈がそこな丸太の間から。出たを深達罪福相浮めてやつたと意氣過ぎた。地色習はぬ經の談義口悉皆富樓那の辨長

様。詞是からわしが咄さうと膝に抱寄せ聞かしやんせ。こちの隣に分限者の造り倒れがあつたげな。男は去年の正月に初の子産んで死なれたげな。跡で後家御が騙られて傾城狂ひをしられたげな。揚錢の魅入りにて節季と言ふ鬼になり。地慾に眼が光るやら身代に尾が見ゆるやら。額に江口倉橋の大根程な角生えたを。くき桶に入れ其家のはしりの脇に埋んだげな。其執心で夜々は屋鳴震動雷電し。天井板がむち／＼。コハリ梯子がぐわたく／＼。四方の壁がどろ／＼どろ。詞モウ此話置いてたも。どうやら面白なさうな。ハテまあ跡を聞かしやんせ。又膳棚がぐわらく／＼。庭の薄がざわ／＼。明障子がぼ／＼と燃え。其中から幽靈が白佛程化粧うての。お齒黒は烏羽色髪打捌き逆に。屏風の陰によつこりと。顔差出してけらく／＼けら。ハ、ハ、ハット笑うたげな。家内の者が一時にワ、／＼／＼ワツト目を廻せば。小坊主は狼狽へて彼方へ向けば向ふから。又其顔がによつと出る此方へ寄れば後から。毛の生えた手で撫て廻す仰ぬけば二階から。俯けば簀子から。フシ是はならぬと逃げ廻り。地吉三が袖に顔差入れ法蓮華經も本道も。付けう薬のない首尾を杉が氣轉の手療治に。ひん抱へ來て風呂敷の小袖を取つて辨長が。顔に起請を早々と。先づよい事を書院先。硯を取つてくれ縁より。フシ濡縁あるこそ嬉しけれ。地色互に向ふ顔と顔あちらに抱けばこちらにも。恐しがりて抱き付いてお題目よりお経より。如是本末や屈竟の子供を騙す方便品。膝の間より坊主首によつと出して見た／＼。おりや見付けたと駈寄るを杉も續いて走寄り。其處を彼の幽靈が後より引摺み。なう怨めしやそち故に。多くの屋内が世話を焼く。小意氣過ぎたる小坊主めと。まつこの様に抱帯くる／＼と目を巻きて。執念き聲でやい其處な。詞二人の者はうっかりと何狼狽へて立つて居る。そちらではないこちらへぢや。地ハアテあちらへ目離りのない帯解く事も時による。つひちよこちよこちとねるものと。氣を付けられて領いて。飛石傳ひやう／＼と圍の中に入りければ。さあ爲濟した幽靈も最早冥途へ歸るとて。搔消す様に方丈へ。フシ逃げて。形はなかりけり。地辨長一人うろ／＼と。詞杉こりや何とする事ぞ。地めんないちどりか合點ぢやと。座敷一間を舞ひ



歩き吉三殿お七様。杉々と呼ばへども。返事なければ鉢巻を。そつと外してこりや如何ぢやと。あたりを見廻し打領き起請を出して押戴き。詞一杯陥めたと思やろが其裏食はせこちらには。吉三の袖の内にあるこれしてやつたよい氣味ぢやと。地打笑うたる後には。萬屋武兵衛太左衛門先より様子を聞き濟し。新發意此處に何してぢや。詞エ、お二人様御詣りか。久兵衛様も先から客殿にござります。地お出でと云うて駈行くを。ア、これ辨長殿。詞こなたが只今戴いた文を身どもに下されい。ハテつがもない事ばかり。忝くも是はな。お七様と吉三郎戀慕れ、つの起請とやら。お前が貰うて何さしやるサア其お七と吉三めが起請ぢや故に貰ひ度い。其代りには常々に欲しい〜と言はれたる。木佛の大黒と布袋や歌留多一面ぢやが。地何と、背中を叩かれてこりや談合が面白いが。詞騙食はすのぢやござらぬかや。ハテ何の嘘をばつくものぞ則ち太左が請合ぢや。ム、歴々の證據人そんなら遣ろと差出せば。地武兵衛悦び請取つて是さへあれば此方の。戀は叶うた手に入つたと兩人呟き入りにけり。辨長は只一筋に武兵衛様必ずや。明日とも言はず晩からは六介が部屋へ行て。二文四文の博奕打つて釋迦に契を結ぶの神。お七が戀のにくずしと知らぬ。事こそ。三重へ悲しけれ。地主従の因は流石深編笠用ありげなる侍の。玄關に佇みて頼みませうと言ひ入る。折節住持は方丈へ吉三伴ひ出で給ひ。何人なるぞ用あらば此方へとありけるに。ハツト答へて編笠を。フシ取つて彼處に入りければ。ヤア。詞十内殿お久しい。先づ申さう御主人には。不慮なる事の御浪人。殘心推量仕つた吉三は親子の仲なれば嘸歎かうと存じたに。流石は學文籍に入れ出家に染まる程あつて。地世界は無常と諦めて頓着も致さぬ段さりとは奇特に存ずると取なしあれば十内は。詞滿悦至極の御言葉それと申すも上人の。日頃お示しあるいはれ就いては主人源次兵衛。浪人せしは何故とお耳へ入りしは知らねども。自分に於て一合も非道の沙汰は致さねども。若殿の御難儀を救ひ申さん爲ばかり。私欲の科を身に被り不時の虚名を受けたる事。更々悔み候はず。地色それにつけても吉三郎出家の願ひを只管に。貴僧様へ申上げ剃髮染衣の姿をば。篤と見届け立歸れと。拙者を差越し候と。フシ懸

慙に相述ぶる。地色上人暫し領いて。苦勞の中にもそれ程に子は大切な物ぢやよなう成程々々今日にも。出家致させ申さうと悦ばしげなる返答を。胸に手を置く吉三郎。兎や角思ひ廻して真中へずつと出で。詞ム、珍しや十内扱某が出家の事御師匠仰せある通り。心に待兼ね居つたるが今其方が話を聞き。忽ち心底翻り二度武士になる思案。先づ一通り承れ。父源次兵衛若殿への。忠義に浪人致せしを若殿御満足に思召し。御身持直れば浪人せし甲斐あらん。然れども此趣。大殿御存じなき時は。親たる人徒奉公をした道理。地某國へ立歸り隠れし忠義を顯す事。今日遁世致すより拔群の孝行と。言葉飾るも好色の。フシ嘘に馴れたる證なれ。十内涙を袖に受け多くの書物を見廣げて。深き道理を思召す御所存感じ入つたるが。詞武士の作法は外の事。主の善惡顧ず討死するも世の習ひ。そこは差別はない所。お前が奉公お望でも不届者の悴とて親殿御抱へなされまい。申し開きもならぬ筈。すこ〜歸り給ふのは恥に上塗する同然。地色よく〜思し直されよと理を正せどもイヤ〜。詞身どもが勸當受けたのは大殿も御存じある。さあれば親とは他人なり。其他人の某が奉公望むが誤りか。地何の遠慮あるべきと云はせも果てずこれ吉三様。詞勸當を言立に御奉公あるこなたなら。孝行顔も入らぬもの。ア、如何やらお前の御胸中紛はしうて吞込まれぬ。是も非も入らぬ發心をさあ。地成さるゝか成されぬか返答次第拙者めが。分別ありとにじり寄る。上人は聲を上げア、氣が短い十内殿。詞武道の仕儀は其許に如何様とも捌かれい。法師の道は此方へ預け置かるゝ筈の事。數ならねども師と頼む愚僧が差圖致す儀を。吉三も否とは申すまい。地世話を焼かずとゆるりつと。心鎮めて語らしやれ。こりや〜辨長茶持て來い。非時も拵へ煙草盆酒よ銚子よさん〜の。中に立つたる御師匠の心へ遣ひぞ殊勝なる。地然る折節方丈より八百屋久兵衛親子連。續いて武兵衛太左衛門住持の前に會釋して。お暇申すと立出づる。エ、こりや各お歸りか。最前より此處に居て御挨拶もせなんだ故。武兵衛殿や太左殿は定めて酒が足りませぬ。お客も心安い仁。ようござるわい遊ばしやれ。平に〜と止むれば兩人は立止り。詞久兵衛殿聞かしやつたか。御遠慮の無いお方とある然



らば序に今の事。お寺へお話し致しませう。ハテ武兵衛殿それはまあ今日に限らぬ事。地鼻や娘も連れられたれば暮れぬ内に去に度いが。ござれと云ふも聞かぬ顔。フシ是非なく共に立戻る。地兩人は上人の膝許に畏り。御酒は望みに候はぬが急にお知らせ申し度き。いはくは是なる吉三郎。親御は名ある武士とやら。承れば大それた事仕出して。此頃追放せられたとも。縛首を討たれたとも口々の取沙汰故。親の子なれば如何様の儀がござらうも知れませぬ。片時も早く暇をば遣されたら好からうと憚りながら存じます。ハア心遣ひは忝し先達其事は愚僧も聞いて居まするが。世間の沙汰とは裏表様子は分けて言はれぬ儀。苦勞に思うて下さるな。ハ、ハ、ハ、いやそれはお寺へ遠慮して取合せ云ふ鼻眞口。其横着さ非道さは聞くも身の毛のよ立つ事。吉三は不便に思へどもお寺には替へませぬ。云うても御合點ないならば無理に吉三を引出すぞと。太左と身ども兩人が膝合せて置きました。サア吉三立つて行けと傍若無人に罵れば。地住持顔色損じつゝ兩人存外千萬な。詞出家の弟子は子も同然。其吉三郎を我儘な雑言は何事ぞ。難儀が懸りや師弟共此寺を開く分。そなたの世話にやしますまい。お手前ばかりが且方か不出來な差配と叱られて。エ、何にも御存じない故に御鼻眞が一概な。お前は弟子と思さうが。地お七と言うてあれに居る。娘が吉三のお内儀様フシ坊主の女房と嘲笑ふ。地久兵衛夫婦腹を立てそりや武兵衛殿何いやる。大事の娘を吉三には誰が仲人て嫁つたぞ。龜相な事は仰るまい證據を見よと立ちかゝる。はて喧しう云はいてもこちらからお目に掛けるとて。件の起請取出し。コレ讀みまする聞かつしやれ。詞其方様に御出家を。止めさすからは此方にも。嫁入致し候まじ。次に色々神おろしよし様參るお七より。地何んと云ふを聞くよりも吉三は袂打振ひ。はつとばかりの風情なり。お七はおろく涙ぐむフシ氣色もいづれ笑止なり。地久兵衛目鼻をしかめつくくと打守り。疊を叩き身を震はし。詞やいそこな徒者。何時の間にまあ此様な大膽な儀を仕出して。大勢の眞中で親に面恥かゝせ居る。すつばのかはな若衆が。此久兵衛が僅なる家一軒を見込にて。仕掛けた戀に乗せられたな。地大痴め盗人めと彼方を睨み此方をば。引摺り寄せて散々に

打たるゝ杖の下よりも。お七は吉三を打見遣り。吉三は爰に居ながらに。スエテ消えも失せたき心なり。地色住持は暫し黙然と涙を隠し居られしが。やゝあつてこれ御夫婦。詞全くお七に科もなく。吉三が徒したてもなし科人は此坊主。お七が爰に居られし節。はれたいけな發明な。娘の子ぢやと思ふから戯れ事を二三度も申した事の候が。サア女は何處やら愚かにてまん誠かと某へ送らうとがな思つたを。地しどけなうして拾はれて。無き名負うたる不便やと。衣に落つる涙こそ。フシ二人が。袖にわかるらじ。地武兵衛はせいて大胡坐これお寺様。詞御鼻眞が餘り過ぎてむつとする。烏を鷺になされうが起請の文字は剝がされまい。これ御覽せと投出す。いや見る迄もないお手前が。最前讀んだ文言に。其方様に御出家を止めさすからとはなかつたか。吉三は出家ぢやおじやらぬぞ。宛名に書きしよし様は愚僧勿論吉祥寺。地何と紛ひはあるまいと眞顔作つた。詞に。何れ誠と分き兼ねて。フシ皆々。興をぞ醒しける。地武兵衛住持を睨付けて。詞これ御坊。女房狂ひをなさるなら魚も定めて參るであらう。幸ひ道で求めたる卵を是に持合す。地お饗應を申さうと袖の内より取出し盃に打入れてサア。詞お寺様卵酒一つ參れと突付くる。何ぢや身どもに是飲めか。如何にもお七同然の八百屋の卵。參る氣か參らぬ氣かて眞實の。底を洗うて見る合點。ハテ疑深い男ぢやなう。佛祖をかけてお七への戀は偽りなければども。邪淫は思案の外の事殺生戒は得破るまい。イヤくくく。何程佛祖をかけられても是を飲みやらにや何時迄も。吉三が垢は脱けられまい。ム、すりや是非ともに飲めぢや迄。おんでもない事聞召せ。ハテ扱々是非もない。ハアげに昔も例有り鳩の秤に身を代へし佛の慈悲の古も。愚僧が今も菩薩の行此酒即ち清淨池。吉三が垢さへ脱けるなら飲んで見せうと引受けて。地手に持ち初むる盃の朱を注いだる血眼に。スエテ涙は霰の如くにて。詞武兵衛餘りむごいぞや。久兵衛夫婦は大切な娘に浮名立てられし。其腹立に如何様な無理無體も言ふ筈ぢやが。地寺且の誼によしなにも取合せある筈を。難題言はるゝお手前が胸の中に物がある。詞搜して見度いものなれども。法師の身なりや是非がない。拙僧既に父母の家を離れて七歳より。佛の前



に受戒して難行苦行師の苛責。誠に出家の文字の様。住家と定む宿もなく。雨露霜雪に身を痛め此處に馴れば彼處へ行き。或時は飢に疲れ。玄義文句に眼を暴し四十有餘の此頃は。色衣を着し敬ひも一字の寺を司り。聖人とも云はるゝ身に卯酒を飲まさうとは。身どもが無間へ落つるならお手前は叫喚の。苦を受けうのが不便なわい。と云うて飲まずば聞かれまい。伊蘭の林に交れども赤梅檀の香は失せず。泥より出でて泥ならぬ胸の蓮は宗門の。七字の首題只今の妙法蓮華と一息に。ずつと干さんとし給ふを十内手を上げ待たう。待ちませうぞや。待たう。地待たうと盃取つて彼處へ投げ。吉三郎を取つて伏せ。拳振上げ遠慮なく。フシ散々に打ちければ。ヤア家來の身にて推參なと一腰抜かんとする所を。透間あらせず二つ三つ足の下に踏み付けて。詞何が推參緩急な。親の安森源次兵衛。地見忘れたかと懐中より骨桶出して差上ぐる。踏まれながらに吉三郎振仰向いてこは如何に。親仁様は死なしやつたか。ヲサ／＼エ、。詞問ふも語るも怨めしや。先月廿九日の夜御切腹遊ばされた。忠義とは申しながら御無念な御最期の。其中にても仰るは。言ひ置く事は外に無い何卒吉三郎が。出家相續する様に。地くれ／＼十内頼むぞとて。家來に御手を合されしお志の。フシいとほしさが。地骨に徹つてある故にお主を叩いた天罰も。踏んで奈落へ沈むのも身どもは何とも思はぬと。其儘其處に倒伏して。フシ男泣きこそ。切なけれ。吉三郎は骨桶を手に載せて見つ膝に置き。エ、變り果てたるお姿と。ステテむせ入り／＼消えかへる。地色十内やがて起直り。地骨桶を弓手に持ち怒れる顔も其様も。別れし親の物言ひにて。詞ヤイ悴の吉三郎。源次兵衛が冥途から汝に尋ぬる事どもを。言譯あらば返答せい。形は人に生れても恩を知らぬは畜生よ。恩にも三つの品がある。差當つては親の恩。身を立て子孫を養育するお主の恩は猶重く。文字を習ひ目を開く師匠の恩は取分けて。地大海よりも亦深し喩を以て言ふ時は。親は子を憐めどお主には見替へぬ事。主は家來を養へど身に替へて鼻眞はせぬ。師匠の恩は目前に汝が不義に代らんと。四十餘年戒行の譽も名をも顧ず。卯酒を參るのをめ／＼として見て居る事。畜生と云はるか腰抜者と云はるか。八逆罪の科

人めよ。詞次に此源次兵衛。假に勘當せし事某豫て若殿の。御爲に死ぬる覺悟故流浪させんも不便なり。亡からん後も甲はれ度く。少しの事を言立てに出家にならぬ其内は對面せじと此寺へ。追道はせしは慈悲ならずや。其甲斐もなく今日明日と遁世を延ばす由。内々人の知らせし故末頼みなき悴めと。眞實の心になつて勘當はしたれども。自然法師に成るならば十内我に成り代り勘當も免して遣れ。骨になるとも懐しき顔に對面致させよと。地頼みし手前も恥かしき非義非道なる性根にて。親の爲に奉公せう武士に成るのが孝行とは。ようも汝はぬかしたと。一度は怒り一度は又打萎れたる物腰に。それはと答ふ言葉なく。身を知る。雨やさめ／＼と。フシ泣いて。俯向き居たりけり。地色十内涙押しひ。詞親且那の御意見が篤とお耳に止つたか。是からは又十内め推參を顧ず。一言申し上げますと飛退り手を突いて。申し吉三様善と悪とは北南足振變ゆる迄の事。それ程の義は言はいても辨へのある御發明。殊に短慮なお生れつき。家來の者に人中で踏まれた事の無念など。定めて遺恨に思すてある町人づれの口先に家一軒を見込ぢやの。いや盗人のすつばのと言ひ散されてきよりつとうぢついて居る人ぢやない。コレ徒といふ大病に勇も武略も抜けましたの。昨日迄も今日迄もの。千石取の御一子と崇め育てし此方をば。難言せられし其時は。舌切り裂いて棄てうかと刀の柄に二三度も。忍びに手をば掛けたれど。いや／＼。自分相應に大事の娘を犯されて腹の立つが道理ぢやと。のめ／＼おきて十内も腰抜けになつたぞや。家來の恥は此方の恥。お前の恥は親御の恥此世で不孝し足らいて。又未來迄なさるか。愁心でない言分にさつぱりと暇遣らしやれ。地どうぢや／＼。サア。／＼サアとせはしなく。問ひ詰められてうろ／＼と覺えず其處へ流す目に。お七は顔を振袖の下から手にて物言はず。否にもあらず稻舟のおうとも得こそ言はれざる。十内二人が口無しの色にぞいでの堪り兼ね。つか／＼と駈寄りてコレ吉三様。とてもこなたの性根魂曇りを磨く此刀。某が手に掛けて我も冥途のお供して。父御の前で拙者めが一分立つる御覺悟と。血相變へて見えければ上人中へ押隔り。詞主に諫は家來の役最前よりも宥免す。臍甲斐ない此法師と末頼みなう侮りて。近頃過



言聞きにくし。出家にも佛にもなすべき我が親切は。地先から目に見えぬかと氣色變れば十内も。吉三もはつと感涙の。フシ頭を。下げて涙仰す。地色武兵衛や太左は何とやら小むつかしさにこつそりと。立つて行くを十内は後さまに襟髪を。引摺み引戻し汝等最前親且那を。横着者の非道のと何者にか聞きたるぞ。眞直に白状せよ。改めては言はねども若殿様の御難儀を。身にかぶりたる忠義とは一國に隠れない。出放通なる謗言をようもく吐き出したナ。討つて棄て度い奴なれど御出家なさるゝ悦びに。地命ばかりは助くると右左へ取つて投げ。起きんとすれば踏倒し逃ぐる所を又蹴倒し。二十三十五六十腰も脊骨も立ち兼ねて。はふん逃げて歸りしは。フシ心地よく亦をかしけれ。地久兵衛夫婦も氣味悪くそろく出づる支關口。戀に泣く子を引立て。母が繰言ねすり言。はて何とせうも言やんな。なり物類なら何にても。たばうて虫は入るまいに魚屋ならねば蛤の。口の開いたは是非ないと呟き。てこそへ立歸る。

### 中之卷

歌やよ柳。もとの梢の雪ならで。餅搗く宿の梅とのみ。冬籠する大根も蕪も。ナホスフシ千代の諸かづら。フシ常磐堅磐の。交譲木や。橙。柑子榎搗栗。昆布串柿商ひの店を其儘蓬萊の。八百や萬の神の餅御藏のかどみお雑煮の。かちんあたゝけ心見を爰へ取子のひつちぎり。ちぎり解れて戀病の。地娘お七は奥の間に。春をも待たず逝年を惜むてもなし世の中は。スエテ無常と外へ見せかけを。色とは誰も水晶の願ひの玉を手にかけて。フシ題目繰つて居たりけり。地色仲居の杉は差寄りて。詞一年一度の餅搗に小忌々しい何ぞいの。親御様への意地張りは却つて御身のひしはなびら。地移ろひ易き人心先には忘れてござるやら。最早坊様に成つてやら。知れぬ相手に義理立は。フシ損な事やと陳むれば。地色聞えぬ事を言ふ人かな心の變る變らぬは。色品數多見盡して濡れの巧者の仇比べ。吉三様にも我が身

にも戀の手習血に染めし。起請の罪もあるぞかし。河しに仇になるべきと。しやくり上げたる顔容愛らしく亦儘しくも。重ねて返す言葉なく有様云へばお道理と。晶眞目にさへ持つ涙。フシ漏れて袂を濡しけり。地色臺所より親方は杉よくと矢り聲。詞おのれは其處に何して居る。泣く子も目開いて泣くものぞ。殊には今日の餅搗が。年寄つた久兵衛や婆が正月祝ふのか。類火に遇うて諸道具も足らぬ中から毎年の。嘉例の通り搗く餅に小米一升減じぬは。生先のあるお七ちやと子に粹さるゝ親の慈悲。近所隣へ聞えては密な事と識るである。一門どもも笑ふである。其上に娘に迄すねて貰ふは是非がない。構はずと捨て置き。やがて甌もしまひちやげな男どもは隙がない。兩替町の蝶和殿針立の玄伯殿。地色お出でなされと云うて来い。フシあた面倒なと喚かれて。地笠も足駄も取敢へず髪さへ今日は結ふ隙の中戸口より呟いて。吹雪を凌ぐ前垂に走り出でたる軒の下。春も根片も埋れて。雪重げなる簀笠に臥せる里の子哀れやと。言捨て過ぐる裾を引き。顔差出すは吉三郎ハットばかりに立戻り。こは淺ましき御有様如何なる事と抱き付き。スエテ人目も分かず泣出だす。詞吉三郎は押静め。何故ぞとは怨めしや色故身をば妻事。如何なる高位高官の古今も同じ事。地色百夜通ひし少將の雨夜の憂さは知らねども。雪に身内は冷え抜きて顔見ぬ内に消ゆる身と。フシ泣音もいづれ弱げなり。詞ヲ、御尤く。こちらと同じ憂き思ひたつた今迄言出して。二人が泣いて居りました。地色幸ひ表に誰もないそろりと其處を這ひ入りて。潜を左へ五六間行けばお部屋の縁の下。暫し屈んで居りしやんせお便に行て戻つたら。首尾見合せて雪よりも積る事どもどちらから。云ひつ言はれつさせませう必ずさうと囁きて。オクッ駈行くへ戀の道橋や。地色渡りに舟の心地して教へしまゝに這ひ入りて。土に此身を打任せ釘になりたる手足をば。君が膚に打付けて寝もせぬ内に睦言の。フシ心工ぞはかなけれ。地色かゝる折節町の年寄彌左衛門誘ひ入り来る。久兵衛夫婦悦びて。詞コレへく何れも様。珍らしからぬ響應に却つて御苦勞掛けます。地さあさあ奥へと手を取れば彌左衛門打笑ひ。詞如何にも參る上からは奥へも屋根へも通らうが。序ながら御夫婦へ願ひと



云ふは武兵衛の事。組中と云ひ平生に兄弟よりも懇志仲。俄に不仲な様子をば聞いてさりとは氣の毒故。どうぞ挨拶致さうと最前武兵衛に云うたれば。ハテ久兵衛さへ合點なら。身どもに別儀ござらぬと結構な返答に。今宵の祝儀を幸ひに跡からは見ゆる筈。地押付けがましいやうなれど萬事は我等が貰ひます。御夫婦頼むと云ひければ久兵衛居直りて。詞お心遣ひと申さうか御宿老殿のお言葉を。背くは慮外に候へども畏つたと申されぬ。様子は定めし何れものお耳へも早入つた筈。私類火の砌には半襦一つ得退けずに。やう／＼寺に隠はれ二度お町へ立歸る。始末しがくもな時節彼の武兵衛が尋ね來て。金二百兩膝に置き預けるでもない遣るでもない。普請の用に立て、やる手廻し自由になる迄は。二百年でも待つ金子手形取るにも及ばぬと。投げ出されたる嬉しさに思慮分別も入らばこそ。忝いと戴いて初の如くそこ／＼迄。斯様に普請致せし事一門よりも大切な友達仲と悦びしに。十四五日以前の事それなる太左殿挨拶にて。娘お七を所望とある。夫婦の者は猶以て満足に存ずれど。如何なる事か娘めがふつ／＼否と云放すに。親子ながらも此事は曲げて曲がらぬ道理故。其段返事致したる明けの日よりも金子をば。戻せ／＼と五度三度毎日日立てせがみ。金子が無くばお七をば。呉れるか有無の返事をと無體至極の使立て。地色如何に貧なる久兵衛とて賣買にする娘ぢやと。見立てられたる無念さがどう堪忍がなるものと。スエテ聲打震ひ腹立つる。詞彌左衛門領きて。段々至極仕つた。武兵衛のが不屈ぢや。そりや身どもでも堪忍せぬ。しかし斯うした事もある。沙汰に及んだしはん坊親の病氣に人參を。盛らぬやうなる欲者が二百兩と云ふ金をば。手形もなしに預けたは心から底から息女をば。欲しいと思ふ餘りの事。賣買にせぬ證據には其節わけも云出さねば。侮ると言ふものでもない。それに兎や角意地張れば證文のない金子故。待つてとも言はれぬ義理。とあつて折角普請した家を賣らすも笑止なり。此入譯を篤くりと言ひ聞かせたらお七にも。地色合點が無うて何とせう。平に／＼と物馴れに言ひ廻されて夫婦の者。兎角の答言ひかねて。フシさし俯向いて居る所へ。地色武兵衛はじろりとした顔でつか／＼とのし上り。詞何れもお待ち久しかる。横

山殿會ひませぬ。小栗が今宵の參會に毒など盛つて給はるなど。地色かさにかゝつた言分をむつとはすれど是非もなき。金に捲かるゝ苦笑ひ乾の隅へいざ／＼と伴ひ。奥に。三重入りにける。地色お七は炬燵に假寝の夢何とやら襲はれて。ふつと起れば勝手には三方土器束束。母は銚子に蝶々の折据付けて忙しげに。フシ持ち行く奥の高笑ひ。地色合點の行かぬと見る内に丁稚の彌作取看。手に持ちながら差覗き。詞コレお七様嬉しいか。否の應のあるととても親と銀には肩骨が。おれもちつくりあやかり度い。吉三様の聞かしやつたら胸の火が燃ゆるてある。燃ゆる序にお前程火に縁のあるお方はない。火事故寺で徒し火事故今度の嫁入し。地脾の臆強い男持ち雲雀の様にならんしよと。オクリ笑ひてへ走り行きにけり。地色お七は覺えず聲を上げ。ナウと、様か、様怒めしい。わしが心にどの様な行かれぬ義理がある事やら。親子の間はれずば人傳にても聞きもせず。死ぬるといやと云ひ放す。事を好みしなされ方娘を一人捨てるのか餘りに慘い心やと。スエテかつばと轉び。泣く聲が。地色洩れて誘ふ縁の下吉三は顔を差出せど。姿は流石隠れ簾隠れ笠なら抱付いて。聲をも立て、泣き度やと。フシ足摺してこそ居たりけれ。母は奥より。走り寄り。地色暫く泣いて云ふ様は。合點の悪い娘やな。詞此身も一度は若盛自分に花もやつて來て。惚れた惚れぬの術も知り。器量の好いと悪いのは老の目にさへ見ゆるもの。地そなたのが皆尤も故いやと言やるを無理にとは。今日迄言はぬ兩親が慘いとは言はれまい。詞世が世の時であるならば。假令そなたが合點でもあんな男を持たさうか。器量發明揃うたる婿と並べて見ようため。分に過ぎたる二十荷の箆筒長持襟敷を。地恥かしからず取揃へ蚊帳は手織と急がしき。中にみづから機上げて織り調へし物迄も。類火にあだとなりたるは因果な男に焦げ付いた。先生よりの奇縁ぢやと。フシ思ひ諦めくれよかし。地ならぬとならば此家を銀の代りに突出して。出て行く分は構はぬが親の難儀を辭す。思ふ人には添はれまいよし添ふとても出家をば。詞引落したる罪科は閻魔の廳に就けられて。火の車にて迎へられ等活地獄の火の中へ。生きながら嵌められて煙の下に其人を。地戀し床しと叫ぶとも甲斐なきのみか夫



迄。奈落の底へ落すのが何心中になるものと。スエテ威しつ。又は賺すにぞ。地お七はあどなき心から涙の顔を振上げて。暫しも君に添ふならば此身は縦へ生きながら。火に入るとも厭はぬがいとしい人が永沈へ。沈むとあるは悲しやとおろ／＼するに力を得。母はなほ／＼口説立てをなたの返事次第にて。忽ち夫婦は袖乞ひの果は野の末山の奥。飢ゑ凍えて此世から餓鬼道の苦を見するものも。たつた一つの胸の内孝行な子は佛神の。詞憐みありて後々は願ひの様になるものぞ。世間の掟は夫をば大事々々と教ゆれど。顔も心も憎體なる武兵衛に添ふは世界の義理。飽かるゝ様に身を持ちなしや。何時去つて遣すとも忝しと請取つて。其時こそは打暗れて好いたお人に添はせて遣る。親の難儀に暫しの勤をすると思ふなら。吉三殿の目の前で帯紐解いて寝るとも。淫奔とは思やるまい。地合點がいたらあいと言やあいと言やとて撫で摩り。初心な心一つにて胸の内が捌けまい。追付け杉が戻つたら母が無理か。道理か。談合して返事しや。我が身は奥へと立ちながら心許なき親心。鉄剃刀櫛宮の。フシ中を探して持ち出づる。地お七は更に夢現何か定めんなか／＼に。消えなば消えね玉の緒のかゝりとだにも其人に。知らせて後に死にたやと。障子一重を關の戸の。明くればやがて逢坂の。フシ道とも。知らず泣き盡くす。地色吉三郎は羽拔鳥手も足も無き心地して。やうやうそつとにじり出で。涙を簀に押しひつく／＼と。思案して。母のつど／＼言はれしに一つとして無理はない。詞嫌とも應とも返答のないは道理ぢやことわりぢや。必ず／＼怨みはせぬ嫁入するも我々が。薄き契りも過去よりの定り事と知らずして。地うか／＼何しに來た事ぞ親の命又師の目をば。暗まかしたる天爵の忽ち當ると言ふ事を。今といふ今身に覺えた。あら勿體なや。フシ怖しや。立歸つて明日は發心するぞふつ／＼と。おれが事をば思やんな。こちには忘れ果てたるぞや。さはいへ今宵來たと云ふ。事はつかりは知らせ度い納めに顔がにし／＼と。見度い事やと這ひ寄りて障子覗けば我が影の。若しや勝手に見えんかとそつと退いては又立寄り。杉は何とて戻らぬと。スエテ又さめ。さめと歎きしが。詞ハア是も亦誤つた。お七には早や武兵衛とて親の許した男あり。地目を盗むのは正眞の間男も同



然よ。叶はぬ事をくど／＼とよしない浮名濡衣の。重きが上の小夜衣何の簀笠入らぬとて。左や右に脱ぎ捨て。涙のつらゝ玉霰。オクリ袖をへ懸して出て行く。フシ斯くとは如何で。地白雪の。道踏み分ける高足駄。杉の心のわくせきと行違ひたる取形も。縁の薄さに見紛ひて内を覗けば夫婦共。勝手に見えすよい首尾とやがて立寄る縁の下。簀笠取つて是はさて。仲人は宵の程。最早祭が渡つたと障子明くればやれお杉。悲しい事が出來たはと。スエテ袂に縫りて。泣き出せば。詞イカニモ／＼さうである。もう何ほ程むつかつた。地お脈見ようとじやれかゝる。詞エ、面白さうに何ぞいの。戀しき人に逢ふ事の叶はぬ首尾になつたもの。脈が良うてもおりや死ぬる。死なせてたもと塞き上ぐる。詞ハアどうやら拍子が違つたが。まあかの人に逢うてかえ。ナニかの人とは誰ぞいの。すりや未だ御存じないさうな。吉三様に逢ひまして爰にござれと教へたる。所に簀笠ありながらお姿は見えませぬ。地人が見付けて去なしたか但しわしを待ち兼ねて。歸り給ふか氣遣ひなと其處よ此處よと尋ねれば。お七も共にうろ／＼と。彼方此方と見廻せど。其甲斐もなき簀笠に。ひし／＼と抱き付き。フシ暫し消え入り歎きしが。地色稍あつて云ふやうは。詞いやいや人が咎めたでもそなたが遅い故でもない。奥には今宵婿人の早や盃の取結び。かゝ様最前爰へ來て様々の御意見。否とも應とも得云はずに泣いてばかり居た故に。地それが心に障つてがなお歸りあつたものである。間のない事ぢや追ひ付いて呼びまして來てたもぬか。これなう頼むと手を合す杉は聞くよりえせ笑ひ。詞何がさうした事ぢや物歸られしやれいで何とせう。親御であらうが王様の勅諭にても否なれば。否と云ふのが戀の意氣。朝晩泣いてござつたは人目威しの偽りよ。地さうとは知らず此事を取持つ日からお二人の。如何なる御苦勞遊ばすとも何處迄も引添うて。奉公せうと思つたはよしなき案じ過しをした。わしも一所に水臭い者と恨みてあらうもの。其中へは行かれまいもう今頃はお頭が。丸うがななつてある。お前は明日から筈に結うて嫁入の御稽古あれ。男は持たず迫めてまあ寝て花やろと立つて行く。冥途の坂の腰を押す。オクリ言葉とへ後は悔しけれ。地色お七は内の者に迄恥しめら



れてしを／＼と。如何様わしが悪かつたついでと云うたらば。お嬉しさうな顔を見て今頃は寝て語らうに。どう狼狽  
 て泣いては居た側からさへもあのやうに。愛想盡かせば其身には嘘やお腹が立つたてである。言譯せうも詫びやうにも  
 最早お出ではあるまいし。文も届けてくれまいし頼みも綱も切れ果てた。あら懐しやと戀しやと。立つて見居て見眺  
 めやり移り香残る簀を着て。笠も被つて此様に。しよんぼりとした形をして爰にまつまつ水鳥の。翼にあらぬ簀笠は  
 仇の形見よ取るも憂し。脱ぎも遣られぬ袖の雨。着て見れば泣き捨て、は泣き。爰に歎けば座敷にはフシ三國一と言  
 ひ囁す。地婿とは憎や穢はしやそれ故にこそ相思ふ。仲をおのれに引裂かれた我が夫戻せ呼び戻せ。さなくば寺へ連  
 れて行け出家落して生きながら。火へ嵌つても大事ない。逢ひ度い見度い行き度いと。諸形も亂れ氣も亂れ。  
 オホスフシ亂れ心の。あどなくも家が焼けたら寺へ行き。又逢ふ事のあらうかと。ふつと付いたる出來心。オクリそろ  
 りへそろりと。フシ這ひ寄りて。炬燵の煖を四つ五つ簀に包み小袖にて。上を引巻きうろ／＼と震ひ上るや箱梯子。三  
 惡道の通ひ道。二階は地獄の入り口。鬼が責め來る身の因果廻り。くる／＼／＼／＼車長持戸棚の上。此處か其處か  
 と見廻して。ほいと投ぐれば戀風に我より。先へ。三重煙るらん

## 下之卷

フシ罪科の。ごもく所を牽といふ文字は戀路の穴冠。地繋ぐや牛のお七こそ今日火刑と町々の。役人夜番柴薪敷きを  
 爰に持ち運ぶ。煙はいづれ變らねど。フシ哀れはいと増りけり。地色母は今日さへ牽の飯持つ手もたゆく足弱く。  
 道も涙に見えねども我が手づからに煮炊きせし。物と思はゞ暫くも添ふ心地して嬉しかる。自らとも此腕を手に觸  
 れたりと聞くなれば。それをお七と抱きかへ逢うた心と楽しみに。漸く牽屋に辿り着き門ほと／＼と音づれて。  
 フシお七が飯と云ひ入るる。地番の者の聲として。詞今日のお上の書付にお七が養ひ入らぬ筈。持つて歸れと云ふ聲

も。地色權威をかうに木で鼻を。こくる下部もフシ所がらぞつと身の毛も立戻る。地色向ふの方より久兵衛は歎きに  
 軽いおもひとも。いづれあやなし暫くも宿に一人は居られずと。よろぼひ來たる老の杖。詞ヤア嘆戻りやるか。ナン  
 トお七は機嫌よう。物も食うたか進んだか。どうぢや／＼と尋ねれば。サレバイノ聞かつしやれ。あの内でさへ義理  
 じゆんぎ振舞てもあつたやら。今日は御飯が戻つたと。地云ひも果てぬに久兵衛は我を忘れて大聲も。ステエわつと叫  
 びて。伏し轉ぶ。地女房は取付いてけたましましや何事ぞ。様子が早う聞き度いと。フシ縫り責むるぞ遺瀆なき。詞ハテ  
 泣くとて別の事ぢやない。可愛い奴と思ふから思はず知らずの涙涙ぞ。地さあ去にましよと包めどもイヤ／＼こなた  
 の言葉の端。如何にしても氣遣ひな。地隠すも事による物と手を取つて引留むれば。久兵衛包むに力なく。流石は  
 そちが女の身。様子を知らぬは尤ぢや。詞總て牽舎と云ふ物は。殺さるゝ日は大法てあなたより扶持が出る。地お七  
 が命も今日限り。あれ見やそこな柴薪。若木の花を生きながら煙と成すは胸怨と。立ち寄つて杖振り上げ。敵いつ泣  
 いて現なき。母はあまりに興覺めて泣くも泣かれずうろ／＼と。頭是も無しに爲た事を何故お町衆は只管に。訛事を  
 して給はらぬ。代官様も了簡のないは餘り胸怨や。頼みを掛けし日親様法華經の功力にて。焼けたる鍋は空に飛びお  
 命恙無かりしとや。夫婦の者が年月に袂の下で教へたる。お題目の力にて若しや焼けずに戻らうか。さもなか母けど  
 うせうぞ八歳の龍女様。雨車軸してたび給へ國土の内に何時迄も。火と云ふ物の無かれかし世界の人の恨みにも。母  
 には罰が當るとも娘一人が助からば。ステエ情なしとは思ふまじ。地三年四年前よりも仲人が來てあちこちと。似合  
 ひの縁もあつたれど。人手に置くが氣遣ひさに入婿取りて何時迄も。石に根纏ぎの寵愛が過ぎての今の苦しみを。よく  
 見覺えて世の中の娘持つたる親御達。縦へ如何なるいたづらをも見逃しにして置き給へ。我身は懲りて悔みても。歸ら  
 ぬ事が淺ましやと。大地にどうど打伏して。フシ消ゆる。ばかりに。見えにける。詞久兵衛は差寄りて。ヲ、道理ぢ  
 やさりながら。假初ならぬ科なれば。代官様のお慈悲にも。町衆の詫び事も叶はぬ事と初めより。諦めながらくど



くどと我も迷うて朝晩に。法華の數珠を掛けながら愛宕様の方へ向き。地色娘が沈む火の難をどうぞ救うて給はれと。謗法とは知りながら。フシ頼みし事の恥かしや。地子は三界の首枷とて。現世未來を取外す。悲しき老のしまひやと。同じく側に伏轉び聲を立てゝぞ泣きにける。地色かゝる所へ人夫ども柱を擔げて口々に。詞何と不便に思はぬか。まこと譬に云ふ通り花ならば初櫻。月ならば二奴どり。饅頭の様な手足をば。在所で團子焼く様に火にくべるのは惜しい事。それに相手の若衆めは何をしてけつかつて。地色今日が日迄に尋ね來ぬ因果はお七一人ぢやと。心無き身も哀れ知る。フシ目を擦りてこそ通りけれ。地色夫婦は見上げ見下して世に疋弱な娘をば。あの柱へくゝり付け四方から焼き立てゝ。阿鼻焦熱の苦しみをまじく見て居られうか。共に灰ともなり度やな可愛の者やさりとては。火をつけずともどうぞ又。外に思案は出ななんだか。駈落するといふすべを。杉は心も付けずして。フシ我から。身をや焦すらん。地年寄りたりし我々が。身は去年にも相果てばかゝる憂目は見まいもの。今は死なうも生けうにも。有るにあらぬ世界やと。足手顛はし目くるめき。スエテ性根なきこそ。道理なれ。地色所へ年寄彌左衛門派片手に駈け來り。詞ヲ、悲しうござる尤ぢや。心一杯訴訟もするお上にもどうぞして。助け度う思召し言譯の仕様をば。くゝめる様にのたまへども年の行かぬ悲しさは。吉三様に逢ひたさに火をつけましたと有様に。云ひ放せば是非もなく。法の如くにお仕置を悔みても返らぬ事。それに就いて武兵衛めが斯うした中に取交せて。二百兩の金子の儀たつて御訴訟申し故。委細御詮議遊ばされ此事故に此度の。科人も出來たりと殊の外の御憎しみ。只今牽へ打込まれ右の金子は久兵衛へ下さるゝとの御上意ぢや。地色せめてはそれを力にして歸らしやれいと引立つれば。地久兵衛は手を合せ金子に念はなけれども。娘を夢目に沈めたる元の起りの武兵衛めが。牽へ入つたと聞いたればいづれ力が付いたやら。ちつと眼が見えますと悦ぶも又哀れなり。地色女房は聲を上げ此吉三めは如何なればお七が最期我々が。歎きを餘所に見ず知らず尋ね來ぬこそ怨めしけれ。行方も知らぬ者迄も。口々云うて誹るのが。耳へ入らぬか聞えぬか。娘の敵胸

八百屋お七江戸櫻

慾者。情知らずと。フシ泣き惑ふ。詞久兵衛は押し鎮め。愚の事を云ふ人かな。お七が爲に正眞の敵といふはこち夫婦。學問立つる家でもなし武士の一門持ちもせず。僅な八百屋商ひして。娘が徒らすればとてさして恥にもならぬ事。お寺へ云うて早速に吉三を婿に貰うたら。地今日のつらさはあるまいに。小家一軒建てうとて。厭がる縁を結びし故。惨い死にをばさするとて。最期に親を怨めうもの。千部萬部を讀んだり此方夫婦が申ひは。露程も受けまいが。詞戀しと思ふ吉三殿一遍の題目も。フシ草の蔭にて悦ばん。地色扱又此場へ見えぬのは猶以ての情ぞや。お七が吉三の顔を見れば心亂れてなまなかに。臨終の迷ひとなり未來の程も不便なり。願うた後生はなけれども見物群集の人の。御回向の功德にて佛にもなれかしと。思ふもせめて親の闇。あじき涙の諸聲に。フシ餘所の。袂も濡れにけり。地色早や刻限と相見えて拔身の鎧のひら／＼と。朝日まばゆく輝けば夫婦は共に叫び出し人目も恥も警護をも厭はず構はず駈け出すを。彌左衛門跡より取付いて諫め賺してやう／＼と。歸るや夢の浮橋を娑婆と冥途の二道に盡きぬ名残の袖の露跡へ戻れば先へとて。引かれぬ足の一やだに泣く音や。三重是を

かわり歌祭文呼子鳥の。オクリ哀れ。なるかな。合お七こそ。戀路の闇の暗がりに。よしなき事を。仕出して。戀の罪科。ナホスフシわれ一人。かき集めたる。玉箒。あこがれ焦れ行末は。かゝる憂き身をこゝかしこ。見付。見付に。曝されて。日本橋より引かれ行く。見る人袖を絞る人。見返る人も皆人も。柳原野の。つく／＼し餘所目に餘る涙川。渡り兼ねたる丙午富士の。江戸冷泉煙と。諸共に消ゆる命ぞ。果敢なけれ。首にかけたる玉の緒の。絶えなば絶えぬ箒木の。長地形見の念珠繰返す守は父の賜はりし一部一卷後の世を。助け給へや南無妙。法蓮華經南無妙法蓮華經。歌何時しか君と馴れなじみ。變るまいぞや變らじと起請を。書いて取交し。小指を切りて。ナホスフシ血を絞り。互に



語る睦言に。二上り祭文さりし御見の夜の雨。殿御待つ間の疊算。逢ふ夜逢はぬのよ。いさよ恨みても。外に悪所は。誓文と。オクリ仇し。男の。ナホスフシ仇事や。地貧の盗みに戀の歌三十文字書き習ひ。湯島に懸けし松竹梅本郷お七と記し置く。十一歳の筆の跡見し人あらば私の。形見と思ひ一遍の御回向頼み奉ると。顔差入る懐の。内より洩るゝ振袖に溜る。涙ぞ哀れなる。フシ身は人くづと。言はゞ云へ。笑はゞ笑へ一筋に。思ひ初めたる戀なれば。たとへ此身を貫かれ。骨は粉となれ灰となれ。スエテ魂は此世に留りて。影に附添ひ身に移り。小オクリ二世もへ三世も我夫と手に手を取りて蓮華乗。説經カ、リ法の纜切れ果て。我と火に入る夏の蟲。焦死とは。此事か。竹の子故に迷ふ親。冥加も知らず恩知らず。如何に若めといへばとて。氣儘に心持ちなして。オクリあられ。少きしめじとは神も佛もしらまゆみ。ナホスフシ三つ葉四つ葉の。嫁が萩。脛も現はに三田の郷。スエテ亂れし髪と諸共に。隨喜の涙をちこちの。二上り祭文眺めは。爰も鳩の海。小浪寄する。品川や。いよ。いよ。いよ。濱に。合入江の海人小舟。見えつ隠れつ。一霞の。あれ。から。先を。見渡せば。吉原雀口々に。科のよしあし夕時雨。戀の邪魔する。男こそ。色の命をせしじみ。我は佛になりもよし。オクリ振りもよしなやよ。いさよ戀故に。命の峠。フシ今暫し。暫しと留むる人もなく。心も駒も忙しげに行く道柴も露ぞうく。引く足なみの數盡きて。爰ぞ名にふる鈴の森最期場にこそ。着きにけれ。

地色かゝる所へ吉三郎思ひ切つたる白装束。群集の中を押分けく人目も恥ぢずつかく。立寄らんとしけれども警護の武士に隔てられ。泣く音ばかりの間ひ交し我故かゝる罪科は。淺ましの有様や。スエテ此身も共にと焦れける。地色お七は顔を振上げて愚にござる吉三様。我が心から爲す業を少しも悔む事ならず。逢うて死ぬれば今は早や。フシ心にかゝる事はなし。地色お前は命目出度うし。御出家なされ亡き跡をよくく。弔うて下さんせ。言ふ事とは是ばかりはやくお歸り遊ばせと。名残りに心亂るれど。人目を恥ぢて潔き。言葉の中に曇り行く目許に。哀れ残すらん。吉三も涙押し隠し我身をかばふ心ざし。喜ばしやと振返り役人に手を突いて。詞科の起りの本人は私にて御座候。地色急いで彼をお助けなされ我等をお仕置下されよと。たつて申せど役人は。詞愚や一度代官所で詮議極まる科人を。我が計ひに叶はぬぞ。地死なんず命をあのが望みの如く出家して。跡弔ひて得させよや急ぎ立ち去れそれ科人。時刻移ると下知すれば。吉三も今は力なく生てゐられぬ我が命。いでく冥途の道連れに我先立つて待つべしと。腹一文字に掻き切つて露と消に行く露の世や。お七は今年十六歳吉三郎は十八の花や。月雪郭公なれも冥途の友となる。戀に果して武藏野の草の縁と色深き。浮名諸國に擴りて。語り傳へる末の世に哀れは。盡きぬ物語。



富仁親王嗟峨錦



富仁親王嵯峨錦

作者 紀 海 音

序詞山は高きにあらざれども。仙あれば即ち名あり。水は深きにあらざれども。龍あれば即ち靈なり。廬山の瀟孤山の梅。李伯和清が愛吟より。其名も高き日の本や。百世重なる天皇の。徳は富仁親王の。オロシへ政事こそ。やごとなき。色香も榮ふ御齡。まだ廿年の若草に。籠るてふその業平に類へる玉の御形。風雅の名さへ著き永享元年暮秋の空。千世の古道嵯峨紅葉行幸の車大井川。汀に向きて玉座を占め御遊覽とぞ聞えける。供奉の卿相雲客より菅家江家の儒士博士。連る袖の色替へて。末座に篋目の千玉丸。今日の舍人を蒙り強力不敵の若男。瑤輿を守護し坐したるは。フシいかめしう。こそ見えにけれ。地色中にも關白兼定公笏取直し謹んで。詞物として捨てざるは天地の公。君のめぐみの深き事八入に照れる紅葉も。景色を添へ候と壽き立てゝ奏せらる。地色親王御機嫌麗しく朕太平の餘風を慕ひ。往昔仁明天皇の。芹河の行幸に準へ。詠歌の興に君と臣相和ぎて樂しみを。下に施す一節と思し入りたる和歌の題紅葉水に映るとの御製は斯うぞ聞えける。もみぢ葉の影も流れず大井川。散らぬ梢を筋にして。地添くも御宸翰御短冊に染め給ひ。都の錦名所の褒美に何か惜しまんと。流れに添うて投げ給ひいざや面々目前の。趣向はいかにと宣へば。兼定公を初めとし我もくと公卿達。長歌短歌混本歌。詩連句漢和俳諧口。千言萬句綴り添へ色紙短冊とりふに。浪に浮みし有様は陸奥山の黄金花。オクッ入り日へに洗ふ如くなり。地色入興の餘り人々はヤア千玉丸。詞日頃は無骨なりとても今日の瓊筵に。一人洩るゝは一座の恥流行歌の一句でも。覺えた事を書き出だせいかにかと宣へば。地ハツト答も荒男のつさくと御前に出て。詞分相應の役目には川波に飛込んで。或は水練立游御覽に供



へんと肌。油を乗せたるに。存じの外の御所望迷惑至極さりながら。地御恥辱とある上はたつて辭退もいかゞなり歌や連歌は氣がかはらず。わつさりとやつてくりよ。歌龍田川にはちんちり紅葉を。流すよほんをさととさよんよえ。ナホス君を始め奉り。フシ各興に入り給ふ。地色時に尾上の方よりも紅葉につれてちら／＼と。吹かれて来る板繪馬御前にこそ落ちにけれ。地親王取上げ見給へばいと細やかなる彩色に。美女の姿を畫きなし願主狩野の雪姫と。讀み終つて宣ふは。詞女の繪師と譽ある雪姫が筆ずさみ。地聞くに勝りて妙なるかなかゝる器量を蓬生に。埋もれ置くこそ本意なけれ。まだ獨居にあるならば宮仕をも勧めよかし。兼定いかにと綸言あり。詞さん候此雪姫儀は。某が家臣膳手織部が娘。折を伺ひ御階迄召連れお目見え遂ぐべき所。丹青修行に暇なく空しく打過ぎ候なり。又此繪馬は雪姫がわりなき夫婦の其仲に。子を設けたき祈願により我姿を書寫し。松の尾の明神へ奉納せしと聞きつるが。地山嵐に誘はれ君の御手に入りし事。民の子を安んずる願成就の吉相と。フシ委細にこそは奏せらる。地色親王由を聞き召し。なに此繪馬は雪姫が姿筆に寫せしとや。心にくやゆかしやな彼が風流聞くにつけ。夫が知り度し何者と勅諭あれば兼定公。詞されば候何時頃より。馴れ馴染しは知らねども夫はあれなる千玉丸。地委しき契は召出して御尋ねあれかしと。座興を交ぜて勅答ある。親王世になく打笑ませ果報いみじき千玉丸。骨柄に似ぬやさ者よな汝が癖の腕立にて。雪女は仕留めうが雪姫には消え／＼と。なだれて溶けて何時の間に子持と迄はしたゝるき。願ひごとやと冥加なき御戯れの言の葉に。もち／＼として千玉丸。フシ顔を赫めて居たりけり。地色爰に蟠海僧都とて親王の御兄宮。高雄にまします御許より百濟師國使者として。玉座間近く畏り。河邊の行幸先達つて。主君僧都承り幸ひ御寺も程近し。所は名に負ふ高雄の奥。春を欺く紅葉は此地の及ぶ事ならず。地旅宿の席を相構へ臨幸願ひ奉る。御迎ひに參上とフシいかめしげにぞ申しける。地色兼定公は豫てより僧都の悪心察する上。今師國が面。魂害を含むの計略と心に込めて宣ふやう。詞ム、御連枝の因みとして思し寄つての御招待君御觀感さりながら。逸遊逸豫の樂も過ぐれば民の煩ひたり。

此地への行幸は先例を追ふ所。高雄に一宿あらん事安きに誇る誹を受け。朝政事怠らば下の訴へ滞り。君一人の御過無益の結構叶ふまじと。言葉正しく返答ある。師國頭を上げ。コハ心得ぬ御言葉差當つて御兄宮。御慈の招待に四の五のあるは無禮の沙汰。地又朝廷の行ひも天子に代る關白殿。御一宿の其間捌きに違亂あるべきか。近頃狭き胸中とフシ嘲笑う。てぞ居たりける。地色親王つく／＼聞き召しげに同胞の睦まじき。使がねとは言ひながら。政事には替へ難し。高雄山の風景より民の寵の賑ふこそ。朕が詠めの紅葉なれ外に求むる樂しみなし。歸りて此旨申せよとフシ悠々としておはします。地色師國消息はつとつぎ。詞天知る地知る人知ると何處ともなしの取沙汰に。親王の御事はもとより女帝にまします故。廿歳を過ぎ給ひてもお后もなく女御もなく。華奢風流の御容顏合點が行かぬと思ひしに。關白殿を始めとし登山厭がり給ふ事。高雄は女人結果故行詰つての言葉争ひ。尤もかな知れた／＼。地よしは女帝にあらばあれ其時こそ僧都の行力。いかなる魔障ありとても退け給ふは案の内。骨肉の御仲にさのみな包み給ひそと。さも憎さげに言放す。兼定大きに氣色を損じ。詞ヤア勿體なし師國。天子の御身に謂れなき難題を云ひかけるは。汝が當座の雜言か但し僧都のお指圖か。出家の御身に悪心のあるべき様には思はねども。地只今の一言にて愈還幸なし難し兎に角還御を急ぐべし皆々用意とありければ。師國は大音聲。詞忝くも蟠海僧都一の宮の命を請け。勅使に等しき某むざ／＼とは歸られず。其上行幸ならざれば女帝の噂も廣うなり。世の人口も笑止なり無禮は却つて忠義の道。地否とあるなら玉體を無體に供奉し申さんと。フシ傍を睨んで立つたりけり。地色千玉今は堪へ兼ね末座よりつゝと出て。詞ヤア師國とやらどる國とやらいかつげに喧しい。僧都とは誰がこと。兄弟にもせよ親にもせよ。世を離れたる捨坊主我儘の願ひ事。却つて御遊の妨げし二歳め迄がい／＼と。身體に過ぎたあごた骨捻ぢ歪めんと飛びかゝるを。地色親王は御聲を上げそれ制せよと宣へば。公卿の面々取付きて。オクリ漸々へかしこに押込むる。地色親王。玉顔穩に師國が云ふ所やぶさかなるに似たれども。詞女帝となき名言ひ立つる世上の噂捨て置かれず。



地其上僧都へ立つる道直ぐに行幸を催すべし。今日此所へ來たる事誠は朕が下心。紅葉より猶色深き女の風儀を見そなはし。心に叶ふ者あらば貴賤に依らず召し入れて。后に立てん爲なるぞ。然れば高雄山とても。三月廿一日は女人も山へ詣るとや。來年の例日を明日へ取越して。我參詣の作善のため女人の參りを赦すべし。近國へ相觸れべし僧都の行力頼まねど。佛法王法二つなき朕が許すと云ふ言葉。世界國土の海山も草木もなか背かんと。虎の威あつて猛からぬ君子の。道こそ。三重末廣き。フシ法に形は。地染めながら心は貪慾一の宮幼立より御行跡邪にまします故。押して出家になし參らせ山家の住居朝夕に。無念の焰焚き添へて護摩にふすぼる顔色も。崩黄緘の腹巻に筋金入れたる櫛の棒。馬手に搔み飛び如くせきに急いたる目の内に。天地をはつたと睨み付け。詞先帝一の王子と生れ萬乗の位に即くべきを。胸慾な親心二の宮を寵愛し。左右の大巨媚びへつらひ親王を位に即け。罪なき我を此如く無體に剃つて剃りこぼたれ。地醫憤遂に散せんと時節を待ちに待ち畢せ。今日嵯峨の行幸こそ天より我に讓る所。謙し寄せて害せんため連枝の因みを託けに。詞師國を遣はせしに待てども。歸らぬは。察するところ謀計を關白めに悟られ。からめられしは必定とても露顯の上からは。地討手を待たず逆寄して一戦に勝負せん。フシ方々いかにとありければ。地色岩飛の脱天坊霧間の時夜又始めとして。前後不覺の惡僧ども異議にや及び候と。勇んで中途に駈け向ふ然る所へ師國。競ひ切つたる戻り道兩方はたと行合ひたり。詞僧都怒つて大聲上げ。ヤア臆したるか師國。事延引に及ぶと言ひ親王をも供し來らず。のめく歸る狼狽者兎角の返答聞く迄なし。直ぐに向つて片端目にも見せんと駈出づるを。師國縫つて引留め。お急きなされぬかりはない。拙者が辯舌武勇にて首尾よく當山行幸の。勅詔下り候と仕濟し顔に云ひければ。僧都顔色打解け。さぞあらんと思へども。一大事の競口仕損じたるかと氣遣ひたり。地サア彼奴等が命は寢腐つた天が下は一呑みと。勇み躍れば脱天時夜又共に浮れていきくと。物にも足らぬ公家は。糖粉を斬るより易い事。手應へのある相手もがな高名をして遊ばんにと。フシ雜言たらしく言ひ散せば。詞師國は

頭振り必ず御油斷なさるゝな。親王若くましませども天子の御位備りし。威勢を四海に振はんため結界の地を踏み破り。明日女人の參詣を許すとあるの宣旨こそ。凡慮の及ばぬ御發明。關白もとより智謀の臣舎人に笹目の千王とて勇猛無双の若者彼めを拉がぬ其内は。滅多に天下振られぬとにがくしげに訴ふる。僧都からくと笑ひ。のさばり過ぎた勅詔顔智慧が却つて害となり。身の亡ぶべき前相女人の參詣許すこそ。これ此方の究竟一。地智略を以て討ち取らんは何條仕損じあるべきと。手に取る如き廣言に皆手を打ちて領き合ひ。天晴智慧の山ばかり芋掘り坊主にあらざれば。げにさも僧都とそやされて。自慢に鼻も高雄山本坊指して。三重歸らるゝ。フシ大君の。勅をば笠に着て。高雄の紅葉踏み分くる。女につれて男すら貴賤群集の摩合も。咎めず揺ぐ袖と袖。錦の世界を賑しき。地色參詣多き其中に戀と情の色合は。こんなものかと夕顔の昔をか雪姫は。見おろす程の顔容貌。今日は寢して出立場へ。小オクリひらり帽子に抱帯しやんと締めたる風俗も。浮れて輕き瓢箪の。腰元仲居風呂敷にちよつと小提の手なくさみ男思ひの氣配りを。フシ行幸の道を慕ひ行く。地色山の麓に御車の轅に凭れふらくと。小居眠りする千王丸退屈らしい舎人役。伽欲しげなる顔付とつかくと側に寄り。懐へ手を差入ればびつくりとして大欠伸。詞扱々づなうほされる事。ホウ女房ども。夫の留守の氣儘歩き近頃以て無作法至極。地後生は内でも願はるゝつひ拜んで早歸れと。只一口も仕人なり雪姫は打笑ひ。詞ほんにマア心を知つてゐればこそ。添寄りのない物言ひ。物詣は附けたり。女の繪師と云はるゝから屏風掛地の度々に。地櫻は吉野紅葉には高雄の秋を寫せども。目に見ぬ事は覺束なくお許あるを幸ひと。辿るゝも參りしが。目馴れぬ山の景色より矢張見つけてお前の顔。眺めて遊ぶが面白い。ハアいかう草臥れたちと爰貸してと膝の上。凭れかゝれば突倒し。詞あた見苦しい舌たるい。七尺去つて師の影踏まず。八尺去つて男の顔拜んで居よとは古人の戒め。飛退つて畏れ。フウ仰山な。内證の魂膽は聖人でも同じ事。地こんな處で和いて人に羨りがられてこそ。打晴れての女夫なれ。地色ア、まゝよ。地色そんなら獨樂しむじやと立退いて小提重。仲居腰元打交り



フシさいつ おさへつ 酌交せば。地色千玉じろく打守りハレいかう氣が盡きた。八尺の内二三尺間には大事もない事と。言葉の下よりそれく。詞ちつとぞうもござるまい。重ねては道なかく抱付くが合點かヲ、後は後目のまへのたつた一杯くと。地互にわりなき酒機嫌凭れ合うたる袖袂。頭隠せど尾上より還幸なりと呼ばはつて。親王關白僧都迄御下山あればうろくと。廻る車の前後。オクリ隠れへかねてぞフシ見えにける。地色兼定公聲をかけ御許さるゝ苦しいない。罷り出でてよとありければ。ハツト答へて兩人は顔見合せてうぢくと。フシ玉顔近く畏る。地色親王御氣色麗しく千玉が妻雪姫よな。詞風流と云ひ形と云ひ例稀なる繪のたくみ。幸ひ所も高雄山其外古歌に詠み置ける。名所々々の紅葉の色集めて爰に眺め度し。寫して見せよと勅諛ある。雪姫額を地に着けて。詞拙き女のすさみ迄召し上げ給はん論言は。地身に餘りたる嬉しさも。畏多く候と。フシ言葉の品も優しけれ。詞兼定差寄りコレ雪姫。勅諛いかで背くべき。地即ち是に晝けよと扇と硯賜ければ。ハツトばかりに押戴き。墨擦り流し筆を染め。オクリ一々へ次第に。寫しける。先づ紅葉の名所の其色品を自ら。筆の稽古は青葉なる稻荷の山の若楓木の下。闇の。フシ繁みより。更け行く秋の。一入に。八鹽の末を契りては長くもがなと命毛の。榮を祝ひ書そめける。次に寫すは鏡山オクリもみぢ。重ねの。色々の伊達を仕立つる襟付も。對の白無垢霜の綿。霧を伽羅とも。燻らせて。世に見せ顔の粧を。フシ心にこめて晝くなり。さて其次はかけまくも。かしこき。神の愛て給ふ。オクリ龍田の。川の波の面渡らば中やたえなんの。御製もげにや一樣にくだし掛けたる唐錦。一際目に立つ。フシ眺めとかや。さて又爰に。名にも似ず。笠取山の村時雨盛りて零れてさつくと。絶間に。残る虹よりも。朱を見せたる下紅葉。オクリ戸無瀬の。瀧の折掛けてめぐり流るゝ粧は。雪ならねども山の帶。風にほどけて日に晒し結び。止めて。止まらぬ秋の行方ぞ惜まる。分てゆかかし風景は。定家卿の住み馴れし昔を爰に小倉山。フシこれ敷島の道しあり。妻呼ぶ鹿も紅葉散る。跡を尋ねてかいると鳴くはしほらしや。さてしほらしき。山里の名所名木とりくに盡きぬ。水莖あらましを。かく

とばかりに□□御前にこそ差上ぐる。地色親王親感淺からず□□被物。數々積る雪姫は御暇下されて。オクリ家路にへこそは歸りけれ。地色然る折節時ならぬ撞鐘しきりに呻り出し。大地も碎け落つる音。フシ山家崩るゝ如くなり。地色各是はと聞く所に山をくだりに百濟師國。息氣を切つて匠來り僧都の前に畏り。詞扱も不思議の事候。當寺の撞鐘故なきに火焰となつて失せ候。いかなる障碍あるやらん急いで歸山遊ばせと。事ありさうに訴ふる僧都ハツト仰天顔。地コハ一大事ござんなれ忝くも此鐘は。宇多天皇の勅願にて。橘の廣相。菅原の是善卿藤原敏行。言葉と筆を残せし故世に三絶と稱せられ末代の靈物。今退轉に及ぶ事天下の凶事を示すのか。佛法破滅を告ぐるのかあら氣遣はしの變災と。言ひもあへぬに山上山下太鼓を鳴らし法螺を吹き。脱天時夜又兩惡僧與力の大衆鎗長刀。得物々々をひらめかし遁さぬやらぬと聲々に。親王目がけ取巻いたり。脱天坊真先に進み出で。怒れる眼はつたと見開き。詞ヤアノ親王よつく聞け。當山神護寺の御事は弘法大師の開基として。眞言秘密の道場。六百餘年の掟を背き天位に任せ時ならぬ。女人の參詣許せし事中興文覺是を怒り。靈魂我に代入り。邪の政正さんために來りしぞ眼前思ひ知らせんと。罵りをめく有様は。フシ恐し。なんどもおろかなり。地色兼定少しも騒ぎ給はず。詞ホホウ文覺の。魂とて新しい事承る。法の掟を背くにこそ。一年一度は許されて女人の參る道場故。其當日を今日に取越せとある勅諛は。大善根の結縁佛感應あるべきに。物咎する文覺坊現世におはする其時も。頼朝に頼まれて平家の世をば覆し。又六代に頼まれては二度源氏を亡さんと。謀叛好きな癖あれば魂魄とて其如く。又何者にか頼まれて叛逆一味の企てと。脱んだ眼は違ふまじ。サア眞直ぐに白狀と。地理正しき一言に。返答はつと行當る暫くしらせ居る所に。後に控へし師國俄にうんとのかへり。悶絶したる有様にてやがてむつくと起き上り。詞方々知らずや我はこれ。當寺建立の本願人和氣清膺が靈魂なり。そのかみ仕へし孝謙天皇行跡無道にまします。罪なく遠流に處せられたる鬱憤今に止む時なし。根を同じうする女人の參詣。許して靈地を穢させし。遺恨は親王汝にあり。地立ち所に懲しめんと。フシ氣色



込うてぞ挑みける。地色千王焦つて飛んで出て進む悪僧五六人。引摺み／＼投げ散しつゝと立ち。詞ヤア兩人のへろへろ怨靈。某を見知つたか。日本無雙のわやく者金平が幽靈。娑婆の騒動聞くよりはや八萬地獄を脛にかけ。てんぐりかへりして駈付けた。鬼友達と附合ふ故人食ふ術も知つてゐる。地おのれ等動くな片つばし坊主首を引抜いて。鼈料理の生醬油。色しゆつ／＼しゆつと。地云はせんと。ふんぢがつたる有様は。フシ閻魔の從弟も斯くやらん。地色僧都は當の違つたる顔青ざめてきよろ／＼と。氣色を直し追從聲天晴れ健氣な若い者。詞手柄次第に何ぼうも首引抜いて遊ばれい。地愚僧は寺に立籠り靈魂鎮めの護摩を焚き。御代は長久親王の警固を祈り申さんと。挨拶口も跡や先。フシ山上指して逃げ歸る。地色千王可笑しきたまられず。詞ア、蟠海殿手が悪い。俗は熱火を子に拂ふ。僧都は悪事を弟子坊に塗つて／＼塗り坊主。地まめな足元逃げ振りと大手を打ちて笑ひける。地色時夜又進んで下知をなし物な云はせそ打ちひしげと。切先揃へて切つてかゝる。詞ヲ、面白し／＼。歌もみぢ踏分け鳴く鹿の。ナホス胴骨肩骨膝頭。薬食ひには重疊と大手を廣げて。三更追ひ廻す。フシ中にも猛き。脱天坊。組みにかゝるを事ともせず目より高く差上げて。詞文覺坊と名乗れども誠はそてんかく上人。地精進看に取らせんと。敵の中へ投げ付ければ。微塵になつて失せにけり。此勢ひに恐れをなし四方へ別れて逃げてげり。地色エ、臆病なる悪僧ばら逃ぐるは科を悔ゆる道。許すは仁愛深き道道の道たる親王の。還御を急げと御車に入るさの月の都の方。輝く威勢は八洲の外。疊込んだる兼定の智慧の明玉千王が。武勇は四海を覆ひたる天を。翔りし斑足王。山を劈く龍伯公。それよりも名は高砂の松の操に準へて忠臣の種。と榮えける。

第 二

地孫眞人が三養にも思慮寡きを第一とす。然るに富親親王は皇統萬機の政。民を養ひ世を恵む。古賢の教文の道夜

晝絶えぬ御工夫に。御心疲れますすにや。盛りの花の顔ばせも。フシ稍寝れさせ給ふ故。地色公卿の面々とり／＼に觀慮を慰め申さんと。絲竹の遊び舞樂の興夜の大殿の添臥に。女御の入内六宮に更衣の袖を並べても。君御心傾かず鴛鴦の褥もいたづらに。病鵲の明暮と。スエテ宸襟穩かならざれば。地智化の老臣是を歡き。三臺五門四座七辨各御殿に出仕あり。地色かゝる所へ蟠海僧都心にあらぬ袈裟衣。苛高の數珠仰々しく殊勝つくつて參内あり。兼定公に對顔し。互に行幸の下心胸と胸とにありながら。表は慇懃やはらかに。詞遠路の御行駕御運枝の御慈愛深くまします段。千萬感じ入り候。ヲ、されば／＼。親王寶祚長久と日頃に念ずる法力故。清磨文覺兩人の靈魂をだに鎮めしもの。況や當座の邪氣なんど一祈りにてさまさんと。地はる／＼參着致したりさは云へ當封本番の。星の祟か氣遣はしと。天文の書を取廣げ算木を並べ忝しく。詞ム、當年は丑の年。時は十月生は辰にて金性。ハ、ア先づ辰は陽にて天子の形。丑の年の陽に應じ金性水と相生し十月の陰を自得す。陽有餘の徳に位し。地男子は病難の憂なし。女は當月陰の運に辰の陽氣を閉づの大病。踏み違へたら危物。世上の噂が偽りか皇子と云ふが實正か。二つの迷ひに蟠海は殆んど當惑致せしと。フシ眉を。ひそめておはします。兼定につこと打笑ひ。詞吉左右の占の面先づは安堵仕る。御惱は追付け鎮らん。地皆々悦び給へやと共に。壽なし給ふ。僧都顔色せき上げて。ア、とほけまい諍ふまい。詞忝くも易道は伏羲氏の晝してより。孔子の天命佛神の。冥慮を照す鏡の面男子には病難なし。地それに違例とあるからは女帝には極りし。大切の儀を偽つて必ず後悔致すなど。かさに掛けたるは袴。フシ腰のさするぞ是非もなき。地兼定怒りを押鎮め。詞コハ心得ぬ御咎め。憚りながら占形の御傳授いまだ足らぬ故。總じて易は變易とて即時の機轉が肝要たり。八卦の面に現はれぬ御惱は四百四病の外。地戀風といふ御惱み疑はしくば御容體。伺ひしろし召されよと寢殿に差寄りて。玉垂半ば巻き給へば。親王現なく心は餘所に空蟬の。霜待つ梢枯れ／＼に。寄るべ涙に忍び音を。スエテ件ふ枕押しやりて。稍起直らせ給ひつゝ。明暮御身を離されぬ繪馬取上げて打詠め。フシあら美しやしほらしや。物言



はず笑はねども。長地其佛は生寫し天皇の身と生れても。叶はぬものは戀なるよな。詞楊貴妃却つて唐帝の思ひ李夫人去つて漢王の情。地それは透けき別れの道。スエテは間近き苜垣の。同じ都の内ながら。餘所に許せし下紐の。解けて歸らぬ春の雪。フシ花踏み散す。鳥ならて。妹背語らぬ諸翹。憎やねたしや怨めしと。包むに堪へぬ御歎き。哀れはかなき風情なり。詞ハア一筋に思ふまじ。地色後朝に世を恨み待宵に身をかこち憂きつらい目は戀の科。心長う寝るこそは夢にも契る縁そと。衣引被き臥し給へば。フシ御簾さらりと下りにけり。地色蟠海案に相違して稍暫し差俯き。王子と云ふには疑ひなし。非道の戀慕に迷ふこそ。我叛逆の元手よと。獨笑して打領き。詞ヤア兼定。加持行力を頼まねども是程輕き病をば。何故療治致されぬ。唐天竺にもあらばこそ都に住める女繪師。今迄油斷致されし心底いかゞと怪しめる。關白嘲笑ひ。イヤ御説とも覺えぬ儀。彼には笹目の千王とて慥な夫ある事は。申さねど御存じ。君にもさすが儘ならぬ。地浮世を侘びての御惱み不義と見ては臣として諫をこそ入るべきに。女を奪ひ勧めよとは理不盡のお指圖と。理を正して述べらるゝ。僧都頻りに打笑ひ。詞定木を踏まへてくどくと胸を焦すは下々の業。地氣儘に募るが天子の樂しみ。先例を尋ねれば。詞白河の院は源の。仲宗を遠流せしめ。其妻を后に備ふ。祇園女御是なり又。永曆の帝には父天皇の女御になづみ。二代の后に立て給ふ是等さへあるものを。賤しき奴の妻なんど勅詔として召されんに。誰を憚る事あらんと。フシ傍若無人云ひ放す。詞兼定も笏取直し。入らざる貴坊先例だて此方より申すべし。往昔唐の太宗は鄭仁基が娘を戀ひ。后に備へ給はんと入内の宣旨給はりしを。魏徵諫めて此女。陸氏に縁を結びしと申上ぐれば忽ちに。宮中を出されし。地是ぞ賢き世の例。よい戒を教へずして悪しきを手本に引かるるは國を亡す御思案かと。云はせも果てず。詞ヤア猶以て愚かなり。日月あつての世界なり。天子あつての政道よ。元を立つるは親王の一命。纒か雪姫一人を無理なりとて勧め得ず。焦れて必死に至りなば仁義はさて置き天下は闇。太子とてもあらざれば差詰め此蟠海を。還俗せよと勸むると。翻すべき心と思ふか。勿體なや。地一度遁れ

し塵の浮世。望むところ更になし。天津日嗣の絶えんこと。悲しうないか兼定。但し叛逆たくむかと雜言云へば關白も顔色變つて聲を張り。詞すはと云へば手を出す御坊こそ悪心よ。地いや其方が非義者と。フシ爭論次第に相募れば。地親王御枕を上げさせ給ひ暫しと押鎮め。詞四海の誹を憚るは臣下の忠義と云ひながら。地天下を庇ふ蟠海の志こそ嬉しけれ。片時も早く雪姫を禁裡へ召せよと勅詔あれば。公卿の面々顔見合せ。フシ呆れて。答ふる者もなし。地色僧都一人したり顔。汝如きの愚痴者と論ずるは無益なり。衆生濟度は佛の慈悲。無體の戀路取持つは人を助くる行者の願力。元より名利を厭はねば拘摸とも太鼓坊主とも。笑はゞ笑へ云はゞ云へ。雪姫住家へ立越え縦へ夫の千王丸。孟賁夏育が勢あるとも。我また不動の縛をあざなひ。四種三密の金剛力にて引立て来るは今の事。心安かれ親王。氣遣ひするな公卿等と形は隨縁真如の有様。心は修羅の早飛脚焦つて。こそは。三重

狩野雪姫道行

次第弓張る月の入る方や。我が隠家と定めん。詞扱も笹目の千王は。親王非禮の機に殉じ。蟠海我が家へ來りしを。打擲の上追ひ返し。重ねて討手來るを待ち受け。腹掻き破るは易けれど。多年の忠義やみくと。泉下の土に埋んより。身を退きて日月の。ナホスフシ明けき世を。松のこや。夫婦諸共旅姿心の駒に鞭打たず。足の乗物手の奴。杖と草鞋に案内させ。住みこし都を立別れ。フシ近江路指して出て。行身の有。オクリ様こそ。是非なけれ。名も逢坂の關ならば。追手を防ぐ辻占と女心に喜べば。夫は無念。フシ數々を。跡に見返る。山々の。緑を添へて麗しく。本フシ目馴れし我に餞と。立並びたる心地して。物に觸れても忍ぶ川アノ苜浦に。波風の立たて二人が行末も。猶守山と堅め合ひ。手に手を取りていそくと。袖振る肘振る腰を振る目狹き旅の。物憂さも。戀にはいと。一中節野洲川に。群立つ千鳥友鶴の。あさる間もなく瀬を早め駒の渡りや徒歩渡り餘所にや人を。ナホスフシ三上山。峯よりお



ろす。スエテす榊葉は。猶萬代の數添ふる。挿頭の幣と吹き落ちて夫の鬢や我が髻を。長地打拂ひ又撫て付けてそよけを直す鏡山曇なき世を喜びても。いとと思ひは果しなき。野路の篠原篠竹の小オクリしんき。しんきのふし込めて汝も憂目を知り顔に續く茂りも長等山。打過ぎ行けば渺々と。向ふに清き月出島。歌堅田浦よりコツチへお舟がお舟が。來るとヤツツツツ。調轡楫を揃へて押せヤツサ。琵琶の水。海月を見しよオホンしつとん。オホンしつとん。ナホスフシ空艚の音のよさと。旅の道草。老曾森。小石交りの露霜の。裾に纏はれひた。避けて急げばしとしと歩み苦しき足並も。波のうね野やまくず野の。萩も薄も刈萱もおのれ。染模様。露皆脱ぎ替て木枯の。ナホス朽葉の錦装。へる花の縁と。見返れば。玉のお山の村時雨さつと降り來る一しきり。つれなき松もおのづから。馴れてや近き。フシ床の山。岩がね枕苔筵。臥す猪鹿の音諸共に色を込めたる優景色影恥かしや名取川。契は深き中々に心の憂さと。較ぶれば。猶も隔つる。二面見せばやこの手柏原泊も旅の習ひとて。二人が中に面白い夢も見果てず醒井の。スエテ流れも清き道のべに暫く。語らひ。フシ休みける。

地かゝる所に師國時夜又大勢引具し駈來り。詞ヤア天罰知らずの下郎め。勅を承る僧都に向つて悪言吐き。地打擲したるあぶれ者いづく迄か遁すべき。命惜くば女を渡せさないと首が逐電せん。何と何とと罵つたり。詞千王からからと笑ひ。性懲もない腕ずんばいおのらが主人の鼻入が。無體の顯たまし故拊碎かんとしたれども。出家の身を憚つて土足を上げて疥癬元。地そつと撫てたるぶんの事慮外もせぬ落度もない心ありての我が出國送つた賃に片端。握拳が所望かと捲り上げたる腕毛は。綱が鍔を掴んだる。フシ茨木童子も斯くやらん。さしもの同勢怖れなし互に譲り合ひ。進み兼ねてぞ守りある。時に遙の跡よりも兩人止れと聲をかけ。雪姫が父膳手織部逸散に馳せ來り。詞ヤア粗忽あるな師國。貴殿は僧都の仰を請け私の遺恨なり。我は天子の勅命にて是迄追手に向うたり。若し此方の手に餘らば其時加勢を頼むべし。先づそれ迄は退いて見物あれと押隔て。やれ狼狽へたり夫婦の者。名に負ふ笹目の千王

とて武道を磨く身を持ちて。地堪忍を辨へず漫に都を立退くは。女が惜いか追手がこはいか。心底いかにと尋ねける。詞千王丸聲荒らげ。討手といひ剩へ舅の口から不挨拶。女の五疋三疋に絆打たる、男でない。天子に戀慕せらるゝは天晴果報の雪姫。參れと言へども頭を振り暇を呉れば死なうとほざく。地色勅説背けば討手の沙汰刃向ふ時は朝敵同然。天子に非義の名も立てず夫婦が節義も立てたさに。いづくになりと影隠し世上の鳴を静むるなり。聳の舅の遠慮はない入らざる止立致されなば。椽麴棒を掉られんと。フシ切刃を廻し怒りける。織部騒げる氣色もなく。詞汝が申すは若氣の思案。普天の下卒士の濱落着く處皆王土。君に背いて天地の内いづくに足を止むべき。粗忽の至りと言はせも果てず。ハテ日本に住まれずば。地足に任せて唐高麗鬼ヶ島へもつつ走り。廻一つて働いても夫婦が口は養ふとえせ笑ふ。フシてぞ居たりける。織部いらつて聲張上げ。詞事可笑しき言分三千世界を乗越して初利天に至るとも。朝敵不義の兩人を圍ふ者あるべきか。覺悟極めて立歸れ。イヤ朝敵とは謀叛の輩。無道の君を見限つて國を立退く例はないか。ヤレ勿體なや親王を假にも悪しく言ひ散す。舌は八つに裂けぬべし心を鎮めてよつく聞け。國の主の御身として。御惱になる程雪姫を戀ひ慕はせ給へども。地道ならぬ義を辨へて押して召さるゝ宣旨もなく。關白其外公卿達それと色には悟れども。勸めんといふ臣下もなく君臣共に素直なる。惠は夫婦が身に取りて冥加に餘る事ならずや。圓然に蟠海謂れなく取持ち顔に立越えて。汝に對して無體の所望。邪とも狼藉とも。我と我との仲間らば存分に致す筈。されども僧都何人ぞ先帝の一の御子。地色君御連枝の御身體下衆の土足に穢すといひ。勅を背いて立退くは朝敵にあらざるか。サア返答と詰掛くる。詞千王丸ぎよつとして。ハア南無三寶しなしたり。地色生れ付いたる一轍にて。思はず知らず某は朝敵の名を取つたるか。エ、後悔や悲しやと鬼を欺く目の内に。涙はら。男泣き大地にどうど身を投げて足擦したるばかりなり。親と夫の諍に。心も消ゆる雪姫は。互の胸を推量り。我身の上を思ひやりかつばと伏して。泣き叫ぶ。織部も共に涙ぐみ。ヲ、ことわりなり。フシ道理なり。君も哀れと思召し關



白公も兎や角と。御思案を廻らされ今改めの勅諭あり。歎を止め承れ。詞論言の旨別ならず。親王わりなき好色を暗  
 け難なき御餘り古へ美人の譽ある小野の小町が佛を寫させて見るならば色品ともに雪姫が。地姿繪よりは勝るべし増  
 す花あらば今迄の戀は忘るゝものぞとて兼定是を承り。道の工に云付けて繪に書き又は木に刻み。數多觀覽致せども  
 御心に止まらず。詞弘法大師の遊ばせし玉造といふ文に。小町が盛の顔ばせより老の波寄る腰付迄。少しも變らず書  
 き記し寶藏に籠め給ふと聞く。地雪姫筆に妙なる上夫を救ふ誠をば。佛神に祈りても高野の御藏に納りし。正しき小  
 町が姿繪に少しも變らず寫すべし。日限十日が其間人質として千王丸。獄屋に繋ぎ置き給ふ。事無う繪圖だに成就せ  
 ば。親王戀慕を思し切り千王丸も御免あり。夫婦に下し給はるべし書現す事叶はずば。夫も罪し其方を召仕へとある  
 勅諭なり。汝も世に知る繪の名人仕果せてあるならば。夫婦が仲も變りなく第一には親王の。惡名出さぬ無一の忠義。  
 急いで勅答申すべし。ラシいかにと勧めける。雪姫はつくぐと聞くに思ひの結ばれし。糸繰り出す涙の露貫き  
 止めぬ顔を上げ。思召しても御覽あれ名高き畫工の人々さへ。小町が顔に劣らずと寫し得難きあらましを。拙き筆に  
 いかなれば十日が内はさて置いて。我黒髪は白妙の老になる迄案じて。見ぬ佛を中々に。何とて畫き出すべき。と  
 云うて背かば忽ちに夫は殺され此身をば。宮女の數に召されんとは無體至極の勅。十善天子は下々を惠み給ふと聞  
 くものを。此難題は胸慾や。頼もしげなき世の中としやくり。上げてぞ泣き居たる。見るに憂目をますらをが彌猛心の  
 千王も。齒を喰ひしぼり眼を張り。ハア力なき次第かな。樊噲項羽と戦ふとも勇氣弛まぬ勢ひも。綸言といふ兵に  
 はほうど矢先を折られたり。無念にあらう雪姫貞節は身に逼る。其上及ばぬ難題も我に連添ふ故なりと。思へば不便  
 の女房と打萎れたる有様は。猛きに餘り哀れなり。詞織部言葉を正しくし未練なり千王丸。雪姫も又腑甲斐ない。地知  
 らずや松浦小夜姫が夫を慕うて石となり。又藤原の佐國は花を愛して蝶と化し惠心僧都は肉身の胸に蓮華を生ぜし  
 も。一心の念願力知らぬ天竺見ぬ。唐。工夫の上に歴然たり是を悟つて末代迄。譽を残す氣はないか。何ととた

み掛け理せめて言ひ立つる。雪姫はつと打領き歎きに心奪はれて。清き誠を忘れたり世界の人の子を生むにも。初  
 めの程は其形定かに何と定めねども。辛抱よりして悉く續き備はる血筋の繪本。此理を種として小町に變らぬ美人  
 をば。寫し出さてあるべきか氣遣ひあるな我夫と。今迄萎む面差は。やがて笑顔に返り花。直ぐに小町が姿繪と。  
 フシ思ふばかりに美しき。千王大きに悦んでヲ、出來したり頼もししお主が筆の働きて朝敵の名は残りなく。繪の具  
 の下に立隠れ忠義の道に歸らんと。勇み進んで立上れば師國時夜又聲々に。詞コレ召人めに繩を打て。地逃すなやる  
 など下知を受け取つたくと駈寄つたり。詞千王眼に角を立て。コリヤ蛆蟲ども何をす。坊主が討手は恐くない。  
 勅諭故に立歸れば逃げも走りもせぬ男。窮屈な目は身が嫌ひだ。へろへろ繩の千筋より千王が一言は。地色八重の鎖  
 も同然跡へさがつて供せいと反打掛けてのつかのかイザ。お先へ舅殿。女房どもも来い。と手を引き袖引き引き  
 連るゝ。一挺の弓二挺掛墨と硯の戀仲は。眞實眞書極彩色。織部が情の本繪より。唐繪に稀な日の本の昔に照らす玉  
 造。小町が姿寫繪と普く。世上に廣まれり。

第三

地水は人に近うして而も人を溺らせ。徳は馴れ易うして而も親み難しとかや。元より無道の蟠海僧都天位を輕しめ逆威  
 を振ひ西嵯峨の別院を内裏造に建て並べ。身の天罰を願ぬ冠の下に鬘鬘。法衣を解いて袈龍の袂けやけく玉宸に着  
 き。自ら天子と稱すれば。従ふ所の惡僧迄。假髮頭とりぐに。おのれと登り官加階。護摩堂守の關白職。お札配り  
 の左大臣。地奉加勸めの權中將。且那あしらひ頭の辨。お福所の尙侍。常香守は衛士の役。伴の御奴朝淨め。鐘撞き  
 坊が御垣守。其役々を請取りて。木地が丸さに冠を。滑らかすやら束帯の。裙を踏まへて轉ぶやら。笏て願播磨瀉  
 船に酔うたる風情にて。フシ騒々しくぞ。列座する。地色蟠海緩々と空嘯き。げに幸ひは招くに來る。巍々蕩々たる



禁裡の體粧。地追付け大聖成就を待ち設けたる前表と。貪慾先立つ廣言は、フシをこがましくも憎てなり。地色時夜又席を抽んで。詞君には何時迄うか〜と時節を見合せ御油斷ある。衆徒野武士等を始とし數千騎學つて合戦を。今や今やと待つ所。急いで京都へ御出陣然るべうとぞ勧めける。ホ、ウそれこそ彌猛に思へども。小氣味悪きは千王丸彼奴を殺さんばかりに。かの高雄での仕組より段々枕を割り續け。どうやら斯うやら只今て牢獄の身となしたれども。地未だ命のある内にすはと言はゞ出しやばつて。又惨い目に出遇はんかと思ひ出すさへぞつとする。先づ〜彼めを殺すの計略仕上を見よと云ふ所へ。地色師國はこと〜しき競ひも顔に乗物を。桐油にしたみ細引掛け下部に早かせ殿中の。小暗き處におろし据ゑ。詞御大切の召の者首尾よく伴ひ候と。地聞くより蟠海。詞ヲ、大儀々々。地早是へ引出せ承ると立ちかゝり。駕の縛め切りほどき罷り出でよと戸を叩けば。フシあいと答へて立出る。男の年三十の上は二三度水淺黄。木綿裕のしよぼからげ彦惣頭巾の鬢先に。早や職人と知られける。邊を見廻しぎよつとして。あなたへ走りこなたへ行き。立騒ぎ横手を打ち。詞面妖な處へ來た。わけも云はずに道中で乗物へ拾ひ込み。はつと思つた其後は闇路を辿ると覺えしが。悲しやおれは死んだげな。あれ〜あそこに闇魔様御慈悲でござる十王様。地娑婆へ歸して下さりませ。老いたる母や女房がわしが手一つまぶるとは。言はずと見る目喚ぐ鼻のお取合せもあらう筈。參らて叶はぬ道ならば衣裳の仕覺もあるべきに。頭巾を着たる罪人は。ためし稀なる我身やと。フシ震ひ佗ぶるぞ可笑しけれ。地色師國も打笑ひ。詞成程合點の行かぬ筈。忝くも爰は禁中。あれに御座るは富仁親王。汝を御殿へ召さるゝ事世間の聞えを憚る故。斯く計ひて連來れり。少しも恐るゝ事はない。宣旨の趣とつくりと吞込ませいと云ひければ。ハア扱は爰が内裏様。地結構なやら恐いやら未だ性根は落着かねど。お内裏様のお手づから煎じ茶を呑むなどは。凡慮の外の仕合せ。とてももの事に十粒程供御でも浮し給はれと。フシ頭巾を取つて畏る。地色蟠海遙に聲をかけ。詞ム、人形作の名人。左の甚五郎とは汝よな。最前よりも様々と痴をつくすは作物。以前は由ある武士の由。魂を見届けて大切の所望あり。一通りを語るべし。世の噂にも聞きつらん。朕雪姫が姿繪に戀慕の思ひ遣瀨なく。后に立てんと計れども千王といふ夫が邪魔。彼奴を害せん其爲に。難題を言掛けしは。高野大師の御筆に小野の小町が姿繪を。末世の鑑に残されしは寶藏に納りて。天下に一人も見知らぬ圖。それに變らず寫すべし十日を限りて出來ずんば。雪姫を召上げ千王を誅せんと。のつびきさせぬ魂膽よも書くべきとは思はねども。地一器置ある女繪師。自然に寫し得る時は我戀叶はぬのみならず。天下の人の物笑ひ細工に於いては汝また。世に知られたる者なれば七日が内に先達つて件の形を刻み出し。雪姫に鼻あかせば朕が望みも叶ふと云ひ。汝も細工の名を擧ぐる褒美は望みに任せんと。フシ誠しやかに語らへば。地色甚五郎思はずも二度びつくりの身の難儀。生れ付いたる正直者なか〜不義には傾かし。何卒此場を言逃れ首尾よう宿に歸らんと。騒げる胸を押鎮め。詞職人連を公へ召出さるゝ有難さ。冥加の程も辨へず勅説違背致す段。畏れ多く候へども。甚五郎めが細工の儀は師匠も取らず教へもなし。地美人に三十二相とは音には聞けど目には見ず。滅法界の當仕舞子供の泣くを紛らはす。慰む業に候へば。權者の筆の意氣込を。千日千夜寫すとも叶ふべき儀にあらざれば。詞御赦免願ひ候と謹んで平伏す。蟠海大きに忿をなし。ヤア表裏ある抜け口。京童に至る迄細工は左の甚五郎。繪師には狩野の雪姫と互角に立ちし名の譽。彼めは繪圖を請合に。おのれは辭退致す事朕が詞を侮るのか。雪姫夫婦を疵ふのか。所存を聞かんと迫りつくる。甚五郎頭を上げ。御不審は御尤も。小町が誠の顔形我が知らねば雪姫も。見ぬ事ながら晝かんと領掌せしは貞女の道。十日を限る夫の命金輪際迄助けんと。思ひ込んだる一念こそ天理に通ずる工夫の柱。地是を基に取付けば小町はおるか目に見えぬ。金命鳥でも寫すべし。甚五郎が身に於いては工夫の柱候はず。其上一人の老いたる母三日以前に何者か。勾引されて行方なく洛中洛外夜晝と。足を空に尋ねれば。魂は早や有頂天。鉤取る手も覺えずと聞くより蟠海聲を上げ。ヲ、面白い〜。地急いで召人引出せ承ると一間より。頭の雪も溶けやらぬ細目より猶見る目憂き。オクリ老のへ足取。フシ弱々。とや

地急いで召人引出せ承ると一間より。頭の雪も溶けやらぬ細目より猶見る目憂き。オクリ老のへ足取。フシ弱々。とや



れ甚五郎母人か是はくど打驚き走り寄り寄りとする所を。師國其外惡黨ども眞中に駈け塞がり。詞推參至極の下郎め。大事の宣旨を蒙りて勅答もせずのさくど。召人に立寄らば目に物見せんと極附くる。甚五郎氣色を變へ。こは心得ぬ人々かな。老いたる母にいか程の罪科ありて其如く。縛り絡げて置き給ふ。君邪にましまさば諫を云ふべき方々が。共々跳り狂はるゝは君臣共に世は既に。地道なき國となりしよな。あはれ昔の武士ならば天子であらうがお公卿でも。片端より斬散らし母の供して歸らうに。町人の身の悲しさは小刀一本貯へず。右の腕は叶はねば心ばかりの羽拔鳥。無念の我や口惜しと。慮外も身をも顧ず。フシ罵りわめくぞ道理なる。地色蟠海はしたり顔。詞ホ、嘸あらんく。兼々親に孝なる由先だつて召取り置く。是を汝が工夫の柱。なんと違背はなるまいが。返答いかにと迫り付けられ。地甚五郎一言の答も出ず胸幅り。道を歪めぬ墨曲尺も兎や角狂ふ有様に。かしこへどうど居坐つて。スエテ身悶へ。したるばかりなり。母も涙にくれながら。ヲ、道理やなことわりや。地因幡藥師へ參詣し。その歸るさを大勢に取圍まれて今日三日。憂目に遇へる此身より夫婦の人が泣き焦れ。尋ね惑はんいとしさに命の内に今一度。顔をも見せて死に度いと願ひし神の利生にて。思はぬ對面遂げたれば。フシ此世に心は残りぬぞや。地色只今聞けば自らが召し取られしは其方を。頼まん爲の下心世に大切の詔。輕々しくも請合うて折角作り刻んでも。お氣に合はねば身の恥辱。お役に立てば雪姫が貞女の道を妨げん。人の歎を身につみて未練を出すな甚五郎。親子の因夫婦の義理いづれも重き事ながら。他人の誹が恥しい若木の末を枯らすなよ。はや流れ行く老波の母をいとふな庇ふなど。言葉を盡くし氣を配り。フシしやくり。上げてぞ泣き居たる。地色途方涙の甚五郎やうくと顔振り上げ。今に始めぬ親の慈悲。憂目の中におはしても。子を思うての御教訓。あら勿體なや忝なや。左程恩愛深き程猶天罰が恐しい。詞いかに貧苦を致せばとて。夫婦が代るくにもお供に添うて歩きなば。地斯様な事はあるまいと女房どもがぐどくと。悔みては泣き云うては泣き。泣くを見兼ねて相借家。お町衆迄手分してわしは今日稻荷山。深草邊を尋ねしにあの侍に

出逢へばこそ。存じも寄らぬ御對面いまだ盡きざる親子の縁。差當つたる御難儀を救ふより外世の中に。義理も道理も無益ぞと。思案極めし顔色に母はいよく氣をせて。詞ヤレ狼狽者卑怯者。おぬし今こそ町人なれ。先祖の武士の名を汚すは。地不孝の上の不孝ぞと。母は子故に身を捨つれば子は又母を痛りて。誠にせまる憂き涙。フシ心の玉を貫けり。地色蟠海焦つて大音上げ。詞よしなき憂に事延引母が生死はおのれ次第。孝を立つるか義を守るか。ぬかせくとのめめけば。地思ひ詰めたる甚五郎。詞ハア畏り奉る。常々親を養ふも此左の手只一つ。地色今又命を助くるも此手に得たる細工の道。孝行のため君のため念力を以て七日が内。刻み申さて有るべきかと。フシさも潔く云ひ放す。詞イヤく何とも呑込まぬ。當座の難を遁れんとは面魂に顯れたり。偽りならぬ誓を立て。コハ曲もなき御詞。甚五郎めも其以前武士商賣をせし時は。不義非道には傾かねど今町人となつたれば。仁義禮智の四つ寶は拂ひ仕舞うてさつぱりと。地新銀賣の細工人小刀冥利此方に。少しも偽り候はぬが疑はしきは御方々。詞内裡々々と宣へども來りし道を覚えねば。重ねて母を受取りに。地いづくを指して參るべき。證據をたべと望みける。地色蟠海暫く思案して。地裝束一重召し出し下々なれども噂にも。天子の服は聞き及ばん。詞是を後日の證にせよ。今日より七日に相當らば勅使を母に相添へて。地汝が宿に送らんとさもありさうに欺罔れば。甚五郎立寄りて見れば袞龍天子の御衣。ハットばかりに押戴き玉の御階の案内も。知らぬ下郎の冥加なく兎角疑ひかけまくも。忝しや勅詔を何しに背き申さんと。巧にふはと乗物を。包む桐油の神ならぬ身の行方こそ。三眞果なけれ。返せやくお祖母をかやせ。甚五郎をかやせ。フシかやせくの。地色太鼓鉦。尋ぬる妻の心さへ。闇に磔の當所なき行方を照す小提灯。骨惜みなき相借家頼めばほんの杖柱棒になる迄足限り歩けどあるか白雪の。逢はて今宵も明方に。フシ打連れ我家に歸りけり。地色涙ながらに女房はマアく皆様忝ない。夜の明るる迄うくとと駈廻つての御懇切。其甲斐もなき悲しさと。スエテ袂絞れば聲々に。詞ヲ、道理々々。祖母様といひ甚五郎。地二人ながら見えぬとは並大抵ては泣き足るまい。こ



ちとに禮は及ばぬ事。戀仲はこんな時。とても尋ねに出るからは一人も二人も同じ事。随分探し歩くのに逢はぬほどこへ擱んで往た。大江山の鬼神でもお祖母に無心は云はぬ筈。年寄來いといふ程に鳩の峰へも飛ばれたる。甚五郎はてつきりと源五郎狐へ入婿。大和の方を尋ねたら。フシ知れるであらうと笑ひける。地色女房は餘所事の耳へ入らねど愛想げに。お宿の店の開く迄は皆寄つてたばこでも。茶でも參つて下さんせ。詞サレバノ。亭主の留守に大勢の頭數を押込んでお茶争ふてはなけれども。地志ぢや參らうと皆門口に來かゝりしが。ヤア何やらあるぞ提灯と。立寄り見れば是はさて絡み付けた捨棄物。合點が行かぬと詞の下。詞こりや女房ども。湯でも水でも一口と。地聲は紛はぬ甚五郎。ヤレ戻つたはそれ〜と手ん手に細引ひつたり。桐油捲ればすつと出る。冠裝束きらめきて。見た事もない身の有様女房初め皆の者。ためつすがめつ打ちまもり。甚五郎には極つた形が一圓呑込まぬ。様子はどうかや昨夜から。フシどこに居たぞと咎むれば。地色さあらぬ顔にえせ笑ひ。詞ナントきつか〜。羨しうてたまるまい。ちつと吹聴仕る。さる所の神主に祭道具の貸賃。壹貫五百ぬぐさになり何時でも留守を使ふ故。昨日は時分考へて案内なしに臺所へ。ずつと這入れれば幸ひと夫婦酒事最中の。眞中へのし上り。人には損をかけながら。こりや御榮耀でござるのと。憎體口に當付けられ。地そこらが流石長袖ぢや。赤面してそつと立ち簞笥の中から此裝束。前に置いて手をつかへ。詞銀子と云うては當分ない代りに是をと聞くと早や。詞變改のない内に取つて着して思ふやう。先づ此形で二三日店先へ出て雛の看板。それから跡を切り碎けば芥子人形が六七千。十層倍の利徳ぞと飛付く心をしつと鎮め馳をくれぬねだり聲。詞神職の身を以て尾籠至極のなされ方。神は非禮を受け給はずなりませぬなりませぬ。地ならぬ〜と一越調そこら四五軒鳴響けば。筋向の醫者坊が。藥研片手に走つて來て。どうぞ了簡遊はせと詫げればいとゞ目垂れ見て。こなたの知つた事ぢやない醫者坊叶はぬ退いて居や。いかにも構はぬ筈なれども抜ひかゝつて身ども、亦。すご〜とは歸られぬ是非に及ばぬ古けれど。乗物一挺はずみましよそれで足らずば桐油細引。平にと云ふを機にし

て近頃無念に存ずれども。こなたに免じて堪忍と云ふより早く三枚肩。飛ぶが如くに立歸り。フシ斯くの通りと紛らかす。地色皆々横手を丁と打ち案じたとは格別。銀儲して送られて。身上は吹付くる左扇の甚五郎。祖母様は御輿で戻らりよと。オクリざはめきへてこそ歸りけれ。地色夫婦も今は背戸門を開けてもあけぬ胸の内。裝束ながら甚五郎物をも言はず煙草盆。思ひ草とや手に觸るゝ煙管より猶廻り氣な。女房膝を突き動かし。詞これ愛な野良間。何時の頃から目を抜いて内裏上臈とくさり合ひ。公家出立での夜泊。地いかいお手柄さるにても。母御様の此頃中行方知れぬは忘れてか。わしが心の悲しさをいかばかりとか思つてぞ。姑御にも此方にもお氣に違つた事もなう。睦じう暮せしに行方の知れぬは何程の。恨み憎みのある故と身を疑へば世間には。惘然者と譚はれん生きて詮なき身の上と。わしや覺悟して。居ますぞや。それとは違ひ結構なぞ〜とした形をして。相借家の人々へも苦勞の禮はそこ〜に。嘘八百は何事ぞエ、惘然や怨めしと。スエテたくり掛けてぞ。かこちける。地色甚五郎小聲になり思ひがけなきなり形。心得難く思ふ筈我身ながら我かとも。辨へ難き身の難儀。詞藤の森の邊にて人大勢に立圍まれ。禁中へ召されしに母人は早やあの方に。人質に縛められ仔細は斯様〜にて。詮ずる所見ず知らぬ小町が像を七日が内。仕果すれば其通りさなき時は親と子の。長き別れとなる事を。地そも何とせん女房と思案顔なる目の中に。スエテ忍び涙を浮べける。地色女房聞いて打驚きさうとも知らずつか〜と。フシ今の慮外は免してたべ。扱おいとしや。姑御。老木の肌へ荒けなき繩目に憂きを見給ふと。傳へ聞くさへ堪へ難き。詞いまだ目に見ぬ鳥類さへ作り出せる名人の。細工を得たる御身にてなど耐甲斐なく見え給ふ。地片時も早くお命を助くる様子遊ばせと。勧め立つれば甚五郎。誠にそれよ能う云うた。油断をするは不孝ぞと冠裝束脱ぎ置きて。木地の頭の荒ごなし左細工に工夫の妙。先づ口開に目は二つ鼻筋高う耳の穴。なしとは人の偽か。淨瑠璃本の小町でも大方格は知れてある。サア女房ども美しいか。フシ評判せいと差出すを。地色見るよりふつと笑ひ出し。詞どこにか小町が目を剝いて澁面作つて居やすまい。



おぬしが目にもさう見ゆるか。地どりや此度は念入れて白木にあてる青木賊。磨かれ出づる玉造。小町が姿生寫し。ぞつとする程よかるがな。詞ヲ、ぞつとする。矢張初めの澁面顔。餘り立派で嘘凄。こなたの細工何時からかどの人形も此顔癖。地色よう氣を付けて見給へと詞に付きて打守り。初めて刻む其時の。一念が晴れぬ故側から指南頼むぞと。互に心合せ砥に。小刀の刃もつくくと。切れると繋ぐ親子の縁。オクリ案じへ煩ふばかりなり。フシ物憂き旅も。一人に重きが上の稚子を背中に。ちつと笈摺や。胸に木札の巡禮歌。スエテ女の聲のしなやかに。巡禮歌補陀落や岸打つ。波は三熊野の。那智のお山に。響く瀧津瀬通らしやれ。歌父母の恵みも。深き。詞これくナウ。こちらに大事の魂膽事。地氣が散れば邪魔になる通つて下され通らしやれ。歌岩を立て水を。湛へて壺坂の。詞ヤイ物貰ひ。斷り云ふを聞かぬ顔賣物見世にへちまふは袂の下の谷汲へ人形を納めよといふ事か。地うろついて居りや巡禮に棒喰はずと腹立つる。詞ハア御尤もさりながら。報謝の望て先から立ち休らふには候はず。私どもは遠國者思ふ願ひの候て。西國の志し何とも難儀は此若が。道中から蟲おこり泣き憐むを謙し兼ね。地氣慰に人形が求めたさと聞くより早や。手鑿返す商ひ口。詞ム、結構な巡禮様。若子は奇麗な生れつき。お顔なら手足ならいかい上手が作つた物。地色女房どもと談合してお氣に入つたを召しませ。醫者になりたか胴人形飛脚が好きなら飛び人形。南京人形武者人形。フシお望み次第と言ひ立つる。地巡禮が子を下し。詞コレ金平か西行か。地どれかこれかと宛てがへど其方へ目もやらす。今作り居る人形の顔をつれく守り居て。あれをく指差せば甚五郎可笑しが。詞世智賢い幼い身がきざりし人形より。地荒木作りが欲しいとは錢安いのを御賞。商ひはしたけれど大切な詭物。フシならぬであんすと欺けば。地色巡禮も恥かしげに。いかさま此子も不物好。此内で見えてどれなりと買やと云へども聞入れず。詞イヤあれが父様の顔によう似た懐かしい。地買うてくと泣叫ぶ。母は聞くさへ慕はしく心を付けて差覗けば。げにも夫に生寫し縦から詠め横から見。そとろに顔を抱き取り我子引寄せ涙にくれ。ヲ、賢い子やよう見知つた。

日頃に可愛がられたる恩愛によりと、様の。逢ひにござつた對面しや。アラ懐かしの我夫と。フシ抱き。付いてぞ泣き居たる。地色夫婦は呆れきよろくとためらひしが立寄つて。詞ナウ巡禮。忝くも此人形は天子のお手に觸れらるる。地涙に穢すは何事ともぎ放す手をしつかと取り。アラ心なの都人。夫の形見と見るからに共に此身も朽つるとも。なか／＼頭は渡さじと奪取りて走り退き。撫てつ摩つつ抱きかへ。懐へ入れ膝に置き。袂の内に押隠し身を震はせし氣息ざしは。海士の浮繩引上げて。フシ玉取り得たる如くなり。地色女房は立寄りて。詞殿御を慕ふ御歎き穢に現はれて痛はしや。此人形は手前にも命に代へる念願にて。夫が刻みかけたれども仔細に依つて自らが。貰うてなりとも參らせん様子ありげな御有様。地心置かずとお咄しあれ數ならねども我々が。一遍の回向の種功德ともなるべしと。スエテ世に泌みくと尋ねれば。地色旅の女は起き直り嬉しの今の詞やな。女心のはかなくも。切なる愁を包み兼ね。取亂したる身の上を語り申さん聞いてたべ。詞我が生國は肥後の熊本。夫は度會源五とて。關白公に仕へしが不慮の事にて浪人し。伯母を便に國許へ下り給ふを幸ひに。從兄弟同志の夫婦となり八九年添ふ内に。子といふ者は一人。かねがね源五心底に古主へ歸參の望みにて。此子を我に預け置き三年前の春よりも。京都に上りゐられしが。六月廿二日の夜祇園林のほとりにて。闇討に遇はれし由。地傳へ聞いたる其時の。口惜しさ悲しさを推し量りても知らし召せ。生死無常と云ひながら病み煩ひにもある事か。男盛をむざくと旅の空なる露と消え。詞此子はやうやう其時六つ。後立にも助太刀にも。我身の外に知るべもなくましてや顔も名も知らぬ敵を狙ふは。もろこしの吉野の山に入る人を。地尋ぬるよりも果なしと思ひながらも念力と。佛の誓ひを頼みにて形は斯様に出て立つとも。心は矢張り煩惱の。絆も解けず寝れば夢。歩けど思ひ忘れぬ。夫の最期は三十八。目の張眉のかよりより。面長にきつとして。只其儘の顔形斯く迄似れば似るものか。正しくは觀音の。御手を貸して御亭主の作り給ふと思ふから。暫しも肌は離されず。買はせてたべとばかりにて。フシ聲を。ばかりに泣き口説く。地色同じ涙に女房もげに定めなき世



の中は。いつ何時か身の上にかゝる憂目のあるべきと。フシ思ひやるさへあぢきなや。地色夫婦連添ふ仲にさへ女はいと氣の狭く。世間を恥ぢて物事を案じて暮すものなるを。殊更殿御に別れての旅は物かは大切な。敵に憂身寢さるゝ姿といひ。心といひ世界の女の鑑ぞと。フシ思ひ入つてぞ感じける。地色甚五郎は默然と始終を聞いて居たりしが。頻に催す落涙を拭ひ。又類なき志。承るも人形故亡き世の人に似たるこそ幸ひ。何かは惜み申すべき頭ばかりも見苦しき。それ／＼と云ひければ女房も嬉しげに。よくこそ心付けられしそこらはわしが細工ぞと胴串衣裳襖辻のあふ瀬に返る其人と。梅華皮取りて差さすれば。詞ア、イヤ／＼。假初ならぬ武士の姿。地長持にある本身の小。暫くの中取つて来い。アイと答へて一間に入り。オクリヤがてへ二腰。フシ持ち出づる。地色甚五郎取上げ人形に横たへさせ。旅の女中御覽あれ。詞此姿ではどうぢや／＼親子は見るよりつと寄り。地とゞ様物を云はしやれと又泣き出せば母親は。氣も魂も消えて行く。煙の後も面差は生けるが如くありながら。など詞を掛け給はぬ。せめては妻か我子かと。たつた一言聞かせてと天に。あこがれ地に伏して又歎き添ふ氣色なり。詞甚五郎聲荒く。歎きに性根暗まされ未練なる女かな。大小が武士の魂其二腰より物を云ふとつくりと念入れて對面あれと辱められ。地よく／＼見れば鍔は木瓜青皮の縁。目貫は金の狂ひ獅子不思議や夫の差物に。似たりや似たり花菖蒲菖蒲作りの梅華皮鞘。此二腰は何として此方の手には入りたるぞ。詞ヲ、問ふ迄もなしお主が夫。度會源五を討つたる敵。昔は勝山彦次郎サア首討てと。地聞くより早や。扱は夫の敵かと。子を引抱へ走り退き杖に仕込みし刀を差し。氣色凛々しく立寄れば。甚五郎妻も人形に差させし刀追取つて。夫を圍うて立つたるは。フシ危くも亦健氣なり。詞甚五郎聲をかけた、せくまい／＼覺悟の前。地浮世に報といふものはあるかないかと疑ひしに。我身にひつしと知られたる。懺悔を兩人よく聞け。鼠窮して猫を噛み。人貧しうして盗みすと。云ひしは手前の身の上。親の知行を棒に振り母と女房引連れて。花の都は住吉と比所に借宅し。晝夜渡世を繰ぐ内因果は老母大病受け。何れの醫者の配劑も人參目五分七分づつ。刀

脇差諸色迄賣代なしても續かばこそ。一人の親を見殺すかと悲しい時の神たゞき。佛もせぶる思案にて清水へ詣てしに。詞八坂の茶屋より呼掛くるは正しく度會源五が聲。同じ浪人仲間にて懇意に語る仲なるに。地心浮かねど立寄れば。家内の宿女に取廻され。借上らしう紙入より四五十兩の金子を出し。湯水の如く蒔き散らす。扱は歸參が叶うたか珍重の儀と云ひければ。詞いや／＼是には仔細あり話は追つてと言ひ残す。地ア、よい物を持つてをる十兩貸してくれたらば。母の命を助くるにと。金に惚れたるなずみよりふつと付いたる無分別。所詮殺して取りたりとも孝行よりの悪心は。天道見許し給はんと勝手づくなる了簡して。とも／＼飲んづ歌うつに夏の夜早く更け行けば。深々たる鐘の音。一つ二つと指を折る數も積つて丑三頃。いざ歸らんと打連立ち眞葛原の跡先に人通りなき間を見合せ拔打ちにちやうど斬る。南無三寶と振返るを疊掛けて斬付ければ。刀持つ手にしつかと喰ひ付き振れど扱ぢれど放さぬを。漸うとして踏倒し止を差して立歸り。金子の蔭にて早速に母の病氣は治りしが。喰付かれたる右の腕。次第に痺れ叶はねども。詞左で細工の妙を得て異名を左の甚五郎と。日本國へ廣まる故。身上不足な事もなく。地世を安樂に暮すに就け不便な事を致せしと。一念思ふ其日より。最期の顔が向ふに立ち。お山作るも源五に似る。若衆刻めど源五に似る。あら凄じやと思へども母にも妻にも隠せしが。詞今月今日兩人が爰に来るを待受けて。我心命を果すよな。誠に自業自得果と。己れを觀ずる覺悟の體。フシゆゝしくも。又優しけれ。地色親子は一度に聲をかけ。詞其方に討たれたる。度會源五が妻にまさご同じく一子徳太郎。サア立上れと断寄るを。地女房あはて押隔て。大事の敵を目の前に。何とて見許し給ふべき。詞さは云へ義理と恩あれば討たれぬ品もある事ぞや。地行方も知らぬ旅人が夫の顔に似たるとて。立寄り給ふは人形の恩。これ正眞の人形にも。フシ義理とは誰も申すぞや。地色様子を問ひしは我身の恩。敵と名乗るは夫の義理。恩と義理ある身の上に。詞君より難題七日が内に。小町の像作り出さぬものならば。地母が命を召されんとて内裏に止め置き給ふ。爰の所を聞き届け。僅七日が其間。命を預け給はれと。フシ手を合は。せてぞ。



泣き口説く。地色まさごは急いで身を震はし御道理なりさりながら。我身になりても御覽あれ。詞敵の面は知らずとも。おのれやれ一念で尋ね逢はんと方々を。足掛三年さまよひて。地言問ふ人も嵐吹く山のあなたを故郷の。空懐かしく折々は。父母の御身の上いかゞ渡らせ給ふぞと。思ふもよしや我夫の。敵を討たぬ其内は。二度國へは歸らじと迷ひく／＼てやう／＼に。今日といふ今巡り合ひ餘所に看なして謂れなき。フシ御身に義理を立つべきか。地色サア甚五郎遁さぬと刀をすらりと抜き放せば。させぬと女房縫り付く。振切れば又後より抱き付いて引戻し。しがみ付き轉び臥し互に。夫を思ひの山劍の山を登り兼ね。フシ倒れさまよふ如くなり。詞甚五郎目を怒らし。卑怯の振舞何事ぞ放して討たせと睨め付くる。女房は怨めしげに心得難き詞やな。他人へ義理を立つるのは姑御への命の仇。親孝行の爲ならば逃ぐるが恥でも引てもない。地此場を我に振り任せ立退き給へ我夫と。尙もまさごに取付いて。フシ早う早うとせき狂ふ。詞ヲ、尤なり某も。心付かぬにあらねども母の命を今日迄。助けし事も源五が恩。地末期の念力三年の月日と共に小刀の先を巡つて妨ぐれば。とても小町が形をば。作り得ることなり難し。親子の定命只今に逼り切つたる身を持ちて。いづくへ足を向くべきと。フシ動く氣色は見えざりけり。地女房今は諫め兼ね。ア、腑甲斐なのお心や。死人に念力ありとて。親を助くる念力を。いかてか妨げ申すべき。お二人様に成り代り我こそ死なん身の上を。まさご殿にも聞いてたべ。詞元私は播磨瀧室の遊女に候ふが。あれなる人に思はれて當番非番の別なく。通ひ續けの過りにて浪人なされ候へども。お袋様の納戸金三百兩に請けられて。地借家住居の憂き節も自ら故の事なるぞや。昔の武士にてましまさば細工の難儀もかゝるまじ。三百兩の金あらば夫の悪心起るまじ。源五を殺せし根本の敵といふ此身なり。夫の代りに自らを。討つて思ひを晴らしてたべ。フシ聞分け。給へと口説き立てむせ返り。てぞ歎きける。地色まさごも共に涙にくれ。ナウ歎きも同じ歎き。憂目も變らぬ憂目ぞや。母故沈む身の懺悔。男思ひの物語一人を討てば忽ちに。三人殺す罪科は冥途の夫の身に報い。修羅の苦患となりやせん。七日の命預けるも謂はど暫

しの間ぞと。我は了簡致せども。辨へもなき子心に。待遠にかは思はんと。許すもつらし許さぬも。餘りつれなき次第やと。フシ差しうつ。むいて居たりける。地色女房は力を得店に飾りし馬の手綱。引きかなぐりて差出し。詞生きては閨を同じうし死しては一つ塚に入る。地身體をお預け申さんと我と後へ手を廻し。フシにつこと笑うて居たりけり。地色まさごも思案付き兼ねて。詞コレ徳太郎敵を討つか此人を預り宿へ連行くか。地分別しやと聞くよりはや細取つてかひがひしく。高手小手に引縛り。詞ヤイ甚五郎。今日の命は助けてやる。七日過ぎたら此女と。代々するぞと呼ばれば。地見てゐる母も縛らるゝ。女も共に聲上げて。スエテわつと。ばかりに。泣き沈む。地色甚五郎は感涙に身さへ流るゝ心地して。然らば拙者は七日が内一間所に取り籠り。一念力の鑿鉋小町が形を刻みたて。お禮はつど／＼其時と止めぬは親へ孝行者。引かれて行くは心中者。氣の通り者了簡者さらば。さらばも泣聲に。あら味氣なの世の中と。妹脊を歎き恩愛を慕ふ心の諸翼水の。鴛鴦。巢の燕搦みし姿羽抜鳥泣く／＼見送り留まりぬ。

第 四

フシ月花の。形は筆に寫せども。思ひは繪にも詞にも。オクリ及ばで。積る雪姫が。住居は殊に奥深な。本フシ亭の一間に取籠り。地人も通はず寄付けず。長地見もせぬ顔を兎や角と心も空に案じ佗び机に肘を寄るべなく。只つづくりと燈火に照添ふわれが姿さへ憂目に細る心地して。更くるも知らぬ宵の間に。一番鳥の知らずれば。はつとばかりに打驚き。スエテつれなの今の一瞥や。汝も妹脊の諸時羽交の下に温め合ふ。玉子の數も五ツ六ツ。フシ十日に限る我夫の命をせめる八つの時。明くれば消ゆる露霜の。それよりも猶あだし世に。生れて憂目を見る事は。宿世何たるフシ因果ぞや。詞世界の内に住みと住む人は戀路を樂みに。まだかた若き始より。地八十の老の後迄も缺障なく添ふもある。手づから織れる布機や裁ち縫ふ業を習ひても。夫一人は養ふに。いかなれば自らは藝に譽は得たれども。明



日の命を繋ぎとめ引止められぬ荒駒の。あら口惜しや悲しやと持つたる筆をからりと捨て スエテ絶え入るばかりに。歎きしが。地稍あつて手を合せ。南無。日本の神佛仰ぎ願ひ奉る。別しては弘法大師。フシ御筆の奇特に。小町の倂影向なさしめ給へやと。一心に祈誓して夢にや見ると手枕に。袖を片敷くところくと オクリ暫くへ眠り入りにける。フシ同じ思ひと。浮れ来る。地世は人形の牛車巡る左の甚五郎。細工の外に取添へて身を削らるゝ義理と孝七日の命氣息の緒もはや切れかゝる夜半過ぎ。人手まぶりに雪姫が。館に紛れ忍び入り。地色あなたなたと駈廻り砌も深き扉より。密かに内を差覗き胸を押へ打鎖き。詞ア、少し落着いた。我より先に寫繪を若し仕果せて上げんかと。地心ならず思ひしに流石名を得し雪姫も。日限今に逼る故物憂き眠りに工夫さへ。疲れ果てたる有様は。いにしへ小町が帝より。題賜りて言の葉を。案じ入つたる風情かと思ひ出れば我も亦。人目包みに東帯の袖を翳して佇むは。かの大友の黒主が。歌盗まんと窺ひし フシ姿も斯くこそあるべけれ。地色それは昔の優女是は譽れの女繪師。其數ならぬ甚五郎。二つの道は劣るとも。孝には深き奥の海 フシ白波の名は。立たば立て念力通さて置くべきかと心を配り。身を潜めつくづく窺ひ居たりしが。更け行く夜半に何時となく。オクリふらり。ふらりとねむの木の フシ繁み倒れ臥しにけり。現には。見もせぬ雲の上迄も。夢には通ふ雪姫が。魂姿を飛び出づれば。コハリ心較べの甚五郎胸より出る思ひの火。二つの魂空中にあなた。こなたと漂うて照り輝けば ナホス館の内忽ち變じて百敷の。御簾の隙々几帳の陰昔を今に フシありくと。磨き立てたる。玉造小町の榮え衰えを。只身の上に顯せしは不思議に。も。三重またへ目覺まし、地いて其頃は天長元年彌生の空麗はしき。淳和の帝の御惠み時めく御代の歌の會。紫宸殿の額の間に和歌三神を勸請し。名香立花綺羅をやり玉座深く見え給へば。左の上座は紀の貫之右は同じく王生の忠岑。フシ我も。我もと伺候ある。地色中にも大伴の黒主は日頃小町に意趣ありて。自ら望む歌合せ フシ晴がましうぞ聞えける。地せかぬ氣色に差向ふ小野小町は花鳥の。すさみかしこき色々の。其詞さへ心さへ姿はいとゞ日の本に。男日照と輝きて フシ御前にこそ出で給ふ。地色貫之は判者として一々和歌を吟じ上げ。批判の次第ある中に大伴の黒主。雁に寄する戀といふ題に趣向を取結び。詞思ひ出で、戀しき時は初雁の。鳴きて渡ると人は知らずや。地貫之暫し打詠じ歌の程を譬ふれば。薪を負へる山人の。花の木蔭を行き歸り休らふ風情と褒められて。面目顔に黒主。肘押張つて居たりしは フシ憎體にこそ見えにけれ。地色小町は尙もしとやかに心の奥の水莖の及ばずながら口ずさみスエテお恥かしやと差出せば。地色貫之取上げ見給ふに。詞水の邊の草といふ題に心を思ひ寄せ。地讀める歌にはまかなくに何を。種とて浮草の波のうねうねと生ひ繁るらん。繰返し吟じ終つて感じ入り。歌の姿はいにしへの衣通姫の類にて。弱きは女の品形自然の徳を備へたり。古今の名歌今日の司と判じ定むれば御簾も几帳もさゝめきて。フシ覺えずどつとぞ褒め給ふ。地色黒主はつと出で 詞ヤアいかに小町。古歌を盗んで出すならば誰か勝負に勝たざらん。是御覽ぜよ人々と。地懷中したる萬葉集御前に差上ぐれば。貫之取つて押開きよく見れば同じ歌同じ題にて入れである。君を始め公卿の面々 フシ興の。醒めたる次第なり。地色小町は騒ぐ氣色なく萬葉集の古歌は。空に覺えてあるものを可笑しの人の詞やと。書物を取りて繰返し。詞墨新しく候へば洗はせてたべかしと。地思ひ入つてぞ奏すれば。兎も角もとの宣旨を請け黄金の盃にたぶくと。御手洗川の澄み渡る水を漉へて小町姫。心を籠めて三神の御影に向ひ禮拜し。清き誠の玉禪しつかと結んで肩に掛け。書物を水にざんぶと入れ押浸し。君が代を汀の水溶けぬれば。苔の鬚をも洗ふよ。賤機布を玉川に晒す生平の何時しかも フシ白玉筆。繪の盃は。月の影をや洗ふらん。心を洗ふ。御手洗のほとりに立てる二柱。歌の神にたまはせばなき名を洗ひ給へや。住吉の。住吉の岸に。生ふなる松なれや。波に洗はれさらくさつと。根は現れて浮草の。文字は残らず消え果て、フシ元の如くになりけり。地色帝を始め月卿雲客。あつとばかりに感嘆あり是を傳へて世の中の。小町が草紙洗ひぞと見榮す。夢はへ消えて行く

く 太夫フシ色は日の出よ。戀ざかり。情の晝と名に照りし。スエテ小町は玉の實生えにて。柳の腰も。フシ弱々と。



歌も上手で氣も上手。生けつ殺しつ品物に。小オクリ惚れてへ思ひを深草の其主様と相惚れも。心較べの強弓は。弛みかゝりし下紐の。寢衣姿やほら〜と。フシ外面を覗き見給へば。ワキ地色痛はしや少將は百夜の數を違へずし。月にも行き闇にも行く雨の夜も風の夜も。スエテまして霜雪嵐の夜も行きは車に刻を付け。フシ通ふ給ふぞ哀れなる。太夫地色小町見る目も痛はしく。御側に立寄りて數ならぬ身を斯く迄に。慕ひ給うて夜なくに御通ひこそ嬉しけれ。日數の満ちし折節は冷え返りたる御肌を。懷て温め歸さんと。フシ笑顔に玉ぞ零れける。ワキ地色ア、忝なやさりながら百夜を通ふ其間には。魂は早や冥途の鬼焦れし甲斐も何あらん彼の錦木の千束迄待ち忍ぶのは昔の事。今の浮世は氣短く。神佛への立願に百度。參りと申すにも。門前よりも行き歸り其數をだに滿てぬれば。フシ神も納受あるとかや。地色それに習うて少將もあれなる車のほより。扉の下迄行き通ひ百夜の數に都合せば。今宵を過ぎぬ御情フシ頼み。入るとぞ掻き口説く。太夫色小町もさすが。誘ふ水。浮れ心に打笑みて實に耳寄りな御談合。誓ひし數だに合ふならば百夜も一夜も變らねど。雨雪霜の厭ひなき心の奥の知れ難し。それにも。理候ふか。ワキ詞成程それも心得あり。百夜重ぬる心にて姿を變へて參るべし。地今宵は空も晴れたれど君が心のまだ解けぬ。雪に降られて行かうよ。雪に取りても様々の。薄雪淡雪春の雪。所は名に負ふ伊吹山。スエテ佐野の渡りにあらねども。大和河内は綿の夕暮。アン〜温さうなる腰付よと。ぶつと凭れて。戯るれば、太夫フシ小町はびんど立退いて。百夜の數を。待兼ねて人は無げなるお詞や。空に知られぬ。雪ならば。仇に散行く花の雪。誠少き人心。スエテ只うか〜と積られて。肌はだの雪の程もなう。とくれれば元の水臭き。フシ男はいや〜と。答へける。ワキ地色コレ水臭いとは宣へども。少將程に身を寢し戀慕ふ者あるべきか。太夫詞あるとも〜上がある。地昔用明天皇は。玉世の姫を戀ひわびて。いつしか帝位を振捨て、山路が草刈笛とて。世の諺になり給ふも。フシ戀故にてはあらざるや。ワキ地色げに誠過つたらば雨夜に通はんと。車のもとへ立戻れば。太夫小町も今は濡衣。袖打駱し物陰に。フシ忍びて。様子を眺めゐる。ワキ山城



の木幡の里に馬はあれど。オクリ君を。思へば徒歩眺。さて其姿は裳ももに笠。フシとは云へ何も着もせずには。地雨夜の詮せんが立ち憎いはてどうがなと立舞ふを。太夫小町はそつと後より上衣を脱いで打掛ければ。ワキ少將はそつとして。嬉しさを何に喩へんから衣。下行く水の湧き返る。思ひを休め給へやと。フシ袂に。縋り泣き侘ぶる。太夫地小町も色に染糸の亂れ心に手を締めて。引。上り歌闇の夜に。鳴かぬ鳥の。聲聞けば。縁がないかと心にかゝる。縁がなければ恨みもないに。添うて見たらば面白さうな。男ぢやと見て。わしから思ひ。結ぶ絆きずなについ繋がれて。通ひ車は思ひの種かいの。根から厭いやなら添ふ氣ぢやないに。欺たぶさ。れた。ナホスフシ好いた男と袖翳し。二人フシ春は子の日に。引連れて。童わらわ浦公うら英へい土つ筆へい。オクリ摘むてふ袖も數々に花見戻りの酒機嫌。あのよものよに千早振三井の古寺。フシ鐘はあれど。地色昔に還る聲は聞えず。ワキハア南無三寶東が白んだお百度始めよ。太夫そんならわしも連立ち行かん。ワキ諷ふう淨衣じやういの袴かば搔か取りて。〜立烏帽子たちを風折かざり。太夫歌紅裏白裏一つに搔取り。ちよこ〜走り。ナホス行きては歸り。歸りては行く一遍二遍。三遍五遍。鶏も鳴け〜。鐘も鳴れ〜嬉しや今は。九十九夜になりたり。あな苦し眩暈めまいや胸苦しやと悲しいて。車の陰に伏すかと見れば。形も忽ち。フシ消えてけり。太夫其怨念おんねんの取付いて小町は心惚れ惚れと。是なう〜と歎き迷ひ西へ走り東へ行く。狂ひ車のわれかあらぬか行方知れずへ消えて行く青黛せいざい誰か常あらん。膚はだに凍梨とうりの梨を抱く。盧生ろせいが夢の戯れと。賢き人は驚かず。迷へる者は來し方を。ナホスフシ慕ひ泣くこそ愚おろかなれ。侘わびびぬれば身をうき。草と浮れにし。それさへ今は。昔にて。小野とは言はしおのづから惜まぬ命長らへて。辛きを止むる關守に。幾百歳ももをふる姥おばは。小町が果の名なりとて。笑ふ人目も恥かしく。スエテ面を隠す破れ笠。後に負へる袋には。フシ飢うを。助くる。菱ひし鳥わ芋ご。木の實取らんと道のべの。樗あかの木きに立休らひ。五月待つ。花橘はなの香かほを嗅げば。昔の人と。詠よめしに我は。ハルフシ梢この秋待ちて。ハズミ命いのちを繋ぐ。外なしと。地色杖つゑを上げ拂ひし時。袖に落ち來る栗柿くりのかつを遅しと待顔まちがほに。地むら〜ばつと落來れば小町は人に取らさじと爰こゝに。立寄りかしこに轉まび。千歳



の坂と祝ひしは。老を養ふ母の杖はまた。篠竹の。くいさ、村竹かり竹の。杖に木の實も打たれて力なみあなたへよろり。こなたへよろりよろりくよろくよろと。走りさまよふ身の行方こそ。フシ悲しけれ。ナウ。物賜べの旅人。お錢たべの旅人。歌それがならずば水松櫛のましろの木。大小柑子金柑なども。ナホス苦しからぬよの。狂ひ戯れかつばと伏し。フシむせ返り。てぞ泣き居たる。詞ハア餘りに苦しく候程に。是なる朽木に腰を掛け暫く休まうずるにて候。ワキ地然る所に向ふより世を雲水の定めなき。且過の僧の一人旅通り合せて見るよりも。謠詞ヤアいかに老女。お事が腰掛けたるは。忝くも佛體色性の卒都婆。そこ立退けとありければ。太夫愚かの仰せ候や。ステ古き歌にも唱ふれば。佛も我もなかりけり。南無阿彌陀佛の。フシギンオクリ聲ばかりして。身佛隔てなき上に文字さへ見えぬこの朽木。勿體なしとの心はいかに。ワキ詞イヤく汝が引歌は至り至れる智識の詞。地又中頃の俳諧句に。搦粉木よ。我も昔は櫻にて。是僧凡夫の見解なれ早やくそこを去れよこそ。太夫ナウ我とても月花と立並んだる顔形。鬘髮に蘭麝を薫らせて。舞錦の帷温かに。ナホス隙間の風を賦ひしに移りに。フシけりな徒らに。道のほとりの。埋れ木と。朽ち果てし身は行交ひに。長袖褌とても引かざればおのづからなる世捨人。佛になどか遠からん。ワキ詞ソレハ世にこそ捨てられたれ。世捨人とは可笑しの詞。地ナウ煩惱菩提は月と影戴く桶の底抜けて。フシ水溜らねば月も宿らず。迷ふが故に凡夫あり。ワキ地悟の前には佛もなし。太夫褒むるは順縁。ワキ誹るは逆縁別なき法心心性。太夫誹げに本來一物なき時は。ナホス佛も衆生も隔てなしと。懇に申せば。ワキ地僧は狂女を禮拜しさらばく。フシさらばと云ひて立退けば。太夫地小町も今は是迄なりと杖に纏りて。よろ。よろと立別れ行く。袖の涙の關寺や。鸚鵡返しその一字。苔の衣を清水の。物言ひ交す七小町。七つも過ぎて六つの鐘。フシ夢は。忽ち醒めにける。地色セメ雪姫むつくと起上り。纏て墨すり筆を取り亭に勇めば。ワキ籬にも。同じ夢見し甚五郎。二人いそく我が家へ立歸る。手の舞ひ足の踏み所知らぬ業をも孝行と。太夫貞女二つの提げ較べ。ワキ細工は左。太夫繪師は右。二人いづれが重き晴勝負前代未聞後々末代。小町が姿の。手本なるわと世いつて。是を賞翫す。

第五

地地の麗はしきは稻を養ひ君の仁あるは士を養ふと云へり。されば富仁親王は御違例快氣ましまして。朝政怠り給はねば。共に賢佐の功烈しく。關白兼定其外卿相残りなく。フシ肅然として伺候あり。地御隨身には膳手織部。廳官雜仕に至る迄。威儀をあらせて相詰めしは。オクリ由々しくへも。フシ亦晴れがまし。地色かゝる所へ甚五郎まさご親子を伴ひ。庭上に畏り。詞私儀は人形屋甚五郎と申す者。勅命を蒙りし日限相違仕らず。細工を調べ奉ると小町の像を御階に据ゑ。謹んでこそ言上す。織部は顔を打守り。ヤア推參至極のえせ者。小町の形は雪姫こそ勅諭を承り。夫の命を救はんと思ひを籠めし工夫にさへ。畫き能はぬ姿をば名もなき小刀細工にて。作りしなどは胡亂なりそこ立去れとぞ罵りける。甚五郎むつとしてイヤ胡亂とは宣へども。繪に畫き又は木に刻むも工夫に二つあるべきか。雪姫夫を悲めば此方は又母の命。地助けんための念力故忝くも弘法の。御夢想を得し傳授の形毛雙違ひ候はずと。フシおめず臆せず云ひ放す。地色兼定立寄り木像取上げ。げにも小町が顔形生けるが如き細工の妙。神妙々々さりながら。詞此儀に於て他の者に宣旨あるべき仔細なし。何者に頼まれし様子を語れと宣へば。甚五郎手を束ね。先月廿五日の夜密かに御殿に召し出され。勅命ありし趣は申すも餘り畏れあり。人質として老母をば内裏に縛め置き給ひ。地即ち後日の證據とて御衣をば下し賜はりぬ。御覽あれと差出す。詞ヤア野太い下郎め。天子よりお頼みとは跡かたもなき偽り。先月廿五日の夜は狛の舞樂を觀覽にて清涼殿に相詰め。終夜外の御沙汰なし。地色其上此御衣汝等が手に入る事。此頼み手は此方に心當の詮議もあり。詞ソレ搦めよと聞くより早や雜人立寄り押伏せて。フシ敢なく繩をかけにけり。まさご驚き差寄りて。詞憚りながら自らは度會源五が妻。是なる者に夫を討たせ此如く附添ひて。今日本望



遂げる筈。然るを召捕り給ひては誰を敵と狙ふべき。地甚五郎一命を妾に下し給はれと。スエテ涙を流し言ひければ。詞兼定は聞きも敢ず。其源五めこそ某が以前の家來。こしやく者故有職の道をより／＼教へしに。地色奥儀を極むる慾心萌し代々傳はる家の秘書。並びに君より拜領の。詞コレ。此御衣を盗み取り。行方知らずなり行きしが。其後聞けば蟠海が謀叛に與し剩さへ。内裏の造營法式迄きやつめが指圖致せし由。扱は御衣をも蟠海に渡せしは必定。地色是ぞ逆心一味の證。妻子とても逃れなししつかと括れと下知あれば。承ると立ちかゝり親子も繩目に及びしは。フシ思ひがけなき有様なり。地かゝる所へ雪姫あわたゞしく兼定公の前に出て。小町の繪を差上げ。詞かねて宣旨を請けし姿繪調へ参り候なり。地觀覽に入れ給ひ。片時も早く我夫の。命を助け。フシ給はれと思ひ入つてぞ奏しける。地色兼定公つく／＼と細工と繪圖を引較べ。詞ヤアをこがまし雪姫。元來汝が寫繪の虚實を糺さん其爲に。勅に従ひ先達て高野山に立越え。弘法大師の眞筆を再三拜し参らせてとつくと記憶してあるが。ハヤ先達て細工の像髮筋程も違はぬ名作。それに同じき形をば遅れて上ぐるは贋物同然。かゝる粗忽の仕業より事延引になるくだり。地震襟を惱まし宣旨を黙す重罪安穩にて置くべきか。詞ソレ織部搦め捕れ。畏つて立上り。フシ泣く／＼繩をかけにける。雪姫わつと泣き出し。思ひを碎き身を懲らし夫を慕ふ冥加により。二つともなき繪像をば夢想に大師に授かりしに。誰が先達て上げけるぞ不思議さよ淺ましや。夫婦が縁も是迄かとかつばと伏して泣きければ。地甚五郎も堪へかねて雪姫に差向ひ。詞ヲ、先を越されし残念の歎きは嘸と思ひやる。何を隠さん其方の工夫を慕ひ館に忍び。窺ひまどろむ其内に夢想に受けたる此細工。地然れば深き妄念の。盗人は某。非道に身命溺れしも。母を助けんためなるに。我さへ死する運なれば。恨みらるゝも恨むるも。共に果なき浮世ぞと。スエテ男泣きにぞむせび入る。地色然る折節蟠海は。師國時夜叉隨へて。オクリ悠々とこそ。地色出て來り兼定公に打向ひ。詞改めて蟠海を参内せよとは何事の。趣きなるぞとありければされば。此度僧都の加持大護摩の徳に依つて。親王御體平盛あり感徳の餘り。今日より大僧正の位階を

授け給はる。繪旨目出度く領掌なざるべしと披露ある。蟠海ムウ懇志の程過分なりと。地挨拶の内甚五郎目を離さず。蟠海の。顔打守りはつとばかりに聲を掛け。詞何時ぞや天子と偽つて細工を望むは御坊よの。ぬく／＼と騙されて今の憂目は何事ぞや。地サア母を返してたべ。エ、怨めしい腹立つと。スエテ怒りの涙せき敢ず。地色まさご雪姫聲震はせ。あら憎や情なや。皆是御坊の悪心より。いづれも非法の最期の恨み。思ひ知らさて置かうかと。三人一度に口説き立て。フシ大聲。上げて歎きける。詞蟠海ちつとも騒がず。ヤア甚五郎。親王と偽りしは紛れもない某。は何故ぞ。天子として戀慕に死するを救はんため。暫く王位を學んだり。斯程に慈悲を惠む我。何しに契約違へんず。地それ／＼師國召人引けと聞くより早や。甚五郎が母と妻繩付ながら連れ來れば。親子三人顔見合せ。フシ先立つものは涙なり。地色蟠海二人が繩を許し。母が義は勿論。女房迄を尋ね出し供し來つて相渡す。サア請取れと詞の下。甚五郎は頭を下げ忝しと一禮す。母涙ぐみ頭振り。たとへ此身は遁るゝとも。我子死すれば生き甲斐なし。繩掛け給へと掻き口説けば。地女房も物憂げに。フシ互に。義信を立つるにぞ。詞蟠海は打領き。ヲ、さぞあらん／＼。コレ兼定。召人どもが一命を我に免じて助けてたべ。甚五郎は偽りにも天子の詞を重んじて。細工を挑むは忠の道。地色雪姫事は親王が病になる程戀ひ慕ひ。今又罪に附せんとは照る日の曇る政道。何にもせよ慈悲は上から助くるは法のため。思ひ立つた命乞ひ是非貰うたおくりやれと。フシ只一筋に言ひかくる。地色兼定公聞きもあへず。詞和は仁の基なれども刑罰なければ亂の端。利益の道はお僧の役。朝政は又臣等が役。其上繪言還らずと。地云はせも果てず蟠海繪言を取出し散々に引裂き捨て。ヤア繪言の繪旨のとは王法を立つる上。濁れる祿を何かせん。否でも應ても貰ひかゝつた召人。ソレ師國時夜叉と聞くより早く匿寄りて。フシ皆縛めを解きにける。詞雪姫は差寄つてコハ忝き御心やされども妾が身の上より。地悲しきは夫の命お救ひあれと手を合す。詞兼定は聲を上げ。ヤア不覺なり雪姫。汝が心怠る故最後の日限極つて。千王は今朝曉早速討つて捨てたりと。フシ聞くより雪姫あつとばかりに倒れ伏してぞ泣き居た



り。地蟠海は大手を打ち。彼奴めを殺さんばかりにえいやつと骨折りしに。世界は廣しと立上り玉座間近くどつかと坐り。詞ヤイうつそりども我こそは謀叛の骨張。かねて源五と心を合せ時の變を窺ひしに。地今蟠海が開ける運親王其座を立去れと御簾引きちぎればコハいかに。思ひも寄らぬ千王丸仁王立ちにつつ立つたり。雪姫を始め満座の人フシ再び驚くばかりなり。地色蟠海狼狽へ逃げ廻るをどつこえやらぬと躍り出で。其儘繩をかければ織部も續いて立掛かり。師國時夜又兩人を捕つて伏せ働かせず。縛り上げて突据ゑたり。地かゝる所へ親王は出御まします御有様丈に餘れる下髪に十二重の優姿始めて女帝と知られたり。兼定は悠々と蟠海に差向ひ。詞エ、是非もなき行跡やな。天性不道にまします故天子を女帝と知らせなば必定輕しめ謀叛の種と幼少より。皇子と稱し剩さへ。此度の無體の戀慕も。御身の疑ひ避けんとての企て。地猶も悪心探らんと刑罰烈しく取行ひ。第一は千王が死したりと聞き給はゞ。虚に乗ずるの謀叛の色現れんと。計るところ案の如く此仕合せ。今此繩目に愧ぢ給へと。フシ理立て、制せられ。蟠海は差詰り詞も出ず赤面す。地帝御氣色穩かにいかに兄宮。詞同じ血筋の帝位をば左程迄疎み給はずとも。女のすなるまつり辛苦を憐み縁となり。地悪心止まりたべかしと。スエテ御涙にくれ給ひ。地暫くありて。ヤア雪姫。詞我故様々の難儀は不便さりながら。たまぬ思ひは目の前の女姿に明けし。地色さて又汝が小町の圖。佛神擁護の筆の妙。感ずるに餘りあり。向後朕が繪所と譽を世上に知らすべし。地甚五郎も雪姫に同じ恵みの細工の像。何れも稀代の重寶たり。褒美として日の本の細工の司と銘すべし。詞次にまさこは夫に違ひ。神妙の志。甚五郎を狙ふ由度會源五は朝敵故たとへ討たでも遁れぬ命。地汝が事も夫につれ重類を絶つ罰なれども。貞節に免じて命を助け稚子を瀕口に召し出し。詞度會源五と改むべし然れば夫は蘇生の心。其上何の敵あらん。地必ず仇を残すべからず。皆々其旨心得よと。云ふに妙なる綸命に。フシいづれもはつと感じける。詞兼定は詞を正し御同胞とは云ひながら政道は背かれず。地蟠海僧都は隱岐の嶋へ遠流せしめ。さて又師國時夜又は臣として君を諫めず。朝敵となる大尉禁外へ引出し刑戮に行へと仰せを請けて追ひ立つる。是を手本の善の綱。僧都を懲し我君を祝ふ御國は忠臣あり孝行あり貞節あり。能迄も満ちくして榮行く。春こそ久しけれ。

右之本遂吟覽頌句音節墨譜等不違毫釐令加筆且以著述之全本令校合畢尤可爲正本也

豊竹上野少掾

作者 紀海音

大坂上久寶寺町三丁目

正本屋 西澤九右衛門版

富仁親王嵯峨錦終



お  
そ  
め  
松  
久

袂の白しほり



おそめ松の白しほり

上之卷

作者紀海音

地難波風賢者も富めり君が代は。天の羽衣唐錦朝鮮綸子高麗橋。三井が見世に山たゝむ。フシ雪の巖の掛直なし。  
 地銀さへあれば今云うて今も調ふ身のまはり。春待袖の殊更に武士は角ある上下に。御紋の時服一重請取注文算盤の。  
 儉約な顔も町人は。僭上張つてよい衆に。似せ八丈はしまつげな。婆も孫子も着衣始。うら珍しき中紅絹の入掛買う  
 て行くも有り。法師は人も木の端と。云へば綸子の切端を。丸紵帯の末にては。フシめぐり逢うてふ主やこの。戀の  
 日の出や。東堀。白齒も纏ておそめとて。誰に思ひの種油。締めて寢油二親の。光は有れど暗きより。暗がり好の豫  
 言を知らぬ仲居や乳母連れて。嫁入小袖の模様より目は久松に行道の。三井が見世に立寄れば。地色乳母ちよこ  
 と走り入り。ハア藤七殿今日は。奇特とお宿にごさんする。奥様からの御言傳。毎日こちへござつても模様がお氣に  
 入らぬから。無駄足ひかす氣の毒などうて買はねばならぬ物。主をばそれへ遣りまする數々見せてあげすけに。地頼  
 みますとの云付でアレお染様わざ／＼と。お出なされました早に。オクリ伴ひへ内に入りにけり。地色若盛なる手代  
 ども目を見合せて突きしろひ。瓦屋橋と聞及ぶ。油壺から取出した髪の艶から地合から。あのような縞子が有らうなら  
 中の島のお屋敷に。祝言前ぢや百本でも忽ち金にせうものと。見る物くはう仇思。ウシ是願の掣なり。お染は何の  
 氣も付かず藤七に笑顔して。色品變る模様どもたび／＼見せて貰へども。氣むつかしさに取紛れすげなう云うて戻



せしが。地色今日は心も晴れやかさに慰みがてら染小袖。見ませうために参りしと。おめた所を手入らずと。フシ世  
 上に是をたふとがる。詞藤七は慇懃に。何よりかより御氣分の良いと聞くのがお頼もし。幸ひ今朝下りたる染物多く  
 ある中に見るから粹と白綾子に五色の糸で縫付けける。地京大坂の菊合せ千歳の秋を八重桐が。舞臺衣裳の物好み。御  
 氣に入らぬ事あらじと自慢顔して差出す。地色乳母や仲居は立ちかゝり。詞コレは是になされませ。是を召したら  
 取成も八重桐に生寫し。地よかろくと囃せども久松一人餘所目して。詞淫奔らしい藝振にうつつて男こま付けて。  
 京大坂に浮名立ち身の行末を八重桐が。地狂言にして貰うたら泣くであらうと呟くを。人は何とか白菊のお染も色に  
 現はれて。菊の一夜を千夜とも頼みし仲は變らねど。うつろふ菊のあだ名こそ。フシいまいませと搔遣れば。詞藤  
 七は心得て。然らば是になされませ。廓に名をば咲かせたる花紫が物好きに。我名を衣に染色のおり縫ひ織紋織節の。  
 地花の色繪のあしらは黒人仲間によしといふ上なき模様候ふと。詞飾れど久松は。詞いやくは是も心得ぬ引手あま  
 たの傾城の。地どう根性を似せ紫。とゞろ割けたは見苦しと顔打赫め言ひ消せば。乳母仲居は腹立てて。詞こりや其  
 處な者何をいふ。流行模様の善悪を。お主らが辯口な。地黙つて居やと叱れどもお染は暫し俯きて。詞いや久松の云  
 やるのみさのみ無理とは思はれぬ。地色の變るも變らぬも絹には依れどさりながら。氣に懸るのは入らぬ物も厭と  
 て下に置く。地色藤七お染が脇顔をつくくと打守り。扱むつかしい客人かな左程物好き有るならば。雛形書いて後  
 よりも御目に掛けんさりながら。詞三井が棚に小袖は無きかと云はれんも口惜し。藏の内なる染模様。あらく語  
 り申さんと。地側なる帳面引き寄せて。スエテ一々にこそ讀立てけれ。文彌武藏野に一村。薄穂に出て。フシカ、リ亂  
 れ合うたる小袖もあり。フシ吉野初瀬の。花楓。今を盛りと見ゆるもあり。月の名所は。多けれど色は。様々信濃な。  
 る。姨捨山や更科の。フシさやけき月は。是ぞこの。地砥草を分けてさしもげに。磨かれ出づる體も有り。御簾の隙  
 より唐猫の。綱を控へし女三の宮。姿を見そめて戀慕の闇に迷ふ柏木の。えもん流しの蹴鞠の庭。柳櫻に松楓。梅に

鶯紅葉に鹿。竹に雀や花に蝶離の八重菊葛かづら。桐に鳳凰獅子に牡丹扇ながし砂ながし蟲づくし草づくし。小紋  
 唐草ちらし紋。淺黄鹿子に鴉鹿子。紫鹿子に皆人の。ナホス心はけしの紅鹿子も候と。辯舌は足らうたり。言葉に花  
 を咲かせつゝ。一時計語りしは。フシげに面。白うぞ聞えける。ナホス地お染につこと打笑ひ色品多き其中に。一村薄  
 打亂れ末に逢ふとは面白い。是にせうかと穂に出づる。フシ目元が直にすゝきなり。地色乳母や仲居は口々にこちと  
 が目には爰ら内。丸めてみんな欲しけれど何を云うてもこれくゝに。縁遠なりし片端者。せめて五百か七百で四五十  
 年も著るやうな。糸入縞か抜袖。フシ欲しい事ぢやと打笑ふ。地色藤七領き合點して。成程くゝそれもある取なし頼  
 む追従に。錢のあるなし知らねどもさあらばこなたへくゝと太物見世へ行く水の。オクリ跡には濡の差向ひ。  
 地色お染はあたり見廻して久松が手をとらへ。コレ腹立さうな顔付を。なぜにしやると凭れ寄る。膝をすつと立退いて。  
 歌嫁入衣裳を見に黄八丈。しかも心はとび八丈で。口に戯れ目と云ひもぢらせど。フシらしやもない事。云はしやりん  
 すな。つむぎ騙そと云ふ心かと。ナホスフシ振り切る袖を引止め。地色そんな小癩な當言を俄に誰に習やつた。詞茶  
 屋新町へ折々に稽古にとやら人が云ふ。地あた鈍らしと睨めども。久松猶も傍目して。歌純子枕に二人がつひに。ぬ  
 め幻の世の中と。物が云はずぞ。フシ哀なる。ナホス地色お染は暫し思案してやうやうと今合點がいた。嫁入小袖を  
 買はんため来たとのその腹立よ。何樂しみに其やうな榮耀な心を持つものぞ。憂き身を泣いて夜晝と寝て居る故に  
 かゝ様の。詞お氣に懸けられさまぐの御意見の上此金を。枕元に差置いてさもしいやうな物なれど。死なて叶はぬ  
 時節にも命を延ぶる妙薬ぞ。大事にかけて片時も必ず肌身を放すなど。地涙ながらのお詞に心が付いて如何様に。そ  
 なたの衣裳調べて姿の花を見るならば。氣合もとんと宜からうと勇み勇んで来たものを。愛想盡かしなすね言葉  
 スエテ憎や。つらやと。かこつ。にぞ。地久松はつと差俯き。詞誤りました拜みます。地もう御堪忍遊ばせと手を取  
 交し面白う。フシ成りかゝりたる真中へ。地色皆が戻れば久松はこれ藤七殿。詞わしも正月小袖の加賀の諸白がより



羽二重の。フシ御召小紋が打とけて藍水松茶にも致さうか。地氣遣なしに現銀と小判ぐわらりと投出せば。地色乳母や仲居は聲々に何共是は呑込まぬ。詞お主が何で此金を是程は持つてぞと。地口々に咎むれば久松打笑ひ。詞イヤ是は江戸の兄貴が所務分。今朝程飛脚に請取つた銀は有切なな衆も。地目に入つた物何なりと御用にたつと大氣なる。詞も戀の口塞げ思案もなしの女子ども。夢か誠か久松殿顔もふくく福の神。年の内から若恵比須厭面に溜る水淺黄。巾廣帯で品やらば脇から腹を抱帯。はんなりとした紫の帽子びらく風吹に。這ひまくやうに十兩の。金もわが身も暇乞ひ東。オクリをへ差して立歸る。地色道二三町。過ぎけるが二人は何か囁いて。お染は跡へ振返りまだ日が高いそなた衆は。座摩の内にて淨瑠璃を十段計聞いて居や。久松連れてわしは又法印様に來る春の。年八卦をば見てもらをこちへくと立戻る。跡先知らぬ乳母仲居慾から萬領いて。フシ合點行かねど行く袖や。地色お染久松しよぎしよぎと扱もよい首尾上の首尾。競ひ口には叔母もよし叔父は猶よし一門は。片腕程の綱と聞く渡邊筋の。へ其そこに。地色表屋ながらトや算見通しの法印とて。失物盗人走り者扱は相場の高下迄。合ふの不思議合はぬのも不思議くと云ひ囁す。旦那々の籠袖月待日待代待手。文字ふつゝかに祈禱札春の事迄片付けて。嘉例に伊勢へ年籠り。夜舟にのりの旅脚絆供の茂吉が鉄箱。大事にかけよ女房ども本尊々々のお鏡も。三か月様のお供も必ずく忘りやんな。詞ソレンおれも忘れて居た。見れば最前油屋から長々とした文が來た。若し久松めが不埒など致せしとある付届。物參する門出故。わざと隠し居らるゝか。地色氣遣はしやと尋ねれば女房を知らぬ顔付に。詞悦ばしやんせさうぢやない。久松殿のあんまりと奉公振りがよい故に。仕着せの外に龍紋の帶遣すとの御知らせ。地色ほんに其文見せうものつい引裂いてとあひしらふ。詞法印悦び打鎖き。褒美の帶は龍門の瀧に喩へて立身を。地致せと有るのお壽。吉左右く満足なよう留守しやれ追付けて。目出度う春の初夢は。五日の晩ぞ樂しみやと。オクリ戯れながら立出づる。地色女房は未だ門口に跡見送りて居る所へ。久松お染いそくと笑顔作りて入來れば。なうお久しやと計にて。フシやがて

内にぞ伴ひける。地色二人は戀の中宿に日本一の首尾なれど。流石それとも云ひ兼ねて叔父坊様は留守さうな。定めて參宮でござんしよと詞跡先奥口や。二階なんどへ目も遣るも。フシ晝寢の夢の場取なり。地女房は會釋して。詞成程主は伊勢の留守。けぶたい者も無い大事の事ぢやとつくりと。地互に談合しめ合うて又締め合うて。締め合うて。謀合せてござんせと挨拶すれば兩人は。さても粹かなめだかかないや申しお内儀様。詞なじみもないに淫奔な娘と思うてござんしよと。地さしうつづけは何のいの。若い時には有る習ひ氣をはつたりと持たしやんせ。今日よりしては旅他國案じたま善し案じぬも。行く先々に鬼はない弱い心を持つまいと。力つければ久松は。合點の行かぬ御挨拶憎う思さぬお心に。身の行末の事迄を思ひやつての事なれど。そこらは二段奥の間でちよつと話し。足早に。去なねばわしよりお染様内のお首尾がわるいのに。通つたやうでどこやらが未だおぼこにござんすと。しらけて云へば女房はわしが詞の不思議なより。こなたの心がいぶかしい。詞内方へとて足ぶみのならぬ首尾にて出て來たる。地こな様方にあらずやと語れば二人はぎよつとして。詞何ぢや内へは去なれぬとは。地斯うした事が知れたかと。スエテ顫ひ出すを押鎮め。地色女房小聲に云ふやうは。おふくろ様より最前に。コレ此文を遣された。讀みます程に聞かしやんせ。詞親心にはいつ迄も童々と思ひの外。いつよりしてか久松とくさり合うたる中々を。無理に放さば淺ましき浮世の夢や見るらんと。案じ過しの數々は。筆にも盡さず候なり。地斯くとは知らず嫁入の日取を急ぐ父親の。詞突詰めた氣につゆ程も見付けられてはそもやそも。並大抵の事あらじ同じ内には置かれじと。思ふ心の一つからそれとは云はて賺し出し。路の遣ひの事なども心を付けて遣せし。外へ行かん所もなしそこ御許へ參るべし。叔父御の手前はよきやうに取成し云うていづくにも。かくまへ置いて給へかし月日も経つて言入の。縁だに切れて候はゞ訛事たてゝ添はさうと。地母が心を云ひ聞かせ若氣短氣の出ぬやうに。くれぐれ頼む。フシ言の葉を。地お染聞くより泣出しあらはづかしや面目なや。さぞやお腹の立たうのに末々迄の親の慈悲。背かぬ様に此上はお前の情でいづくにも。立ち忍ばせ



て下されと。二人は左右に取付いて スエテ身もだえしてぞわびにける。地色女房も涙ぐみ。ヲ、尤や。フシことわりや。地色わしが思案をして置いた。あたりほとりの目も多く爰にはどうも置きにくい。詞京大佛の煙管屋にひとりの姉が居られます。一先あれへ遣りませう一年半年ござつても。御遠慮の有る所ぢやない姉への文もさきから。認めて置きました是をば持つて一足も。地早や日が暮れる出さしやんせ八軒屋から乗合の。船で風などひくまいぞ着いたとあるの便をば。早速見せて下されとそより立つれば二人もまた。泪はあれど心には一所にゐるが年月に。願ふところと嬉しさに心も空に氣も空に。暇乞さへそこへに走り出でしが。立戻り。詞夜船も只是乗せまいが其段はどうしましよ。ハテ商人のやうにもない銀で兩換なされいの。サア其銀がござんせぬ。ヤア何と云はしやる御文には。路のつかひも遣るとぢやが。但し忘れてござつたか。イヤ其銀は絹買うて乳母や仲居に帶帽子。地買うてやつたと云ひさして二人は。下に泣き伏しぬ。興醒め果て、女房は恨めしげなる聲を上げ。詞いかに年端が行かぬとて戀する心も持ちながら。餘といへば愚かやな世上に銀といふ物を。仇おろそかにせぬものとは今お二人の身の上ぞや。油屋殿が長者でも女房のまゝに金銀の。ならぬは町の習はしよ。地子ゆゑの闇にどの様なせつない事て調うた。銀やら知らずうはく〜と其浮ついたお心では。今日より明日が覺束ない京三界へやりまして。浮つらき名を立てられても頼まれがひも有りやせん。若い同士の思込一過は野でも山にても。辨へなしに面白い世渡悪しく物事が。儘にならねば不圖したる恨みつらみに尼となり。青道心の破衣別れ〜に成るものと。例を云ふも御意見も跡になつたる悔しさと。スエテ叱りつ泣い口説きしが。中にて心を取直し上り詰めたる逸り氣に。詞鹿相があらばお袋へ言譯もなしよしなしと。抱き起してコレ〜。案ずる事はちつともない外には人も知らぬから。一先内へ去なしやんせお袋様と私が心二つの才覚を文で知らせて心よう。地添はする様に成しますと騙し賺せば流石には。十九や廿に未だ足らぬ。蕾の花の梅櫻 フシ盛り待つ木に立戻る。地色乳母や仲居は内に入り日が暮れうかと案じたに。サア〜早うお歸りと急ぐを機

會に女房も。そよめき立つて門送りさらば〜暇乞。逢ふ戀イ、ヤ逢はぬ戀。時分柄とて掛乞ひも心せはしき。三重、暮の鐘。

### 中之巻

地思ふ事なづな〜とこたまよび。春調へて門松も物もうの聲聞き覚え。顔も覚えて見通しの。法印御禮方まで。フシござりますると行過ぐる。地色油屋の内よりも少女子一人走り出て。申し〜法印様。詞頼みまし度い事有りとお袋様やお染様。今朝から待つてござんした。暫くお這入りなされませ。ハア御用とは何てある。お盃なら春永にとお断をば云うてたも。イエ〜さうぢやござんすまい。地ちよつと〜と引連れて オクリ小座敷にこそ通しけれ。地色母やお染は立出でて先づ以てお久しや。目出度い春の壽も。又御參宮の悦に人でも上げます筈なるを。詞店御の何のとて。主にも寺のお禮さへ今日勤めらるやうな事。地御無沙汰のみに過ぎましたヤレ蓬菜よ銚子よと下女を散して近々と法印に差向ひ。詞お前も御存じ有る通りお染が嫁入致すのも。早や近々に成りまして。親父一人は悦べどもあの子は厭ぢや〜とて。地湯水も吞まず居まするを見てゐる母が心底を。御推量して下さりませ。とあつて今又變改の談合などに乗るやうな。旦那殿ではなれども。詞護摩の牛王なが取所。お頼み申すは爰の事。音に聞えた辯舌にて滅多無性に相性が。悪い〜と云消して氣に懸けさせて給はらば。其尾に付いて色品のあるまいものとも思はれぬ。地色二世と豫たる夫をば騙すと云ふも子が可愛さ。お話し申すも恥しと。フシ袂を顔に押し當つる。地色法印は打笑ひ何より以つてお易い事。詞左様なる儀は一日に。五十三頼まる、皆此方の商賣なり。地色燃杭に迄昨晩は丁字頭が立つたのは。是であつたと請合へば。覺えず知らずにつたりと。笑ふ子よりも見る親の。フシ心ぞ春の景色なる。地色折節亭主太郎兵衛は金持氣質目に立たぬ。袴持たせて一僕の久松連れて内に入り。詞是は〜法印様。



いまだ御慶ごけいでござります。ヤアこりやお染も起きてゐる。顔持ちなどもきつう良い。地水垢みづご離取るが今日七日就いては先程法印様。是へ御入りありし故お染を側へ呼出して。此子が今年の吉凶を見て給はれと頼んだりや。詞算木しさんぎを出しねんごに半時ばかり考へて。以ての外なる顔付して御笑止ごせうしな儀は御息女に。大災難だいさいなんが出来ました。此度の祝言このたまが悪縁なるを無理やりに。取り繕つくろふが曲事まがこととて結ぶの神の御咎め。神々達の仲間へも觸ふが廻まわつて有る故に。祈禱いのちも薬も手が届かぬ片時も早く此事を止めよと御意見有る兎や角思つうしひ合するに。詞法印様はやうくと夜前伊勢よまへいせから御下向ごげかう。三日が内は神明しんめいの乗移のりうつつてござると聞く。立願りつがんかけた私に示し給ふと有難く。地はつとお受け申すとはや。娘が氣合きあひ良うなつて常より機嫌きげんうきくと。まだ様々の不思議な事あなたへ直に御聞ごきこきと。眞顔まがこ作るも親心おやこころ。地色太郎兵衛ぢしきたろうべゑつくく聞届きこけ合點あひだちの行かぬ氣色きしきして。神の利生は知らねども元三大師もとさんだいしの御籤ごせんには。詞體したいによいと上つたる。佛を破る罰ばちとても當る所は只一人。疑はうなら法印殿。慮外りぐわいな申分まをわなれど違ちがひはせぬかま一算いっさん。地只管ぢのり頼めば懐ふところより算木取さんぎと出し置き並べ。暫し頭かしらを打振うつて。詞フ、ウ、一徳いとくの水青陽みづせいやうの神木しんぼくの氣を養やしやうて共に三さんの火を育やしやつ。生家しやうけの油何時迄も盡つくくる事なく金銀は。子に子を産うんで千年も上々吉じやくきつの夫婦合あひあ。地あら目出度めいしゆやと占うふに。お染は顔の色變いろかり母は覺えず聲こゑを上げ。詞コレそな法印殿。折角せつかく人に頼たのまれた大事だいじの算さんをぐどと。置直おきちすとは御卑ごひ怯じやうな。見通みとほ殿だんと持も囉らす響ひびが今から廢たるぞや。地お名なが惜おししくば何時迄も初めはつめの通とほりにおつしやれい。是なうくとあせれども法印ほふしん騒さわぐ氣色きしきなく。詞如何様酒いかさましゆといふものは諸事しよじ萬端ばんたんを仕損しとんふ。一杯機嫌いぱい嫌きらんでうかくと初手はつてに置いたは町内の。鍛冶屋かじやの後家ごけと水汲みづくみの五介ごけが中を取違ちがへ。地そこで水火すゐわの大惡縁だいく縁元來もとより拙者しよが生れ付き。フシフシ阿房印あぼういんぢやと嘲笑ちやうぢやうふ。地色母ぢしきぼはいよく腹はらを立て。詞イヤくさうは云はすまい。地無理は三度さんどぢや置直おきちしや。サア見よくと立寄たるを太郎兵衛たろうべゑは押隔おしへて。法印ほふしんの側そばへにじり寄り。詞驚入おどろつた御名人ごめいじん。誠に八卦はつぱ占形うらなは人を助くる道なれば。曲つた氣きではならぬ管流石くだりいし以前いぜんはお侍さむらい。例へば一家一門いっかいつもんが果報くわくぱう引出ひ出す事にも。地色非道ぢしきひだうに一味致いまいちさぬと坐まつたあなたあなたの御所ごしよ存ぞんと。身共みどもが思案しあんと比ひぶ

れば割符わりふより猶合なほあひまする。とても事に今一色いっしき。お尋ね申す事がある。詞金銀出入きんぎんでいりの店卸みせおろし。昨日帳面けふのりしむる時十兩程じゆりやうの不足ふそくをば。大商賣だいしやうばいの中なれば帳つひの付落掛方つひおちかかたの。思おもひ忘れもある事と其分ぶんにしてしまひしが。其盜手ぬすてが今日けふは大おほ方に知しれました。地同類どうるいの義ぎが覺おぼえない一算いっさん頼たのむと云いひければ。地色法印ぢしきほふしんはつと算木さんぎをばそこくに置き並べ。詞ハテあぢな事こと此金このかねは。人間にんげんは取りませぬ。ム、さうである。主しゆをくります人ひとでなし人間にんげんならぬ管くだりの事こと。シテ同類どうるいは見みえませぬか。イヤ何とお聞き有る人間業にんげんわざでないからは同類どうるいのある管くだりはない。貴殿きだんのけたい當年このとしは大煩おほさわひか大損おほそんを。なさるゝ星ほしに當あれども。年頃日頃としがらひがらの御信心ごしん心天しんてんに通とほじて纒まかなる。地金子ごんぎんに轉てんじ替かへ給たまふ守まもり本尊ほんそんの御方便ごべん。必ず詮議せんぎ御無用ごむいようと云はせも果はてずイヤこれく。詞譽ほめ損とんひが仕つかる。盗ぬすんだ奴やつは人も人取ひととり分わけて御坊ごぼくの甥おやし。地證據じやうこを御目ごめに掛かけうかと久松くまつを引出ひ出し。おのれ心に覺おぼえ有る。高津かうづの坂さかをおりる時風ときかぜに吹ふかれてちらほらと。あぢな身振みぶりをしをる故心こころを付けて見て置いた。地其下そのした着出きだせ見せぬかと込付こみけられて久松くまつは。うぢくするを無理やりに。肩脱かたはがすれば花はなやかな。淺黄あさぎ小袖こそでの引ひかへし。フシ見る目めもいとと笑わら止となり。地色太郎兵衛ぢしきたろうべゑきつと睨にらみ付け。詞さてく不敵ふてきな丁稚ちやぢめかな。盗ぬすんで着るとは知らずして傍輩はなはどもが云はうには。年季重としがらねし者どもには日野ひのや袖そでの魚物いそぶつして。久松くまつづれに何事なにことを召まさると主しゆを恨にくみ出し。不奉公ふほうこうすりや身代みしろの歪ひずみに成ならうも知れぬ事こと。地憎にくいと云うて上のないいたづら者と傍そばにある。箒押はらこ取りさんくくに肩背かたせ厭いとはず叩たたけども。叔父おじは餘所あま見みて扱あはず下女げによもこはがり寄付よせかねば。お染お染は見兼みかね驅寄かるを母はははうしろへ引戻ひし。父ちちに色目いろめを知らせじと立塞たてさいがれば押おのけて。行いかんとするを取り留とどめ。競合せいかふ内も三ツ五ツ。尙飽しやうぼ足あらず振上ふるあぐる。箒はらこに母は取付といてむかつにござる旦那殿だんなだん。詞小袖こそでひとつを着きたるとて盗ぬみしたとも云はれまい。地主ぢしゆならねども親おやも有る。アレれつきとした叔父おぢ御ごから。して遣つかしたとあるならば。其返答こたへがむつかしかる。よし盗ぬすんだにしてからが纒まの金かねではござらぬか。春はるの初はつめにいまししい取分とけお染お染が顔持かほもちもたつた今迄いまよかつたに。騒さわぎに氣きをば取りのぼし又またぞや氣色きしき悪わるさうな。たとへ千兩萬兩せんりやうまんりやうにも娘むすめが命いのちは買かはれまい。祈禱いのちの代しろに遣つかつ



たとも思うて堪忍して下され。法印殿も胸愆な盗人でない久松が。打擲かるゝをまぢく／＼と見てゐる所ぢやござるまい。叔父様がひに言譯の仕様もやうも有らうこと。すべに依つたら私が同類ぢやとも云つてやる。盗の主にもなるわいの。思案を付けて給はれとフシ片手を上げて拜みける。詞法印言葉押鎮め。御鹿相仰せられますな。外より云うて濟まうならお前の智恵を借らねども。何の黙つて居りませう。何云はうにも慥なる證據をとられし上なれば。盗人の名は消えませぬ。久松おのれもよつく聞け。身が熱いとて狼狽で。同類呼はりなんどして必ず外を損ふな。斯うなる筈と諦めてお主の杖の上に死ね。親方殿も随分と力の限り打たつしやれ。地色さら／＼以つて此方にお恨みとては申さぬと。フシせかぬも聲は震ひけり。地色太郎兵衛箒をかりりと捨て。とつくと坐つて。詞法印殿さりとは。嬉しいこなたの御心底。あけて云はねど心には載いてをります。地色子も同然の久松に盗人の名を付けられて。さぞ口惜しうござらうが。僅の金に出来心さして恥にて恥ならず。詞世間にはまだ大それた横着者が居ります。同行中に使はるゝ久松程な丁稚めが。主の娘をそゝなかし嫁入するのをうるさがり。地うつら／＼と煩ふに母親は只一概に。子の可愛に絆されて。浮名誹も顧みず。地よしな巧事を云ひ。悪智恵付けるも父親が知らぬと思ふ愚かやな。詞とくより合點しながらも世間と義理にからまれて。見す／＼死ぬるを見るときも結納を取つた先様へ。變改などはならぬ事。地色意見をすれば知るになる知りながら又嫁入すは。婿にかづける様なものを以て云はうなら。詞値千兩萬兩の茶入茶碗に瑕有るを。隠して賣るは拘摸同然。知らねばこちに咎もなく買人もさのみ恨まじと。地色せめて心の取置きに思合せて久松を。打擲したも同類を知つても知らぬ意見の杖。打付くる手もわな／＼と苦しき老の所存をば。推量あつて久松が重ねて盗みせぬやうに。御意見頼み存すると涙を隠す目の内に。親子の顔をつれ／＼と。フシ守るも流石妬げなり。地色法印やがて久松を膝元へ引寄せて。天命知らず罰當りめ。詞たとへ壹錢半錢でも目を掠むるは横着者。況んや以つて是がまあ並體の盗人か。其不敵なる性根から叔父が所へのさ／＼と。地盗物をば抱へて来て

隠してくれよと頼みしな。女房はどこしも當分の義理に心が弱うして。請合ひながら兎や角とてにはの違ふ事有りしは。此法印が神明の加護に預る身の仕合。若しさもなくば今日は非道仲間に入れられて。當事苦口云はれても何と返答うつべきぞ。詞夜前其儀を聞くとはや胸に早鐘つきたれど。飾の内は面々が身祝をこそ致すなれ。五日三日遅いとてさのみ兎相も有るまいに。注連過ぎてから呼付けて折檻せんと思つたる。地所存が今で跡になりお主の杖を身に負うて。目の前叩き殺されても。言分の無い汝をば。まだ御不便が失さらずして意見を頼むなどとの。慈悲なせつなきお詞は。犬猫にてもとつくりと耳の底へは應へる筈。長う云ふには及ばぬ事幸ひ牛玉を持合す。今迄の儀を改めて何たる人が勤むるとも。ふつ／＼盗みせまいとの血判をして見せませと。小刀を添へて差出せば。地色久松聲を打震ひ盗みは成程しますまい。血判は許して下されと拔差ならぬ中にさへ。戀の錨に繋がれて。フシ離れ。難なく見えにけり。地色法印きつと氣色を變へ。詞扱をしぶとい丁稚めかな。汝は最早此坊主が。以前の武士を忘れたか。今長袖になればとて。是しきの儀を言掛りせぬとて後へ寄るものか。地是非厭ならば此小刀。喉笛に突込むと小腕うしろへ振上げて。どうぢや／＼と突つかくれば。詞アイ／＼成程致します實正するか。アイ／＼と。地こちらは首肯きやあちらなる。お染は厭ぢや／＼とて。かぶり振る／＼ふる涙。泣音を母は打掛の下に隠して押付けて。早まらしやるな法印様。憎くば打ちも擲きもし。御意見ならば幾重にも騙し賺すが宜い筈を双物を持つて無理やりな。それや胸愆と云ふものよ。牛玉とやらは恐しい血判を捺して違ゆれば。罰が當つて死ぬるといふ假令久松心をば。持直さうと思ふとも。盗仲間が聞きやせまい。死なば一所と固めたる牛玉に判も捺してある。そちらの罰が當らずばこちらの罰を被りて。若し久松が死んだらば同類も亦死ぬるである。跡に残つた親叔父が老木の春を慰めの。花とて何を眺むべき死んで浮名を流すのと。生きて波風騒ぐのと思ひ比べて見たがよい。人の誹も嘲も七十五日過ぎぬれば。止むとこそ聞け珍しき顔をも活けて見るならば。目出度いなどと悦ばん死なせて後に何方で逢うて嬉しと思ふべき。例へば指が



汚いとて。切つては捨てぬと云ふものを一人の甥を殺さんとは。大賊の身もせぬ事ぞ衣着ながら無慙なる。人心やと氣息まきし。フシ覺えず。知らず。泣出す。地色至極に詰り法印は。さすが持つ手も弱々と。フシ暫ためらひ居たりけり。地色太郎兵衛近く立寄りて。御眞實なる意見故。得心顔を見届けてさつぱりと氣が霽れました。牛王に判を据ゑたらば盗人といふ悪名が。其身一代剝されまい。地さう極れば此内の家來にしては使はれぬ。暇を遣らば世間から太郎兵衛程の身代にて。僅の銀で久松を追出したとは心得ぬ。いたづら事ぢやあるまいか如何か斯うかと跡もなき。取沙汰などをせられては御苦勞頼んだ甲斐がない。詞元來彼奴が生付悪所狂ひをする様な。性根は曾て下げぬやつ藪入前に成りたれば。奉公ぶりがよいなどと親へ僭上云はんため。地孝行からの出來心奥頼もしき所有り。恥と思はて何時迄もよく奉公を勤めよと。ほや／＼云へば面々も少し落着く顔形。牛王も元の袖に入れ小刀も鞘に納まつた。フシ御代の春とぞ祝ひける。地色太郎兵衛重ねて感慙に。まづ以つて法印様。年の始に様々の御世話ばかりを掛けました。お禮は參つて申すべし是が佳例のお初穂と。地懷よりも一包扇に乗せて差出せば。あつとばかりに挨拶も。出兼ね云ひ兼ね堪へ兼ねて。金の脈とる心さへ。泣く。／＼我家へ。三重歸りけり。

地藏めぐり道行 下之卷

ニ上り相ノ山夢に見て現に逢うて。幻に立つ甲斐。もなき妹背鳥。合つがひ離れて。跡や先。しやれた。振袖加賀笠に紅絹の紵紐。抱帯若紫のナホスフシお染こそ。上の空なる。薄化粧。こましやくれたる取成を。君に見せばやつくり木の。いく久松と云ひ交し。長地忍び／＼の寢油をとけてぬる夜の數積り神に事寄せ今日は又。地藏めぐりに託けて。春の道草爰そこと。フシ人なき道は。手を引きつ。フシ一人託ちて。行くの道。二人が仲の災難も。又は天満も。遠ざかり。今日は心もよしはらの。無常の煙立昇り。小オタリ西とへ東へ國分寺。突出す鐘の三つ頭。フシ數へながら。も伏拜み。頼む誓や法の舟。洩さて濟ふ網島に。かゝる鯉鮒市立て。二番に立てる。フシ大長寺信心深く行く先に。見返る人も在原の。本フシ當世男千鳥足。ちりぬれそめてゑひもせず。はや京橋を打渡り番場を見れば。氣も晴れて心も晴れて。廣小路。彌陀正覺寺有難や。スエテ庭に作れる梅が枝に。鶯來鳴くしをらしや。フシ本尊かけたる二世かけて。變らぬ仲の羨まし。ナウあれを見や數々の。鳥も戀する色かせぐ。梢々に。飛びつれて羽と羽とを合せては。フシ今やあふむの床の内。タ、キ何うそ鳥といふも有り。扱も聞えぬ時鳥。フシ泣いて明せし。ツキユリ涙には。石の枕も朽ちぬべし。此方ばかりに思へとはいつそ死ねとの兼言か。偽多き人故に。あたら此身をつくし舟あこがれ。こがれ今日の今。人目を恥ぢず迷ひくる。それぢや。／＼。先づそれぢやいの。それ。アタルすいた御心中。儘ならぬ身をかこち草。露よ。時雨よ染様と泣いつ笑うつ取亂し。ナホスフシ思ひ直して顔と顔。色の緋櫻。燃え出でてはやけ地藏の慈悲厚く。直ぐに急げば天王寺。五番の札所。フシ是とかや。逆縁ながら六番は。遙か戌亥の法善寺。スエテ是より拜し奉る。地南無歸命頂禮地藏尊。地藏歌哀れ拙き我等かな知らずば扱もやみぬべき。既に此理を辨へて後世をば恐れぬはかなさよ。娑婆にて慈悲の名號を一たび唱ふる功力にて。業にひかる。魂魄を導き給へ地藏尊。ナホスフシ所願を。爰に打納む。道頓堀の果て太鼓。いざ生玉の借り座敷うさを語らんこなたへと。心いそ／＼。フシちよこ／＼と。八幡宮の右左。爰へ／＼と招かれて入日の影と諸共に。おくそこもなし人もなし。誰もないぞと伊豫籠二人が姿木隠の床机に。夢をや結ぶらん。フシげに大坂の。東山。千代を數へて生玉の。社は殊に春めきて。常磐に見えし萬歳も。能も放下もわつさりと。フシ聲若やかに立渡る。地色お染は跡を振り返りコレ／＼久松あれを見や。詞アノ看板の書付に。お染久松祭文とは。地餘所にも丁度同じ名があれば有るものさりながら不思議な事と立止る。久松は打笑ひ廣い世界に同じ名も。同じ戀路もあるべきが歌に歌ふはこちとより。切ない事があるである。ごさんせちよつと聞きませう。如何にもおれもさう思ふ餘所の久松器量さへ。そなたにちつと似たならば。餘所のお染もてつきりと。



フシ惚れたてあるともたすれば。地色成程餘所の久松はわしより鼻が高いげな。餘所のお染に此様な。鷹は無いと戯れて立寄り聞けば錫杖の。聲無常めく祭文に。祭文、所は都の東堀。聞いて鬼門の角屋敷。瓦屋橋とや油屋の。獨娘にお染とて。心も花のナ色ざかりの。オクリ年は二八の細眉に。ナホスフシ内の子飼の久松が。太夫地二人ははつと走り退き。木蔭に顔を突合せ此身の上を何者か。爰へ持て来て歌はずとそなたは心が付いたかや。詞おれが思ふはと、様の昨日の様におつしやつても。思ひ切りそに見えぬ故戀が募れば此様に。地口にかゝるといふ事を人頼して御意見の。廻者ではあるまいか。詞イ、ヤさうではござんすまい。こちとにさへも打明けぬ深い旦那の御心で。出所の沙汰には成されぬ筈。こりやお袋の才覺で。浮名が立たば縁組の先から變改するである。そこでは私とお前とを。地女夫にせうといふ事ぢやと仇頼なる早合點。フシ又も葦簀に立寄れば。祭文へこなた嫁入嬉しかる。わしは生きても死んでもぢや。たとへどの上に云はしやると。誠があらば縁付は。ナホスフシなされぬ筈と云ひければ。地アレ聞かしやんせお染様わしが心の恨をば。云はねど知つてお前をば不心中なと云ひはやす他人の口の恥しと。フシくねり掛れる女郎花。地色お染は顔を打赫め。そなたの心を知るからはおれが思うてゐる事も定めて知つて云ふである。この跡聞いて其上で悪くば詫言せうわいのと耳を寄せれば祭文は。今が哀れの最中と。スエテ語るも聞くも涙なり。祭文へ勿體ない事何として。お主様をばわしが手にかけられましよと云ひければ。お染涙にくれながら。何の我身の。殺しやろぞ。跡を頼むといふ聲も。ナホス地南無阿彌陀佛と諸共に。スエテ終に自害し果てにけり。太夫地二人は興も覺め果て、臆てかしこへ立隠れ。顔見合せてうつかりとさりとは何といふ事ぞ。此身は爰に息災で連歩くのにまざくしい。嘘つくとも事による。年の始にいまくしい人目憂目も思はれぬ。往て強請らうか喚こか。うろくせしが久松は。地心を鎮め小聲になり。詞いや申しお染様。あの者どもが云ふ事を。嘘と思へば嘘なれど誠に聞けば皆誠。お前とわしが身の上をよ。思案して見ますれば。不思議な事ぢやござんせぬ。叶はぬ事をくどくどと御苦勞かけに物語。地色神や佛のお心にと

ても死なねばならぬ身と。人に教へて行末を知らしめ給ふと合點すりや。長くも生きぬ此命最早死んだも同然と。思ひながらもがつくりと手足もなえて悲しやと。スエテどうど坐つて泣出せば。地お染もわつと聲を上げ實にもはかなき我々かな。命はいつを知らねども此大坂に幾人か。今迄心中多けれど死なぬ先から此様に。唄繪草紙に載せられてわが亡き跡をわが聞いて。泣くと云ふのは。古も。フシ又後の世もよもあらじ。地色たとへ心中するとも跡に心は残らねど。おいとしいのは母様のとつとおいつも苦になされ。お氣の短い父様へ此事知れぬ様にとて。蔭へなり又日向へなり。御意見あるも聲低う。涙交らぬ事はなし我はいかつな口答。詰る所は死にますと。いぶりを出せば氣遣うて夜着に巻かれて寝ずの番。憂き苦勞をばさせませし親の罰でも行末の。よからう様には思はれずよしは死んでも添ふ事が。なればよけれどあの世をば見た人もなし言傳が届くも知らぬ片便宜。心元なき冥途やと。久松に抱付きフシ身を寄り。伏して泣き惑ふ。詞ヲ、御尤先の世は。私とても知らねども。折々旦那の御供して。談義の上で聞きました成程地獄も佛も有る。大きな蓮葉の其上に女夫くは並び居て。寒い悲しい事も無う千百年も居るげなが。地二つ取には此世にてせめて一年半年でも。主よ女房と云ひ云はれ所帯とやらがして見たい。百萬石の大坂に身の置所なき様に。心苦しい我々が憂をばせめて忘れうと。爰へ來たれば此憂目聞けばとにかく死神の。行く先々へ付廻り。催促するか責むるのか。最早宮へも參るまい。スエテ歸りませうと手を取れど。地色お染は更に立上らず。出にくい内をぬけ隠れ。又戻つては色々の辛い事をば聞くである。いつその事の出ついでに。日は暮れようと明くるとも浮れ歩くかさもなくば。連れて退く氣はないかいの。詞ア、扱叶はぬ事ばかり。行く所ありや何時ぞやの折にどこへも退きます。お袋様の下されし命を延ぶる妙薬の。金とてもなし知るべはなし。地死ぬる時節を待たうより外に思案はござらぬと。互に袖を取交し。立ちては泣いつ居ては泣き。フシ泣くや涙のきぬく。フシ別れをつぐる。鳥ならで。晝突く寺の鐘の音に。身はかげろふの有りやなし。胡蝶の夢と覺めはて。宮居と見しは本來の。空に歸るや石の



火の。光乏しき油屋の我住む内とへなりにけり。

地色帳場に眠る久松はむく／＼と起上り。胸押しさすり息をつぎあたりほとりを見廻して夢は夢ぢやが現にも佛は猶忘られず。お染様はどこにぞい悲しい事を見ましたと。語りもしたし顔ばせも今日又見ねば懐しと。人に心をおくの間の。ステテ障子を戀の入重垣に。妻や籠れる久松も。爰にいろさの月影に。横雲かゝるばかりにて。フシ立ち煩うてゐる所へ。地色山が屋よりも呼使五郎入は走り來て。詞旦那様お家様お染様をば連れまして。お早うお出なされませ。相伴衆は待ち兼ねて汁や煮物の加減さへ。地違ひますると追々に呼びにぞきその山が屋の。フシ使は早く歸りけり。地色太郎兵衛夫婦立出でて日がたけたものさうである。娘は着物着替へたかお染。お染とせはしなう呼び立てられてあい／＼と。明くる障子の髪形取繕はず何事を。泣き脹したる目元して。詞かゝ様わしは往きますまい。假寝の夢に思はしい辛さにかう泣いた故。地今につぶりがふらついて。どうも起きて居られぬと顔差入る襟の下。そつと覗けば久松も同じ夢みた顔形。フシ云はねど。胸に應へけり。地色母も心にかゝれども。笑顔作つてホ、／＼ホ、。詞をかしい事をいふ人かな。夢は逆夢どの様な悲しい事でも此母が。判じ直してよい様に目出度う解いてやりませう。今日山が屋の振舞はこちとは假令をなたをば。呼びたいからの造作をば行かぬと云ふも愛想ない。地ちつとの間往てつひ戻りやいざやと云へば太郎兵衛は。詞ソレ／＼。母がいふ通りおぬし一人が正客で。れつきとしたる二親は御機嫌取りの太鼓持。地指の股でも廣げうに兎角心をわつさりと。持つが物事目出度の。焼物焼鳥取分けて。料理は自慢たら汁と。オクリ勇みへ賺して行く跡の。憂身は何と。地久松は。常磐にあらぬ常磐木と。フシ變らぬものは涙なり。フシ春の日かげは。明けき。折知り顔に梅の花。ありとや爰に鶯の鳴音は月日ほし燕青。年頭歳暮の御禮をば一荷に荷ふ薬番は。野崎村の久作が。フシ物もうとこそ言ひ入る。久松は立出でて。詞ハア親父様ござつたか。今日は屋内が振舞にお出なされて誰もない。地こちへ這入つて草鞋の。紐も解く／＼お休みと。オクリ連れ立ちへ内に入りけり。地色久作きよろ／＼見廻して。御夫婦共に留守さうな。詞見ればお上に鏡箱や懸硯など引散し。和御寮一人に留守させて。出歩かる／＼はよく／＼に。奉公振がよいものと。嬉しい／＼さりながら。おれも今年は六十一。何時まで田畑せ／＼つても切れ變つたる果報をば。掘出さうとも思はぬ故おぬしに世をば打任せ一枚敷でも取圍ひ。寢起を樂にせう爲に隣の茂四郎が狡猾者。おくめを嫁に貰うて置く。地色おぬしが暇も貰ひに來た旦那へ禮は付けたりと。落着顔に言出す久松はぎよつとして。詞成程さうもござらうが。わしが年季はまだ三年是から先が御奉公。留守も預り外向の御用にも立つ最中に。地そんな事をば云はしやつたら旦那が腹立致されう。お留守の内に歸しられフシ早／＼とせりかくる。地色久作は打笑ひ。詞イヤ／＼そこは氣遣すな。縁故や其身の浮むには。どつこの山椒太夫でも悦び暇をくれるもの。地旦那に云ふと早速に暇は扱置き着おろしの。袴肩衣貰うて見しよ。久松は氣色を變へ。如何にこなたが文盲な土百姓でも相應の。義理と法とは立てるもの。七ツの年に内方へ連れられて來て正眞の。西も東も知らぬ内御夫婦様の世話になり。手習算盤其間に四書の素讀も習はして。今獨食する迄は親より深き御恩をば。禮奉公とも云はずして年季の内に出られうか。旦那は合點しられてもわしが去なぬと云放す。久作側へ差寄つて。詞親方殿のお蔭にて物讀もした證やら。さつぱりとした挨拶の。道筋立つて面白い。おれは無筆の明盲何の差別も知らぬ故。主の娘を勾引して淫奔かはく學問は。地尙かし聞きも習はぬと睨付けられて久松は。詞ソリヤまあ何をおつしやると。地云はせも果てずヤア諍ふまい／＼。詞おのれが身持の有りたけの底を叩いて法印に。皆たつた今聞いて來た。扱々汝は憎い奴。一人の親に差向ひよう悪口をぬかしたなあ。地土百姓はするけれど子を盗人には産付けぬ。恥を思はゞ其儘に在所へ逃げてはなせ戻らぬ。主に憎まれ傍輩に汚れた頬を押し拭ひ。娘御寮やお袋の機嫌を取つて此家の。跡してやらう慾心か。詞品に依つたら其様な首尾にも若しはなつた時。打擲した父御前は。結句諦めもよからうが。最負召さるゝ母殿の心の内には汝めが。地喉のあたりへ喰ひ付こか。刃物を持つて身の内をば。切りさいなんて

火の。光乏しき油屋の我住む内とへなりにけり。地色帳場に眠る久松はむく／＼と起上り。胸押しさすり息をつぎあたりほとりを見廻して夢は夢ぢやが現にも佛は猶忘られず。お染様はどこにぞい悲しい事を見ましたと。語りもしたし顔ばせも今日又見ねば懐しと。人に心をおくの間の。ステテ障子を戀の入重垣に。妻や籠れる久松も。爰にいろさの月影に。横雲かゝるばかりにて。フシ立ち煩うてゐる所へ。地色山が屋よりも呼使五郎入は走り來て。詞旦那様お家様お染様をば連れまして。お早うお出なされませ。相伴衆は待ち兼ねて汁や煮物の加減さへ。地違ひますると追々に呼びにぞきその山が屋の。フシ使は早く歸りけり。地色太郎兵衛夫婦立出でて日がたけたものさうである。娘は着物着替へたかお染。お染とせはしなう呼び立てられてあい／＼と。明くる障子の髪形取繕はず何事を。泣き脹したる目元して。詞かゝ様わしは往きますまい。假寝の夢に思はしい辛さにかう泣いた故。地今につぶりがふらついて。どうも起きて居られぬと顔差入る襟の下。そつと覗けば久松も同じ夢みた顔形。フシ云はねど。胸に應へけり。地色母も心にかゝれども。笑顔作つてホ、／＼ホ、。詞をかしい事をいふ人かな。夢は逆夢どの様な悲しい事でも此母が。判じ直してよい様に目出度う解いてやりませう。今日山が屋の振舞はこちとは假令をなたをば。呼びたいからの造作をば行かぬと云ふも愛想ない。地ちつとの間往てつひ戻りやいざやと云へば太郎兵衛は。詞ソレ／＼。母がいふ通りおぬし一人が正客で。れつきとしたる二親は御機嫌取りの太鼓持。地指の股でも廣げうに兎角心をわつさりと。持つが物事目出度の。焼物焼鳥取分けて。料理は自慢たら汁と。オクリ勇みへ賺して行く跡の。憂身は何と。地久松は。常磐にあらぬ常磐木と。フシ變らぬものは涙なり。フシ春の日かげは。明けき。折知り顔に梅の花。ありとや爰に鶯の鳴音は月日ほし燕青。年頭歳暮の御禮をば一荷に荷ふ薬番は。野崎村の久作が。フシ物もうとこそ言ひ入る。久松は立出でて。詞ハア親父様ござつたか。今日は屋内が振舞にお出なされて誰もない。地こちへ這入つて草鞋の。紐も解く／＼お休みと。オクリ連れ立ちへ内に入りけり。地色久作きよろ／＼見廻して。御夫婦共に留守さうな。詞見ればお上に鏡箱や懸硯など引散し。和御寮一人に留守させて。出歩かる／＼はよく／＼に。奉公振がよいものと。嬉しい／＼さりながら。おれも今年は六十一。何時まで田畑せ／＼つても切れ變つたる果報をば。掘出さうとも思はぬ故おぬしに世をば打任せ一枚敷でも取圍ひ。寢起を樂にせう爲に隣の茂四郎が狡猾者。おくめを嫁に貰うて置く。地色おぬしが暇も貰ひに來た旦那へ禮は付けたりと。落着顔に言出す久松はぎよつとして。詞成程さうもござらうが。わしが年季はまだ三年是から先が御奉公。留守も預り外向の御用にも立つ最中に。地そんな事をば云はしやつたら旦那が腹立致されう。お留守の内に歸しられフシ早／＼とせりかくる。地色久作は打笑ひ。詞イヤ／＼そこは氣遣すな。縁故や其身の浮むには。どつこの山椒太夫でも悦び暇をくれるもの。地旦那に云ふと早速に暇は扱置き着おろしの。袴肩衣貰うて見しよ。久松は氣色を變へ。如何にこなたが文盲な土百姓でも相應の。義理と法とは立てるもの。七ツの年に内方へ連れられて來て正眞の。西も東も知らぬ内御夫婦様の世話になり。手習算盤其間に四書の素讀も習はして。今獨食する迄は親より深き御恩をば。禮奉公とも云はずして年季の内に出られうか。旦那は合點しられてもわしが去なぬと云放す。久作側へ差寄つて。詞親方殿のお蔭にて物讀もした證やら。さつぱりとした挨拶の。道筋立つて面白い。おれは無筆の明盲何の差別も知らぬ故。主の娘を勾引して淫奔かはく學問は。地尙かし聞きも習はぬと睨付けられて久松は。詞ソリヤまあ何をおつしやると。地云はせも果てずヤア諍ふまい／＼。詞おのれが身持の有りたけの底を叩いて法印に。皆たつた今聞いて來た。扱々汝は憎い奴。一人の親に差向ひよう悪口をぬかしたなあ。地土百姓はするけれど子を盗人には産付けぬ。恥を思はゞ其儘に在所へ逃げてはなせ戻らぬ。主に憎まれ傍輩に汚れた頬を押し拭ひ。娘御寮やお袋の機嫌を取つて此家の。跡してやらう慾心か。詞品に依つたら其様な首尾にも若しはなつた時。打擲した父御前は。結句諦めもよからうが。最負召さるゝ母殿の心の内には汝めが。地喉のあたりへ喰ひ付こか。刃物を持つて身の内をば。切りさいなんて



も棄てたかろ。詞なれ共こちらを痛めれば。あちらのわちよがあたけ出し。地死の生きよのに持餘し花香もあらぬ祝言に。隣あたりへ歴々の婿や舅の通るのを見る度毎にくし／＼と。娘一人をむぎ／＼と棒に振つたは久松の。犬め故ぢやと果てしなく。一生睨み付けられれば金の中から目見出すと。何が手柄に成る事ぞ。詞アノ法印めが事を見よ。兄弟なれどおれよりは智恵も器量も勝つたと。二親達が自慢して武士の養子にやられたが。それも仕遂げず今は又。あぢな商賣目論んで。上下小袖ひつ違へ衣の肩はいかれども。地おうた門をばひそ／＼と肩身すぼめて通るげな。地色其内證の苦しさは思ひ遣るさへ。笑止なり。在所住ひの氣散じは腰を屈める相手もなく。惡所すゝめる友もなし榮耀喰こそ不自由なれ。乏しい月日はつひにない。人間一生安樂な親の家をば譲るのを。厭とぬかすか罰當りめ。詞其性根とは知らずして此冷たいにおれを見よ。素足で居れどおのれめに穿かさう爲に此足袋を。地持つて來たのが悔しいと振上げ／＼七ツ八ツ。さん／＼に叩き伏せさあ無念な。口惜しいか。詞親の叩くは慈悲の杖。主の打つたは憎しみの。杖をしたゝか受けたげな。地親子二人と分つても木に譬へれば子は枝よ。枝を叩けば木の本の親に當つて苦しいと。スエテしやくり上げた。久作が胸の。内こそせつなけれ。地色道理に迫る久松は。親の顔をば打守り。とかう答へもあらばこそ浮世の中に我程な。不幸な者はあるまいと。フシせき上げ／＼泣き居たり。詞久作愈々腹を立て。不幸と自身知つてゐる人では手がつかぬ。地色子と思はねば濟む事ぞ七生迄の勘當と。顧みもなく言捨てゝ立たんとするを久松は。裾に取付き引止め。詞我と不幸と申すこそ。地背くまいとの詫事ぢやさりとは赦して下されと。手を合すれば久作は。詞ヲ、それで我子よ可愛子と。地引寄せ／＼撫て摩り。フシ乳も吞ませたき氣色なり。地色稍あつて立上り思へば留守へ入込んで。惡智恵などを付けたかと親方殿に思はれては。暇を願ふ邪魔になる平野町迄往て來るぞ。着類半がへ取りおかば篤と我物人の物。見分けて雪駄片足でも。さもしいなどと云はれなと急いで出でしが何とやら。心が／＼りてうぢ／＼と又立戻り。コレヤ久松。詞なんば悲しい事にて。三日四日の水難れ。宿のおくめ

が縮髪。地見てや止みなん葛城の。オクリつらき。別と。フシ後ぞ知る。地色久松は只うつかりと夢と現の悲しさは。思ひ比べて思案して。見れば見る程どうしても。死なねばならぬ身の上を。二つ取には諸共に。死んだ夢こそ増ならめ。スエテ覺めて悔しと泣き惑ひ。地色兎角する間に人や來ん親や戻りて此上の。愛目や見んと急がはしく。硯と紙を持ちながら。オクリ心の。闇路暗きより。フシ藏の窓こそ。極樂の。東門なりと伏拜み。佛様よりお染様婆婆のお顔を今一度。見たやと思ふ一筋に。心や行きて誘ひけん。地色お染はひとり駈戻れば。久松窓より顔出して。詞もう私は覺悟して只今爰で死にま。する。ヲ、さうである／＼。地色我も假睡の夢の内心中したと思つたは。神や佛の御導。それを語つて諸共に。死なうと思ひ極めて來た。なぜ藏の戸を明けやらぬぞ。詞イエ／＼爰へござんすな。二世とは云へど親達の許さぬ内に御一所に。地死ぬればわしは主殺しあひも變らぬ夢の内。云ふ事聞く事語る事皆盡果てて魂は。連れて冥途へ往たてある今の身體は空蟬の。空しき此世を恨みても。泣いても最早歸らぬ事さらば／＼といふ聲も心もさすが細引を。首にくる／＼ひん巻けば。お染も何の後れうと。剃刀出して忽に紅流すみつせ川。地冥途の坂に久松も哀と消ゆる春の雪。白きを見れば死顔の一つ蓮の生如來。さかさま事の弔ひに死光する燈火や。お手の物なる油屋と。樽にしるして國々の。其國々の果迄も言の。葉草となりにけり。

おそめ 袂の白しほり終  
久松



傾城三度笠



傾城三度笠

豊竹若太夫正本

二上り歌坂はてるく鈴鹿はくも。くもるヨイノ。あひの。土山。歌。歌てやるこれや此。行も歸るも。ナホスフシおなじ道。フシ知る人ふえて。宿々の。オクリとまりくのとめ女。旦那のお上りお下りと。言ひつ言はれてはのきくも。金と色との二道に。迷ふは人の世やふかき。伏見の里の朝もよひ。氣もかるさんのきならしに。内と外とに一歳を。フシ半ばは馬の背に睡る。歌戀の重荷の乗掛馬や。此方の思ひは目に三度笠。夢も添寝の。フシ標野を過ぎて。よそに仇名の森口や。變らぬ色を松が鼻。今朝九重を立ちしより心は西に飛梅の。宰府もゑふも晩は早や泊りは。我が住家ぞと馬子も。三重いさみて。鈴が鳴る。フシ行來の駒の。地足音も若しや忠兵衛が歸りかと。待つ母親の氣も忠實に。ヤイ權太郎。風呂の下をけふらすな飯は炬燵に温めてと。世話を焼くやらしよさくるやら。フシ取まじへたる斗なり。地手代の三ぶは帳引寄せ爲替の銀の請拂。荷物の請取狀の届け。朝むつくりと起きるから扱やかまじき商賣やと。暫し伸して大欠伸。誠に死病と口過とに仇なことはない。千兩取る役者も質屋から鏡をすはる。僭上な遊女も節季の白粉は薄く。飛脚の手代は金銀を腰に付けても。我が物にして抱いて寝たことはない。目に正月をさすぢや迄と。フシ烟草引寄せのみ居たり。地然る所へ其年は定かに見えぬ女房の。人目を忍ぶ綿帽子廿五六の男づれ。門口に立寄り手代の三ぶを手招きして。詞忠兵衛様はお留守かといへば。ム、成程お留守ぢやがそれが何とした。然らばお袋様に會ひましたい傳へて給へと有りければ。三郎兵衛不審して是は算用が違うた。旦那に會ひたさうなものがお袋様に會ひたいとは。扱は旦那が子がな孕ませて。頃日便りもない故に腹立まぎれに内儀様に。言うて恥



をか、しよとの事か。それはあまり一興な。如何に思へばとて江戸から會ひにも來られまい。此粹が吞込んだ今でも歸られたら取持て。産料でも取つてやろ。跡なは家來殿か。ゆすり等食ふ三郎兵衛ではない。出ようがよければ一步や二歩は取かへてもやらう。何ぶん今宵は歸られよと言へば。女房打笑ひ。地イヤ左様なものではござんせぬわしは大和の姪でござんす。をば様に會はせてといへばアアおとら様か粗相なこと。サアお通りと言ひければフシ二人は奥に入にけり。地をばは奥より立出て何とおとらか久しやな。ようおちやつたと言ひ度いが是は何とも合點行かぬ。詞前方は互に行來もしたれど。我が子の忠兵衛と許婚して。おもて向から結納をやつたれば此方の秘藏。地迎ひもやらぬに徒既で。しかも見馴れぬお連もある。さりとは心もとない様子はどうかちやと言ひければ。詞男腰を屈め。お前がおとらが伯母御でござりますか私儀は新七と申して三輪の邊の者。是なる女とは三年前より人知れず夫婦の契約いたし。隠すことなれば親達にも御存じ無うて。先頃御子息忠兵衛殿へ婚禮極り。印の樽も納りし上は某ふつと思ひ切り候へ共。女心の一筋に拙者に添はずは身も亡すべきと歎きしが不便さに。二三日以前に所を立退き候へ共。思案する程一大事のこと私は内證のちなみ。忠兵衛殿爲にはおほやけの妻女。其の分にしてはござられぬ筈。見付けられ次第に科に行はれんは知れたこと。然る時には一門一家の恥辱と思ひ。互に覺悟極めし上。恥を捨て、今日は參りしも。他人なれば了簡に及ばず。伯母様と有るを力にて一旦お詫に參りたり。地二人の者の一命は生けうとも死なそうとも。御兩所様の心まかせ存分になされても。ちをらであらう道理。伯母君のお情に宥免有りて給れと。フシ慇懃にこそ申しける。詞伯母は聞くより。何方かは存せぬが發明さうな御口上。御若い同士のことなれば妻なし夫なしの時分には。有るまい事でも候はねばその所は咎めませぬ。今では我が子の女房と名の付いて有るおとらをば。連れ退き給ふ御所存は不義でないとは申されまい。地忠兵衛宿に居るならばこなたを只は歸すまい。しかし皮引きや身がつくと姪が不便に候へば。隱密にしてやりませう互にふつと思ひ切り。おとらを早く親里

へ展し給へと有りければ。おとらは側へにじり出て今日へ參ること恥かしいやら怖いやら。胸がどきどき致しまし御挨拶さへ得せなんだに。思ひの外なる御了簡二人が命拾ひもの。有難いやら嬉しいやら申さうやうも御ざんせぬ。此の上慾な事なれどとても事に埒をもあけて下さんせ。忠兵衛様も根心はわしを女房に持つことは。厭がつてぢやと聞いてゐる。其の筈のこと新町の梅川といふ女郎と。二世の起請を書いてぢやげな。其の水くさいお心と新七様の可愛いと。どうマア思ひかへられう主は男のことなれば思ひ切らうとの給へど私や何ぼでも成りませぬと。思ひの筋の遠慮なき。年より過ぎた通りもの。フシ田舎に京とぞ思はる。詞伯母は聲を尖らして。おぬしは何處の寺へ行って。其の徒は習ひしぞ。何と忠兵衛はいやにして新七殿がいとしいとや。伯母が前にてはてくろしい。眉目よう生れ付いた故人が惚れると思ふかや。今の世界の流行もの顔形より敷金に。惚れる男が多いぞや。地左様な者の癖として。博突うつたり藝好して。金銀のみか寢道具迄。げじいてのけて擧句には無體なことを言掛けれ。裸で逃げて戻るもの。思ひ切らうが切るまいが。此の伯母が切らせて見せうと。フシ疊叩いて言ひければ。詞新七詞を静めつ。只今の一言にちと言分も候へども。地高が我等が無理なれば言譯も要らぬこと。所詮かなはぬ上からは長居は無益サア立ちやと。おとらをやがて引立て。フシ表を指して出てければ。地伯母は暫しと押留め扱是非も無きことどもや。伯母が心の和らぐずは死なうと覺悟極めしも。思ひ合うたり契りたり。我も昔は若木の花色も情も知りたれど。浮氣盛りの者同士が一花ぞめの色ならば。思ひ切るでもあらうかと叱つたことも憎口も。憎うと我は言はぬなり五十路に餘る老の枝。高座の上の談義にも子のなきことは殺生の。報いと示し給ひしを聞いて戻つて其の後は。鯉鮒さへも殺さぬを。老先遠き方々の命二つが取られうか。と有つてそつと赦しては心短き忠兵衛が。世間の恥と思はざる。歎きや見んと悲しけれ兎あればかゝりかくすれば。あらむつかしの浮世やと。暫し涙に咽びしが。何とか思ひ定めけんそばなる硯引寄せて。さら／＼と書く三行半おとらが前に差置いて。詞二人の科も忠兵衛がうらみの品も年寄つた。我



が身一つに引請くる。泊つて行きやと云度いが。其の内忠兵衛が戻つては。地物事がむつかしい早う／＼と言ひければ。命二つを御赦免の伯母の御教書戴きて。心しよぎ／＼いそ／＼と。オクリ急ぎ歸るぞ道理なる。地斯る所へ忠兵衛は財布を擔げ馬繫かせ旅巧者として疲れず。隣歩きの心して。ゆらり／＼と歩み來る三ぶや權太立出て。馬の荷を解く草鞋とく。笠の緒もとく／＼と。フシ荷物は奥へ入にける。詞忠兵衛母に打向ひ。留守中御無事でござりましたか。扱々今年の様な寒い年はない。箱根の吹雪に當てられて。夜晝腹を痛めて難儀致しました。扱此の財布は伊丹の爲替金四百五十兩。地戸棚へ入れて給はれと言へど答へずんとして。物思はしき有様に。忠兵衛は訝かしくお氣難かしく御入か。なんぞ御機嫌損ねたかと。にじりよりて問ひければ。詞母は涙を眼に受けて。いやはや興のさめたこと途方に暮れて居るけれど。どうて言はねば濟ぬこと嫁に貰うたおとら奴が。とうからくさり合うてゐる。其の男めとたつた今。連立つて失せをつた。憎うて／＼己れやれ掴み付かうと思ひしが。年寄は涙脆い。死のゝ生きよのと歎くの。地裏にも暗にも獨りの姪。見殺しにも成り難くつひ堪忍して歸せしが。其方には腹が立とけれど。了簡しやと有りければ。詞忠兵衛冷笑ひ。女と思ひめだれ見て。双物三昧致たるゆすりを一ツばい參つたな。地憎さも憎し追付いて。引戻さうと言ひければ。詞いや／＼今のことではない。モウ半時も間がある。しかも了簡した上に。暇の状もやつたれば何の歸らぬ昔ぞと。言難さうに紛らかす。忠兵衛肝を潰し。何暇の状を遣りしとな。母ぢや人には聞えませぬ。私女房持つことは仲間の者に知らぬはなく。祝儀の樽も二三軒から越しました。今更盗まれたと言つて一分が立ませうか。私は子ながらも他人。とらめは眞實のお前の姪なれば。地身共が廢る一分よりとらが難儀が御不便なる。あんまりそれは胸怒と。フシにがり切つてぞ申ける。地母も怒りの穂に出づる。顔を赤めていふ様は。ヲ、尤なり道理なり。よしなき者を哀みて口惜い詞をきく。其方が五つの時よりも廿年餘り親といひ。子となじみたる其中に。何の隔てが有るものぞ。二人の者に憂目を見せ其方が手柄に成るならば。何しに只是歸すべき言ひするにあら

ねども。其方と一夜の枕をも並べた上の事ならば。不義とて人も笑ふべき。知られず知らぬ古への。馴染と聞けば憎からず。十人寄れば取々の賞めそしりさへある物を。一門中のことなれば互に萬隠し合ひ。波風立たぬがよい筈と心一つに圖ひしも。眞實の子と思ふ故。心安さの餘りぞや其方が心に自らを。常も他人と思へばこそ。思はぬ恨みも請けしぞや。其心なら折ふしに。面倒がつた事あらう氣儘なものと誹るらん。あゝ辱かしの年月や今宵一夜は待合せ。明日は早く自らが駕籠走らせて大和へ行き。暇の状を取返し。二度歸らう歸らずば。フシ得取らぬものと諦めて。親子の別れと思へやと恨ながらに立給へば。詞忠兵衛袖に取付きて。あんまり腹の立つまゝによしなき事を申掛け。御機嫌を損うて千萬後悔致すなり。地誠の親と存ずる故斯様に慮外も申すなり。とらめが事は兎も角もお指圖次第に仕る。お腹を休め。フシ給はれと氣の毒。さうに言ひければ。地母も顔色直りつゝ。ヲ、それでこそ我が子なれ。アノ淫奔なとらめより。地百層倍もよい女房を。呼んでやろうと幼兒を。謙すやうなる挨拶に忠兵衛じつと畏り。詞其お詞に甘へ早速なれどちとお願ひがござります。さる女郎とふつとした。夫婦の様な儀を致し置候。地あはれ御許しあれかしと。フシ笑顔作るも可笑けれ。母も聞くより打笑ひ。詞此方から無心言うたれば其方の願ひもかなへる筈。然し其梅川とやらには。其方が懇志な利右衛門殿と。何時の間にやら深うなり身請の相談極りて。手付の金子卅兩内より盗んで出られ。一昨日から歸られず。親達は腹を立て勘當するの追出すのと。地内はどやくやませるげな此女郎めはおとらより。十越して憎いやつ。ア、いや／＼とぞ言はれける。地忠兵衛はつと思ひしが左あらぬ態にて。高が賣物店屋者もさらりと止めまして。年明けてからわつさりと惠方の方から呼びましよと。言へば母には悦んでそれよそれよと言捨て。フシ寢所にこそは入にけり。地忠兵衛暫し呆れつゝ茫然として居たりしが。暫く有りて横手を打ち。知れぬは人の心かな茶臼山には天狗が住むとも。梅川が心は變るまい。堀江の川より人魚は出るとも。利右衛門との懇意は切れまいと思つたが。ようも／＼二人して。我をまんまと騙したな。おとらが事は當分の腹立。殊に他



國に住むからは人も知らぬ。今宵の今迄女房と思つたを。友達の内儀ぢやと見えては居られまい。よくよく我を白痴と見すかしたればこそ。請けうとも言へ請けられうともいふ。己れ畜生同然の不義者めら。切つて捨る刃物がな。い江戸戻りの土足にかけ。踏殺さんと駈出しが。又立歸り思案して。死なうと躍り狂ふとも亭主や幫間に支へられ。銀づくの詰開きに成る時は。無いと言つては濟むまいと。邊り見廻し戸棚なる。錠ねぢ切て最前の。革財布取出し。利右衛門めが何程に張合かけてきを共。此金にては埒が明く。しかし是亦分別所。人のものをかすめるからは我が首はないもの。命に替へて一分立てうか。イヤ無念を堪へて命を生きやうか。サアどうせうか斯うせうかと。金の脈取り地脈取り。死脈が打つて進むやら。つまる所が分別を。むの字の形にかたづきて貧の盗みはいらぬもの。戀の盗みはなき跡の人の噂も憎からず。己れ只今踏込んで二人が面をはりかへの。提燈さげて蠟燭も一寸先は闇の夜や。肌三途のかはせ金。娑婆の身請の手付とは後にぞ。三重思ひ知られける。

中 之 卷 へ生顔野へのくろはぶたへ

津の國の。難波の事か色ならぬ遊び戯れまでといふ。中に情の様々や。南の岸に寄る波の浮かれて身をや捨小舟。待つとはなしに曾根崎の。遊女に身をうつ。フシ客も有り。戀の誠の塊は廓と粹が定め置く。世間の意氣地友達の義理一遍に利右衛門は。首尾損うて金捨て、夜晝はまる此里の。思はくならぬ手枕に炬燵の内は好ましき。闇がりなれど遠慮して足さし合ず帯解かず。囁く事も他所目には。フシ妬ましけれど戀ならぬ。地忠兵衛が所存姑の。ためなほされぬ氣の毒を。憂名の數に取添ゆる。フシ名代男ぞ氣詰りや。地花車は座頭の手を引いて片手に持ちし取さかな。隣で酔つた酒機嫌辰巳上りの聲をして。詞これはマア餘りなこつてり自慢。夜晝三日が間聲も立てずに寝てばかり。只今でも御金が渡つてお歸りあればお宿の花。頭の雪と見ゆる迄すひついてござんす御縁。此里の名義にわつさ

りと酒も上げましたし。梅川様のお氣に入りの清都の三味線。又聞きに御出も稀にあらうと思つて呼びにやりました。地間の。益二世三世仲人のわしが橋渡し。お一つのんで上げますと會釋をすれば清都は。やがて商賣畏り榮華の春の一節や。小歌踊昔々とのむかし云置きし。浮世のたとへ世話詞。なん／＼並べて。フシ申すべし。すぎわひは草の種。稼ぐに追ひつく貧乏なし。貧すりや鈍する長はんがあてのみ。雁は八百矢は三本。闇の夜の磔。牛に引かれて。フシ善光寺詣り長者の萬燈貧女の一燈提灯に釣鐘。膝とも談合。立寄らば大木の蔭。暑さ忘るりや蔭忘る。法論味噌の夕立。出る杭が打たる、出る／＼杭が打たる。藪に萬巻藪から棒おたから棒。ふりこめさ／＼。兎角戯れ遊べえ。詞利右衛門につこと打笑ひ。日頃の馴染み梅川を祝ふ小歌の一禮に。地紙花なれど今日明日の雨露の恵みに正眞の。さかりをばつと見せうぞと兩人が手に渡すれば。貫つた時の地藏顔忘れた時の閻魔顔。まづそれ迄の樂みと笑うて。内に入りにつり。地かゝる所へ亭主の喜平治外より歸り。利右衛門が前に畏り。詞用事ありて先程新町筋を通り候へば。梅川様の親方榎屋の半兵衛呼び込んで。身請の金はなんとする。肥後の御客へ遣はせば昨日に小判の顔見るに。其方が爲とて歎く故不承を堪へて待てばとて。餘りと云へば不埒なこと。今晚中に埒明かすば右の約束變改と。以の外に腹立ち候。尤も其方様からも。卅兩といふ手付は請取候へ共。地何とぞ今宵か明朝迄銀子お渡しあれかしと。フシ伺ふ顔も氣の毒なり。詞利右衛門聞いて尤々。斯様に延引致す筈はなけれど。親父が手前不首尾故。内から銀が出しにくさに今日迄は不埒せし。然し先程さる方へ無心を言つてやつたれば。明日用に立てんとの事。地先づ悦んで給れやと誠しやかに言ひければ。喜平治大きに悦んで扱も目出度き御事かな是にてさりと夜が明けた先づ女房にも此通り。咄して安堵致させんと。フシいそ／＼として入りにけり。地二人は顔を見合せて暫し詞も出てざりしが。梅川云ふ様ざりとは急に成りました。どう思案して給はるとうろ／＼涙に問ひければ。詞利右衛門溜息ほつと吐き。當座退れに潔く言つて今宵はのがれたが。始終がどうもつまらぬ事今更悔みて返らねど。此方が心



底忠兵衛が所存もかねて知りながら。外の男に請けさせては思ひやるさへ笑止さに。こんな時こそ友達の役と申うて忠兵衛に。地問ふ迄もなく留守の間について請出して兩人が。悦ぶ顔を見よ物と思ふ一つの出来心。内の不首尾に支へられて僅の金子に手詰る事。中々言ふも。フシはづかしや。地恩が仇とは斯様なこと生中な事仕出して。世間の取沙汰忠兵衛が無念の上に面目を。失はするもわれが科宿へ歸りてのめくくと。人に面が合はざりよか死んで言譯立つならは今でも命は惜しまぬとさし俯向いてゐたりけり。地梅川聞くにせき上ぐる涙をやがて紛かし。扱浅からぬお心ざし何時の世にかは忘るべき。必ず斯様な時節には障の出来る物かして。年の内には五度三度心中するも金銀の。不埒と。聞けば世の習ひ身にも人にも恨なし。我々故に此方さんの身にもかゝらぬ御事に。お宿の首尾の損ねたが。何より先は。フシかなしけれ。地明日にもぬしの戻られたら此頃内のお世話の段。くれぐれ語り悦ばん忠兵衛殿に會うたらば。又よい思案もあらうもの左程苦にする事ならずと。思ひ込めたる心の底包むとすれど何處やらが詞のはしの氣遣ひさに。利右衛門いと氣の毒の。病が出て此處らにてとんと死に度い／＼と申うて前後に暮れにけり。地然る所へ忠兵衛。梅川がゐる茶やは嶋屋と聞てせき来り。詞梅川殿のお客利右衛門殿が爰にの由。太鼓を持ちに忠兵衛が来たと傳へてくれといふ。地花車は挨拶自慢にてお淋しがつてあつたのに。よう御座んした奥の間へお通りあれといふ聲を。利右衛門聞くより南無三寶忠兵衛が尋ねて来た。面目無うて會はれぬと。フシ炬燵の。内へ隠れける。地女郎は忠兵衛を見るよりもづか／＼と走り寄り。詞ナウ待ちかねてゐましたと抱き付くを突倒し。地折れよ碎けと踏む足もフシ震うて物は言はざりし。地梅川はきよつとしてナウ怪しからぬ機嫌ぢやが。氣が狂うたかさりとではどうぞ／＼。と言ひければ。詞忠兵衛聲荒らげ。ヲ、怠惰者の心からは氣狂ひとも思ふ筈三〇れが様な徒ものを斬つても突いても某が。すたり果たる一分の中々相手に足らぬなり。サア請出すといふ男めを何處へ隠した引出せ言分有ると睨め付くる。地女郎やう／＼起上り扱は身請の概略を。聞きはつりての腹立かそんならさうというたがよい。それに就いては利右衛門様段々のお世話にて。お宿の首尾も構はずに夜晝是にごさんすに。會うて御禮を言はんせと少しも急かぬものごしを。詞忠兵衛冷笑ひ。さすがは傾城程有つてよう打明けて白状した。地たとへ己れが會はせぬとてのめめと歸らうかと。蒲團まくれば利右衛門は。其方の方へ目もやらす押俯向いてゐたりけり。地忠兵衛側へどうとすわり扱も初心な御大臣か。ほふるのは梅川と口説を我に取りもてか。詞ヤイ其處な不屈者。義理差合を辨へるが傾城買の一徳ぞ。人のわけくふ好色は面桶ぐるひと名を付けて。人間なれば乞食の所作。畜生ならば犬と猫。地よい獸も嗜むこと。お主も男のきれなれば。かく雑言を言はれては堪忍ならぬ筈。覺悟をせよとつめかくるを。利右衛門騒がず打笑ひ仇し男に面目を。失はせたる我なれば當言言はうがた／＼かうが。さら／＼腹は立たぬと言へば忠兵衛いよいよむつとして。思ひの儘に踏付けて格恰らしい挨拶は。我をなぶるか乗せるのか。又氣色に恐れつゝ此場を逃げて退く爲か。勤なれども女房と。契つた中を知りながら眼を盗んだは間男よ。首並べんと脇指を。抜きかける手に纏りつきやれまてそれは了簡違ひ。詞其方と我が懇切は兄弟よりも深い中。身の大事をも語り合ひ心の底も知りながら。不義などとは曲がない。其方が留守に梅川が身請と聞くと身が燃えて。小判の二百や三百は夜が夜中も調ふと。地言ふを自慢にしか／＼つて孔子くさした事なれば。話をするも恥かしさに返答はうたぬなり。取上したる心から氣の廻りたも道理ぢやと。紙入よりも一紙を出し。詞コリヤ此手形はな。梅川が親里へ路銀をやりて呼下し。娘を其方に呉れるとの證據に取りし説文の。當名は龜屋忠兵衛と書かせて置いたも其方が爲。地是でもおれが誤りかと忠兵衛に投付ければ。はつとばかりに押戴きかねての所存知りながら。持病の短氣が差起り悪口ばかり言散らし。扱迷惑などうせうと頭を掻い手を探みつ後へ引けば梅川は何と我が身が徒か。恨みかゝれば氣の毒がりはて忙しないどうぢやいの。其方が恨みは内證事片一方から説言の取次頼むと戯れて利右衛門が膝に頭を付け。唯堪忍とばかりにてスエテ手を合。せてぞ拜みける。地利右衛門顔を和らげてお主と我が其中に。どうしたことをいうたとして心に障る事

ては利右衛門様段々のお世話にて。お宿の首尾も構はずに夜晝是にごさんすに。會うて御禮を言はんせと少しも急かぬものごしを。詞忠兵衛冷笑ひ。さすがは傾城程有つてよう打明けて白状した。地たとへ己れが會はせぬとてのめめと歸らうかと。蒲團まくれば利右衛門は。其方の方へ目もやらす押俯向いてゐたりけり。地忠兵衛側へどうとすわり扱も初心な御大臣か。ほふるのは梅川と口説を我に取りもてか。詞ヤイ其處な不屈者。義理差合を辨へるが傾城買の一徳ぞ。人のわけくふ好色は面桶ぐるひと名を付けて。人間なれば乞食の所作。畜生ならば犬と猫。地よい獸も嗜むこと。お主も男のきれなれば。かく雑言を言はれては堪忍ならぬ筈。覺悟をせよとつめかくるを。利右衛門騒がず打笑ひ仇し男に面目を。失はせたる我なれば當言言はうがた／＼かうが。さら／＼腹は立たぬと言へば忠兵衛いよいよむつとして。思ひの儘に踏付けて格恰らしい挨拶は。我をなぶるか乗せるのか。又氣色に恐れつゝ此場を逃げて退く爲か。勤なれども女房と。契つた中を知りながら眼を盗んだは間男よ。首並べんと脇指を。抜きかける手に纏りつきやれまてそれは了簡違ひ。詞其方と我が懇切は兄弟よりも深い中。身の大事をも語り合ひ心の底も知りながら。不義などとは曲がない。其方が留守に梅川が身請と聞くと身が燃えて。小判の二百や三百は夜が夜中も調ふと。地言ふを自慢にしか／＼つて孔子くさした事なれば。話をするも恥かしさに返答はうたぬなり。取上したる心から氣の廻りたも道理ぢやと。紙入よりも一紙を出し。詞コリヤ此手形はな。梅川が親里へ路銀をやりて呼下し。娘を其方に呉れるとの證據に取りし説文の。當名は龜屋忠兵衛と書かせて置いたも其方が爲。地是でもおれが誤りかと忠兵衛に投付ければ。はつとばかりに押戴きかねての所存知りながら。持病の短氣が差起り悪口ばかり言散らし。扱迷惑などうせうと頭を掻い手を探みつ後へ引けば梅川は何と我が身が徒か。恨みかゝれば氣の毒がりはて忙しないどうぢやいの。其方が恨みは内證事片一方から説言の取次頼むと戯れて利右衛門が膝に頭を付け。唯堪忍とばかりにてスエテ手を合。せてぞ拜みける。地利右衛門顔を和らげてお主と我が其中に。どうしたことをいうたとして心に障る事



はなし。思案する程梅川を外へやりては其方へ。どうも一分立たぬなり假令五年が十年でも。身請の埒を明くる迄廓の門は出てまじと。フシ思ひ込んだる氣色なり。地忠兵衛膝立直し其段ならば安堵せよ。身請の金子餘る程則ち持參致せしと。小判を出して見せければ利右衛門大きに不審して。詞其大分の金子をは其方が分にて何として。才覺はしたことぞ。されば是には話あり天道人を殺さずぢや。今度上りの道連に然る歴々と連立しが。地長道中の憂さ晴し一杯酒のお相手に。淨瑠璃小歌色ごとの話してとんと取入りて。身の上の事話せしに二言も言はず此金を。使へというて貸されたと速意つげなる間に合も。舌三寸の誤りに。フシ五尺の身をば亡すと。地知らで利右衛門悦んで亭主々々と呼立て、小判の山を見せければ。ヤレお目出度やお盃勝手の行燈かき立て、祝儀は鮎の御吸物下を炊くやら腕拭くやら。金で庭掃く槌屋へと亭主は急ぐ利右衛門は今宵は歸りわが宿の。首尾繕ろうて明日ははや。駕籠を作らせ兩人を。迎ひに來うと戯れて悦び我が家に歸りけり。地女郎は心いそぐと立ツたり居たり拜んだり。愛染様への御無心もさらりとやめてあしたから。飛脚の神は知らねども達者な様に仁王様。信心したがよい筈ぢや何かを置いて來月は。有馬へ入りて赤子産んで成人したら嫁呼んで。夫婦は外へ隠居して參り下向て暮さうと心にたゝむ百年の命も今日か明日かとも知らぬ忠兵衛は無常氣であへんどうたず戯れず。炬燵に顔を寄せつゝつくづく物を思ひけり。地女郎は少しむつとして。世の諺に嘘がない女房と名がつくとはや。愛想が盡る物ぢやげな。殊に近々御内儀を。呼ばしやんすのもきいてゐるかたを背中へ結んでも。女夫は女の手柄にて何程榮耀に暮しても。妾と言へは何處やらが足らはぬやうに思はるゝ。年越の夜や七夕は必ず一人寝しさうなもの。樂しみもなきかた様が可愛といふも蟲の所爲。斯ういふさへもいやさうなと。フシ睨む尻目も物ぞうき。地忠兵衛は聞くよりも女房持つて聞きながら。今迄知らぬ振せしはざりと深き心かな。跡になりたる言分なれど女房呼ぶも數銀に。心のつくは怨ならで其方を身請の胸算用。裾が違つてそれも今日さらりと去つてしまふたりや。女房といふは其方が事母も大分合點なりや。追付内へ呼入

れて随分大きな顔さしよと。騙すを知らず梅川はそれは誠か眞實か。お袋様へお土産には菓子か酒かと氣を配る。フシ女心の果無きも。フシ賢き人も。留まらぬ市の假屋の一騒ぎ假の此世と觀すれば。思はず出づる念佛の。詞ア、南無阿彌陀佛くく。地聲も哀れにはなへ入る。心送くる涙川。フシ堤も。切れてむせ歸り。詞やれ女房よ梅川よ。此有様を何に似た。物とも今日は知らずとも思ひ合はさん其時は。念佛申し手向よや。まつ此様にわれが身は野邊の枯木の木守と色は替りて朝夕に。いとし可愛と締ためも鳥の嘴に食ひこぼし。血潮は染むる千日の嵐の野邊の草むしろ。夜すがら撫でし肌をも煩惱の犬くひ散らす。身の行末の悲しやと覺えず。泣いて語るにぞ。地梅川何の辨へなく扱いまくしき物語。どうぞ覺の有る事か包み給ふは聞えぬと。スエテ縫り付きてぞ泣き居たり。地忠兵衛心を取直し歎くは道理ことわりや。詞今は何をか包むべき。最前渡せし身請の金。人に借たと話せしは皆偽の爲替金。地盗んで内を出てたれば二度歸る心はなし。何處如何なる奥山に暫しが程は隠るとも。多き仲間のことなれば遂には探し出されて。憂目を見んは知れたこと覺悟したる事なれど。其方が歎きを見るならば未練な心や起らんと。隠せしも亦。フシはづかしや。地斯くとは知らず相思ふ妹背の中は萬世や。龜屋忠兵衛が女房と頼みにせしが不便やとまたさめくと泣きにけり。地女郎は呆れ惑ひつゝ扱恨めしのお心や。誰に添へとて自らを命の仇の金出して。身請と思ひ立ち給ふそれとは知らず露の間も。勇みし詞果無しな。主様とても我とても人悪しかれとは思はぬに。思へば過去の敵同士。互に惚れつ惚れられた報いを返すと思ふぞや。今は泣いても悔みても歸らぬ夢の浮橋や。渡り比べて今ぞ知る。千歳の契交すとも別れとなれば辛からん。一言なりと女房と呼ばれしを只思ひ出に。とても逃れぬ道ならば隠れ忍びて添はんより。死出の山路の旅よそひ。永き契りをはすべし。最期を急ぎ給へやと。フシひれ伏し泣くぞ哀れなる。地忠兵衛とかく諫めかね。先づはうれしき心ざし。あの世で添はるゝ物ならば。何しに跡に遺すべき悲しきは只我が身の上。科を正してあらけなき双の下に消え行かば。地獄とやらん恐しき鬼の筈の下に伏し。假令一ツ所に死ね



ばとて相見る事は叶はぬなり。一門共も疎み果てとひ弔ひも致すまじ。其方が誠の心ならば尼ともなりてなき跡に。残りし野江の黒髪を拾ひ集めて烟とし。回向の鉦を聞かせよやそれを力に成佛し。末期は遠く隔つとも夫婦の縁は蓮臺の。半座をわけて待つべしと願しても亦いやおの。答もあらず荒磯の。フシ涙凍らぬ斗なり。地かゝる折ふし中間の者。忠兵衛有家喚出して理不盡に駈入るを。利右衛門跡より追付き間口に立ふさがり。詞やれ待て方々。大事を仕出す不敵者。死狂ひして一人でも。地かすりて負うて入らぬもの我には心許すべし。騙して爰へ連出さんと。フシ言捨て奥へ走り入り。地忠兵衛に囁けばはや仲間へも知れたとな。是非に及ばぬ是迄と脇指に手を懸くれば。利右衛門其儘抱きとめて何時死なうと儘なこと。一先づ爰を立退きて一日なりと梅川を。女房に持つて榮華せよ。跡は某請取た。退けよくと引立れど。忠兵衛ちつ共動かずして一旦二たん段々の恩を請けたる其方に。難儀をかけては生甲斐なし離せ。くとせき狂へば。利右衛門大きに腹を立て。我を我とも思はぬ故。斯程の事を最前に包みし段が恨なり。おぬしが今度の過ちも言はゞ身共が梅川を。出しそこなうた故なれば。地汝が科は吾が科。是非々々止らぬ覺悟なら。某先に腹切らんと同じく刃物に手を懸くれば。忠兵衛はつと涙をこぼし。命にかけての心ざし無下に致さうやうはなし。そんなら落ちて見ようかと。屋根を覗き裏を見つ。其處か此處かと立騒ぐ。利右衛門きつと思案して。炬燵の炭櫃引上げて是よくと囁けば。梅川を抱き下し續いて忠兵衛飛び入りしが跡振返り。利右衛門が顔を打守り手を合せ。朋友の縁盡きせずは再び會うて語るべし。落行く方は大和の國落付いたなら六道にて。早速御禮申さんと言はせも果てず睨め付けて。詞やれうらたへもの。そんな粗相な根生ては身の行末が覺束ない。頼む頼めと言交す義理違へぬは武士のこと。斯ういふ我は町人ぢや我が身に難がかゝる時。血に迷うたらあらゆること白状せまい物でもない。命を的の當所問はず語りは何事ぢや。大和へ行くと思ふなら幡磨へ行くといふものぞ。東の旅に赴かば長門へ下ると書遣せ。足跡運れて口論すな道を急いで夜道して。物した物を物せられな。時刻が移る早や行けと名義の顔を振向ける。門出の道死出の道。火宅を出る冷炬燵もとの如くに取直し。居ぬはくと聲上ぐれば。大勢一度に込入つて納戸にも居ぬ湯風呂にも。居ぬはくといふ聲は下屋に響く地雷。臍隠すやら撮むやら。闇きに入りて闇がりの峠を指して。三重落ちて行く。

下之卷 道行人目のせき

まゝならぬ。世に生れ来て憂き事の。其中々や色の道引けど離れぬ煩惱の。怨と悪との三筋町。スエテ流れに洗む梅川の。淵は瀬となる飛鳥川。フシ搔けどすゝげど。身の垢の。落ちて行方をくろめんと。黒縮緬の一樣に。石持月は霜月の曇まじりにふる雪を。打拂ひく。アミドオクリ二人へ連立つ後や先。フシ知る人忍ぶ。菅の笠。前傾きに着なしても。何處やら粹な抱へ帯。フシそれとは誰もしら出立ち。東の方もしらくと。しら玉造り札の辻。野はづれ頃は人顔も見ずや。見せじと袖口に。眼の下隠す法妙寺。晨朝の鐘現にも。小オクリなまみだ。鉢叩懸路の闇の晴れやらぬ。闇き浮世の。闇きより。闇きに迷ふ。フシ娑婆世界。猶愛しさに行道を。頼まずとても彌陀佛助け給へとフシふし拜み。地此頃つもある憂き思ひ語るに盡きず語る間も。泣暮したる年月の情重なり今ははや。我が故里へ伴ひて一日なりと世帯して。祭文朝茶わかする釜のざと。オクリいへば梅川。フシ氣に懸けて。地それはお俊の祭文歌ア、氣懸りと耳塞く。誠にさうよさりながら請出す其方を連退くは。末世は知らず今の世に又有るまじき身の上を。難波の町の讀賣に語り盡せと言ふ事か。練歌舞伎の諺の。種に残して置く霜の。露塵厭はぬ身なれども。二上り文彌宿世如何なる機縁にや。見初めしよりも身に添ひて。月こそ出れ葛城の。よるく松原の。長堤煙草のまんと煙管筒。片手に火繩片手ツキユリ口説も今は忘れ草。むかし。がたりと成果つる。フシこゝ松原の。果は煙と成る物を。悔むは愚痴と吸殻を叩く拍子に雁には。ハツミくゆる煙の。わが。思ひ。誰が身の上も此如く。果は煙と成る物を。悔むは愚痴と吸殻を叩く拍子に雁



首の。スエテ落ちて喫むべき様もなし。地男は肝にこたへても素知らぬ顔に物言はせ。先で休まん此方へと色オクリ心ぼそくも。辿り行。フシ闇がり峠。のぼり坂二人手に手を。取かはし。歌心安かれ當麻へいたら。何時が何時まで居ようと儘ぢや。さのみくどく思はずと道急ぎや。先には親の有るものと。いさめ立つればそりやそもあるが兎角定めぬ。フシ身の上と。泣いても歩み笑うても。歩む姿ぞ見すばらし。人目忍べばいとよなほ。往き來る人の見返りて所目なれぬ取なりと。後指さすうたてさよ。歌申しこれなうさりとては。わしが身とてもまゝにはと。末は涙に果しなく。オクリ延紙の三つ折。取直し離さぬ内にせはしくも東の方。方。フシ眺めやり。あれアノ森の木隠を。當麻寺とは申なり。地中將姫の發心も濡れにぞ濡れし尼衣。長地戀の仇名ときくなれば假にも戀はせま欲しき。戀知らぬ身はむくつけに。玉の盃底なきもの。物の哀れは是よりぞ知るも。知らぬも色の道迷ひ迷ひて行先は。なを隠家のみのへ村知る人。三重里に。着きにける。

地我が庵は三輪の近所を戀しくば。尋ねてこいは辻占の悪い本歌を遠慮して。言はねど氣にはかゝり戸の心細さやさうめん。機織習ふ白を挽く。姿捨てゝも色と香は昔を匂ふ。フシ梅川は。ほつとりものと手間取が尻を叩けば忠兵衛は。地女房自慢の高胡坐。膝に拍子を取らせつゝ。それ女房の尻といつば峯には四季の雪を戴き。麓に止觀の海を湛へ。三世の諸佛出生の門。一切衆生煩惱の。スエテ鬼門に當り。地けるによつて。都の富士とは。フシ名付たり。かゝる尊き靈地なれども。某不思議の機縁によりて。たとへば夜が夜中なりとも。残らず拜み奉る。ア、心あらん人々は。槌や杓子や摺木にて。叩き給へと言捨て。フシ神は。上らせ給ひけりと。地語りしまへば梅川は又大だはけが起つたと。箒を取て追廻れは。おとらが腰に縋り付きゆるせ。くといふ聲も。フシどよみ戯れる所へ。地新七親子立歸り物をも言はずふくれ顔新兵衛奥へ入れれば新七どうど座を組んで。あたり邊りを睨め廻せは。忠兵衛おとらは不首尾にてじんじと下に下りけり。梅川そばから笑止がり。あじやらが過ぎてえいなりの。爰へござれといふ聲

を。力草にて立退けば新七暫し睨み付け。詞コレサ忠兵衛。飼ひ飼ふ犬に手を喰はるゝとはお主がこと。行むかたもない所を。隠まひ置いたる恩の忘れ。何故女房に不義はしかける。上につかれて後悔すなと荒らかに言ひければ。忠兵衛ぎよつとして。是は近頃迷惑千萬。流浪の身となりし以後は。夫婦一ツ所の寢所でも念佛で明すことあり。左様に榮耀な心底は神以て候はず。其上恩有其方の内儀に。蟲なればとて不義すべきや。地鬻氣晴しに女房とあじやらが過て此仕合。疑ひやめて給はれと。スエテ理を盡して言ひけれども。詞新七少しも合點せず。いやさあじやらとは言はれまい。其方とおとらが古は許婚の中。枕こそ並べね互ひの心に一物ある筈。地其筋に頼りて言離けんとの巧。恐らく見た眼は違ふまじ。フシ返答聞かんと差寄れば。詞忠兵衛聞いてム、さう思ふ心底からは疑ひも尤も。親子の中に違ひは無けれど。地いよく心残らぬとの證據のために改めて暇の状を遣すと。筆さらくくと染直し。フシ血判添へてさし出せは。新七見もせず引破りム、詞只今暇をやる迄は。不義しても大事なとの言譯か。梅川などは遊女の果さうした事も有るべきが。身が女房は在所もの。不義仲間へは入れられまい。彌々たはけた言分と氣色を變へて言ひければ。梅川はむつとして。なんと。遊女の果は不義するとや。地お前は甚い粹様ぢや。大和に置くは惜しいこと先程からの御無體を。つくく聞てゐまするが。どうやら物が有りさうな。ナウ忠兵衛様。御思案は無いかといへば忠兵衛もさうぢやというて打點頭き新七が前へつゝと寄り。詞エ、聞えぬ新七。隠まふまいと思ふなら。何故打明けては言はぬ。我に無名を立つるのみか。女房がこと迄を無念な詞をいうたナア。地其口やめてやりたけれど片時も養はれた。恩がある故のめくとは出て行く。人には報いの有物ぢやと齒を食ひしぱり怒りけり。詞新七を知らぬ顔つきにて。如何に女房。厄介人が去なるゝに笠杖やれと言捨て。地奥を指して入る所をおとらは袖に縋り付き。たとへ如何程お心にさはりしことあればとて。それ程までにお二人を。酷う辛うの給ふは。心の底のいぶかしやいふに及ばぬ事なれど。地自らや此方さんの死なうと思ひ定めたる。命二つを伯母様に助けられたる返しぞと。思ふが故



にお二人を。隠まふ事も。フシ身の祈禱。何程御馳走申しても。飽足らねども御遠慮が。有りもやせんと朝夕に。手馴れぬ業をさせますも。お心安き爲ならずや。地人にかゝりは物事に心が引かれそつとした。事にもお氣がまはるもの。憂さ忘らせん爲にこそあじやらいうたり笑うたり。戯れいふも無理ならず。詞お前も昨日今日迄も頼母しかりしお心の。地俄に變り給ふのは邪見な奴が智恵付けて。威し居つたか叱つたか。たとへ千人萬人の邪見な者がほむらより。一人なりとよき人に誹らるゝのを恥ぢ給へ。扱うらめしのお心やとむせ返りてぞ歎きけり。詞新七眼に角を立て。名を取らうより徳取るぢや。地あた面倒なと突倒せば三人目と目を見合せてはつと斗に泣居たり。地おとらは二人にさし向ひ。今の詞の出るからは最早御思案おはしませ。邪見な男持つたゆゑ吾が心も一ツ所か。思はれんこそ。フシ悲しけれ。地今お二人の御難儀も僅の金の過ちぞや。私が嫁入つて居たならば斯様なことにも成るまいと。世のあだ人に馴染めて引違へたるいたづらの。我を根ざしに物事が斯う成り行きてお二人に。憂目見すると思ふ故。身に引請てしみんとおいたはしう思ふなり何處に住せ給ふとも。頼の文を賜へかし。邪見な夫と憎ければ添ひ果てうとも思はれず。時節を待ちて宮仕へ今日の辛さをお詫びせん。命があれば世の中が辛う斗もないものぢや。御息災にてましますと。言譯するも跡やさき。フシ亂るゝばかり泣きあたり。地忠兵衛顔を打守り夫婦が中に斯程迄。違うた心底有るものか。頼む木蔭に雨漏つて。さし行方も覚えねば野原の土とならんより。その情の一詞冥途への土産にて。いつそ空しく成りなんと涙と共に言ひければ。梅川騒ぐ氣色もなく。まだ此上にどのやうな。憂目を見んも知れぬ世に早う殺して給はれと。近くへ寄れば忠兵衛脇指抜いて立つ所を。地新七やがて走り寄り脇指もいて投げければ。詞忠兵衛鞆に納めつ。我々此處で相果つれば。難儀のかゝる恐ろしさに強ひて止めるか氣遣ひすな。サア梅川一二丁。地そろ／＼歩めと手を引けば。新七暫しとおしとゞめ後の障子引明けて。父新兵衛の前に。畏り。羽織をとればこは如何に。布子の下の小手しばり。フシ皆々興をぞさましける。詞新七涙を流し。地語るまじとは思へども。

死なうと有る故一通りを申すなり。詞今朝よりも親子の者庄屋の方へ呼付けて。兩人の儀を村中が是非胡散なとあやしめて。先立て早や飛脚仲間へ概略言うて遣す由。地取逃しては地下中がいかう迷惑することぢや。必ず沙汰を致すなと牛王の裏に判させた。しかし某が心中には。たとへ神罰受くるとも。おのれ早々落さうと思ふ色目を悟つたやら。そこで庄屋が智恵自慢。詞新七には孝行者親の難儀を見捨ては。よも方人は致まい。兩人を渡す迄とて此如く。地繩をかけて歸せしが。道すがら親人の仰には。汝が我を思ふより親の汝を思ふのは。百倍千倍勝りたり。我が難儀を苦しみて恩ある友に義理缺くな。地此様子をば語りなば先にも此方をかばはれて。落ちまいなどある時は心ざしが無足する。どうぞ思案を廻らせと。仰られしを尤と同心して。手段の爲の慮外の段さこそ憎しと。フシおぼされん。地夫婦の者は伯母君の陰で延ばはる命なれば。今更人に成り代り如何なる憂目を見るとも。地もとより厭はぬ管のことゆかりもあらぬ親人が。子の爲にとて年寄の。難儀をしのぎ兩人を。落さんと有る心ざし一禮いうてのき給へと。涙ながらに語るにぞ。こは過分なるお心やと。フシ覺えず。知らず泣きにける。地新兵衛につこと打笑ひ様子は忤が言ふとほり。以前の情今日の恩損徳なしの鸚鵡返し。禮いふことも言はるゝ事も時刻移りて氣遣ひな。夫婦の者も用意して村境まで送りませ。急げ／＼と有りければ。杖よ笠よといふ所へ物騒がしき足音の。近くなるよと思ふまに捕つた。捕つたと言ふ聲に。續いて大せい駈入りて。兩人共に縛めの。フシ細取り後より引立つれば。地新七おとら新兵衛は。呆れて涙も出でざりけり。二人は覺悟極めつ。詞涼しき暇乞ひ。どうで一度は死病腎虚内損勞咳の。いたり病の上を行く戀の双に圍まれて。女のよれる捕繩に身は繋かれて引かれ行く。隙行く駒に上さし三度びなはの仇煙消えに行く身の道連のなかに哀れも目立たる。黒縮緬の優さ男狂言。綺語に名をのこす。

右之本透吟覽頌句音節墨譜等不違毫釐令加節且以著述之全本令校合畢尤可爲正本也。

豊竹上野少掾



傾城三度笠終

愛護若埒箱

大坂上久寶寺町三丁目  
正本屋 西澤九左衛門 版  
作者 紀海音



愛護若時箱

作者 紀海音

序詞龜言軟語皆第一義に歸し。治生産業おのづから實相に背かず。智門は高きを勝れたりとし。悲門は下れるを妙なりとす。低き人の丈較べはひくきを勝ちするが如し。無相の法身皆一智毘盧の全體なり。暫らく劣機に近づきて強剛の衆生を利す。和光同塵神津國幾萬代の末久に。豊秋津洲の御主。仁明天皇のオロシ御聖徳へ傳へ聞くこそ。有難き。地色毗近多き其中に二條の左大臣清平公。古今に秀てし英才なり。又六條の右大將有雄卿と聞えしは。させる學智もなけれども御外威の威を振るひ。我より上に立つ人を嫉み妬んで色々と。讒者の唇動くこそ。道明らけき九重のフシ月に。雲ある如くなり。地色然るに春の末よりも天皇御不豫の事ありて。晝の御坐に垂籠めて打臥し惱ませ給ふ故。地當時の名醫入り代り倉公華陀が手をつくし。陰陽の頭當年の星を勘へ易を繰り。諸寺の高僧壇上に孔雀明王薬師の法。丹誠無二の御祈禱もいまだ效驗見えざれば。月卿雲客堂上に額を鳩め氣を痛め。武官の輩は庭上に弓矢た挟み居流れて。縦へ變化の業なりとも目にだに懸らば射伏せんと。思ひ込んだる有様は。フシ殿めしうこそ見えにけれ。地かゝる所へ比叡山帥の阿闍梨參内あり。謹んで宣ふは。詞玉體御惱の御祈り山門は申すに及ばず。諸寺諸山の僧徒ども至情を抽んで候へども。更に效驗あらぬ事不思議の思ひをなす所に。老僧夜前あらたなる瑞夢を蒙る其意趣は。此度帝の御祈願には神明和光の力を頼み。王城の未申別雷山の麓にて。流鏑馬を興行し二條の家に傳はりし。降天の唐鞍を明三歳の駒に置き。同じく双の太刀を佩き清平公の長男。愛護の若に勤めさせ神慮をすずしめ奉らば。地玉體長久たるべしとの神勅猶豫に渡らずと。畏れ入つて奏聞あり。地色月卿雲客一同に是は希代の靈夢やと。フシ冠



を傾ぶけおはします。地六條の右大將會釋もなく進み出て。詞御坊は老にほれられて筋なき事を言はるゝな。夢は五臟のなす所善惡共に信ずるに足らず。其上山々嶽々にて行徳兼備の高僧ども。肝膽を碎きてさへしかくとなき御勞り。何ぞや俗家の武具馬具にて年端も行かぬ愛護の若。地流鏑馬の曲したればとて如何なる神が愛で給ひ。御惱平安なるべきぞ。フシ傍痛しと嘲笑ふ。詞清平笏取直し。粗忽に候右大將。假にも瑞夢とある事を疑ひ給ふは勿體なし。古人の夢を論ずる事眞妄邪正虚實あり。菩提心經の如くんば佛天感應の四種あり。蓮華三界日月僧是を四つの善夢といふ。又樓寶藏經の中には佛在世に惡大王あり。夢中に入つての不思議を見る。是を外道に尋ねれば入難の夢遁れ難し。若し寵愛の尸婆夫人を。殺さば其身の禍ひは免がるべしと勧めたり。その時佛聞し召し止んなんく入福輪の吉夢なり。必ず寶を得給はんと夢合せし給ふに。果して翌日隣國より玉の冠を捧げたり。地唐土の帝王も夢を信じて國を保ち。我日の本の天皇も靈夢を感じ給ふ事。書傳に先例候とフシ理正しく宣へば。詞右大將氣色を損じ。よし瑞夢にもせよむね夢にもせよ。手前の行法差置いて餘所にまします神明の。加護を頼むは何事ぞ。抑々山門昔より多くの寺領を當て行ひ。施物を費し敬ふも百王鎮護の靈場と。思つて致す所なり。但し末世に至りては佛法の威も亡び失せ。地祈るに驗なきならば山門ありても益もなし。阿闍梨を始め三千の坊主どもを還俗させ。牛飼ひ舎人に使はうかどうぢや。フシどうぢやと睨めつくる。地色阿闍梨涙を押し拭ひ。詞ア、忌はしや勿體なや。地色非修非學の愚妄人言葉交すも穢るれど。顯密弘通の大乗を誹謗めざるゝ不便に。あらう語り聞かすべし佛法不思議の靈驗は末世にいよいよ盛んなり就中我山は。詞圓頓の花止觀の月上見ぬ鷲の嶺なれば。本尊の利益他に勝り行者も外に勝れたり。地衆生の諸願無量にして佛智の悲願もまちくゝなり。虚空藏の求聞持にて財寶化徳を成就し。詞聖天の浴油には官祿長職速かなり。壽命を祈る閻魔王怨敵退治は大威徳。不動の護摩に掲焉たり金剛般若の利劍には。三毒四魔を切拂ひ五穀成就六慾怨敵七難即滅七福即生。地色八大金剛童子の法如法に祈念する時は。枯れ木再び花開き白骨肉を生ずれども。

悲しきかなや朝廷に。無道の佞人立交り政道邪曲ある故に。王法佛法衰へて本地の利益薄き故。垂迹の神明を祈るが愚僧が誤りか。地別雷山に降臨ある松の尾の明神は。我山におはします大山咋の命とは。同一體の御神にて鳴鏑の神ともいひ。流鏑馬は此神の妙體。因縁故實も知らずして佛法を破却せん。僧徒を還俗せんなどは佛敵朝敵たるべしとフシ憚り。なくぞ申されける。詞右大將腹を立て。ヤア賣僧坊主めぬかすまい。汝は元來清平と親しき所縁ある故に。二條の家の太刀鞍にて御惱平癒なされしと。世間の者に言ひなづけ逆心を企つる。地朝敵の與黨人彼奴引立てよとのめれば。瀧口に伺候する駿河の前司國則。つゝと寄つて用捨なく小腕取つて引立つるを。それを制せよとの下知を受け清平公の郎等。早苗之介勝重庭上に立上り。詞君を惱ます變化の物。今といふ今見付たり。猿にもあらず猫にもなく頭はお公家氣は狼。地第六天の魔王組。佛法護持の名僧に敵對をなす眷屬め。射て落さんと大雁股きりく引絞れば。詞ア、これく勝重短氣なり。主人持つ身は相互ひ私の宿意なし。佛法話の有難さにお十念を授かる。と。地ひよつと爰まで出ましたと手持ち無沙汰に手を合せ。南無阿彌く南無阿彌と狼狽へ廻りほえ廻る。泣き聲鶴に似たりやと。堂上堂下一同に。フシ覺えずどつと笑ひける。地色天皇玉の床近く清平公を召されつゝ。阿闍梨の奏聞先達て朕が感ずる所なり。地別雷山に埒を結び神すゞしめの流鏑馬を。愛護の若に勤めよとの勅詔誠に有難き。家の面目末世の規模神の恵みに叶ひたる。直ぐな心の清平公。邪智貪慾は有雄卿。位倒しの諺は。此時。よりぞ三重へ始まりける。フシ代々経てや。地君が千年を松の尾の。葉替へぬ色を流鏑馬に神すゞしめて頼むてふ。心の的一二三埒結ひ廻す外面には。物見好きなる都人押し合ひへし合ひ伸びあがり。見るもことわり今の世の若衆の蓄香ばしき。名さへ顔さへ鷹さへ愛護の若は大君の。勅に従ひ陸奥の安達駒の駒にあらねども。降天の唐鞍置き手綱搔繰りひらりと乗り。オクリ先づ下へ地をぞ乗り給ふ。フシ抑も馬に七箇の秘事三箇の手綱五箇の鞍。陰陽の鞭朝嵐大嵐小嵐。運びのべ足。フシ千鳥足。霰流しと。地云ふ曲をしつと、打つて乗り返し。乗廻しては引返す轡の。コハリ音はちりりんり



ん。障泥の音はどう／＼／＼とくる／＼。ナホス地くるりと輪乗りして。障泥をはたと打つ程に、フシ四足を宙に駈出す。地色馬上に番ふ白羽の矢かの養由が柳的。三度の目當違ひなく當つて／＼當つてと。貴賤上下一同にフシいや／＼どつどそ褒めにける。地色然る折節いとやごとなき上臈を。後達お婢肩にかけ埒押開き駈入りて。局と見えしがはしたなく。詞コレ／＼若衆動きやんな。的のそれ矢が姫君のお腹に立つてお目が眩ふ。地償や／＼と呼び猛る警固の者ども打笑ひ。推參なる言分かな。御神事の的先のさばり出たが不調法。死なば死に損構はぬと地叱り付くれどたじろかず。詞イヤ／＼さうは云はせまい。主と頼んだ姫君の嫁入り前に乳の下へ。穴あけられて是がまあ堪忍がならうかと。地恨むもげにと白羽の矢胸苦しげなる有様に。若君馬より下り立つてする／＼と走り寄り。不慮な事とは云ひながら扱いとほしのお姿と。詞の花の色に香に風が持て来る。懐の。内擦る手は逆鋒の雫よ物の初めぞよ。スエテ締めつ緩めつ姫君は。流し初めたる目の内も。戀におぼこの若君は何と答も夏黄蘗の。照葉と顔を打赫め、フシ氣の毒らしき折節に。地色是も變らぬ上臈を女房達は肩にかけ。つか／＼と立寄つて。詞妾がお主はおの様のお手にかゝつてお命も。地今を限りになり給ふ様子は斯くと白羽の矢。肌くつろげて見せければ若君呆れ給ひつゝ。神の咎めか二人迄思はぬ憂目見る事と。差入れ給ふ左の手押戴いて締付けて。氣遣ひさするもお笑止なそれ矢と云うたは偽り事。戀のそめ羽の色に出て思ひ込んだる一念の。石に立つ矢の例をば。知られまほしきばかりにとフシ縫れかゝるや。左右いづれを花と櫻とも。水淺黄なる愛護の若指唾へたき氣色なり。地色先に來りし女房達與さめ顔に打守る。中にも局聲を上げ。詞ノウそこな大騙。こちの趣向をなぜ盗みやる。折角工み拵へて射て落したる寢鳥をば。地綱掛けうとは大膽なあたいやらしいとわめけども。こちらも負けぬ女口。詞ハ、／＼味な事を聞く。趣向は似ても違ふとも兎角勝負は早いが勝。地戀の矢疵の時花醫者其許迄は手が廻らぬ。杉山膏藥買はしやれとどつと笑へば右に立つ。姫君少しせき心。詞君が心は知らねども情はこちが一の的。地あれ／＼あそこな幕の内腰元どもを屏風にして。つい物陰につま

こもる矢野の神山匂ひ初め。見初め寝初めて解け初めて。ちよつと／＼と手を引いて誘ひ給へばこちらにも。むつとせられて引戻し戀は互と先から。了簡すればまんがちな。斯うした首尾は優曇華の咄する間もあるものを。せはしないやらはしたない其處退かんせと突放す。詞イヤ小癩なるお上臈。わしが男をわしがでにどうしようと構やんな。びろ／＼しやるそなたは誰そ。ア、とつくと聞いて置かしやんせ。權大納言爲道が乙の娘に鳩照姫。地愛護様とは似合ひし女夫の中と思し召せ。詞ム、そなたが公家の姫なれば自らも右大將。有雄が娘に六條姫。地氏も系圖も若君の御臺と云うて不足はない。イヤ／＼わしが嫁入る。おれが殿御に持つて見しよ。ならぬ。させぬと兩方へ引張り合つた衣手の。もりて浮名は立たば立てこなたへ。イ、ヤこちらへと互に募る女の意地。若君は持てあぐみ早苗之介は居やらぬか。荒木の左衛門／＼と。呼ばひ給へば兩人ははつとばかりに走り出て。フシ先づ双方へ押分けて。詞様子はあれにて承る大殿へ披露して。表向より婚禮の儀式を調へ候べし。地先づ／＼御歸り遊ばせと宥め謙せば姫達も。流石は人目恥かしくそなら今日は歸ります。詞早苗之介殿頼むぞや。愛護様をば鳩照が夫に持たして下されや。地いかにも／＼勝重が肩持つて添はしましよ。詞コレ荒木殿構へて六條姫が嫁入るぞや。地成程々々左衛門が御取持ちを致すると。當座通れの請合も空頼めしてにこ／＼と。互にめなし男なし廣八丁に何時なると。大浦波立歸り見れども飽かぬ山梨の花の姿も隠れ行く首尾こそよしと兩人は。若君の御供し。オクリ心へ靜かに立歸る。フシ然る折節。向ふより頭の辨成重卿勅使とあつて入り來り人々に一禮し。詞流鏑馬首尾よく執行ひ神明擁護あるにより。御惱忽ち快然たり。地色報賽の御爲に神田神領御寄附あり。愛護の若も今日よりは中将に任ずるとの。宣旨の趣き相述べ御宸筆の願文を。若君に差出せばはつと頂戴なされつゝ。社の方に差向ひ柏手再拜懇るに。高らかにこそ讀みあげける。

## 願書の卷



地それ秋津島は神慮擁護の靈地たり。かるが故に上一人より下萬民に至る迄。佛神を深く尊むなり。就中當社松尾明神は帝都不變の守護神たり。豈納受なからんや。然るに天皇圖らずも。寒暑の難に恙を生じ。醫陰の兩道術盡きて諸佛の悲願空しきを。神明和光の力により。平復ならせ給ふ故。社頭造營仕る。地先づ五十餘町に地を引かせ。宮殿樓閣鮮やかに。瑪瑙の行桁玻璃の柱。黄金の闔を延べ開き。瑠璃の高欄やり渡し。碑礫の擬寶珠磨き立て玉の蓮臺錦の御帳。渚の砂に黄金を交ぜ壁には七寶。池には玉の橋をかけ。忌垣はかうやうらんけいし。廻廊。拜殿式の文金剛薩埵を移すべし。棟梁の棟をうきやかに。無量の瓔珞結び下げ。華臺の幢は雲を分け。常樂我淨の。謠風吹かば胸の蓮空に開き。蘭麝の匂ひ四方に満ち。無明の。眠り覺めぬべし。地香の煙諸經の聲。二六時中に絶間なく。綾の幣帛白銀の獅子狛犬。階は唐木を以つて作らすべし。大塔鐘樓堂いかにも高く。雲の上に光を放つて作らせ四季の祭禮意らず。珊瑚琥珀を延べ。九品の鳥居石の塔。金剛界の曼陀羅。胎藏界の曼陀羅。鏡腹卷太刀刀。唐土天竺我朝。三國の寶の數。寶殿に納むべし。仰も神と申すは眞俗たるを姿とし。正直たるを心とす和光。同塵地曇りなく異賊を千里に。退け早く素懷を遂げしめ給へ。南無歸命頂禮。敬つて申す寶龜三年五月十五日。二條の中將愛護の若と。高らかに讀み納め悦び。勇み歸らるゝ。フシ神道兩部。習合の道の。道たる奥旨をば。見る人聞く人押並べて感ぜぬ者こそなかりけれ。

## 第 二

地兩雄必ず争ふと先哲是を評論せり。地色右大將有雄卿禁裡に於て争論の。鬱憤更に晴れやらす家臣駿河の前司國則。其外一家の諸侍隆元近く招寄せ。詞此度帝御惱につき典藥は醫術を盡し。諸寺の名徳家々の秘密を以つて加持するに。更に驗のなき所を比叡山の阿闍梨めが。作り靈夢の滅多的まぐり當りに玉體は。地忽ち平安なりし故二條の家は

日を追うて。威を一天に輝かし我が六條家は年々に。衰へ行くは知れた事。スエテ無念と。云ふも餘りあり。詞取分け先帝第一の御子某が妹腹。村雲の皇子こそ天下を保たせ給ふべきを。行跡悪しとさみしつゝ。當今第二の御子。春宮に立つる由是清平めが業ならずや。地彼といひ是といひ最早堪忍なり難し。天下の諸武士を相語らひ左大臣を打滅ぼし。當今春宮追ひおろし一の王子を位にそなへ。某攝政關白と尊まれんと思ひ立ち。當時諸國の大名には先づ何れをか頼むべき。面々所存を残すなど大きにせいて怒らるれば。あり合ふ者ども口を揃へさて。目出度き御企て。御家の繁榮此時と。フシ悦び合ふこそ愚かなれ。地色國則一人最前より眉を擡め居たりしが。くつくと笑ひ出し。詞扱も扱も輕々しく淺はかなりしお心や。大事を思し立つならば天下の大名小名が日頃の行作に心を付け。彼奴は不忠に與せぬ者彼は味方につく者と。とつくと心底見届けて仰せ合はされ候はゞ。事も成就すべき諸武士の所存も辨へず。只軍勢の多少のみ。選ばせ給ひうかゝと廻文を持ちかけなば。遂には此事露顯し叛逆の名を取つて。お家の滅亡近きにあり總じて軍の肝要は。詞居ながら遠きを鑑みて戦はずして勝利を得る。是良將の成す所。此度の御大事憚りながら國則めにお任せ候べし。屈竟の智略あり。此左大臣清平公。北の方死去の後まだ縁組の沙汰もなし。扱もお家の姫君様愛護の若の御器量に。首だけのぼつておはします。そこをば態と引違へ清平殿を聲に取り。お興を入られ候はば。地外に色ある御身といひ。年寄り男を嫌ふといひ新枕からそぶくと。地色陸まじからぬ夫婦合そこを見付けて姫君を。瞞し賺して人知れず扱も奪取らん。詞元來天子御預りのお寶なれば早速に。御咎めあらんは必定なり。其時節には姫君も此方へ取戻し。逆臣なりと讒奏せば仕合せようて遠島か。大方お首はないものよ。地然る時には天が下只取る山の時鳥。繁れ松山御家の。フシ繁昌ならんと申しける。詞右大將冠を振り。汝が智謀の一通り道理無きにはあらねども。不相應なる縁組を吞込む様なうつけてなし。何故かゝる工ぞと咎められては毛を吹いて。疵を求むる道理ぞと。云はせも果てず差寄つて。それ猶易き謀。清平公と殿様の互の威勢争ひは。遂には國の亂れぞと天子も兼



ねて是のみに宸襟を御惱まし候由。前非を悔いて今日より意趣を含まぬ誓約に。宣旨を請うて清平を筈に取り度く候と。地色奏聞あらば忽ちに勅説下るは知れた事。何程心に落ちずとも否とはよもや申さじと。フシ手に取る様に言ひければ。地色跡先知らぬ智慧なしども是ぞ誠に上品の。上智と云うたものならん扱申されたり申したり。文殊様よと雖すにぞ附いて乗つたる右大将。ヲ、尤もぢや呑込んだ。直ぐに只今奏聞せん善は急げぢや今日中に。姫は送らん與乗物介添宰領塗長物。嫁入は親の謀帝も一杯清平も。一杯喰はす喰はすとて。孫など見せてくれるなと笑ひて。御殿に三重へあがりけるフシ勅なれば。曆も入らず相性も。老も厭はず年若な妻迎へ舟壽に。一家一門上下を清平公の御館は。石を打つやら謠ふやらフシざいめき渡るぞ賑はしき。地色愛護の若も親と子の祝儀の衣裳改めて。やうく御前に出て給ふ。荒木の左衛門近國若君のお傍に寄り。詞あれに渡らせ給ふこそ只今よりの御母君。先御臺様御同意に御孝行ませと。地申す内にも涙ぐみ。哀れ變れる世の中と。スエテ差俯いてぞ居たりける。地色乳人は懸て心得て御土器をば持ちければ。御末の女房銚子取り。オクリ御酌にへ立つて汲みながす。フシ手に觸れながら。若君は。物思はしき風情にて。物憂き我が身の上や母といふ名は變らねど。生さぬ仲には昔よりさがなき例あるものを。恨めしの父上や元の母様戀しやと。受持ち給ふ御盃干しも得やうと。心迄來る憂き涙止め兼ねさせ給ひける。地六條姫は戀草の枯るゝとなしに逢ふ事を。いつかゝと松の尾の。神の咎めか梓弓。引違へたる嫁入も心の駒は變らぬを。スエテ君ならずして下紐は。解かじと心誓文を。立てゝ語つて知らせと。人目の關の輕さげにうろゝとした目の中を。地左衛門ハツト氣が付いて眞中へずつと出て。詞サア若君様お盃をば早う御戻しなされませ。此お盃濟むとはやあなたは母御お前はお子。どう剝がしても削つても。親子のお名は消えぬぞや。然るによつて親子といふ眞實ぞつこん生えぬいた。地親子ぢやゝゝ親子ぢやと心を拵えて御座れやと。あちらを見たりこちらを見。遠いからくる意見口フシ家老の役もむつかしき。地色若君は打領き盃飲んで下に置き。詞悪い事あり幾重にもお叱りあつて給は

れと。地こちらはほんの母様氣。姫の心は妹脊の中に巡れる御土器。是二世迄の約束と心一つに楽しみて。笑の内なる劔羽や鴛鴦の衾も敷き忍ぶ。奥の間深く入り給へば。若君御禮をさまりて。オクリ御館にへ歸らせ給ひけり。フシかゝる折節。地色老の白髪もすべらかし祝儀に持てる鳥臺の。姥より年は高砂のおのれと屈む腰付も。感懃めいてのししと。清平公の御前に献上物を差置いて。詞さてゝゝゝ御目出度や。さぞお嬉しう思し召そ。折節早苗之介此頃病がおこりまし。飯汁もろくに食べぬ故婆様苦勞にあらけれど。名代に往て下されと頼むを厭とも申されず。聲になつて廿年閩より外へ出ぬ婆が。只今爰へ來ればこそ御無事様なる御顔を見て。地冥途の土産に致します。ア、南無阿彌陀と念佛唱へフシ敬まひける。地色清平御機嫌麗しく。早苗之介は常の事久々にて對面し。満足なりと宣へば。左衛門耳に口を寄せ。詞コレ大儀にようこそ參つたと。拙者へ仰せ渡された。ヤアゝ。鯛を振舞へとこなたに仰せ渡されたか。ヲ、食べませう。七十三になりますが鯛の頭もやりますと。フシ取つてもつかぬ挨拶なり。地清平重ねて宣ふ様。詞コレヤ左衛門。豊が祝儀の鳥臺は松を赤葉に染めなして。鶴かと思れば鳩を置き尉の代りに冠を乗せ。姥にはあらで振袖の女が麻笥に打凭れ。地色熨斗の如くに信濃麻を束ねて臺に据ゑたるは。所存こそ有りつんフシ尋ねて見よと宣へば。地左衛門ぎよつとしたりしが。さあらぬ體に打笑ひ。詞取り所なきかな聲に尋ぬる迄も候はず。早苗之介が物好をつくつく察し候に。常磐の色は古めきて。赤松わつたなどとは無病な人を譬へたり。冠を乗せしは殿様の御壽命尉に等しきと。祝うての事ならん。姥の代りに御臺様御夫婦合は塗桶の。丸い様にと願うた物。鳩は三枝の禮儀を見せ麻の内なる蓬迄。直なる故事も候と似つかはしくも取成して。地豊が鹿相や云はんかと。近付き寄つてコレ婆様。地色お次で休息遊ばせと手を取つて引立つれば。詞ム、婆に一差舞舞へとか。兎も角も致さうが。心を盡くした鳥臺に篤くと御目がとまらぬやら。地お尋ねにもあづからず。長生きしたる其甲斐には。是迄世間の善悪を見渡つて來ましたが。詞此度の御祝言二條の家の御滅亡。榮えし松も枯葉して荒れたる庭の閑子鳥。



年寄り来いと呼ぶなれど若い女は厭がりて。お宮仕への留守事にてつきり眞芋を績みかけん。地麻の狭衣薄くのみ染めて止むべき色かはと。フシ詞の端のうるさきに。左衛門そつと後から。太股抓ればアイタシコ。詞こりや年寄りに濡れるのか。但し云ふなと止めるのか。婆にいさすぢ張らせずと御家老役に先達つて。なぜ御意見はさつしやれぬ。いとしやこちの嫁御寮になんの落度もなければ。血腰の抜けたこなたをば兄に持つたが因果にて。早苗之介は去つたぞや。地それでも合點が行きませぬか。不吉の見た御祝言凶會日なり申の日なり。お輿の入つたも申の時。去るといふには手が付かぬ今宵の内に去らしやれと。老の唇そり立て、フシ齒に衣着せず云ひ散らす。地色清平呆れ給ひつゝ。なに早苗之介が女房を。去つたと云ふは實正か。詞左衛門ハツト畏り。さん候此夕仔細もいはず妹めを。去つて戻し候へども。御婚禮に取交せて不吉なる儀を御耳へ。入れ申す儀を憚りて隠密致し候と。地申し上ぐれば清平公御氣色大きに損ぜられ。詞短慮至極の男めかな某五十に追つかゝり。色に迷うて勅諭を有難いとも嬉しいとも。思うてうか／＼暮さうか。國家の大事身の大事深き思案のある事を。辨へなしの諫言だて。聾が聲の高ければ部屋にも聞かん附隨が。里へ歸りて告げたらば忽ち事の破れなり。詞不便には思へども右大將への言譯に。早苗之介め勘當する明日中に親子共。地屋敷の内を追出せと常は溫和の清平公。フシ以ての外御機嫌なり。地荒木は呆れ聾さへ何聞いてやらきよる／＼と。鰻卵に地黄丸。お物入ぢやと會釋してす／＼我家に三重へ歸りけり。地忠臣の種は心に蒔きなから。植付けならぬ早苗之介空五月雨の時ならぬ。勘氣を受けて追立ての使三度に及べども。門戸を締めて追返し。討つて来らば潔う親子一所に死覺悟。小高き所に座を組みて。ステテ暇の盃汲み交し。詞コレ母者人此脇差を突立て。左へ廻すを合圖にて首打つて給はれと。地仕方で見すれば二三度も。頷くばかりを答にて。云はず語らずわるびれず。フシ聾もいつそ取得なり。地色かゝる所へ荒木の左衛門近國。駿河の前司國則大勢を引具して。門荒らかに打叩く。詞勝重上より聲をかけ。ヲ、早苗之助是にゐる。問ふ迄もなく切腹の御使者なりと推量した。左衛門一人來

られても早速事の濟むことを。いつぞや禁裡で出會せた變化仲間の鳩侍。地色檢使などと云ふ事が穢らしい汝等に。武士の切腹見すべきか罷り歸れと睨め付くる。國則大きに腹を立て。詞ヤイ宿なしの素浪人。佇む所のなまき、に自業自滅の切腹を。檢使とあつて来りしはおのれが末期の面目なり。地四の五の云うて隙取れば踏付けて首打つが。どうぢや／＼と責め付ける。勝重かツら／＼と笑ひ。詞夏豆腐の食らはれぬ六條殿の御家來。國則とやら青のりとやらとろゝな事を置いてくれ。歸れといふにへちまうて去なねば例の雁股と。地弓と矢取つて打番へば。ア、死狂ひのあばれ者。門蹴破つて討取れと侍どもに下知するを。左衛門暫しと押留め。詞やあら聞えぬ前司殿。上意を請けし某が未だ手出しも致さぬ内。貴殿に先の越されては拙者が分はどこで立つ。地色貴殿の切つて立てうかと。刀の柄に手をかくればア、御免誤つた。二條殿の御家來は。どれとも御氣が。地短いと。フシ輕薄云うて押退る。地左衛門は聲を上げ早苗之介も見苦しい。地此場に至つてさしてなき相手取るは何事ぞ。お主が持病の短氣をば一言の妙薬で。一療治して見やう。心を鎮めてよく聞け。例へば上手が碁を打つに。一手をおろすも大切に稍暫し案ずるを。下手が側からもとかしがり助言を云ふは差當る。善悪ばかりに目が付いて一番の碁の勝負は。地色上手に及ばん如くにて理非明らかな御主人の。遠い所を鑑みてなさるゝ事は其方や。某などが眼にはなかく、以つて及びなし。六條殿への言譯とお主を勘當なさるゝも。御所存あつての事ならん。主人にすねるは身の誤り奥山家へも引込んで命全う立歸り又奉公せい勝重と。言ひ宥むれど頭を振り。詞イヤ早苗之介が一命は諫めを入れし島臺に。差出して置きたれば蟬の蛻の此身體。どんな薬を用ゐても本復はなり難い。疊の上で舟を漕ぎ穴藏で。雷聞く。地用心深う養生も全うなさるゝ御自分は。武内の大内大臣の年になる迄長生きして。二條の家は野原となり。鹿の臥所となるを見て袖絞らるゝ有様を。伍子胥が忠義の眼を借り見て笑ふぞ左衛門殿。詞ヤレ愚かなる事云ふな。死は一心の私にて始終の功を立て難し。伯夷叔齊取るに足らず。イヤ勝重は往古の管仲が智は持たぬ。コリヤ忠義に古今の隔てはない。ハテくだい事止



まらぬと。地詞戦ひする所に妻の常世は鉄の柄に。簀と笠とを引掛けて。馬に白泡はませつゝ一文字に馳せ來り。殿様よりの上意がある。兄様そこをお開きと門外に立寄れば。國則聲を荒らげて。詞ヤアこれ〱常世。上意にもせよ何にもあれ。早苗之介が女房よ去られた縁者の證據。不遠慮千萬退きやれ。ム、異な事をお咎めある。そなたは先度内裏にてとこぼえられしと承る。國則といふ侍ぢやの。地常の女と思やつたら當の槌が違ひませう。母が力を産み付けて右の腕に三人力。左の手にも二人力大雁股は持たねども。捻り殺すが合點か。詞ア、待つた〱。或程こなたの大力は先達つて承る。地賞翫致すに及ばぬと。フシ押退るこそ笑止なれ。詞地色ヲ、ちつと左様でござんしよと。軒端に鉄を打掛けて。門の上に這ひ上るを。勝重見るよりコリヤ〱女め。詞某いかになるとまゝ跡り残りにて若君の。御先途を見立てよと頼んだ一言はや忘れて。去られた男の門内へ入らんとあがくは推參なり。地色おのれ其脇一寸でも。おろすと否や切折ると。太刀の鏢元抜きかくれば。常世はわつと泣き出し。餘りと云へばむごたらしい。其言分はどうぞいの。尤も暇は取つたれども今はの際の夫の顔。いとし可愛と昨日迄まはし給ふ姑の。お聲もま一度聞きたさに。義理も人目も恥辱をも。打忘れたが誤りか。是が身も世もあらりよかと口説き。フシ立てゝぞ泣き叫ぶ。地色聲や心や通ひけん老母は顔を振上げて。詞ヤレナウ嫁御ござつたか。老を養ふ孝行の何かの禮も云はずして。地死ぬるが心に懸かつたにようこそは來て下さつた。嫁御〱と手を上ぐれば。常世も兩手を差下し。互に手を取り撫で擦りお前は嫁と宣へども。わしは義理故母様とも姑御とも得云はずに。跡に残るか悲しやとフシ恨み。啣つぞ道理なる。地色岩木にあらぬ早苗之介。フシ共に涙にくれるが。地稍あつてコリヤ常世。詞我君よりの御使とは何事なりと尋ねれば。誠に歎きに取紛ればたと忘れて居りました。清平公の仰せには。勘當をせし者どもが知るべと云ふはそちばかり跡見苦しうなき様に。地色取賄へと宣ひて。身體を隠す簀と笠あたりを清むる鉄迄を。フシお心附けられ候ぞや。これ御覽せと差出せば。勝重ハツと押戴き。詞お主の慈悲は未々迄。斯く有難きものなるよな。コレ

御覽あれ左衛門殿。冥途の旅の御饑餓御主人よりも拜領した。地色浮世の妄執晴れ切つたり。お暇申すといふよりはや腹を切らんとする所を。左衛門苛つて。ヤア死なれぬ〱早苗之介。詞此度の御褒美に國と知行を大分に。拜領しながら死なうとは。ムウ何と云ふ左衛門。鉄一挺に簀と笠外に何にも拜領せぬ。ハア愚かなり〱。國も知行も日本もひん丸めたる竹の子笠。地色簀打ちかぶり行く時は山河草木悉く。望み次第に汝が物。水に望んで魚を釣り春の山田を掘返す。鉄一挺に萬石の知行は年々身に備はる。それでも拜領致さぬとは。詞勝重横手を丁ど打ち。最前食べたお薬の験が只今顯れた。清平公より改めて知行田畠拜領し。地御眞實なる御所存を量り知られた年貢米。實るを待つて早苗之介。名をも形も隠家に土百姓の助三郎。大小入らぬと投げ捨つれば。常世は門より飛んでおり。オクリ簀取りへ着せて笠の緒も。フシ締めて寝る夜は。なけれども死別れより生別れ。巡り逢ふ日を樂しみに暇の狀が氣に懸かる。爰てさらりと引裂いて。もうこちの人往かしやるか。詞ム、女房ども無事で居よ。兎角命が芋種ぢや。地纏て戻つて子種をば蒔いてやらうと差合も。聞かぬ老母の手を引いて門戸くわらりと押開けば。國則向ふに立塞がり。詞やあ待て待てどこへ行く。いつぞやと云ひ今と云ひよくも矢先を向けしよな。堪忍ならぬ太刀先で勝負をせよと極付くる。詞勝重につこと打笑ひ。土民に下つた某と見侮つての言分な。面白い〱。在所喧嘩の手習ひに小鍛冶が打つた鉄がまち。いざ參らうと振上ぐれば詞には似ず飛退り。詞こちが習うた兵法に。鉄と斬合ひ不得手など。地云ふをば機會に指して行く。道は一筋善惡の二つの中を踏分ける。荒木が智慧は吳子孫子。節義は專諸田横にちつとも負けぬ勝重が。心に望みある時は短氣起すな端喧嘩すな。韓信が股女房の股。抜けて潜つて逢坂の關の。そなたへ差して行く心は古今類ひなき。夫も粹兄貴も粹。女房は粹の骨頂と聞く者。感じ合ひにけり。



地遊女の袖吹き返す飛鳥風。誰が徒らに産みつけし。情の知るべ手を入れて。水の月取る鳩照姫。長地女の意地の強弓に的持ちかくる切穴のあな卯の花の擲取に。スエテ羅綾の下着錦織の。打掛小袖しどけなく馴れぬ徒路の介錯に。お婢局壺装束。奴に振らす長刀の鞘の中山命とは。それも戀路かいとしのか愛護の若の御館を。前渡りしてあちこちと。オクリ合圖のへ言葉咳拂ひ。フシ風が知らせて。おとづれて。裏門そろりと押開き。内より常世走り出て待兼ねて居りましたに。ようこそ御出て遊ばした扱まあ今宵の御日待。いつ／＼よりも賑はしくお座敷から勝手迄。藝者どもが居流れて御隠し申す所がない。斯うあらうかと思つた故。御長櫃をお持たせと言ひ遣はしたは爰の事。詞あの中へ忍ばせまし藝者の衣裳と思ふなら。地色誰が見咎めも致すまいよい首尾を見てずつと出し。本望を遂げさしませよ。御窮屈なは暫しの内如何あらんと伺へば。姫君は打笑みて戀さへ叶ふ事ならば。何の苦勞な事あると恥かしさうに顔隠し。姿も隠す長櫃のふためき渡り押入れて。御供の内て鬚のない奴殿これ昇かつしやれ。お局方はお歸りと戀のすれ者手引して。契りの末は長持を。オクリ館のへ内へ昇ぎ入るゝ日待は公家も。町方も。同じ格なるは遊び。琵琶琴止めて三味線も胡弓に移り尺八の。戀慕流しに氣が減入りや。又引立てる流行歌節音曲は外面に洩れて面白きフシ既に更け行く。地色半夜の鐘朔日頃の眞の闇。星の如くに高提灯燦爛としてお館の。廻り四五町取圍み清平御臺に引添うて。荒木の左衛門駆來り門外にて大音上げ。詞御寶藏を切抜いて若君様へ御預けの。御鞍御太刀を盗み取る。徒者の御詮議に。大殿是迄御出てなり若君の御館へ。日待に召されし藝者ども罷り出て面々が。身の言ひ嗜れを仕れ出よ。出よと呼ばれば。地打驚いて愛護の若常世も出て共吟味。日待の興も覺め果てゝ三味線胡弓打折られ。わめく聲又詫びる聲。燭臺こけて猪口皿は。オクリ我も。我もとフシ走り出て。地色杖にはぐれし座頭の坊滅多無性の家鴨飛び。殿を後に畏る。詞こりや／＼こちら向きませい。シテ名は何といふ何處の者。ハアお差合ひかは知らねども夜晝なしの城達。今からお目をかけ値なし三井の貸家にをります。地色次に驚ふ若男名乗りもさすが恥かし。もりしと申

ナ物真似師。フシ誰にまがへて唐辛。辛い浮世にうま／＼と其日暮しの歌念佛。藝者の數に召さるゝは外間にも冥加にも。かなひかりの力持小人島のちよろうけん。跡から出て來る男めが後に負うたは。何箱ぢや。詞上へかづけるは。中將姫曼陀羅の手拭。水は天竺恒河川の水えへんと云ふと榮螺子殼が鱈になるなつこらこ。ハ、ハ、ハ、ハ。いかさま咄に聞いた奴御詮議の筋により重ねて呼出す事もある。今晚は歸れ／＼。アイ／＼お暇申します。地日待の祝儀は相違なくフシ頼みますると逃げて行く。詞サア是ばかりか門内に何物も残らぬかと。地聲に従ひ黒漆の長櫃一合、き出す。六條姫は見るよりもそれ訝しい立寄りて。蓋を開けと宣へば。はつと答へて待どもばら／＼と駆寄るを。常世周章て立ち隔たり。詞必ず龜相なざるゝな。藝者どもが衣裳櫃預り主は私ぢや。地吟味にや及ばぬ通さつしやれ急いでそこを開かしやれ。御臺腹立て聲を上げ。詞常世餘りなめけなぞ。主が開けと言付くるに兎や角いふは慮外である。昨日今日來た自ら故主に立てぬか聞かぬかと。地いと美しき顔に妬みの交るつき聲は。花散る跡に蓮の實のフシ飛んで音なす如くなり。ハ、ハ、ハ。下々などの云ふ様なさもしいお詞聞きます。縦ひ一時半時でもお前はお主私。家來早苗之介が妻。飽かぬ仲をば暇を取り御家に奉公致す者。龜相な事はござんすまい。少しは立てゝ下さんせ。イヤ／＼／＼そりやならぬ。お主が左様に厭がる程一倍詮議がして見度い。そこ退いて明けさせぬか。それではわしが立ちませぬ。立たずとおれを立てゝたも。ハテわしから立てゝ下さんせ。ヲ、そんならば立てゝやる。蓋あけさすまい開かすまい。地其代りには自らが詮議止めやんな悔むなど。側なる鎖を追取り伸べ長持突かんとし給ふを。常世はやがて取継り。詞奥様何を遊ばすぞ。常世とぼけた顔すまい。櫃の内なは鳩照姫。ヤア大切な儀を宣ふが。何ぞ證據がござんすか。證據は即ち此鎖先。地突かんとするを突かせじと取付き突退け競合うてフシ既に危く見えければ。左衛門はつつと出て。詞憚りながら拙者めに御詮議御預け遊ばしませ。ム、何と言やる左衛門必ず兄妹なればとて。蟲貞があれば許さぬぞや。成程某あり様に云はせて御目にかかせう。コリヤ妹。盗んだな／＼。兄様それは何







追詰められて追返し。胸と胸とに富士と駿河の煙くらべや。思ひ較ぶる女の一念。負けじ。劣らじいとし可愛の俤は。ナホス地あれ／＼あそこに嬉しやとて。走り爪立て立ちかゝり。此縛めは結ぶの神の御注連繩。喰ひ切り引切り抱き下して背中をり擦り。手足を撫てたり花の姿をつれ／＼守れば。罪も報いも嫉妬も仇も。忘れて果て、面白や。カハリニ上り祭文しやるか顔の瘦せ。初手の悟氣は。どこへやら。今は二人が理に落ちて合ヨ、ヲ、ヨヲ、イサヨヲ、いつそ泣こより外はなし。合待てば甘露の日傘差しかけし。身もいつしかに。オクリ沈み。果てにし。ヨ、イサヨナホスフシ身の上も。君故ならば。憎からじつまし隠らば唐土の。吉野の山の。山のとろくの又其奥へも。附添ひ引添ひ離れはやらじと兩手を取つて。我こそ行かん。イヤ／＼此身と彼方へ此方へ引合ひ捻合ひ。力車のくる／＼。くるり／＼と入り違へ。いづれ千引の石の身と。動く氣色も難ければ。地妹背の仲は今宵には。降らぬものと寝に歸る。コハリ何時迄草のいつまでも。嫉妬は恨み盡くされじ。忘るな忘れじ二世に。三世と闇夜の雨の。形見に通ふ朝の雲。消えても残る濡衣の恨みも二つ三つ五つ。七つの鐘に夢覺めて。ナホス地さらばの聲や松の風。俤消えて愛護の若忙然として三重おはしますフシかゝる所に。地色常世は兄の計らひにて繩目許され駈來り。若君を見るよりも嬉しやなさりながら。詞大殿縛め給ひしを誰が許して其上に。地御臺所の寢間前に佇み給ふは訝しと。問詰められて若君は。隠すに詞あらばこそあらまし語り給ふにぞ。常世ははつと涙ぐみ扱々是非なき世の中や。詞兄左衛門と言合せ急いで落し參らせて。御詮議あらば私が御爲に死ぬる覺悟にて。地色只今來り候へども執念深い御臺様。共に屋敷を忍び出て御前のまします先々へ。附添ひ給はゞ世間から浮名も立てう親子御の。お顔も再び合はされず私とても犬死を。致さん事の口惜しき御器量勝れ給ふのが。其身ながらの身の敵胸慾なげにこじつこう。惚れ腐つたとしやくり上げ。フシ泣くも。切なる心なり。地色御臺閣より走り出て。ヲ、頼もしや優しやな焦れ焦るゝ魂の。浮れて空に迷ふとは。我身ながらも恥かしきとも叶はぬ懸路ぞと。今は心に諦めて。ふつ／＼思ひフシ切りしぞや。地色愛護の若を落してた

も。只管頼むと合はす手も中に情やフシ籠らん。常世は膝を立て直し。詞嬉しい事を宣ふが御眞實にて候か。神神かけて嘘はない。地ハア有難い忝ないお禮はゆる／＼申さんと。若君の手を取つて比叡の山におはします。阿闍梨の御坊は現在の現在の伯父上様にまします。あれへお渡り遊ばしませ早やとく／＼と言ひければ。愛護の若は開し召し母上様や其方が。志は嬉しいが。詞親の不興を受けし身の縦へいづくへ行きたりとも。年端も行かてどの様な大きな料を致せしと。地色稚兒法師等に笑はれば生きたる甲斐もあるまじき。元の如くに縛めて父のお心休めうと。スエテ思ひ入つたる有様に。常世はわざと荒らかに。詞そりや曲がない若君様。左衛門や私が命にかけての忠義をば。お前は水になさるゝかと。御臺も共に諫むれば若君泣く／＼立上り。然らば仰せに任さんと踏みも習はぬ一人旅。常世跡から來てたもう。父上お叱りあるならば。母様よきにとばかりにて。オクリ館をへ紛れ出て給ふ。フシ跡見送りて。地諸聲に。フシ泣く音を立てゝある内に。地色思ひがけなき清平公御太刀を掲げて庭上へ。つか／＼と出て給ひ。詞ヤア何故に兩人は爰にあるとの御詞に。地狼狽へ惑ひうぢ／＼ととかう答もなかりしが。地色御臺心を落し付け。詞斯く顯はるゝ上からはとても通れぬ身の過り。地愛護の若は自らが館を落し候と。フシしを／＼として宣へば。地色常世はずつと差出て。いえ／＼左にては候はず。御家の寶を盗んだも私一つの心にて。御存知もなき若君に愛目見するが悲しさに。兄が手前を抜け出て斯くは計ひ候と。死ぬるを先に立てゝある。フシ物言ひさへも涼しけれ。詞ム、其管／＼。汝が盗んだ太刀鞍は愛護に預け置きたれば。一旦彼が手へ渡し館へ歸る其砌。地色持參致せと言ひ渡せコレヤヤレ長櫃持つて行けと。餘り嬉しき御上意に。答もやらず百千度打領いて會釋して。女の入らぬ力損今といふ今間に合ふと。櫃々々と引提げて走出るを後より。御臺所はしつかと取り。詞是は自ら預らう。これ奥様。それでは最前立て給ふ誓文が無になります。ヲ、神の罰恐うない。我戀叶はぬのみならず鳩照姫にのめ／＼と。二世の下紐解かせてはどうも生きてはゐられぬ義理。どなたの御意でも此櫃は。地爰を出さじと取継りさせ狂ひたる有様は。



フシ離れつべうは見えざりける。地色清平今はたまり兼ね御太刀を抜いて胸先を、貫き給へばコレ殿様。詞何科あつて自らに惨い死目を見せ給ふ。地色惨いつれない一念に親子の衆を三日が内。取殺さず置き置かうかと。泣き叫びたる其聲はフシ恐しく。また哀れなり。地色清平涙をはら／＼と流し。詞尤もなり理よ。今言ひ聞かず一通り。篤くと心に得心あれ。お主が親の右大将悪心胸に塞がりて。娘の不便も打忘れ世に不都合なる戀聲は。二條家の寶をば奪取らんの謀計。逆意の程を奏聞して打滅すは易けれども。仇を仇にて返すれば子々孫々迄仇になる。地色馴れ親しむを幸ひに意見の加へ善心に。立返らせん所存にて勅答申せし夫婦の縁。詞嫁入つて来る其方は帯をも解かずまどろまず。身を堅めたる心底と。親子盃交はす時物思はしき有様と。老母が諫めの嶋臺と。三つを一つに思ひ寄せ。清平はよつく知つてゐる。いとしいや悪い親持つて成るべき縁を引裂かれ。地女心の一筋に戀煩うて死なずんば。淵川に身を投ぐるてある。詞命一つを助けるは廣大無邊の慈悲といひ。堂の珊瑚の珠。砕くより猶殘念さに。地そなたの爲に清平が心一つに様々と。思案工夫をする内によしな實の詮議だて。詞太刀鞍紛失致せしと世間へ沙汰を致さすは。右大将が貪慾の願ひを止めん謀計。誠は某盗み出し天子の御藏に納めたり。地愛護に越度はなければも手段を人に知らせぬため。預り主の科を著せ縛り搦めて剩さへ。詞屋敷を迷ひ出たれば暫し父子の縁切れたり。そなたを里へ戻すれば母といふ名も消えて行き。互に他人と他人との。内に契りも交せかし。地色跡をも慕ひ行けかしと工みし事も徒らよ。此長櫃の太刀鞍にも耳もあり又口もある。母といひ子といふ名を削らぬ内に見苦しき。立ち振舞ひを致せしは二條家も六條も。宋代迄の疵になる。今死ぬるのは親への孝。夫への心中ぞや恨んでくるゝな六條姫。詞清平は暇をやる。そちが夫は愛護の若。地色夫婦は二世と云ふなれば此世の縁は薄くとも。徒名の立たぬ未來にて長き妹脊を契るべし。さは云ひながら是非もなき。惨い最期を見る事と。スエテしやくり上げてぞ。泣き給ふ。地色姫は苦しき聲を上げ。あゝさて嬉しのお詞や。つゆかゝるべきお心と。知らずやみ／＼朽果つる。フシ身の上こそ是非なけれ。地色逢ふにし

かへば鯨寄る浦の住居に寝れても。何かはつらく思ふべき飽かぬ別れをする時は。縦へ千年を過すとも一夜の夢の心地ぞと。聞き習ひたる事ながらせめて一日片時でも。此世で妻よ夫よといひ語らはゞ斯く迄に。人戀しとは思ふまじ何云うても悔みても。詮方波の立騒ぎ今死んで行く自らに。恨み妬みもないものを鳩照様はいづくにぞ。愛護様の御事を。よく／＼頼んで死にたいに。逢はせてたへや人々とフシさめん。泣いて掻口説く。詞ヲ、よい／＼合點合點。娑婆と冥途に二人嫁。地色清平も亦對面せんと自ら寄つて長櫃の。蓋取り給へば姫君は。闇を出てたる弓張の。眉泣き脹らし襟先も涙の常世諸共に。六條姫の御側へする／＼と走り寄り。詞なういとほしの有様や。地同じ戀路に踏迷ひ我やはつらき人や憂き。思ひもわかれて命さへ今消えて行く人ぞとも。知られず知らぬ中々に共にすげなうはしたなう。言ひ散らしたる恥かしや。自らとても下紐の關を越えねば定めたる。夫といふ名も知れねども。言ひ置かせ度き事あらば。心を残し給ふなと。スエテ共に消え入り。給ひけり。地色六條姫は玉の緒の切れ行く氣息をほつと繼ぎ。暫しは顔を打守り。詞羨しきは鳩照姫。世に恨めしきは我身の上。地夫といふ名は變らねど遠き未來で待つよりは。近き此世に千代や千世契り重ねて嬰兒産んで。松に小松に相老の諸白髪迄添ひ給ふ。フシ行末さへも。ゆかしけれ。地色若君の御行末尋ね渡らせ給ひなば。詞清平公のお許して六條姫は未來にて。必ず女夫になる筈と云うて語つて證據には。お前が立つて給はれや。此世はこなたへ貸します。やがてアノ世で受取るぞや言ひ置く事は是はづかり。あら堪へ難や苦しやと。悶える中に残し置く。口ずさみとやかくばかり後の世の。頼みになして戀死なん。生きて待つべき契りならねば。南無阿彌陀佛とばかりにて。秋に先立つ朝顔のフシ消えてはかなくなり給ふ。地色げに人界の有様は。かげろふ稻妻水の月。消えての後は親もなく子もなく妻も假りの名に。假りの契りを頼みにて鳩照姫は若君の。御跡慕ひ出て給ふ常世も共に夫の顔。見まくほしさに旅衣。あはたつ山の哀れとは。死んで行く身と止まりて。子を思ひたる老鶴と思ひ較べて見較べて。亡き魂は西の空焦るゝ我は東向く。跡には一人すつくりと名殘惜しげ



に手を上げてさらば。さらばの聲々に。落つる涙は百千行。ばら／＼鳥の鳴かぬ間に別れ。別れに立出る

#### 第 四 愛護の若道行

地高麗錦。フシたち馴らしたる。子心に。世は憂きものと白河の。はしたなき目に愛護の若今朝立出る旅衣。フシオクリ迷ひへ出てさせ。フシ給ひける。昨日は玉樓金殿に。冠の紐を結びしが。スエテ今日は行路の旅草鞋。蹴上の水に影映す。オクリ姿の。花は散り行けど色がありとや蝶々の。裾に纏れて戯れて肩に宿りてひら／＼ひら。ひらりと拂ふ其先へ又飛ぶ翅のちら／＼と。關の東を教へ行く。あゝかはゆらし。フシしほらしや。汝さへ旅の。道連れと。思へど物は岩陰に。姿隠すも慕はしく梢々を打見やる。フシ棟のもとに。すつくりと。一人立つたる六條姫。我待ち顔に立寄れば。はつとばかりに驚きて。スエテ暫し傾く笠の内。手を取られては跡へ寄り。纏るゝ袖を振放し。左へ走り右へ逃げ。覺えず帯のしやらどけを。わしが結ぶと走り寄り引繕うて腰元を。とんと叩いて戴いて三下り歌若衆様には。黒いが似合つたえ。染めてさへ。染めてお召しやれく。ろ茶染え。染めてさへ。染めてお召しやれく。ろ茶染え。ナホス櫻が。フシ枝に梅薫る。持合ふせたる女夫連。あやかり者と旅人の。オクリ見返る。振りも二度三度四の宮河原十禪寺。本フシ古蹟と。聞けば恥かしく。浮名や爰にとゞめんと。跡へさがりてフシ道草の。四片八仙花をるふりも。母をまくとや忍冬。花見る振りて待合はせ。オクリ先立ちへ行けば追着きて道守る神に。手向けする男思ひの誓ひには。逢坂山と繰返す若君は又いづくへも。長地追分とのみふる天雲の立隔たれどいつしかに。人にや洩れんわが身の志賀の。里にぞ三重着き給ふ

地湖の懐。廣き志賀の里。住みよき宿も浪人は名字を植ゆる田を持たぬ。早苗之介勝重が貧を養ふ物としては。拜領の御宿の。毛生れもつかぬ小盗みの。夜々荒す瓜島たび重なれば願はれて。ほど足打たれ緊ぎ鳥立つも立たれず起き伏し

も。ならぬ所帯の煙絶え命も絶ゆる身の行方。スエテ無念涙にくれにける。地母は見る目の悲しさに外面へ出てて林なる。晝の桃搗つ親の闇梯子入らずに割鉄。梢に棹は屈かねど屈みて伸びぬ老の腰。そこよフシこゝよとする所に。地百姓ども駈來りの證見付けた老耄め。詞扱々汝ら親子程横着者は又とない。行先もなき浪人にとこぼえたるが不便さに。地下に足をば泊めさせて慈悲を垂るればすりかわく。麥秋には首刈りする稻の穂を抜く夜綿をとる。どことも畠盗人は其座で埋むが法なれど。三井寺の領分だけほど足打が宥免ぢや。地色祖母も今日より同罪と。足手を取つて引張れば。詞早苗之介はア、コレ待つて下されませ。段々の御腹立ち尤も至極さりながら。老母が桃を騙れしは。某斯様の有様を堪へ難かると問はれし故。母に苦勞をかけまい爲いや／＼さうは存せぬが。坐つてばつかりある故に太股に實が入つて。よだるう御座ると答へしを。御存じのかな髻なま中の儀を聞きはつり。ム、桃に實が入り喰ひ度いとや。地こそ心得たと駈出て斯様な粗忽を致されしも。某が詞の科打ちも叩きも遊ばされ。科なき母は御赦しとフシ手を摩り詫ぶるぞ道理なり。地色親に孝ある一言は田夫の身にも聞き入れて。然らば婆々めは赦してやろおのれが科は今日より。桃盗人の制法に過意も桃栗三年ぢや。柿なら八年か／＼らうに仕合せ者めと聲々にわめき。散らして三重歸りけり。フシ御痛はしや。若君は。習はぬ旅の物憂きに。幻ぞとは露知らぬ。御臺所は跡追うて附添ひ給ふ煩ささに。心を苦しめ氣を痛め。スエテ走り抜けたる玉鐙の。道の疲れも顧みず。急ぐ心にやう／＼と。一村里の木蔭にぞ。フシ泣く／＼迎り着き給ふ。地色暫らく氣息を押鎮め。跡振返り眺めやり。いまだ程なき事なれば追着き給はん悲しさよ。何卒爰を行抜いて比叡山へ登りなば。女人は叶はぬお山と聞く。さあらば此道急がんと心ばかりは進めども。御所を出てさせ給ふより。酒飯ふつつと絶え果てゝ食べさせ給はねば。しを／＼と立つ桃林。フシ枝も高くに見えけるを。是幸ひと杖振上げ。丁々と打ち給ふ。地老母は見るより腹を立て。詞憎しさもし、小冠者め。其桃搗つて自らを又候憂目見するかと。地色ずか／＼と走り出て側なる棹を追取つて。殴り情もなう悲しやと若君は。あなたこ



なたへ逃げさまよひ。旅に疲れし者なるに赦し給へと宣ふ聲。小家の内なる早苗之介顔差出し見るよりも。詞なう若君様愛護様。是母じや人／＼。地色やれ是なうと身をもがき行かんとすれど足立たず。兩手を擧げて是々と。呼べど招けど聞かばこそ跡も見向かず打つ杖を。あしらひ兼ねて若君はなう早苗之介爰へ来て地とめてたも勝重と。お主は杖の下に泣き。子は坐ながらに泣叫び。やれ勿體なや母じや人。廿年來引込んで若君こそは見知らずとも。形恰好にも面差にも。清平公の縁者とは。思し寄らぬか淺ましや。斯く成り果つる憂き苦勞皆御主人への爲なるに。武士の冥加も忠誠をも。無になす親の恨めしやと。小家を動かし足摺りし。紅亂す顔色は。地獄を巡る目蓮の母を。フシ見付けし如くなり。地色老母は何の辨へなく。猶振上げて打つ杖に。フシ泣く音や空に歸りけん。麻吹き分ける風の隙。六條姫は現はれ出て。袂の下に若君の。スエテ身を隠す間もありやなし。老母いよ／＼腹を立て。詞小冠者め一人と思ひしに。女郎め迄が隠れ居て。桃を取るさへ腹立つに麻まで荒す憎さよと。地色又さん／＼に打つ杖を姫は愛護の楯になり。子は又母を打たせじと。互に杖の下に寄り。孝と戀との二道に我身厭はぬ有様を。勝重見るよりきよつとして。愁の涙忽ちに眼瞼し肘を張り。胸押摩り氣息を詰め。物をも云はず打守る。此世にあらぬ繼母ぞと。スエテ知らぬ。心は道理なり。若君は聲を上げ。やれ早苗之介胸慾な。現在主の打たるゝを守り居るのは何事と。云はせも敢へず。詞ア、しゃべるまい聞きとむない。早苗之介はついしかに四足殿に奉公せぬ。主でない家来てない。急いでそこを立つて行こ。若君呆れ顔振上げ。ム、主でないならぬ迄よ。四足殿とは誰をいふ。ハ、／＼非道の戀もする氣から。詰開き迄あがつたの。手を引合せてぞら／＼と面白からう嬉しかろ。世界國土の楽しみに。女と戯ふれ遊ぶ程面白い物はない。此勝重はこなた故獨寢をして居ますぞや。地千に一つも斯様なる龜相な事があらうかと。常世をこなたに付け置いたが。詞ア、盗人の隙あれど守りての隙なかりしな。地大織冠より數百年相續いたる二條家が。今日の只今滅亡した。地色御家がなければ勝重はどなたに勘當許されて。誰に奉公仕る腹切つて死ぬる身ぢや。御園ま

ひ度うても圓まはれぬ。早苗之介は惨けれども清平公のお心には。片輪なる子が可愛いとて又御不便が残るであらう。地世間へ廣うならぬ内悪い性根を入替へて。館へ歸つて詫びさしやれ。詞只今打擲しられたは。こなたの誠の御袋が。諫めの杖と思しなば。地色無念な事も何にもない。急いで京へ歸らしやれへちまうてなりや勝重が。兩人共に打殺すがどうぢや／＼と責むれども。言譯すれば母様の。御身一つの浮名ぞと。答もやらすさめ／＼とフシ泣く音。ばかりにおはします。地老母はつく／＼打守り。詞今といふ今合點がいた。心中をしに出たのぢやな。爰は日陰で悪からうあの辛崎の一つ松。地首縊るのによい場所と小家の戸。フシさいて入りにける。地色若君涙にくれながらエ、胸慾な早苗之介。たとへ鳥類畜類でも。親子の禮は知るものを年端もいかぬ愛護とて。道ならぬ義のあるべきか今かゝる身になつたれば。扱は汝も見捨てしな。神代此方主として家來の者の杖を受け。手を合はしたる例はなし。地打叩かるゝは厭はねど後代人の笑ひ草。なんなり末の悲しやと又むせ。返り泣き給ふ。地色稍御涙の下心。怒らせ給ふ故やらん松の。燼拾ひ取り。小家の片壁墨黒に。細工の姥が惜しみつゝ。我を打つたる其仇に。花は咲くとも桃なるな。麻を蒔くとも芋になるな。穴生の里の。あるらん限りは。二條の若とフシ筆捨つる。末の世迄も桃ならず。麻は繁れど芋にならぬ。里をば過ぎて行先も。娑婆と冥途の中々に二人が。仲こそ三熏浮名なれ小波や。志賀の山風吹き荒み。釣する海士の舟ならて焦れ焦るゝ胸の火に。鹽こそ焼かぬ照照姫。常世一人を力草小松若松撞分けて。戀する人に大比叡や。フシ坂本にこそ着き給ふ。地色習はぬ旅に兩人は。杖を力に弱々と。フシ手を引き山に差しかゝる。地色半町ばかり登りしが不思議や俄に足痛み。胸騒して向ふよく突くとはなしにかつばと倒け。先々と進む爪先は劍を渡る如くにて。震ひわな／＼き働かず姫君はつと心付き。詞誠に爰は唐土の四明の洞を移されて。女人結界なりけるを破らんとせし勿體なや。地色是に付けても世の中に。罪の深きは女の身の中の女の中にも自らは。迷ふが上の戀の闇いつかは晴るゝ憂身ぞと。雲入る嶺を打見やり。二人はどうと座を占めて。スエテ呆れ。果てゝぞおはします。地色か



かる折節山上より山麓一人下り来る。常世嬉しく立寄りて。詞申し、柴刈殿。比叡山の南谷阿闍梨のお寺を尋ねる稚兒。地先達つて参られしがいかゞ便りを致さうぞ。教へてたべと宣へば。詞柴刈り横手をちやうど打ち。身どもも夜前その坊の臺所に居ましたが。夜半の過ぎてもござらうが。門荒けなく打叩き愛護とやら舞子とやら。都の甥とて來りしを。僧正不審に思し召し。夜陰に至つて何故に尋ね來らん様はなし。扱は谷々の天狗ども。阿闍梨が行力引き見んため愛護と偽り來りしな。地それ追出せと宣へば逸男の若法師。我劣らしと走り出て。詞こりや、丁稚。帥の阿闍梨の御一家と騙事言ふ賣僧者。さあ失せぬかと言ひさまに是非をも聞かず打ちければ。地あつとばかりに平伏して。杖を赦して給はれと。手を合はせども聞入れず。まだ頼柄を叩くかとさんくんに叩き伏せ。門戸を締めて寄せ付けず死んだであらうと存じたが。人の命はつれないものあれ、あれなる杉の木。そこ迄は來て行き倒れまだうごうごとして居た故。地色若し近邊に其方が知るべの者のあるならば。傳へてやらんと尋ねしに早苗之介といふ者が。穴生の里に居ますれど是が方へも行かれぬと。我身を恨み世を恨み伯父坊恨み親恨み。泣い一口説いつ今頃は大方命もないである。お連と聞けば痛はしや。貰ひ涙がこぼると、フシ教へてこそは。通りけれ。二人ははつと氣も消えて。こは何とせん淺ましや。現在お主や我夫の。死ぬる生きるといふ事を聞いても側へ行く事の。ならぬは何の因果ぞと。膝と膝とに凭れ合ひ。スエテ聲をばかりに。泣き給ふ。地色常世は涙拭ひまだ佛神の御加護にて。夫の在家を承る穴生とやらへ尋ね行き。勝重殿を同道しお山へ登せ申すべし。暫し御待ち候へと。オクリそのまへ里へ急ぎける。フシ跡には姫君。只一人。深山の鳥の聲のみぞ。我に言問ふばかりにて道行く人も見えざれば。よすが尋ねんやうもなし。さしもに高き山が嶺を。見上げ見下し立ちつ居つ。姿も亂れ氣も亂れ。梢に取付き伸上り岸に凭れて飛上り。豎登り極登り。轉び落ちては這上り。茨伏柴身を裂きて。腸を斷つ猿よりも。勝るは我が戀ひしさぞ。なう愛護様、なう若君と張り上げて歎き。叫ばせ給ひける。地色無情やな愛護の若。杉の木の間打臥して。はや消えかゝる玉の

緒を結びとめたる山彦の。愛護々々と答ゆるもやうとして起上り。杖に縋りて。フシよろ／＼と。一足行きては氣息を繼ぎ。二足來てはひよろ／＼と。オクリよろほひ、給ふフシ有様を。地姫君見るに堪へかねて南無や山王大權現。塵に交る神心穢れを許し給はれと。そなたに向ひ手を合せする／＼と豎登り。若君の御手を引き。オクリやう／＼と麓に下り立ちて。地色互に顔を打ち守り。變り果てたる佛を。御見忘れなされしが鳩照姫にて候ぞや。御いとほしの有様やと。スエテ抱き付いてぞ。泣き給ふ。地色暫らくあつて若君は稍御心鎮まりて。詞なう嬉しの人の情やな。まだ解き初めぬ下紐の行巡りたる二世の縁。地今より未は變らじと。綻びそむる花の笑。うつろふ菊に白露をフシ十分持てる氣色なり。地色鳩照姫も今の間に憂ひの色の面變り。手を取組んで膝寄せて憂さをつらさを取交へ。六條姫の御最期を御物語りありければ。若君はつとばかりにて覺えず御手を打ち給ひ。詞こは何といふ身の上ぞ夢か現か幻か。地色今は此世に亡き人の附添ふ影とも知らずして。道なき事と思ふから跡へ下りつ先へなり。すげなう見せし問ひ答へ。厭ひもやらで是迄は跡を慕うておはせしが。女とゞめるお山には魂とても叶はぬか。爰に待つぞと立止まり別れて過ぎしは昨日の夜。今日又同じ麓にて御身に巡り逢ふ事も。定めなき世の定めとは。思ひ出るも恥かしや。何れを戀の淵瀬とも。知らぬ此身に浮名立ち。親の不興を蒙りて命生きても何かせん。思ひ極めて候と。しやくり上げ／＼。涙の音は聞えぬど。流れは。瀧に較べ合ふ。地色姫君世にも悲しくてよしなき事を宣ふな。詞父上様の仰せに六條姫は冥途の妻。此世の妻は鳩照姫二人の嫁とあるからは。地色浮名不孝も侍らず心に懸けさせ給ふなと。諫め給へば愛護の若。愚かの事な宣ひそ。地父の慈悲なるお詞が。フシ今は我身の仇なるぞや。地未來の妻が待ち兼ねて。冥途へ我を招く故。家來の母の杖も受け早苗之介にも見限られ。辛かるまじき伯父上に慘うつれなうしられしも。死ねと草葉に守るらん縦へ都へ歸つても。親子の縁も氣遣はし妹脊の仲は猶しかに。妨げられて添ひ果てぬ歎きに袖を濡さんより。詞自ら不便に候はゞ冥途の道へ伴はん。いざさせ給へと宣へば。地鳩照姫は打領き。ヲ、よくこそ誘ひ給



はりし。年月沈む戀の海。龜の浮木は得たれども此世の夫と結び置く。帶さへ未だ解かぬ間に。未來の妻へ戻すのは。思へば淺き縁なり昨日は人に羨まれ。今日は人をば羨むも同じ戀路と三つ瀬川。とても思ひ詰め給はゞ。常世が戻らぬ其内とフシ勸め給ふぞわりなけれ。地若君世にも嬉しげによくこそ思ひ切り給ふ。詞煩惱も是もと菩提。地色假りの浮世に假りの夢せめては跡の詠めとて。弓手の片袖引きほゞき小指の血汐染め衣に。残し置きぬる泡沫の泡と消えぬる御形見。霧生が瀧の杉の枝に結びとゞめて手に手を取り。南無阿彌陀佛と諸共に。涙の瀧津水底に。入りて形はなき跡も。袖掛けの神杉とて今の。世迄も三重ありとかや。フシ然る所へ。勝重常世は駈來り姫君いづくにましますと。そこよ爰よと尋ねしが袂掛けたる杉の枝。怪しやと見る菊が紋淺黄が裏の紅に。地長らへば又憂目をも水底の。深き心を入りて知らせん。愛護の若と。地讀みも終らずこは南無三寶遅かりしと。泣くも泣かれず齒を喰ひ詰めフシ足摺りしてこそ居たりける。地色早苗之介は聲を上げ。なう愛護様若君様。御短慮な事をなされたなう。詞御臺此世に亡き人と某知らう様はなし。不義と一途に存せし故物柔に申しては。地色お心は直るまいお前が思し切られても。女は離れにくいものあた胸慾に云うたらば。館へお歸りなされうかと勿體なくも家來の身で。言ひ散らしたる悪口が。お腹が立つての御最期か。母が杖を當てたのが無念でお果てなされたか。追着きます若君様。お供に召連れ給はれとフシ既に自害と見えにけり。地常世周章て、取付けば。詞ヤア狼狽へたる女房。死ないて武士が立たうかと振放す手をしつかと取り。成程死にたか死なせましょ。併し落度の詮議ならこなたより先づ伯父坊様。人圍まふは出家の役他人なりとて捨て給ふは。いづれの法にある事ぞ。地色誠不審に思すなら虚實を糺し給ひてこそ。沙門の法も立つべけれ對面をだにし給はず。叩き出せとは何事ぞ。一禮言うて其上に差違へて死なしやれと。ことわり立つれば早苗之介。詞誠にさうぢや坊主首。いて打落して腹愈んと。地色駈行かんとする所へ阿闍梨も周章てふためきて。氣息をばかりに御出てあり只今人の風聞に。詞愛護が身をば投げしとは誠ならずと思ひしに。兩人是に居るからは扱は若にて

ありけるか。地それとも知らず情なく寺へ寄せざる殘念と。スエテ涙を流し宣へば。地早苗之介ずつと寄り。ヤイ胸慾者の伯父坊主。叡山法師はどれとも人を殺すが法なるか。若君へのお手向に坊主首をば賜らんと。反打つて突つかかる。阿闍梨騒げる氣色もなくヲ、尤も。愛護が命の終つたは定業なれば是非もなし。愚僧に恨みを残したる非業にてあるならば。加持の力で蘇生せん先づ鎮まれと宣ひて。地御衣の袂を結び上げ水晶の數珠挿揉んで。天を仰いで三禮あり。地を指差して再禮し。瀧に向うて秘印を結び振鈴雲に響かして。發願をこそ述べられけれ。フシおほけなく浮世の。民におほふかな。我立つ袖に。墨染の袖。志學の春の始めより。經藝の花香ばしく耳順の秋の夕には。玉泉の水底清し。瀧田の螢は孫康が窓に古今を照らし見て。無明の眠り醒め易し。比良の高根に。雪降れば。車胤が眼鏡を忘れしなり。妄執の雲打拂ふ。嵐につれてあれ。あれ。苦海を渡る船なんめり。彌勒慈尊の曉をいつと契りて撞出す。コハリ圓城寺の鐘の音。悉有佛生有明の石山寺の秋の月。三諦即是目前に止觀の胸を觀念す。浸染妙有の文字を捨て。法界東流の聲を離れて一實相の。眼の前には死にもせず又生れもせず。況や非業の童男童女。ナホスフシ愛護並びに鳩照姫が。蘇生の效驗ならしめ給へ。歸命。頂禮金仙氏。佛眼金輪五壇の法。一字金輪孔雀經。七佛藥師熾盛光。烏芻沙摩隨求大佛頂。五大明王六觀音。六字河臨詞梨諦母。八字文殊普賢の法。那膜。所願虚空藏天には。三諦七曜九曜廿八宿別して山王廿一社の大權現。頓法成就ならしめ給へと責掛け。祈らる。フシ時に山鳴り。地色瀧波は渦を巻き上げ巻きおろして。六條姫は忽然と波の上に現はれ出で。地過去拘留尊佛の昔より愛護と我とは生々世々。怨敵の餘執故只今命を取つたれども。大聖の法味を受け成佛得脱致したり。猶此末を守らんと云ふかと思へば波の底。形は消えて愛護の若姫君諸共瀧壺より。手を引合うて出で給へば夫婦は奇異の思ひをなし。阿闍梨を三拜百拜し二人を二人が肩にかけ。喜び勇んで立歸る佛力神力擁護力三つの要に末廣の扇の風や家の風。松は素直に竹素直く。齡は千龜萬鶴も。變らぬ常磐堅岩やと傳へて。今も興じけり



## 第五

地身體髮膚はたらちねの枝葉まつたき孝の道。愛護の若君鳩照姫蘇生の喜び祝言の。祝ひは二つ山玉の恵み尊き神祭。七社の御輿御船に飾り三千の衆徒悉く。甲冑弓箭帶しつゝ、悪魔を拂ふ氣を顯はし。漫々たる湖水の面、フシ錦を流す如くなり。地色陸には二條の左大臣清平公を始めとし。權大納言爲道卿若君御夫婦御伴ひ。時に葵の風薫る水干淨衣みやびこに。舍人牛飼雑色まで。あたりを拂ふ行装は目を驚かすばかりなり。詞左大臣清平公參詣の諸人に向ひ。笏取延べて宣ふやう。抑も此比叡山と申せしは。玉城の鬼門を護り悪魔を拂ふ時のみならず。地一佛乘の嶺と申し。鶯の御山を象れり。地色又天台と號するは四明の洞を移すなり。實相無我の春の花ならずして香ばしく。大乘戒會の時鳥フシ待たぬ先より聲清く。平等利益の新月は。二千里の外明らかに。生滅滅已の雪の色都の。富士の名も著き。我が立つ柳の杣木挽く。伐木とうくりんくと。根本中堂文殊樓麓にあたつて波止土濃は。智水の波も濃かに和光の。塵に交はりて。衆生を導き。給ふなり。有難や一切衆生。悉有佛性如來と聞く時は。女人の身迄も頼もしや。嶺には。遮那の梢を並べ。麓に止觀の海を湛へ又。戒定慧の三學を見せ。三塔と名付く人は又。一念三千の。機を顯はして三千人の衆徒を置き。圓融の法も曇なき月の横河も見えたり。扱又麓は小波や志賀辛崎の一つ松。國家安全長久の齡を見する地しるしの松。あら有難やと演説あり御手を合はさせ。三重給ひけり。地色然る所へ軍勢一度に合圖の聲を立て合はせ関をどつとぞ上げたりける。詞荒木の左衛門駆塞がりこは何者の狼藉ぞ。名乗れ聞かんとありければ。駿河の前司國則一陣に駆出し。問ふにや及ぶ近國折角巧んだ企てが。無になるといひ剩へ姫君迄失はれ。地鬱憤を散ぜんため右大將有難卿。御出陣なされしぞ。清平が首打つて降參せよと罵つたり。詞早苗之介飛んで出ていや推參なりおのれ等。姫は御室に送るから斬らうが突かうがこち次第。時もこそあれ日もこそあれかゝる神事を妨げて。地御輿を穢す無

## 愛護若時箱終

道者いて物見せんと云ふよりはや。兩陣互に群つて火花を散らし。三重へ戦ひける。フシ味方は無勢。地色殊には又思ひ寄せらる一戦故。軍勢心奪はれて。フシ残り少なに討ちなさる。寄せ手はいよ／＼勝つに乗り揉み立て／＼攻寄せたり。詞荒木の左衛門早苗之介すは御大事と駆塞がり。地兩人一所に押並び多勢を前に引受けて。はらり／＼と難き倒すさしにも勇む寄せ手の勢。早苗之介荒木に切り立てられ。フシ暫し弛んで見えにけり。地色然る所へ駿河の前司無二無三に追駈け。近國が後様肩先かけに斬込うだり。詞早苗之介勝重取つて返しむづと抱き。地足踏み直し釣上げて大地にどうど取つて伏せ。首を搔かんとしたりしを左衛門暫しと押し止め。詞敵は一人味方は二人あつたら物を無下にはならじ。地色それこなたへと引起し左右の腕を引抜きて。寄せ手の陣へ追返すは。フシ心地ようこそ見えにけれ。地色大將有難卿を消し馬引返し逃げ引くを。船中の衆徒太刀長刀觸らば冷せと追取り巻き。神罰冥罰思ひ知れ思ひ知らずや山玉の。神勅なるわと首打落しサア／＼還御を急げや。御輿を渡せや囃やせ觸らば冷せと打つ太鼓。神すゞしめの囃し言目出度き。國の御守り。



鎌倉三代記



鎌倉三代記

作者 紀 海 音

序詞廣德神異錄に曰く。天地は凶惡を長育せず。蛇鼠は龍虎と成る事能ず。天網恢々たり去つて何處に行かんとす。天性大樹の御氣性。花實備はる鎌倉山。動きなき世に扇が谷。千代萬代の龜が谷。春知りがほの梅が谷。ヲロシ時めく源氏ぞ芳ばしき。地時維建仁三年源の頼家卿。故右大將家の譲りを受け征夷將軍に拜任有り。虎の威有つて猛からぬ廿二歳の若みどり。丁固が松と見ゆれども。李白が酒杜牧が色。二ツの品に身を浸し。政道怠り給ふ故。秩父北條土肥小山舊老智化の忠臣等。度々に諫の術盡きて。フシ勤番出仕も遠ざかれば。辨俊邪曲の若者共。晝夜お側に蹲踞する中にも比企の判官が。齋娘の若狭の前君御寵愛淺からず。一幡君とて當年は四歳の若君ましますば。勇心に邪を。裁けと御ぜんよしかずとて。貪慾驕奢のあら入道同苗三郎員家。笠原太郎兼澄中野の五郎廣致。胸に惡事を徒黨の武士。枕をわつて謀計の。色には出でず判官は謹んで申す様。頼朝も此頃出羽の國羽黒山の山伏。願行院豪海とて當國に徘徊し。假令ば手足叶はざる年來の病人を一祈に働かせ。啞に忽ち物言はせ盲人に眼を開かせ。難病癡病加持力にて本復させずと云ふ事なし。世學つて此驗者を活不動と尊稱す。さるに依つて。某も密に私宅に招き寄せ。殿若君の御身の上御祈禱を頼みしに。丹精を擡てて御壽算二百餘歳迄は。髓に加持し延せしと。卷數を持參し今朝より。御廣間へ相詰めさせ置き候。御目見得を遂げさせ度く願ひ入候と詞を盡し言上す。地頼家御機嫌麗しく其驗者儀は某も。先達て聞いてあり急いで招喚致すべし。それ此方へと御説にて。奏者に連れだち願行院。悠々と立出てて御目通に畏る。頼家御覽じ。ム、願行院豪海とは貴僧の事よな。世は濁亂に及べども三密瑜伽の功積り。病苦を救ひ



且は又。鎮護國家の至願の旨。甚だ以て神妙なり。地今日よりしては頼家が祈の師ぞと宣ひて。フシ渴仰あるこそ笑止なれ。地豪海詔ふ氣色もなく。左右を見廻し打咳き。詞往昔役の優婆塞孔雀明玉の咒を受持し。鬼神を役し人民の壽命を延し。法流を汲知る者は今の世に恐らく拙僧只一人。此度修法の加持力にて御壽算二百餘歳迄。慥に請合申せしと廣言放つて言ひ散す。地問注所に控へたる朝比奈の三郎するく走り寄り。豪海が膝元にどつかと坐り。詞コレ御坊。某元來武骨者。佛法の有難いも仙術の不思議なも。曾て以て存せねども。大かた人の壽命には方量の有るべし物。大食大酒滯事を随分謹み嗜んでも。百年は活にくい。よし又和僧の咒唱で。我が君二百餘歳迄御長生なざるも。誰あつて其時迄御奉公を仕り。虚か實の證據には何者が出て立つべいぞ。どうやら護摩の灰臭い。地判官殿も方々も。獨鈷仲間のぐるらしいと。フシ頭叩いて嘲笑ふ。地かねく躑躅合せたる中野の五郎つゝと出て。詞いしくも言はれし朝比奈殿。入幡拙者と同腹中正法に不思議はない。外法成就の人ならば其段は知らぬ事。命を延るも縮めるも畢竟以つては同じ事。某を一加持に祈殺して見せられよ。經文の端くれも些と覺えて居る男。地現證なくては信用せず如何にくと語掛る。豪海些とも悪びれず。詞フ、面白く。邪正一如の宗意なれば善悪には拘らじ。望みに任せ其方の命を落してたつた今。嘲笑をふさがんと印事々しく結びかけ。地神咒を唱へ眼を閉ぢ暫く觀念する内に。不思議や五郎忽ちに面色變り慄ひ出し。あら耐へがたや苦しやな。大聖不動明玉の索に五體を締付けられ。手足も竦み動ずと。眼を見つめ戰慄しは。フシ不思議と云も餘あり。地各是はと仰天し天晴御坊の御法力。方便の御殺生も此上は御赦免あれ。縛をも解せ給れと。ステテ聲々にこそ詫びにける。地豪海は打領き。夫こそ出家の本懐たり。苦痛を救ひ申さんと重ねて印を結びかけ。珠數さらくと押搦ば五郎即座に起直り。先非を悔む涙の體皆々ハット感じ合ひ。フシ頭を垂れて居たりける。詞朝比奈かつらくと笑ひ。此義秀がむき出した黒い眼を抜かうとは。むまたらしい旅々。貴僧坊主が行方にてちくとんばかり朝比奈が。腕先にても觸つて見よ。地然ないと故大罵一すもた

せじと。太刀捻くつて押直る。地勢ひに氣を呑れ。豪海左右返答なく。五人の者もうぢくとフシ片隅欲しき氣色なり。地斯とは誰か知せけん。和田の義盛駈來り。御前に畏り。詞君をば始め諸歴々御尊敬ある客僧へ。悴に候朝比奈め持病の我儘差起り。慮外の振舞致す由千萬恐れ入候。地義盛日頃の忠勤に思召かへられて。御赦免あらせ給はれと頭を付けて言上ある。詞判官大きに悦んで。フ、御尤く。子を持つてこそ世の中の親の心は量るれ。地法印へは某が幾重にも詫申さん。御子息の我儘も時に取つては武士一疋。羨しいく。詞底意を殘さぬ證據には若狭の前が妹に。淺茅と申す乙娘貴殿の嫁に進ぜたい。地朝比奈殿を判官が聲に取る儀は成るまいか。フシどうぢやくと抱入る。地是も巧の一ツぞと義盛合點行きながら。然あらぬ體に會釋して。詞出頭無二の能員殿殊更以て我が君の。御縁家に繋る事身に取つての大慶と。地世に嬉しげに領承ある。朝比奈すつと立上り。詞ヤア付上るな入道め。今日此頃漸と取出武士の分際で。聲ななどはそんざいな口引裂んと飛懸るを。地義盛中に押隔たり是非辨へぬ若者かな。汝を聲に取んとは。心に一物有つての事。契約申す義盛も心に一物有つての事。平にくと囁けば朝比奈早く合點して。詞成程聲に成りませう。是判官殿隨分と。仕拵にお氣張られい。嫁入長持塗篋箱筒箱筒箱張子。部屋に世帯も其方から。味噌鹽新米油。其外天上無生ぢやと笑ひて。屋敷に三重歸りけり。地頼伽は卵の内よりも。其聲諸鳥に優るとかや。生先しるき初元結。千幡君と聞えしは。頼家卿の御舍弟にて今年十二の干支の馬。手綱かいくり静々と春の野懸の乗姿。おとなしやかに美しくぼつとりしてしほらしく。實にも武將の嫩とは。フシ名乗てしるき御器量や。地山の内の松蔭に暫し御馬を控へられ。谷七郷の繁榮を悠々と眺望ある。茶道坊主の勘齋を近く參れと召寄せて。詞汝は當地の者なれば。此所を以前より鎌倉と名付たる。謂はれは定めし知るらんな。イエく所には住み候へども名所とも舊跡とも。白河夜舟又してもうまい所を引おこされ。髭作つたり燻べたり困つたる若旦那。語つて聞かせたび給へ。されば入鹿の大臣とて。猛惡無道の逆臣あり。又大織冠鎌足とて智仁勇を備へたる。忠臣是を悲みて



天神地祇に祈誓をなす。忠貞神にや通じけん。天より一ツの鎌降りしを。これ吉左右と押戴き欺り寄つて入鹿が首。水も堪らず撒落し。それより天下太平の守りの爲と其鎌を。此相州に納し故鎌倉山と名付たり。なんと目出度い所でないか。ハ、くく殿様にはいつの間に左様の事を御存じ有る。然らば拙者も覺えたる谷々の名は多けれど。寢もせて君を松葉が谷。耳と口とにさゞめが谷託は盡ぬいづみが谷。憎いかイ、ヤ可愛がやつ。のぼせばいこう舐るが谷すしなやつとて誹るがやつ。折角茶の湯教へても。銀くれるやつ呉れぬやつ。吝いがやつか酷いがやつ。あらまし斯様に候と。呆言盡せば若君は。地氣さくな奴とのお口合。オクリ馬上靜に歩ませ行く。地東御門の向ふより。比企の三郎貞家。御所よりの歸るさに此所へ來掛りしが。出頭自慢の鼻の先千幡君のお先とも。知ず顔なる咳拂ひ邊を拂ひて打つて來る。御近習の若侍つかく、と立寄つて。詞ヤア比企殿にて候か。若君のお供先下馬なされいと立塞がる。三郎驚く氣色なく。當時某下馬せん者武將ならて恐らくは。地鎌倉中に覺なし。家來の者共片寄るな。フシ通れくと云放つ。地お先徒士の衆聲々に。ヤア緩急なる詞かな。詞大樹の御舍弟千幡君眼が見えぬか醉狂か。但しは引ずり下さうか返答聞んと罵れば。員家けらくと笑ひ。眼潰ればお主らよ。我君の小舅辨へ知ば其方より。きつと下馬をば致す筈。若輩人に見許すと傍若無人に云散し。地一鞭あてゝはいしりと。フシ中突割て駈通る。地コハ慮外者遁さじと。一度にはらりと抜つれて。追駈んとする所を若君は聲を上。詞ヤレ早まるなく。彼等が無禮は頼家の御心よりする事ぞ。大老役を相勤る。和田秩父さへ了簡して。見遁しにする狼藉者。若年の身が云募り。彼に迷惑致させては頼家公の御心に。嬉しとは思すまじ。親兄の禮重ければ堪忍するぞ方々よ。必ず粗相致すなと道の道たる御一言。御幼稚ながら頼朝の器量の胤を受け給ふ。聰明叡智の生れ付色には出ず心には。千里の馬も伯樂に逢ねば跛同然と。世を恨みたる御。近習の武士も口々に。扱も憎い比企が谷。いざ追着てきりがやつ。ぼつこしもないやつくを。越えて屋形に。三重入り給ふ。善惡を身に與らず忠言の。跡跡止し畠山重忠の屋敷には。賓客車馬の道通て雨を疑ふ松

の風。糸に亂るゝ淺みどり五柳先生窓に倚り。七松居士が床に臥す。氣色を見せて文机に。文武の眼まくばりてフシ悠然としておはします。地本田の二郎近常。宿直に詰めて居たりしが差寄つて小聲になり。詞今日御所の様子をば未だお耳に達せずや。巨細は確と知らねども。佞人原と朝比奈殿。口論を仕出され鬨諍に及びしを。親父義盛盛賦付られ。事穩便に納まる上。判官が乙娘義秀に妻すとの。契約迄ありし由。一門廣き和田殿が。悪人徒黨に成れては。易大事にて候はん。何とぞ御思案廻らされ。此縁組を妨げて然るべうやと伺へば。重忠莞爾と打笑ひ。ハテ吉左右かなく。比企と縁組致せしは義盛天晴發明者。敵の手段を此方の手段にするが軍書の秘事。地お頼もしき和田殿と咄の跡もとりあへず。又差向ふ物の本。フシ氣もしんくと澄渡る。フシ夜も關に。地裏門を。忍びやかに音づる。近常頓ておつとり太刀駈寄つて差覗けば。頼家卿の御母君千幡君と只二人。扉の外に立ち給ひ。詞重忠に對面し。密に尋ぬる事の有り。案内せよと宣へば。地ハツトばかりに立歸り。斯と告ぐれば重忠も。驚き遠て迎へ出て。御兩所を勞り。オクリ上座にへ誘ひ奉り。地其身は遙に押退り。詞重忠お召あるべきを夜陰の御歩行さりと。氣遣しく候と謹んでおはします。地母君暫し御涙御衣を絞らせ給ひつゝ。さればとよ世の中に。自程な憂事の。數々多き者はなし。頼朝卿に別れし時。共に黄泉に赴くか。さらずはいかなる山の奥谷の蔭にも世を厭ひ。後世願はんと思ひしに二人の若に身を繋れ。心にもなく世に立つて歎きを重ね日を重ね。漸として頼家に家を譲りて嬉しやと。思ふ甲斐なく此頃は。酒と色とに打亂れ。親の諫を聞ぬからまして。臣下の強意見。憎み疎めば方々も出仕を止め給ふに付け。詞小人共が世に誇り。人を人とも思はずして。今日此若が供先を。乗打せしとは何事ぞや。地いかに文盲野人として刀も腰に帶む身が。主従の禮知ぬとはよもや世間へ云れまじ。頼朝生てましまさば斯様な不義は致すまじ。後家の子ぞとて侮るのか。武將の弟たる者を匹夫の馬の蹴上をかけ。衣裳を汚せし無念さを。思ひ量りて給はれと。フシさめんく泣いておはします。詞重忠横手をちやうど打ち。古今稀なる狼藉者。狐は虎の威を借るとは。斯様の事を申べき。糺



明致すは易けれども。露顯に及ばず頼家公。政道暗き識あり何れを何れと別き難き。地御連枝の中なれば。知らず顔こそ御自愛と宥め申せば母君は。成程其方の云ふ通り此事のみは自が。心一つに濟みもせん。只恨めしきは頼家が。邪曲者に氣を奪はれ其行末は身を亡し。國をも遂に失ふは。鏡にかけて見る如し。切て此子を亡人の形見と思ひ障妨なく。成人さして詠めたし。其方ならては後見に。頼まん武士はなきそとよ。日頃の忠義改めず。勞り仕へ給はれとお手合すれば重忠。詞コハ勿體ない御有様。頼家公のお若氣は老臣どもが入代り。千度も萬度も諫を入れ。夫にも承引なされずは。地お家の爲には換へられず。無體に押込參らせて。此若君を守育て。管仲晏子が義を守り。鎌倉三代將軍と。侍き申さば四海の内靡かぬ草木は候まじ。人數ならぬ奴原は。鰻魚の水を慕ふとも。遂には自滅致すべし。お心安かれ母君様。今宵お成の壽に。指古し候へども。畠山が重代を。地若君に献上と。太刀をお前に差置ば母君顔面打解けて。ヲ、頼もし。さり乍ら李陵が如き忠臣も。夷の方へ降參し章邯が勇持つたるも。秦を背きし例あり。二心なき神文に。血判あれと宣へば。重忠少しえせ笑ひ。詞神文誓紙と申す事武内の大匠の。湯起請より事起り。鐵火を握り或は又牛王に血をばあえしなど。上古の風儀に候へども。末世は人間邪曲なゆゑ。神も非禮を受け給はず誓紙の名有つて誠なし。地義經を偽る土佐坊が。七枚起請の先例など。お家に於て不吉なり。夫迄もなく御心を。安め申さんそれくと詞の下に近常奥の襖を引明ければ。朱の鳥居のありくと。八幡宮の額をかけ。鏡を列べ玉垣の光輝く有様は。オクリ嚴しくぞ見えにけれ。地重忠やがて懷中より。一紙の願文取出し。高らふにこそ讀上たり

忠心しるしそろへ

再拜。愚臣重忠敬つて申て申さく。それ神道人道正直の。一つを以て建立す。就中正八幡宮は源氏果代孫の

尊靈。神に誓ひて面々が約束堅き金鐵の。鎧一領旗指物。寶前に納め奉る。地若君の御手を取り。一々次第に教へ給ふ。まんづ東の第一は御代萬歳の春秋を。重ね櫻や八重櫻。フシ小櫻威花やかに。躬向の袖の白妙に。フシ曇らぬ光り久方の。月に星の指物は千葉之介胤直。忠義の弓の一張に彌猛。心の幾度か。敵を欺くや梅や。鳥毛にまがふ鶯の。花に留りし印はそも。坂東の八平氏。時めく武士の名取川。フシ名乗て通る時鳥。卵の花飾る腹巻に。夏の雪かと過たる。團扇の紋は兒玉黨。風にそよ。吹貫の梢走りに散り浮ぶ。紅葉流の龍田川。緋威は岩永黨。五番に見えしは春日野や。紫裾濃の割小札。甲の星の晃きて。眞向眉庇。忍の緒。釣鐘の指物は。信濃の七黨ごさんめり。崩黄匂ひのものがみがた障子の板の揚巻に。ハヅミフシ四目結を附けたるは。近江源氏の佐々木とは。誰も知るらん白糸を。小オクリ染ぬ心に色と香を。錦草の胸目鏡。鬼の腕を鋭くも。一きは目立つ指物こそ。淺利の與市と御覽せよ。扱八番に飾りしは。紺糸威の胴丸に。總獲輪の筋甲。大篋小篋吹流し。お花流しの染こみは。武藏の國の住人。仁田の四郎忠綱。次に列ぶはいつとも向ふ敵を宇都の宮。好む所の摺繩目。龍虎の指物。フシ嚴しき。フシ末座なれども隠れなき。黒革威に金紋の二ツ頭のまふたるは。駿河の國の住人天智天皇の末孫。竹の下の孫八左衛門。扱其外大和源氏美濃侍。近江の國には山本柏木木村姉川。播磨の國には富田高梨赤松黨。伊賀に服部伊勢平氏。三河に足助矢矧武者。出雲に道田河井山。伯耆に詫麻姉輪の一黨。總じて日本國中の侍所武者所。嫡流庶流陪臣迄末世末代子々孫々。永く源氏の幕下に屬し不忠の心を扱まば。ナホスフシ神罰疑ひ有るべからず。地今日よりしては重忠が若君補佐の臣となり。眼に魏徵が鏡を張り。肱に諫の鼓をかけ。胸に誹謗の木を抱き。美惡邪正を手の内に。四海太平國繁昌コハリ漣や。濱の眞砂は盡くるとも。源氏の御代は盡きせじと。三遍謠ひ奏づれば。母君若君諸共に。悦び勇み立給ふ。漢の太公ぎじんけつ。慈あり敬あり忠ありとも中々申す。ばかりはなかりけり



地手車の フシ品こそ變れ。源は清和の流れ堰きとむ。戀の湊に頼家公。色と酒との亂れ髪。さばけ過ぎたる近習がそり上たる太鼓口。拍子に乗て手車の女房達はざはくと。殿御一人を宿の花枝を離れぬ風情にて。太股つめる痣ぬく。フシ姿類れてしどけなき。地若狭の局奥よりも。悠々と立出て。詞ナフ申し我君様。どう思召すお心ぞ。正體もなき御風情。地母君様や北條殿。御耳へ入らば嘸やさぞ。御嘆かしう覺さんと。實體つくる風俗の。フシ棲はづれさへ優しけれ。地頼家ほとんど無興有り。詞總じて女と云ふ者は。子を産むと早や氣が滅入る。此界の樂は色と酒とに極つた。地なんぼう富士が名山でも。抱いて寝たらば冷たかる。更科の月ぢやとて。左のみ變つた事もなし。兎角浮世は柔かな。膝と談合と引寄せて。フシ足擦らせておはします。詞若狭の前は聲を上げ。コレ申し父様兄上も聞き召せ。女の目にさへ餘りたる取所なきお遊びに。踊り狂うて座ます。こな様方の御心底。地何とも私は吞込ぬ。一幡君は御幼少。近頃大事の御命ぢやなぜ御意見を成れぬと。心一杯理をせめて。フシ恥しめる。こそ道理なれ。詞判官眼に角を立て。入らざる和女の諫言だて。陪氣の様で見苦い。大將の御榮耀が珍らしい事でもなし。女護の島へ渡らうと。仰られても是非ないに。屋形の内のお慰み。重疊の義と申して居る。御意見は此方の役和女の役は氣に入る役。やくたいもない事云はずとも。一幡君のおむづかる。奥へくと睨られて。殘る詞をいへばえに。言ねば胸に乳も張りて。オクリ悄々へとして入り給ふ。フシ斯る所へ。地秩父の六郎重保。披露も透す入れば。頼家卿も近習も。俄につくる武士行儀。フシ咳拂ひこそ笑しけれ。詞ア、大事ないく。些とも御騒ぎあそばすな。重忠こそは年に恥ぢ片意地ばかり申せども。此重安めは我君の日々夜々の色遊び。地御羨しう存ずる故。扱こそ推參致せしが。武將とも有らうずる。御器量にはさりとては。御敵みが小いと氣を持すれば頼家卿。詞ム、なんとといふ重保。手の樂

つたる挨拶は是も意見の色品よな。それとも遊び小さいと難じて見たる心は如何に。さん候我君の遊樂あそばす名は高く。見れば女中四五人など相手に取つてのお樂み。大磯狂ひ仕る小大名より下の事。和田酒盛の昔など手ばなした儀が面白い。某熟々存ずるに。女中の五百も三百も。地お泉中へ追放し。龍宮城の樂みは。フシ如何あらんと云ひければ。地頼家近習口々に。八幡飲る物好かな。サア、女中用意あれ乙姫は美人の由。差詰に若狭の前。それくつかめと立騒ぐ。詞重保は小聲になり。イヤ、子持はうつるまい。その妹の淺茅こそ比企殿の乙姫。乙姫の名も御器量も。似合しからんと勸むるを。地頼家暫し御思案あり成程淺茅が器量の儀は。聞及んだりさりながら。詞氣の毒は夜前はや朝比奈と云ふ男を持つ。あの髻面の意地張者。斯様の事を聞いたらば。地鎌倉中を一夜さに。でんぐり返そと云はうもの。残念さよと宣へば。詞ア、お氣弱い事ばかり。往昔鳥羽の法皇は源の仲宗が。妻女的美質を聞き召し。仙洞に召入れられ。御寵愛あそばされ。祇園女御と是を稱ふ。其後仲宗法皇を恨むるの色の見えければ。官職を削られて隠岐の國へ左遷ある。地斯様の例も候へば。一寸一筆御墨付。某に賜はらば朝比奈に對面し。淺茅を迎へ参らんとフシ手に取る様に言ひ放す。判官豫て和田秩父同士討さする陷阱。仕濟したりと下笑し。詞ヲ、頼もしいく。娘自慢でなければども小憎體なる朝比奈には。些と過たと思つて居る。地頼むと云ふに頼家も硯引寄せさらくと。一筆書て賜はれば。重保やがて懐中し。お氣遣遊ばすな彼奴を云ひ伏せたつた今。御輿を入れて此御所を目前の龍宮界。珊瑚の枕瑪瑙の帶琥珀の盃眞珠の鍋。人魚の吸物鰯のぬた。鯨のいこん焼孔雀の摺身鳳凰の。玉子のふはくふはと乗る。人心こそ三重愚なれ。地吉日を三浦の家の御祝言。九十三騎の一門は云ふに及ばず大小名。出入の町人御用人。御部屋見舞の菓子杉折。蒔繪の文箱紅の紐解きそむる花嫁御。淺茅の前と聞えしは。二八に二ツ三ツばかり。數へ足したる器量よし。聲の鶯百千鳥。聞いて詠めて口吟む。フシ歌の趣向ぞ懐しき。地斯る所へ朝比奈は。不興顔して立歸り。詞エ、嫁入程世にこくな面倒な物はない。外へ出れば髭頬が細つたなどと夢聊か。地知らぬ難題云ひかけ



られあした胸悪さに立歸れば。女郎奴等がちらばうて。油臭くて頭痛がする。傍ら軒寄るまいと拳を振れば女房達。フシ逃て奥にぞ走り入る。地浅茅の前は立寄りて。さりとて初心な其様に。當言は言ぬもの。嫁入つた晩からお側へも。寄らぬといふはあんまりと。無念な事と抱つけば。詞ア、舌たるい許してくれ。地拜むくと逃廻るを。詞イヤイヤ人の來ぬうちにお前に些と無心がある。サア其無心が嫌ひ物。今日は大事の精進日。地フシ嫌ぢやくと聲立る。詞スリヤ頼む事聞かぬ氣か。エ、あたくどいと振放し。地駈入らんとする所を。浅茅は頓て懐中より。護脇差取出し既に自害と見えければ。朝比奈やがて抱き留め。詞サア品に由て聞てくりよ。地短氣なる女がある如何にも無心聞てである。ひらにくと押留む浅茅悦び手を仕へ。詞無心と申すは別ならず。恥しながら。自を。判官殿の娘とは偽りにて候と。云はせも果てず朝比奈。ナニ能員が子でないと云ふ仔細は。ア、御不審は御尤。誠は都六條の傾城にて候が。畠山の重保様。京詰の折節に。假の枕の重なりて仇に思はぬ中なりしを。地御奉公とて是非もなう。つい此國へ御下り有り。程なう迎ひのお乗物。身請も首尾能く相濟んで。いそぐ爰に下りしに思ひの外な判官殿。詞奥の一間に呼入れて。向後身共が娘分。風俗詞も更めて。諸事公道に嗜むべし。和田か秩父か兩家の内婿に取るとの仰ゆる。地重保様に逢ふ事も。存生有りし効もなく。此お館へ嫁入は死ぬべき我が時節なり。お情あらば朝比奈様。我が戀人に逢せて給べ。フシ頼みますと泣居たり。詞朝比奈覺えず手を拍つて。扱巧んだり。コリヤ氣遣すな禍も三年置けば役に立つ。身共が女房嫌ひなが和女が爲には大仕合。地願ひの通りさつぱりと。埒を明けて其上に。重保と媒人も。此朝比奈と云ひも果てぬに奏者番。詞御上使として畠山六郎殿の御出と。地聲々に呼はれば浅茅はハット立上り。サア彼の人が見えました。早う逢せてくと。うろくするを押留め。某所存有る間。先づ暫くと奥へやり。オクリ式臺にへこそ出にけれ。地重保上座に押直り。威儀繕ひて云ふ様は。詞貴殿の内室浅茅姫。容儀優れし其聞え。上聞に達しつ。御殿へ召れ御酒宴の御相手にと有る御託にて。某迎ひに参りたり。きつと御請け申されよと。詞御託相

述る。地朝比奈ふつと吹出し。色狂ひする程あつて。嘘劫の經た狸殿。尾を出せくと手を出して。下されませいと降参せい。喰ぬぞくと六郎と。フシ頭を叩いて打笑ふ。詞重保少し色を變へ。某一生假初にも虚言云うたる覺がない。疑はしくば御墨附頂戴あれと差出す。地義秀ハット立寄つて巻返し繰返し。寸々に引裂て大太刀半分抜寛げ。大聲揚げて。詞コリヤ六郎。此お使を承りうつかと爰に來りしは。三浦一家を侮るのか。但しは比企の判官に。眼を剝れたが怖かつたか。所存を聞んとつゝかくる。重保騒ぐ氣色なく。非道の使者に某が望んで來るは仔細あり。當時大名多けれども和田と秩父の兩家こそ。文武の人と指されたる。其義盛が何故に。無道卑劣の判官が聲に貴殿を致されしは。重保更に吞込まぬ。善悪探り知らん爲。態々推參致したり。忠臣變る事なくば妻女を君へ上られよ。但し悪人一味の氣か有無の返答眞直に承はらんと云ひければ。朝比奈顔色和げて。成程くと得心した。扱なう女房と云ふ者は一夜でとんと持ちおもり。放かし所を其處此處と。思案して居た眞只中。地詮意殆と満足せり。浅茅くと呼びたける。聲に従ひ走り出で。なう六郎様懐しやと。スエテ縫り付いてぞ泣きにけり。地重保ハット赤面の。色も聲音も押留め。詞比企殿のお娘御浅茅の前とは此方よな。如何様世間の沙汰程有り天晴御器量御容體。地我が君の御望みも。道理道理と立退くを浅茅は猶も取縫り。詞未練に候御卑怯な。恨が有らば打明けてなぜ聞えぬと宣はぬ。地判官殿に欺られ。憂い月日を送りしも。お前にどうぞ逢はうかと。思ふ心の樂みに。今まで生きてはありしぞや。誰が怖うてうぢうちと。見知らぬ顔を仕給ふと。千々の思ひを一口に。フシ云うて歎くぞ道理なり。地重保ほうど持てあつかひ。返答もなくきよろくと。フシ溜息吐いて居たりけり。地義秀立寄り襟元をほとくと打敲き。詞ぬつくりとした顔付でおつかない事して置いたな。根本根元聞いて居る。些少には候へ共女房一疋進上する。地三百目とはねだるまい。先づ抱付囁付と。フシもどかしがるも可笑けれ。地重保莞爾と打笑ひ。詞遠來と仰られ美事の女房賜はりて。千萬大悦仕る。私宅において打おかず。賞翫致し申さんと。地手を引合うて立歸るを朝比奈向ふに立塞がり。詞先づ待て一



言問ふ事あり。シテ其方は眞實に女房に持か自然又。君へ上うて連行くのか。ム、あたらしい詞かな。始に貴殿の内室を。迎ひに来たる某が。今では自分の妻女とて何と違變が成る物ぞ。只今御所へ連行くと聞くより中に押隔り。弓矢入幡そりや成らない。此朝比奈が媒人は。大鏡を數百本。打付たより堅い事。日本國が動しても。びくとも動く事はない。臆病至極の陽が。臍の下へ落着いたら。何時にても迎ひに來い。地夫までは身が預ると腕押捲れば。重保も氣色を損じ朦朧らげ。詞ヤア無禮過た朝比奈。汝が媒人を頼みにて。六郎妻を持つべきか。假にも比企が娘とは。名を聞くさへも穢はしい。さつぱりと縁切つたぞ。ヲ、去らば去れ此上は朝比奈が女房にする。詞イヤ御詮意ぢや連れて行く。ナンヂヤ實正請取るか。スレヤ何分にも渡さぬか。地ヤルマイ渡せヤルマイと。互に詞詰あうて。フシ鏝元寛げ立寄れば。地淺茅は左右に取付いて。詮ない事にお命を。果し給ふか情なや。詞自ら跡を暗して館に見えぬと有るならば。お二人様は我が君へ。申譯こそ立つべけれ。時節を待つて判官と親子の縁を切つたなら。地心變ず六郎様。女夫に成つて給はれと。フシ涙ながらに立出れば。地兩人ハツト感じつ。出來したり神妙なり。今出て行くは知らぬ分。夫婦の縁は切つた分。此館をば駈落分。朝比奈殿の分も立つ。貴殿の分も立つである。如何にも。さらば。さらば。さらば。と三方へ別れ。行く身ぞ。三重切なけれ。地藝として爲さざる事なき樂みは。富貴の客の癖とかや。斯くて御所には重保が。遅参いかと夕暮の。鞠場に騒ぐ女中鳥。こだまの響く大廣間。弓鎗ばかり役目とて。フシ立列びたる氣色なり。地然るに和田の義盛は黒縁の乗物を。玄關深く昇据ゑさせ。誰ぞ御取次頼みましよ。頼みませうと云入る。地中野五郎立出でて。詞ヤア珍しの和田殿。何故御出仕あられしぞ。サレバ上意の旨を受け。朝比奈が最愛召連れて参つたり。宜しく御披露頼みます。ヲ、御太儀。追付けて御對面あるべしと。地奥へ入らんとする所へ畠山の重忠。是も蒔繪の乗物をお次の間まで昇入れさせ。詞コレ中野殿。お取次頼みますると聲かくる。ハア是は。重忠殿。貴殿も御出仕有りしよな。さればと上意を受けて朝比奈の。妻女を伴ふ途中より。

俄に邪氣に當てられて身心慄み候故。遅参を憚り某誘引致し候段。御披露頼むと云ひければ。地中野合點はゆかれども咎めだてしてねぢ者等に。したゝかなめに逢はうかと。成程承知致したと。フシ御前を指て走り行く。地義盛顔をさし寄せて。詞ナウ重忠。朝比奈が女房は此乗物の内に居る。御自分同道致されし其乗物は何者ぞ。重忠莞爾と打笑ひ。其方にも朝比奈の内室伴ひ給ふとは。慥に見届け罷在る。此方も亦朝比奈の妻女をば連れ参つた。如何様武士の魂は割符を合す様な物。合へば仕合違うたら。その時互に改めう。ハ、ハ、ハ、ハ、秩父成程尤ぢや。追付け割符が知れうもの。然らばお尋ね申すまい。ハテ扱後程。地互に尻目遣ひ合ひ。フシ物をも言はず控へたり。地斯くと聞くより頼家卿。やがて廣間に御出あり。義盛此方へ。と仰に従ひ乗物を。手ぐり。に昇出れば。地大將浮れ出給ひつ。籠の鳥とは恨しい。姿をちよつと水鳥を飛せ。と御意を受け。義盛やがて乗物より黒革緘の鎧を出し御前に指置て。謹んで畏る。君を初め近習共こはそも如何にと呆れつ。フシきよろ。として居たりけり。地義盛顔を振上げて。詞ハア心得ぬ方々かな。朝比奈が最愛を御所望と有る御墨附。重保上意を述べられし。惣じて武士の最愛は。弓鎗小太刀薙刀など。色しな數多候へども。梓に候朝比奈は度々の先駈矢軍に。地裏をもちかへさぬ鎧とて。親より子より兄弟より。別て最愛致す故。中々惜み申せども。詮意をいかで背かんと。地無體に持参致せしが。若し粗相ばし候かと。フシさあらぬ體にあひしらふ。詞頼家くはつと赤面あり。汝等今日來る事素直の所存に有るまじと先達て推量せり。重忠が慮外をも序に聞て遊ばんと。地宣ふ内に乗物を。同じく手ぐりに昇入れて。白銀の猫取出し御膝元に差置て。其身は遙に押退り。詞是は先年頼朝卿西行法師に下されし。銀猫にて候を。修行の旅の妨げとて。門前の童に投やりて通りしを。地縁を求めて某が家の秘藏に仕る。承れば我が君は朝比奈が妻女をば無體の戀慕あそばす由。詞彼の女儀も出生は京堀川の遊女の由。實や世上の諺に。猫には遊女が成るとやら承はつて候へば。何れを寵愛なさるゝもさして變らぬ儀と存じ。献上致し候と眞顔つくつて言上ある。比企の員家つと出。扱々かた